

前に召して、盃など、常の作法よりもさし分かせたまひて、ことに禄など賜はす。年ごろ久しく参り、おほやけにも仕うまつりて、御覧じ馴れたる御導師の、頭はやうやう色変はりてさぶらふも、あはれに思さる。例の宮たち上達部などあまた参りたまへり。梅の花のわづかにけしきばみはじめて、雪にもてはやされたるほどをかしきを、御遊びなどもありぬべけれど、なほ今年まではものの音もむせびぬべき心地したまへば、時によりたるものうち誦じなどばかりぞせさせたまふ。まことや、導師の盃のついでに、

春までの命も知らず雪のうちに色づく梅を今日かざしてむ
御返し、

千世の春見るべき花と祈りおきてわが身ぞ雪とともにふりぬる
人びと多く詠みおきたれど、もらしつ。その日ぞ出でたまへる。御かたち、昔の御光にもまた多く添ひてありがたくめでたく見えたまふを、この古りぬる齡の僧はあいなう涙もとどめぎりけり。

年暮れぬと思すも心細きに、若宮の、
「儼やはむに、音高かるべきこと、
何わぎをせさせむ」と走りありきたまふも、
をかしき御ありさまを見ざらむこ
ととよろづに忍びがたし。

もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに年もわが世も今日や尽きぬる
朔日のほどのこと、常よりことなるべくとおきてさせたまふ。親王たち、大臣
の御引出物、品々の禄どもなど、何となう思しまうけて、とぞ。

ろおどろしく、今なむ限りとしなしたまはねど、近くさぶらふ人びとは、御本意遂げたまふべきけしきと見たてまつるままに、年の暮れゆくも心細く悲しきこと限りなし。

落ちとまりてかたはなるべき人の御文ども、破れば惜しと思されけるにや、すこしづつ残したまへりけるを、もののついでに御覧じつけて、破らせたまひなどするに、かの須磨のころほひ、所々よりたてまつれたまひけるもある中に、かの御手なるはことに結び合はせてぞありける。みづからしおきたまひけることなれど、久しうなりける世のことと思すに、ただ今のやうなる墨つきなど、げに千年の形見にしつべかりけるを、見ずなりぬべきよ、と思せばかひなくて、疎からぬ人びと二三ばかり、御前にて破らせたまふ。いとかからぬほどのことにてだに、過ぎにし人の跡と見るはあはれなるを、ましていとどかきくらし、それとも見分かれぬまで降りおつる御涙の水茎に流れ添ふを、人もあまり心弱しと見たてまつるべきがかたはらいたう、はしたなければ、押しやりたまひて、

死出の山越えにし人を慕ふとて跡を見つつもなほ惑ふかな

さぶらふ人びとも、まほにはえ引き広げねど、それとほのぼの見ゆるに、心惑ひどもおろかならず。この世ながら遠からぬ御別れのほどを、いみじと思しけるままに書いたまへる言の葉、げにその折よりもせきあへぬ悲しさ、やらむかたなし。いとうたて、今ひとときはの御心惑ひも、女々しく人わるくなりぬべければ、よくも見たまはで、こまやかに書きたまへるかたはらに、

かきつめて見るもかひなし藻塩草同じ雲居の煙とをなれ

と書きつけて、皆焼かせたまふ。

御仏名も今年ばかりにこそはと思せばにや、常よりもことに錫杖の声々などあはれに思さる。行く末ながきことを請ひ願ふも、仏の聞きたまはむことかはらいたし。雪いたう降りて、まめやかに積もりにけり。導師のまかづるを御

は紛らはしげなり。今まで経にける月日よと思すにも、あきれて明かし暮らしたまふ。御正日には、上下の人びと皆いもひして、かの曼陀羅など今日ぞ供養ぜさせたまふ。例の宵の御行ひに、御手水など参らす中將の君の扇に、

君恋ふる涙は際もなきものを今日をば何の果てといふらむ
と書きつけたるを取りて見たまひて、

人恋ふるわが身も末になりゆけど残り多かる涙なりけり
と書き添へたまふ。

九月になりて、九日、綿おほひたる菊を御覧じて、

もろともにおきみし菊の白露も一人袂にかかる秋かな

神無月には、おほかたも時雨がちなるころ、いとど眺めたまひて、夕暮の空のけしきも、えもいはぬ心細さに、「降りしかど」と独りごちおはす。雲居を渡る雁の翼もうらやましくまばられたまふ。

大空をかよふ幻夢にだに見えこぬ魂の行方たづねよ

何ごとにつけても、紛れずのみ、月日に添へて思さる。

五節などいひて、世の中そこはかとなく今めかしげなるころ、大將殿の君たち、童殿上したまへる、率て参りたまへり。同じほどにて二人、いとうつくしきさまなり。御叔父の頭中將、蔵人少將など、小忌にて、青摺の姿ども、きよげにめやすくて、皆うち続きもてかしづきつつ、もろともに参りたまふ。思ふことなげなるさまどもを見たまふに、いにしへあやしかりし日蔭の折、さすがに思し出でらるべし。

宮人は豊明といそぐ今日日影も知らで暮らしつるかな

今年をばかくて忍び過ぐしつれば、今はと世を去りたまふべきほど、近く思しまうくるに、あはれなること尽きせず。やうやうさるべきことども、御心のうちに思し続けて、さぶらふ人びとにも、ほどほどにつけて物賜ひなど、おど

何ごとにつけても、忍びがたき御心弱さのつつましくて、過ぎにしこといたうものたまひ出でぬに、待たれつる山ほととぎすのほのかにうち鳴きたるも、いかに知りてかと、聞く人ただならず。

亡き人を偲ぶる宵の村雨に濡れてや来つる山ほととぎす
とて、いとど空を眺めたまふ。大将、

ほととぎす君につてなむふるさとの花橘は今ぞ盛りと

女房など多く言ひ集めたれど、とどめつ。大将の君はやがて御宿直にさぶらひたまふ。寂しき御一人寝の心苦しければ、時々かやうにさぶらひたまふに、おはせし世はいと気遠かりし御座のあたりのいたうも立ち離れぬなどにつけても、思ひ出でらるることも多かり。

いと暑きころ、涼しき方にて眺めたまふに、池の蓮の盛りなるを見たまふに、いかに多かる、などまづ思ひ出でらるるに、ほればれしくて、つくづくとおはするほどに、日も暮れにけり。ひぐらしの声はなやかなるに、御前の撫子の夕映えを一人のみ見たまふは、げにぞかひなかりける。

つれづれとわが泣き暮らす夏の日をかことがましき虫の声かな

蛍のいと多う飛び交ふも、「夕殿に蛍飛んで」と、例の古事もかかる筋にのみ口馴れたまへり。

夜を知る蛍を見ても悲しきは時ぞともなき思ひなりけり

七月七日も、例に変わりたること多く、御遊びなどもしたまはで、つれづれに眺め暮らしたまひて、星逢ひ見る人もなし。まだ夜深う一所起きたまひて、妻戸押し開けたまへるに、前栽の露いとしげく、渡殿の戸よりとほりて見わたさるれば、出でたまひて、

七夕の逢ふ瀬は雲のよそに見て別れの庭に露ぞおきそふ

風の音さへただならずなりゆくころしも、御法事の営みにて、ついたちころ

日の月はなやかにさし出でたる雲間のめづらしきに、大将の君、御前にさぶらひたまふ。花橘の月影にいたときはやかに見ゆる、薰りも追風なつかしければ、千代を馴らせる声もせなむと待たるるほどに、にはかに立ち出づる村雲のけしきいとあやにくにて、いとおどろおどろしう降り来る雨に添ひて、さと吹く風に灯籠も吹きまどはして空暗き心地するに、「窓を打つ声」など、めづらしからぬ古言をうち誦じたまへるも、折からにや、妹が垣根におとなはせまほしき御声なり。「独り住みは、ことに変ることなけれど、あやしうさうざうしくこそありけれ。深き山住みせむにも、かくて身を馴らはしたらむは、こよなう心澄みぬべきわざなりけり」などのたまひて、「女房、ここにくだものなど参らせよ。男ども召さむもこととしきほどなり」などのたまふ。

心には、ただ空を眺めたまふ御けしきの、尽きせず心苦しければ、かくのみ思し紛れずは、御行ひにも心澄ましたまはむこと難くや、と見たてまつりたまふ。ほのかに見し御面影だに忘れがたし、ましてことわりぞかし、と思ひゐたまへり。「昨日今日と思ひたまふるほどに、御果てもやうやう近うなりはべりにけり。いかやうにかおきて思しめすらむ」と申したまへば、「何ばかり世の常ならぬことをかはものせむ。かの心ざしおかれたる極楽の曼陀羅など、このたびなむ供養すべき。経などもあまたありけるを、なにがし僧都皆その心くはしく聞きおきたなれば、また加へてすべきことどもも、かの僧都の言はむに従ひてなむものすべき」などのたまふ。「かやうのこと、もとよりとりたてて思しおきてけるは、うしろやすきわざなれど、この世にはかりそめの御契りなりけりと見たまふには、形見といふばかり、とどめきこえたまへる人だにものしたまはぬこそ口惜しうはべれ」と申したまへば、「それは、仮ならず命長き人びとにも、さやうなることのおほかた少なかりけるみづからの口惜しきにこそ。そこにこそは門は広げたまはめ」などのたまふ。

古りがたくよしある書きざまにも、なまめざましきものに思したりしを、末の世には、かたみに心ばせを見知るどちにて、うしろやすき方にはうち頼むべく思ひ交はしたまひながら、またさりとてひたぶるにはたうちとけず、ゆゑありてもてなしたまへりし心おきてを、人はさしも見知らざりきかし、など思し出づ。せめてさうぎうしき時は、かやうにただおほかたにうちほのめきたまふ折々もあり。昔の御ありさまには名残なくなりたるべし。

夏の御方より御衣更の御装束たてまつりたまふとて、

夏衣裁ち替へてける今日ばかり古き思ひもすすみやはせぬ

御返し、

羽衣の薄きに変はる今日よりは空蟬の世ぞいとど悲しき

祭の日、いとつれづれにて、今日は物見るとて人びと心地よげならむかしとて、御社のありさまなど思しやる。「女房など、いかにさうぎうしからむ。里に忍びて出でて見よかし」などのたまふ。中將の君の、東面にうたた寝したるを、歩みおはして見たまへば、いとささやかにをかしきさまして起き上がりたり。つらつきはなやかに、匂ひたる顔をもて隠して、すこしふくだみたる髪のかかりなど、をかしげなり。紅の黄ばみたる気添ひたる袴、萱草色の単衣、いと濃き鈍色に黒きなど、うるはしからず重なりて、裳、唐衣も脱ぎすべしたりけるを、とかく引きかけなどするに、葵をかたはらに置きたりけるを、寄りて取りたまひて、「いかにとかや。この名こそ忘れにけれ」とのたまへば、

さもこそはよるべの水に水草ゐめ今日のかざしよ名さへ忘るる

と恥ぢらひて聞こゆ。げにといとほしくて、

おほかたは思ひ捨ててし世なれども葵はなほや摘みをかすべきなど、一人ばかりをば思し放たぬけしきなり。

五月雨はいとど眺めくらしたまふより他のことなく、さうぎうしきに、十余

世を厭ふついでになるとか。それはなほわるきこととこそ。なほしばし思しのどめさせたまひて、宮たちなどもおとなびさせたまひて、まことに動きなかるべき御ありさまに見たてまつりなされたまはむまでは、乱れなくはべらむこそ心やすくうれしくもはべるべけれ」など、いとおとなびて聞こえたるけしき、いとめやすし。

「さまで思ひのどめむ心深きこそ、浅きに劣りぬべけれ」などのたまひて、昔よりものを思ふことなど語り出でたまふ中に、「故後の宮のかくれたまへりし春なむ、花の色を見ても、まことに心あらばとおぼえし。それは、おほかたの世につけて、をかしかりし御ありさまを、幼くより見たてまつりしみて、さるとぢめの悲しさも人よりことにおぼえしなり。みづから取り分く心ぎしにも、もののあはれはよらぬわざなり。年経ぬる人に後れて、心収めむ方なく忘れがたきも、ただかかる仲の悲しさのみにはあらず。幼きほどより生ほしたてしありさま、もろともに老いぬる末の世にうち捨てられて、わが身も人の身も思ひ続けらるる悲しさの堪へがたきになむ。すべて、もののあはれもゆゑあることもをかしき筋も、広う思ひめぐらす方、方々添ふことの浅からずなるになむありける」など、夜更くるまで、昔今の御物語に、かくても明かしつべき夜をとししながら、帰りたまふを、女ものあはれに思ふべし。わが御心にも、あやしうもなりにける心のほどかなと思し知る。

さてもまた、例の御行ひに、夜中になりてぞ、昼の御座にいとかりそめに寄り臥したまふ。つとめて、御文たてまつりたまふに、

なくなくも帰りにしかな飯の世はいづこもつひの常世ならぬに
よべの御ありさまは恨めしげなりしかど、いとかくあらぬさまに思しほれたる
御けしきの心苦しさに、身の上はさしおかれて涙ぐまれたまふ。

雁がゐし苗代水の絶えしより映りし花の影をだに見ず

いはけなかりしほどよりの御ありさまを、いで何ごとぞやありし、と思し出づるには、まづその折かの折、かどかどうらうらうじう、匂ひ多かりし心ざま、もてなし、言の葉のみ思ひ続けられたまふに、例の涙もろさはふとこぼれ出でぬるもいと苦し。

夕暮の霞たどどしく、をかしきほどなれば、やがて明石の御方に渡りたまへり。久しうさしものぞきたまはぬに、おぼえなき折なれば、うち驚かるれど、さまようけはひ心にくくもてつけて、なほこそ人にはまさりたれと見たまふにつけては、またかうざまにはあらで、かれはさまことにこそゆゑよしをもてなしたまへりしか、と思し比べらるるにも、面影に恋しう、悲しさのみまされば、いかにして慰むべき心ぞと、いと比べ苦しう、こなたにては、のどやかに昔物語などしたまふ。「人をあはれと心とどめむはいとわろかべきことと、いにしへより思ひ得て、すべていかなる方にも、この世に執とまるべきことなく、心づかひをせしに、おほかたの世につけて、身のいたづらにはふれぬべかりしころほひなど、とぎまかうざまに思ひめぐらししに、命をもみづから捨てつべく、野山の末にはふらかさむに、ことなる障りあるまじくなむ思ひなりしを、末の世に、今は限りのほど近き身にてしも、あるまじきほだし多うかかづらひて今まで過ぐしてけるが、心弱うももどかしきこと」など、さして一つ筋の悲しさにのみはのたまはねど、思したるさまのことわりに心苦しきを、いとほしう見たてまつりて、「おほかたの人目に何ばかり惜しげなき人だに、心のうちのほだしおのづから多うはべるなるを、ましていかでかは心やすくも思し捨てむ。さやうにあさへたることは、かへりて軽々しきもどかしきなども立ち出でて、なかなかなることなどはべるを、思したつほど鈍きやうにはべらむや、つひに澄み果てさせたまふ方深うはべらむと思ひやられはべりてこそ。いにしへの例などを聞きはべるにつけても、心におどろかれ、思ふより違ふふしありて、

涙ぐみたまへれば、いとものしと思して、「婆のたまひしことを、まがまがしうのたまふ」とて、伏目になりて、御衣の袖を引きまさぐりなどしつつ、紛らはしおはす。隅の間の高欄におしかかりて、御前の庭をも、御簾の内を見わたして眺めたまふ。女房なども、かの御形見の色変へぬもあり、例の色あひなるも、綾などはなやかにはあらず。みづからの御直衣も、色は世の常なれど、ことさらやつして、無紋をたてまつれり。御しつらひなどもいとおろそかにことそぎて、寂しく心細げにしめやかなれば、

今はとて荒らしや果てむ亡き人の心とどめし春の垣根を

人やりならず悲しう思さるる。

いとつれづれなれば、入道の宮の御方に渡りたまふに、若宮も人に抱かれておはしまして、こなたの若君と走り遊び、花惜しみたまふ心ばへども深からず、いといはけなし。宮は仏の御前にて経をぞ読みたまひける。何ばかり深う思しとれる御道心にもあらざりしかども、この世に恨めしく御心乱るることもおはせず、のどやかなるままに紛れなく行ひたまひて、一方に思ひ離れたまへるもいとうらやましく、かくあさへたまへる女の御心ざしにだに後れぬること、と口惜しう思さる。闕伽の花の夕映えしていとおもしろく見ゆれば、「春に心寄せたりし人なくて、花の色もすさまじくのみ見なさるるを、仏の御飾りにてこそ見るべかりけれ」とのたまひて、「対の前の山吹こそなほ世に見えぬ花のさまなれ。房の大きさなどよ。品高くななどはおきてざりける花にやあらむ、はなやかににぎははしき方はいとおもしろきものになむありける。植ゑし人なき春とも知らず顔にて、常よりも匂ひかさねたるこそあはれにはべれ」とのたまふ。御いらへに、「谷には春も」と、何心もなく聞こえたまふを、ことしもこそあれ、心憂くも、と思さるるにつけても、まづかやうのはかなきことにつけては、そのことのさらでもありなむかしと思ふに、違ふふしなくともやみにしかたと、

言ひ伝ふべきころほひをだに思ひのどめてこそはと、念じ過ぐしたまひつつ、憂き世をも背きやりたまはず。御方々にまれにもうちほのめきたまふにつけては、まづいとせきがたき涙の雨のみ降りまされば、いとわりなくて、いづ方にもおぼつかなきさまにて過ぐしたまふ。

後の宮は内に参らせたまひて、三の宮をぞさうぎうしき御慰めにはおはしませたまひける。「婆ののたまひしかば」とて、対の御前の紅梅はいと取り分きて後見ありきたまふを、いとあはれと見たてまつりたまふ。如月になれば、花の木どもの盛りなるも、まだしきも、梢をかしう霞みわたれるに、かの御形見の紅梅に、鶯のはなやかに鳴き出でたれば、立ち出でて御覧ず。

植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らず顔にて来る鶯
とうそぶき歩かせたまふ。

春深くなりゆくままに、御前のありさまいにしへに変らぬを、めでたまふ方にはあらねど、静心なく、何ごとにつけても胸いたう思さるれば、おほかたこの世の外のやうに、鳥の音も聞こえざらむ山の末ゆかしうのみ、いとどなりまさりたまふ。山吹などの心地よげに咲き乱れたるも、うちつけに露けくのみ見なされたまふ。他の花は一重散りて、八重咲く花桜盛り過ぎて、樺桜は開け、藤は後れて色づきなどこそはすめるを、その遅く疾き花の心をよく分きて、いろいろを尽くし植ゑおきたまひしかば、時を忘れず匂ひ満ちたるに、若宮、「まろが桜は咲きにけり。いかで久しく散らさじ。木のめぐりに帳を立てて、帷子を上げずは、風もえ吹き寄らじ」と、かしこう思ひ得たりと思ひてのたまふ顔のいとうつくしきにも、うち笑まれたまひぬ。「覆ふばかりの袖求めむ人よりは、いとかしこう思し寄りたまへりしかし」など、この宮ばかりをぞもてあそびに見たてまつりたまふ。「君に馴れきこえむことも残り少なしや。命といふもの、今しばしかかづらふべくとも、対面はえあらじかし」とて、例の

れをしひて知らぬ顔にながらふれば、かく今はの夕べ近き末にいみじきことのとぢめを見つるに、宿世のほども、みづからの心の際も残りなく見果てて心やすきに、今なむ露のほだしなくなりたるを、これかれ、かくてありしよりけに目馴らす人びとの、今はとて行き別れむほどこそ今一際の心乱れぬべけれ。いとかなしかし。わろかりける心のほどかな」とて、御目おしのごひ隠したまふに、紛れずやがてこぼるる御涙を見たてまつる人びと、ましてせきとめむかたなし。さて、うち捨てられたてまつりなむがうれはしさを、おのおのうち出でまほしけれど、さもえ聞こえず、むせかへりてやみぬ。

かくのみ嘆き明かしたまへる曙、ながめ暮らしたまへる夕暮などの、しめやかなる折々は、かのおしなべてには思したらざりし人びとを、御前近くて、かやうの御物語などをしたまふ。中將の君とてさぶらふは、まだ小さくより見たまひ馴れにしを、いと忍びつつ見たまひ過ぐさずやありけむ、いとかたはらいたきことに思ひて馴れきこえざりけるを、かく亡せたまひて後は、その方にはあらず、人よりもらうたきものに心とどめたまへりし方ざまにも、かの御形見の筋につけてぞあはれに思ほしける。心ばせかたちなどもめやすくて、うなる松におぼえたるけはひ、ただならましよりはらうらうじと思ほす。

疎き人にはさらに見えたまはず。上達部なども、むつまじき、御はらからの宮たちなど、常に参りたまへれど、対面したまふことをさをさなし。人に向かはむほどばかりは、さかしく思ひしづめ、心収めむと思ふとも、月ごろにほけにたらむ身のありさま、かたくなしきひがことまじりて末の世の人にもて悩まれむ後の名さへうたてあるべし、思ひほれてなむ人にも見えざむなると言はれむも、同じことなれど、なほ音に聞きて思ひやることのかたはなるよりも見苦しきことの目に見るは、こよなく際まさりてをこなり、と思せば、大將の君などにだに御簾隔ててぞ対面したまひける。かく心変りしたまへるやうに、人の

ど、一わたりづつは、いかならむとすらむと思したりしを、すこしにても心を乱りたまひけむことの、いとほしう悔しうおぼえたまふさま、胸よりもあまる心地したまふ。その折のことの心を知り、今も近う仕うまつる人びとは、ほのぼの聞こえ出づるもあり。入道の宮の渡りはじめたまへりしほど、その折はしも色にはさらに出だしたまはざりしかど、ことにふれつつ、あぢきなわぎやと思ひたまへりしけしきのあはれなりし中にも、雪降りたりし暁に立ちやすらひて、わが身も冷え入るやうにおぼえて、空のけしき激しかりしに、いとなつかしうおいらかなるものから、袖のいたう泣き濡らしたまへりけるをひき隠し、せめて紛らはしたまへりしほどの用意などを、夜もすがら、夢にても、またはいかならむ世にかと思し続けらる。曙にしも、曹司に下るる女房なるべし、「いみじうも積もりにける雪かな」と言ふ声を聞きつけたまへる、ただその折の心地するに、御かたはらの寂しきもいふかたなく悲し。

憂き世には雪消えなむと思ひつつ思ひの外になほぞほどふる

例の紛らはしには、御手水召して行ひしたまふ。埋みたる火起こし出でて、御火桶参らす。中納言の君、中將の君など、御前近くて御物語聞こゆ。「独り寝、常よりも寂しかりつる夜のさまかな、かくてもいとよく思ひ澄ましつべかりける世を、はかなくもかかずらひけるかな」とうちながめたまふ。我さへうち捨てては、この人びとのいとど嘆きわびむことのあはれにいとほしかるべき、など見わたしたまふ。忍びやかにうち行ひつつ、経など読みたまへる御声を、よろしう思はむことにてだに涙とまるまじきを、まして袖のしがらみせきあへぬまであはれに、明け暮れ見たてまつる人びとの心地、尽きせず思ひきこゆ。「この世につけては、飽かず思ふべきことをさをさあるまじう、高き身には生まれながら、また、人よりことに口惜しき契りにもありけるかなと思ふこと絶えず、世のはかなく憂きを知らすべく仏などのおきてたまへる身なるべし。そ

春の光を見たまふにつけても、いとどくれ惑ひたるやうにのみ、御心ひとつは悲しさの改まるべくもあらぬに、外には例のやうに人びと参りたまひなれど、御心地悩ましきさまにもてなしたまひて、御簾の内にのみおはします。

兵部卿宮渡りたまへるにぞ、ただうちとけたる方にて対面したまはむとて、御消息聞こえたまふ。

わが宿は花もてはやす人もなし何にか春のたづね来つらむ
宮、うち涙ぐみたまひて、

香をとめて来つるかひなくおほかたの花のたよりと言ひやなすべき

紅梅の下に歩み出でたまへる御さまのいとなつかしきにぞ、これより他に見はやすべき人なくやと見たまへる。花はほのかに開けさしつつ、をかしきほどの匂ひなり。御遊びもなく、例に變りたること多かり。

女房なども、年ごろ経にけるは、墨染の色こまやかにて着つつ、悲しさも改めがたく、思ひさますべき世なく恋ひきこゆるに、絶えて御方々にも渡りたまはず。紛れなく見たてまつるを慰めにて馴れ仕うまつれる、年ごろまめやかに御心とどめてなどはあらざりしかど、時々は見放たぬやうに思したりつる人びとも、なかなかかかる寂しき御一人寝になりては、いとおほぞうにもてなしたまひて、夜の御宿直などにも、これかれとあまたを、御座のあたり引きさけつつ、さぶらはせたまふ。

つれづれなるままに、いにしへの物語などしたまふ折々もあり。名残なき御聖心の深くなりゆくにつけても、さしもあり果つまじかりけることにつけつつ、中ごろもの恨めしう思したるけしきの、時々見えたまひしなどを思し出づるに、などで、戯れにても、またまめやかに心苦しきことにつけても、さやうなる心を見えたてまつりけむ、なに事もらうらうじくおはせし御心ばへなりしかば、人の深き心もいとう見知りたまひながら、怨じ果てたまふことはなかりしか

幻

る別れぞいと口惜しきわざなりける。今は蓮の露も異事に紛るまじく、後の世をとひたみちに思し立つことたゆみなし。されど、人聞きを憚りたまふなむあぢきなかりける。

御わぎのことども、はかばかしくのたまひおきつることどもなかりければ、大将の君なむとりもちて仕うまつりたまひける。今日やとのみわが身も心づかひせられたまふ折多かるを、はかなくて積もりにけるも夢の心地のみす。中宮なども思し忘るる時の間なく恋ひきこえたまふ。

ざりならぬ御とぶらひの重なりぬること」と喜びきこえたまふ。

「薄墨」とのたまひしよりは、今すこしまやかにてたてまつれり。世の中に幸ひありめでたき人も、あいなうおほかたの世に嫉まれ、よきにつけても心の限りおごりて、人のため苦しき人もあるを、あやしきまですずるなる人にも受けられ、はかなくし出でたまふことも、何ごとにつけても世にほめられ、心にくく、折ふしにつけつづらうらうじく、ありがたかりし人の御心ばへなりかし。さしもあるまじきおほよその人さへ、そのころは、風の音虫の声につけつつ涙落とさぬはなし。まして、ほのかにも見たてまつりし人の、思ひ慰むべき世なし。年ごろ睦ましく仕うまつり馴れつる人びと、しばしも残れる命恨めしきことを嘆きつつ、尼になり、この世のほかの山住みなどに思ひ立つもありけり。

冷泉院の後の宮よりも、あはれなる御消息絶えず、尽きせぬことども聞こえたまひて、

枯れ果つる野辺を憂しとや亡き人の秋に心をとどめざりけむ

今なむことわり知られはべりぬる。

とありけるを、ものおぼえぬ御心にも、うち返し、置きがたく見たまふ。いふかひあり、をかしからむ方の慰めには、この宮ばかりこそおはしけれと、いささかのもの紛るるやうに思し続けるにも、涙のこぼるるを、袖の暇なく、え書きやりたまはず。

昇りにし雲居ながらもかへり見よわれ飽きはてぬ常ならぬ世に

おし包みたまひても、とばかりうち眺めておはす。

すくよかにも思されず、われながら、ことのほかにほれられしく思し知らること多かる紛らはしに、女方にぞおはします。仏の御前に人しげからずもてなして、のどやかに行なひたまふ。千年をももろともにと申ししかど、限りあ

どのすすめたまひける身を、心強く過ぐして、つひに來し方行く先も例あらじとおぼゆる悲しさを見つるかな、今はこの世にうしろめたきこと残らずなりぬ、ひたみちに行ひにおもむきなむに障り所あるまじきを、いとかく収めむ方なき心惑ひにては、願はむ道にも入りがたくや、とややましきを、この思ひすこしなのために忘れさせたまへ、と阿弥陀仏を念じたてまつりたまふ。

所々の御とぶらひ、内をはじめたてまつりて、例の作法ばかりにはあらず、いとしげく聞こえたまふ。思しめしたる心のほどには、さらに何ごとも目にも耳にもとまらず、心にかかりたまふことあるまじけれど、人にほけほけしきさまに見えじ、今さらにわが世の末に、かたくなしく心弱き惑ひにて、世の中をなむ背きにける、と流れとどまらむ名を思しつつむになむ、身を心にまかせぬ嘆きをさへうち添へたまひける。

致仕の大臣、あはれをも折過ぐしたまはぬ御心にて、かく世にたぐひなくものしたまふ人のはかなく亡せたまひぬることを、口惜しくあはれに思して、いとしば問ひきこえたまふ。昔大將の御母亡せたまへりしもこのころのことぞかし、と思し出づるに、いとも悲しく、その折、かの御身を惜しみきこえたまひし人の多くも亡せたまひにけるかな、後れ先だつほどなき世なりけりや、などしめやかなる夕暮にながめたまふ。空のけしきもただならねば、御子の蔵人少將してたてまつりたまふ。あはれなることなどこまやかに聞こえたまひて、端に、

いにしへの秋さへ今の心地して濡れにし袖に露ぞおきそふ
御返し、

露けさは昔今ともおもほえずおほかた秋の夜こそつられ
もののみ悲しき御心のままならば、待ちとりたまひては、心弱くも、と目とどめたまひつべき大臣の御心ざまなれば、めやすきほどにと、「たびたびのなほ

地して、人にかかりてぞおはしましけるを、見たてまつる人も、さばかりいつかきき御身をと、ものの心知らぬ下衆さへ泣かぬなかりけり。御送りの女房はまして、夢路に惑ふ心地して、車よりもまろび落ちぬべきをぞ、もてあつかひける。昔、大将の君の御母君亡せたまへりし時の暁を思ひ出づるにも、かれはなほもののおぼえけるにや、月の顔の明らかにおぼえしを、今宵はただくれ惑ひたまへり。十四日に亡せたまひて、これは十五日の暁なりけり。日はいとはなやかにさし上がりて、野辺の露も隠れたる限なくて、世の中思し続けるに、いとど厭はしくいみじければ、後るとても幾世かは経べき、かかる悲しさの紛れに、昔よりの御本意も遂げてまほしく思ほせど、心弱き後のそしりを思せば、このほどを過ぐさむとしたまふに、胸のせきあぐるぞ堪へがたかりける。

大将の君も、御忌に籠もりたまひて、あからさまにもまかでたまはず。明け暮れ近くさぶらひて、心苦しくいみじき御けしきを、ことわりに悲しく見たてまつりたまひて、よろづに慰めきこえたまふ。風、野分だちて吹く夕暮に、昔のことと思し出でて、ほのかに見たてまつりしものを、と恋しくおぼえたまふに、また、限りのほどの夢の心地せしなど人知れず思ひ続けたまふに、堪へがたく悲しければ、人目にはさしも見えじとつつみて、「阿弥陀仏阿弥陀仏」と引きたまふ数珠の数に紛らはしてぞ、涙の玉をばもて消ちたまひける。

いにしへの秋の夕べの恋しきに今はと見えし明けぐれの夢

ぞ、名残さへ憂かりける。やむごとなき僧どもさぶらはせたまひて、定まりたる念仏をばさるものにて、法華経など誦ぜさせたまふ。かたがたいとあはれなり。

臥しても起きても涙の干る世なく、霧りふたがりて明かし暮らしたまふ。いにしへより御身のありさま思し続けるに、鏡に見ゆる影をはじめて、人には異なりける身ながら、いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく仏な

る限り騒ぎ惑ふを、「あなかま、しばし」としづめ顔にて、御几帳の帷を、ものたまふ紛れに引き上げて見たまへば、ほのぼのと明けゆく光もおぼつかなければ、大殿油を近くかかげて見たてまつりたまふに、飽かずうつくしげに、めでたうきよらに見ゆる御顔のあたらしきに、この君のかくのぞきたまふを見る見るも、あながちに隠さむの御心も思されぬなめり。「かく何ごともまだ変らぬけしきながら、限りのさまはしるかりけるこそ」とて、御袖を顔におしあてたまへるほど、大将の君も涙にくれて、目も見えたまはぬを、しひてしぼり開けて見たてまつるに、なかなか飽かず悲しきことたぐひなきに、まことに心惑ひもしぬべし。御髪のただうちやられたまへるほど、こちたくけうらにて、露ばかり乱れたるけしきもなう、つやつやとうつくしげなるさまぞ限りなき。火のいと明かきに、御色はいと白く光るやうにて、とかくうち紛らはすことありしうつつの御もてなしよりも、いふかひなきさまにて、何心なくて臥したまへる御ありさまの、飽かぬ所なしと言はむもさらなりや。なのめにだにあらず、たぐひなきを見たてまつるに、死に入る魂の、やがてこの御骸にとまらなむと思ほゆるも、わりなきことなりや。

仕うまつり馴れたる女房などの、ものおぼゆるもなければ、院ぞ、何ごとも思しわかれず思さるる御心地をあながちに静めたまひて、限りの御ことどもしたまふ。いにしへも、悲しと思すこともあまた見たまひし御身なれど、いとかうおり立ちてはまだ知りたまはざりけることを、すべて来し方行く先たぐひなき心地したまふ。

やがてその日、とかく収めたてまつる。限りありけることなれば、骸を見つともえ過ぐしたまふまじかりけるぞ心憂き世の中なりける。はるばると広き野の、所もなく立ち込みて、限りなくいかめしき作法なれど、いとはかなき煙にて、はかなく昇りたまひぬるも、例のことなれどあへなくいみじ。空を歩む心

じく、明けぐれの夢に惑ひたまふほど、さらなりや。さかしき人おはせざりけり。さぶらふ女房なども、ある限り、さらにものおぼえたるなし。院はまして思し静めむ方なければ、大将の君近く参りたまへるを、御几帳のもとに呼び寄せたてまつりたまひて、「かく今は限りのさまなめるを、年ごろの本意ありて思ひつること、かかるきざみに、その思ひ違へてやみなむがいといとほしき。御加持にさぶらふ大徳たち、読経の僧なども、皆声やめて出でぬなるを、さりともし立ちとまりてもものすべきもあらむ。この世にはむなしき心地するを、仏の御しるし、今はかの冥き途のとぶらひにだに頼み申すべきを、頭おろすべきよしものしたまへ。さるべき僧、誰れかとまりたる」などのたまふ御けしき、心強く思しなすべかめれど、御顔の色もあらぬさまにしみじく堪へかね、御涙のとまらぬを、ことわりに悲しく見たてまつりたまふ。

「御もののけなどの、これも、人の御心乱らむとて、かくのみものははべめるを、さもやおはしますらむ。さらば、とてもかくても御本意のことはよろしきことにはべなり。一日一夜、忌むことのしるしこそはむなしからずははべなれ。まことにいふかひなくなり果てさせたまひて、後の御髪ばかりをやつさせたまひても、異なるかの世の御光ともならせたまはざらむものから、目の前の悲しびのみまさるやうにて、いかがはべるべからむ」と申したまひて、御忌に籠もりさぶらふべき心ざしありてまかでぬ僧、その人かの人など召して、さるべきことども、この君ぞ行なひたまふ。

年ごろ、何やかやとおほけなき心はなかりしかど、いかならむ世に、ありしばかりも見たてまつらむ、ほのかにも御声をだに聞かぬこと、など心にも離れず思ひわたりつるものを、声はつひに聞かせたまはずなりぬるにこそはあめれ、むなしき御骸にても、今一たび見たてまつらむの心ざしかなふべき折は、ただ今よりほかにいかでかあらむ、と思ふに、つつみもあへず泣かれて、女房のあ

心苦しく、すすろにもの悲し。

風すごく吹き出でたる夕暮に、前裁見たまふとて、脇息に寄りゐたまへるを、院渡りて、見たてまつりたまひて、「今日はいとよく起きゐたまふめるは。この御前にては、こよなく御心もはれられしげなめりかし」と聞こえたまふ。かばかりの隙あるをいとうれしと思ひきこえたまへる御けしきを見たまふも、心苦しく、つひにいかに思し騒がむと思ふに、あはれなれば、

おくと見るほどぞはかなきともすれば風に乱るる萩のうは露
げにぞ折れかへりとまるべうもあらぬ、よそへられたる折さへ忍びがたきを、
見出だしたまひても、

ややもせば消えをあらそふ露の世に後れ先だつほど経ずもがな
とて、御涙を払ひあへたまはず。宮、

秋風にしばしとまらぬ露の世を誰れか草葉のうへとのみ見む

と聞こえ交はしたまふ御かたちども、あらまほしく、見るかひあるにつけても、かくて千年を過ぐすわざもがなと思さるれど、心かなはぬことなれば、かけとめむ方なきぞ悲しかりける。「今は渡らせたまひぬ。乱り心地いと苦しくなりはべりぬ。いふかひなくなりけるほどと言ひながら、いとなめげにはべりや」とて、御几帳引き寄せて臥したまへるさまの、常よりもいと頼もしげなく見えたまへば、いかに思さるるにかとて、宮は御手をとらへたてまつりて、泣く泣く見たてまつりたまふに、まことに消えゆく露の心地して限りに見えたまへば、御誦經の使ひども、数も知らず立ち騒ぎたり。先ぎきもかくて生き出でたまふ折にならひたまひて、御もののけと疑ひたまひて、一夜さまさまのこををし尽くさせたまへど、かひもなく明け果つるほどに消え果てたまひぬ。

宮も、帰りたまはで、かくて見たてまつりたまへるを、限りなく思す。誰れも誰れも、ことわりの別れにてたぐひあることとも思されず、めづらかにいみ

なる、「この人かの人、はべらずなりなむ後に御心とどめて尋ね思ほせ」などばかり聞こえたまひける。御読経などによりてぞ例のわが御方に渡りたまふ。

三の宮はあまたの御中に、いとをかしげにて歩きたまふを、御心地の隙には、前に据ゑたてまつりたまひて、人の聞かぬ間に、「まろがはべらざらむに、思し出でなむや」と聞こえたまへば、「いと恋しかりなむ。まろは、内の上よりも宮よりも、婆をこそまさりて思ひきこゆれば、おはせずは心地むつかしかなむ」とて、目おしすりて紛らはしたまへるさま、をかしければ、ほほ笑みながら涙は落ちぬ。「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは花の折々に心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむ折は仏にもたてまつりたまへ」と聞こえたまへば、うちうなづきて、御顔をまもりて、涙の落つべかめれば、立ちておはしぬ。取り分きて生ほしたてまつりたまへれば、この宮と姫宮とをぞ、見さしきこえたまはむこと、口惜しくあはれに思されける。

秋待ちつけて、世の中すこし涼しくなりては、御心地もいささかさはやぐやうなれど、なほともすればかことがまし。さるは、身にしむばかり思さるべき秋風ならねど、露けき折がちにて過ぐしたまふ。中宮は参りたまひなむとするを、今しばしは御覧ぜよとも聞こえまほしう思せども、さかしきやうにもあり、内の御使の隙なきもわづらはしければ、さも聞こえたまはぬに、あなたにもえ渡りたまはねば、宮ぞ渡りたまひける。かたはらいたけれど、げに見たてまつらぬもかひなしとて、こなたに御しつらひをことにせさせたまふ。こよなう痩せ細りたまへれど、かくてこそあてになまめかしきことの限りなさもまさりてめでたかりけれど、来し方あまり匂ひ多く、あざあざとおはせし盛りは、なかなかこの世の花の薫りにもよそへられたまひしを、限りもなくらうたげにをかしげなる御さまにて、いとかりそめに世を思ひたまへるけしき、似るものなく

そのこととおどろおどろしからぬ御心地なれど、ただいと弱きさまになりたまへば、むつかしげに所狭く悩みたまふこともなし。さぶらふ人びとも、いかにおはしまさむとするにかと思ひよるにも、まづかきくらし、あたらしう悲しき御ありさまと見たてまつる。

かくのみおはすれば、中宮、この院にまかでさせたまふ。東の対におはしなすべければ、こなたにはた待ちきこえたまふ。儀式など、例に変らねど、この世のありさまを見果てずなりぬるなどのみ思せば、よろづにつけてものあはれなり。名対面を聞きたまふにも、その人かの人など、耳とどめて聞かれたまふ。上達部などいと多く仕うまつりたまへり。久しき御対面のとだえをめづらしく思して、御物語こまやかに聞こえたまふ。院入りたまひて、「今宵は巢離れたる心地して、無徳なりや。まかりて休みはべらむ」とて渡りたまひぬ。起きゐたまへるをいとうれしと思したるも、いとはかなきほどの御慰めなり。「方々におはしましては、あなたに渡らせたまはむもかたじけなし。参らむことはたわりなくなりにてはべれば」とて、しばらくはこなたにおはすれば、明石の御方も渡りたまひて、心深げにしづまりたる御物語ども聞こえ交はしたまふ。

上は御心のうちに思しめぐらすこと多かれど、さかしげに亡からむ後などのたまひ出づることなし。ただなべての世の常なきありさまを、おほどかに言少ななるものから、あさはかにはあらずのたまひなしたるけはひなどぞ、言に出でたらむよりもあはれに、もの心細き御けしきはしるう見えける。宮たちを見たてまつりたまうても、「おのおのの御行く末をゆかしく思ひきこえけるこそ、かくはかなかりける身を惜しむ心のまじりけるにや」とて、涙ぐみたまへる御顔の匂ひ、いみじうをかしげなり。などかうのみ思したらむと思すに、中宮うち泣きたまひぬ。ゆゆしげになどは聞こえなしたまはず、もののついでなごにぞ、年ごろ仕うまつり馴れたる人びとの、ことなるよるべなういとほしげ

と明けゆく朝ぼらけ、霞の間より見えたる花の色々、なほ春に心とまりぬべく
匂ひわたりて、百千鳥のさへづりも笛の音に劣らぬ心地して、もののあはれも
おもしろさも残らぬほどに、陵王の舞ひ手急になるほどの末つ方の楽、はなや
かににぎははしく聞こゆるに、皆人の脱ぎかけたるものの色々なども、ものの
をりからにをかしうのみ見ゆ。親王たち、上達部の中にも、ものの上手ども、
手残さず遊びたまふ。上下心地よげに、興あるけしきどもなるを見たまふにも、
残り少なしと身を思したる御心のうちにはよろづのことあはれにおぼえたまふ。

昨日、例ならず起きゐたまへりし名残にや、いと苦しうして臥したまへり。
年ごろ、かかるものの折ごとに、参り集ひ遊びたまふ人びとの御かたちありさ
まの、おのがじし才ども、琴笛の音をも、今日や見聞きたまふべきとぢめなる
らむとのみ思さるれば、さしも目とまるまじき人の顔どももあはれに見えわた
されたまふ。まして、夏冬の時につけたる遊び戯れにも、なま挑ましき下の心
はおのづから立ちまじりもすらめど、さすがに情けを交はしたまふ方々は、誰
れも久しくとまるべき世にはあらざなれど、まづ我一人行方知らずなりなむを
思し続ける、いみじうあはれなり。

こと果てて、おのがじし帰りたまひなむとするも、遠き別れめきて惜しまる。
花散里の御方に、

絶えぬべき御法ながらぞ頼まるる世々にと結ぶ中の契りを
御返り、

結びおく契りは絶えじおほかたの残りすくなき御法なりとも
やがてこのついでに、不断の読経、懺法など、たゆみなく尊きことどもせさせ
たまふ。御修法は、ことなるしるしも見えでほども経ぬれば、例のことになり
て、うちはへさるべき所々、寺々にてぞせさせたまひける。

御 法
夏になりては、例の暑さにさへ、いとど消え入りたまひぬべき折々多かり。

品々賜はす。物の色、縫ひ目よりはじめて、きよらなること限りなし。おほかた何ごとも、いとかめしきわざどもをせられたり。こととしきさまにも聞こえたまはざりければ、詳しきことどもも知らせたまはざりけるに、女の御おきてにてはいたり深く、仏の道にさへ通ひたまひける御心のほどなどを、院はいと限りなしと見たてまつりたまひて、ただおほかたの御しつらひ何かのことがかりをなむ営ませたまひける。楽人、舞人などのことは、大将の君、取り分きて仕うまつりたまふ。内、春宮、后の宮たちをはじめたてまつりて、御方々、ここかしこに御誦経、捧物などばかりのことをうちしたまふだに所狭きに、ましてそのころこの御いそぎを仕うまつらぬ所なければ、いとこちたきことどもあり。いつのほどにいとかくいろいろ思しまうけけむ、げに石の上の世々経たる御願にやとぞ見えたる。花散里と聞こえし御方、明石なども渡りたまへり。南、東の戸を開けておはします。寝殿の西の塗籠なりけり。北の廂に、方々の御局どもは、障子ばかりを隔てつつしたり。

三月の十日なれば、花盛りにて、空のけしきなどもうらかにものおもしろく、仏のおはすなる所のありさま、遠からず思ひやられてことなり。深き心もなき人さへ罪を失ひつべし。薪こる讃嘆の声も、そこら集ひたる響き、おどろおどろしきを、うち休みて静まりたるほどだにあはれに思さるるを、ましてこのころとなりては、何ごとにつけても心細くのみ思し知る。明石の御方に、三の宮して聞こえたまへる。

惜しからぬこの身ながらもかぎりとして薪尽きなむことの悲しさ

御返り、心細き筋は後の聞こえも心後れたるわざにや、そこはかとなくぞあめる。

薪こる思ひは今日を初めにてこの世に願ふ法ぞはるけき

夜もすがら、尊きことにうち合はせたる鼓の声絶えずおもしろし。ほのぼの

紫の上、いたうわづらひたまひし御心地の後、いと篤しくなりたまひて、そこはかとなく悩みわたりたまふこと久しくなりぬ。いとおどろおどろしうはあらねど、年月重なれば、頼もしげなく、いとどあえかになりまさりたまへるを、院の思ほし嘆くこと限りなし。しばしにても後れきこえたまはむことをば、いみじかるべく思し、みづからの御心地にはこの世に飽かぬことなく、うしろめたきほだしだにまじらぬ御身なれば、あながちにかけてどめまほしき御命とも思されぬを、年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむことのみぞ、人知れぬ御心のうちにも、ものあはれに思されける。後の世のためにと、尊きことどもを多くせさせたまひつつ、いかでなほ本意あるさまになりて、しばしもかかづらはむ命のほどは行ひを紛れなく、とたゆみなく思しのたまへど、さらに許しきこえたまはず。さるは、わが御心にも、しか思しそめたる筋なれば、かくねむごろに思ひたまへるついでにもよほされて、同じ道にも入りなむと思せど、一たび家を出でたまひなば、仮にもこの世を顧みむとは思しおきてず、後の世には同じ蓮の座をも分けむ、と契り交はしきこえたまひて、頼みをかけたまふ御仲なれど、ここながら勤めたまはむほどは、同じ山なりとも峰を隔て、あひ見たてまつらぬ住み処にかけ離れなむことをのみ思しまうけたるに、かくいと頼もしげなきさまに悩み篤いたまへば、いと心苦しき御ありさまを、今とは行き離れむきざみには捨てがたく、なかなか山水の住み処濁りぬべく思しとどこほるほどに、ただうちあさへたる思ひのままの道心起こす人びとにはこよなう後れたまひぬべかめり。御許しなくて、心一つに思し立たむもさま悪しく本意なきやうなれば、このことによりてぞ女君は恨めしく思ひきこえたまひける。わが御身をも罪軽かるまじきにやとうしろめたく思されけり。

年ごろ、私の御願にて書かせたてまつりたまひける法華経千部、いそぎて供養じたまふ。わが御殿と思す二条院にてぞしたまひける。七僧の法服など、

御

法

ちをかしう、心ばせかどありて、皆すぐれたりける。三の君、次郎君は、東の御殿にぞ取り分きてかしづきたてまつりたまふ。院も見馴れたまうて、いとらうたくしたまふ。この御仲らひのこと言ひやるかたなく、とぞ。

づうち泣きて、故上おはせましかば、いかに心づきなしと思しながらも、罪を隠いたまはましと思ひ出でたまふに、涙のみつらきに先だつ心地して、書きやりたまはず。

何ゆゑか世に数ならぬ身ひとつを憂しとも思ひかなしとも聞くとのみ、思しけるままに、書きもとぢめたまはぬやうにて、おしつみて出だしたまうつ。少将は、人びと物語して、「時々さぶらふに、かかる御簾の前はたづきなき心地しはべるを、今よりはよすがある心地して、常に参るべし。内外なども許されぬべき年ごろのしるし現はれはべる心地なむしはべる」など、けしきばみおきて出でたまひぬ。

いとどしく心よからぬ御けしき、あくがれ惑ひたまふほど、大殿の君は日ごろ経るままに思し嘆くことしげし。内侍のすけ、かかることを聞くに、われを世とともに許さぬものにのたまふなるに、かくあなづりにくきことも出で来けるを、と思ひて、文などは時々たてまつれば、聞こえたり。

数ならば身に知られまし世の憂さを人のためにも濡らす袖かな
なまけやけしとは見たまへど、もののあはれなるほどのつれづれに、かれもいとただにはおぼえじと思す片心ぞつきにける。

人の世の憂きをあはれと見しかども身にかへむとは思はざりしを
とのみあるを、思しけるままとあはれに見る。

この、昔御中絶えのほどには、この内侍のみこそ人知れぬものに思ひとめたまへりしか、こと改めて後は、いとたまさかに、つれなくなりまさりたまうつ、さすがに君達はあまたになりにけり。この御腹には、太郎君、三郎君、五郎君、六郎君、中の君、四の君、五の君とおはす。内侍は、大君、三の君、六の君、次郎君、四郎君とぞおはしける。すべて十二人が中にかたほなるなく、いとをかしげに、とりどりに生ひ出でたまける。内侍腹の君達しもなむ、かた

みむ。かしこなる人びとも、らうたげに恋ひきこゆめりしを、選り残したまへる、やうあらむとは見ながら、思ひ捨てがたきを、ともかくもてなしはべりなむ」と脅しきこえたまへば、すがすがしき御心にて、この君達をさへや知らぬ所に率て渡したまはむ、と危ふし。姫君を、「いざたまへかし。見たてまつりにかく参り来ることとはしたなければ、常にも参り来じ。かしこにも人びとのらうたきを、同じ所にてだに見たてまつらむ」と聞こえたまふ。まだいといはけなくをかしげにておはす、いとあはれと見たてまつりたまひて、「母君の御教へにな叶ひたまうそ。いと心憂く思ひとる方なき心あるは、いと悪しきわざなり」と、言ひ知らせたてまつりたまふ。

大臣、かかることを聞きたまひて、人笑はれなるやうに思し嘆く。「しばしはさても見たまはで。おのづから思ふところものせらるらむものを。女のかくひききりなるも、かへりては軽くおぼゆるわざなり。よし、かく言ひそめつとならば、何かはおれてふとしも帰りたまふ。おのづから人のけしき心ばへは見えなむ」とのたまはせて、この宮に、蔵人少将の君を御使にてたてまつりたまふ。

契りあれや君を心にとどめおきてあはれと思ふ恨めしと聞く

なほえ思し放たじ。

とある御文を、少将持ておはして、ただ入りに入りたまふ。南面の簀子に円座さし出でて、人びどもの聞こえにくし。宮はましてわびしと思す。この君は、なかにいとかたちよくめやすきさまにて、のどやかに見まはして、いにしへを思ひ出でたるけしきなり。「参り馴れにたる心地して、うひうひしからぬに、さも御覧じ許さずやあらむ」などばかりぞかすめたまふ。御返りいと聞こえにくくて、「われはさらにえ書くまじ」とのたまへば、「御心ざしも隔て若々しきやうに。宣旨書きはた聞こえさすべきにやは」と、集りて聞こえさすれば、ま

にも急ぎ渡りたまはず。大将殿も聞きたまひて、さればよ、いと急にものしたまふ本性なり、この大臣もはたおとなおとなしうのどめたるところさすがになく、いとひききりにはなやいたまへる人びとにて、めざまし、見じ、聞かじなど、ひがひがしきことどもし出でたまうつべき、と驚かれたまうて、三条殿に渡りたまへれば、君たちも片へは止まりたまへれば、姫君たち、さてはいと幼きとをぞ率ておはしにける、見つけてよろこびむつれ、あるは上を恋ひたてまつりて愁へ泣きたまふを、心苦しと思す。

消息たびたび聞こえて、迎へにたてまつれたまへど、御返りだになし。かくかたくなしう軽々しの世や、ともものしうおぼえたまへど、大臣の見聞きたまはむところもあれば、暮らしてみづから参りたまへり。寝殿になむおはするとて、例の渡りたまふ方は、御達のみさぶらふ。若君たちぞ乳母に添ひておはしける。「今さらに若々しの御まじらひや。かかる人をここかしこに落しおきたまひて、など寝殿の御まじらひは。ふさはしからぬ御心の筋とは年ごろ見知りたれど、さるべきにや、昔より心に離れがたう思ひきこえて、今はかくくだくだしき人の数々あはれなるを、かたみに見捨つべきにやはと頼みきこえける。はかなき一節に、かうはもてなしたまふべくや」と、いみじうあはめ恨み申したまへば、「何ごとも、今はと見飽きたまひにける身なれば、今はた直るべきにもあらぬを、何かはとて。あやしき人びとは、思し捨てずはうれしうこそはあらめ」と聞こえたまへり。「なだらかの御いらへや。言ひもていけば、誰が名か惜しき」とて、しひて渡りたまへともなくて、その夜はひとり臥したまへり。あやしう中空なるころかなと思ひつつ、君たちを前に臥せたまひて、かしこにまたいかに思し乱らむさま思ひやりきこえ、やすからぬ心尽くしなれば、いかなる人、かうやうなることをかしうおぼゆるむ、など物懲りしぬべうおぼえたまふ。

明けぬれば、「人の見聞かむも若々しきを、限りとのたまひ果てば、さて試

ちは暗き心地すれど、朝日さし出でたるけはひ漏り来たるに、埋もれたる御衣ひきやり、いとうたて乱れたる御髪かきやりなどして、ほの見たてまつりたまふ。いとあてに女しう、なまめいたるけはひしたまへり。男の御さまは、うるはしだちたまへる時よりも、うちとけてものしたまふは、限りもなうきよげなり。故君の異なることなかりしだに、心の限り思ひあがり、御かたちまほにおはせずと、ことの折に思へりしけしきを思し出づれば、ましてかう、いみじう衰へにたるありさまを、しばしにても見忍びなむやと思ふもいみじう、恥づかしう、とぎまかうぎまに思ひめぐらしつつ、わが御心をこしらへたまふ。ただかたはらいたう、ここもかしこも、人の聞き思さむことの罪さらむ方なきに、折さへいと心憂ければ、慰めがたきなりけり。

御手水、御粥など、例の御座の方に参れり。色異なる御しつらひもいまいましきやうなれば、東面は屏風を立てて、母屋の際に香染の御几帳など、ことごとしきやうに見えぬ物、沈の二階などやうのを立てて、心ばへありてしつらひたり。大和の守のしわざなりけり。人びとも、鮮やかならぬ色の山吹、搔練、濃き衣、青鈍などを着かへさせ、薄色の裳、青朽葉などをとかく紛らはして、御台は参る。女所にて、しどけなくよろづのことならひたる宮の内に、ありさま心とどめて、わづかなる下人をも言ひととのへ、この人一人のみ扱ひ行ふ。かくおぼえぬやむごとなき客人のおはすると聞きて、もと勤めざりける家司など、うちつけに参りて、政所など言ふ方にさぶらひて営みけり。

かくせめても見馴れ顔に作りたまふほど、三条殿、限りなめりと、さしもやはとこそかつは頼みつれ、まめ人の心変はるは名残なくなむと聞きしはまことなりけりと、世を試みつる心地して、いかさまにしてこのなめげさを見じ、と思しければ、大殿へ方違へむとて渡りたまひにけるを、女御の里におはするほどなどに対面したまうて、すこしもの思ひはるけどころに思されて、例のやう

人通はしたまふ塗籠の北の口より入れたてまつりてけり。いみじうあさましうつらしと、さぶらふ人をも、げにかかる世の人の心なれば、これよりまさる目をも見せつべかりけりと、頼もしき人もなくなり果てたまひぬる御身を、かへすがへす悲しう思す。

男は、よろづに思し知るべきことわりを聞こえ知らせ、言の葉多う、あはれにもをかしうも聞こえ尽くしたまへど、つらく心づきなしとのみ思いたり。「いとかう、言はむ方なきものに思ほされける身のほどは、たぐひなう恥づかしければ、あるまじき心のつきそめけむも、心地なく悔しうおぼえはべれど、とり返すものならぬうちに、何のたけき御名にかはあらむ。いふかひなく思し弱れ。思ふにかなはぬ時、身を投ぐるためしもはべなるを、ただかかる心ぎしを深き淵になずらへたまて、捨てつる身と思しなせ」と聞こえたまふ。単衣の御衣を御髪込めひきくくみて、たけきこととは音を泣きたまふさまの、心深くいとほしければ、いとうたて、いかなればいとかう思すらむ、いみじう思ふ人も、かばかりになりぬれば、おのづからゆるぶけしきもあるを、岩木よりけになびきがたきは、契り遠うて、憎しなど思ふやうあなるを、さや思すらむ、と思ひ寄るに、あまりなれば心憂く、三条の君の思ひたまふらむこと、いにしへも何心もなうあひ思ひ交はしたりし世のこと、年ごろ今はとうらなきさまにうち頼み、解けたまへるさまを思ひ出づるも、わが心もて、いとあぢきなう思ひ続けらるれば、あながちにもこしらへきこえたまはず、嘆き明かしたまうつ。

かうのみ痴れがましうて出で入らむもあやしければ、今日は泊りて、心のかにおはす。かくさへひたぶるなるを、あさましと宮は思いて、いよいよ疎き御けしきのまさるを、をこがましき御心かなと、かつはつらきもののあはれなり。塗籠も、ことにこまかなるもの多うもあらで、香の御唐櫃、御厨子などばかりあるは、こなたかなたにかき寄せて、気近うしつらひてぞおはしける。う

うち急ぎて、いとなほなほしや。

かしこにはなほさし籠もりたまへるを、人びと、「かくてのみやは。若々しうけしからぬ聞こえもはべりぬべきを、例の御ありさまにて、あるべきことをこそ聞こえたまはめ」などよろづに聞こえければ、さもあることは思しながら、今より後のよその聞こえをも、わが御心の過ぎにし方をも、心づきなく恨めしかりける人のゆかり、と思し知りて、その夜も対面したまはず。「戯れにくくめづらかなり」と聞こえ尽くしたまふ。人もいとほしと見たてまつる。

「いささかも人心地する折あらむに、忘れたまはずはともかうも聞こえむ、この御服のほどは一筋に思ひ乱るることなくてだに過ぐさむ」となむ深く思しのたまはするを、かくいとあやにくに知らぬ人なくなりぬめるを、なほいみじうつらきものに聞こえたまふ」と聞こゆ。「思ふ心はまた異ざまにうしろやすきものを。思はずなりける世かな」とうち嘆きて、「例のやうにておはしまさば、物越などにても、思ふことばかり聞こえて、御心破るべきにもあらず。あまたの年月をも過ぐしつべくなむ」など、尽きもせず聞こえたまへど、「なほかかる乱れに添へて、わりなき御心なむいみじうつらき。人の聞き思はむことも、よろづになのめならざりける身の憂さをばさるものにて、ことさらに心憂き御心がまへなれ」とまた言ひ返し恨みたまひつつ、はるかにのみもてなしたまへり。

さりとてかくのみやは、人の聞き漏らさむこともことわり、とはしたなう、ここの人目もおぼえたまへば、「うちうちの御心づかひはこのたまふさまにかなひてもしばしは情けばまむ、世づかぬありさまのいとうたてあり、またかかりとて、ひき絶え参らずは、人の御名いかがいとほしかるべき。ひとへにものを思して、幼げなるこそいとほしけれ」など、この人を責めたまへば、げにと思ひ、見たてまつるも今は心苦しう、かたじけなうおぼゆるさまなれば、

めこしらへきこえ慰めたまへば、いと若やかに心うつくしうらうたき心はたおはする人なれば、なほざり言とは見たまひながら、おのづからなごみつものしたまふを、いとあはれと思すものから、心は空にて、かれもいとわが心を立てて強うものしき人のけはひには見えたまはねど、もしなほ本意ならぬことにて尼になども思ひなりたまひなば、をこがましうもあべいかな、と思ふに、しばしはとだえ置くまじう、あわたたしき心地して、暮れゆくままに、今日も御返りだになきよ、と思して、心にかかりつつ、いみじう眺めをしたまふ。

昨日今日つゆも参らざりけるもの、いささか参りなどしておはす。「昔より、御ために心ざしのおろかならざりしさま、大臣のつらくもてなしたまうしに、世の中の痴れがましき名を取りしかど、堪へがたきを念じて、ここかしこすみけしきばみしあたりを、あまた聞き過ぐしありさまは、女だにさしもあらじとなむ人ももどきし。今思ふにも、いかでかはさありけむと、わが心ながらいにしへだに重かりけりと思ひ知らるるを、今はかく憎みたまふとも、思し捨てまじき人びと、いと所狭きまで数添ふめれば、御心ひとつにもて離れたまふべくもあらず。またよし見たまへや。命こそ定めなき世なれ」とて、うち泣きたまふこともあり。女も、昔のことを思ひ出でたまふに、あはれにもありがたかりし御仲の、さすがに契り深かりけるかな、と思ひ出でたまふ。なよびたる御衣ども脱いたまうて、心ことなるをとり重ねて焚きしめたまひ、めでたうつくろひ化粧じて出でたまふを、灯影に見出だして、忍びがたく涙の出で来れば、脱ぎとめたまへる単衣の袖をひき寄せたまひて、

「馴るる身を恨むるよりは松島の海人の衣に裁ちやかへまし
なほうつし人にてはえ過ぐすまじかりけり」と独言にのたまふを、立ち止まりて、「さも心憂き御心かな。

松島の海人の濡衣なれぬとて脱ぎ替へつてふ名を立ためやは」

思いて、ただうちまもりたまへるに、いとめでたくきよらに、このころこそねびまさりたまへる御盛りなめれ、さるさまの好き事をしたまふとも、人のもどくべきさまもしたまはず、鬼神も罪許しつべく、あざやかにものきよげに、若う盛りに匂ひを散らしたまへり、もの思ひ知らぬ若人のほどにはたおはせず、かたほなるところなうねびととのほりたまへる、ことわりぞかし、女にてなかめでざらむ、鏡を見ても、などかおごらざらむ、とわが御子ながらも思す。

日たけて殿には渡りたまへり。入りたまふより、若君たち、すぎすぎうつくしげにて、まつはれ遊びたまふ。女君は帳の内に臥したまへり。入りたまへれど目も見合はせたまはず。つらきにこそはあめれと見たまふもことわりなれど、憚り顔にももてなしたまはず。御衣をひきやりたまへれば、「いづことておはしつるぞ。まろは早う死にき。常に鬼とのたまへば、同じくはなり果てなむとて」とのたまふ。「御心こそ鬼よりけにもおはすれ、さまは憎げもなければ、え疎み果つまじ」と何心もなう言ひなしたまふも、心やましうて、「めでたきさまになまめいたまへらむあたりにあり経べき身にもあらねば、いづちもいづちも失せなむとするを、かくだにな思し出でぞ。あいなく年ごろを経けるだに悔しきものを」とて、起き上がりたまへるさまは、いみじう愛敬づきて、匂ひやかにうち赤みたまへる顔、いとをかしげなり。「かく心幼げに腹立ちなしたまへればにや、目馴れて、この鬼こそ今は恐ろしくもあらずなりにたれ。神々しき気を添へばや」と、戯れに言ひなしたまへど、「何ごと言ふぞ。おいらかに死にたまひね。まろも死なむ。見れば憎し、聞けば愛敬なし。見捨てて死なむはうしろめたし」とのたまふに、いとをかしきさまのみまされば、こまやかに笑ひて、「近くてこそ見たまはざらめ、よそにはなにか聞きたまはざらむ。さても契り深かなる瀬を知らせむの御心なり。にはかにうち続くべかなる冥途のいそぎは、さこそは契りきこえしか」といといつれなく言ひて、何くれと慰

れたまふめれば、何かは。こなたかなたに聞きにくくもはべべきを、さやうに嫌疑離れても、またかの遺言は違へじと思ひたまへて、ただかく言ひ扱ひはべるなり。院の渡らせたまへらむにも、ことのついでではべらば、かうやうにまねびきこえさせたまへ。ありありて心づきなき心つかふと思しのたまはむを憚りはべりつれど、げにかやうの筋にてこそ人の諫めをもみづからの心にも従はぬやうにはべりけれ」と、忍びやかに聞こえたまふ。

「人のいつはりにやと思ひはべりつるを、まことにさるやうある御けしきにこそは。皆世の常のことなれど、三条の姫君の思さむことこそいとほしけれ。のどやかに慣らひたまうて」と聞こえたまへば、「らうたげにもものたまはせなす姫君かな。いと鬼しうはべるさがなものを」とて、「などてかそれをもおろかにはもてなしはべらむ。かしこけれど、御ありさまどもにても推し量らせたまへ。なだらかならむのみこそ人はつひのことにははべめれ。さがなくことがましきも、しばしはなまむつかしうわづらはしきやうに憚らることあれど、それにしも従ひ果つまじきわざなれば、ことの乱れ出で来ぬる後、我も人も憎げに飽きたしや。なほ南の御殿の御心もちろこそさまざまにありがたう、さてはこの御方の御心などこそはめでたきものには見たてまつり果てはべりぬれ」などほめきこえたまへば、笑ひたまひて、「もののためしに引き出でたまふほどに、身の人悪ろきおぼえこそあらはれぬべう。さてをかしきことは、院の、みづからの御癖をば人知らぬやうに、いささかあだあだしき御心づかひをば、大事と思ひて戒め申したまふ、後言にも聞こえたまふめるこそ、さかしだつ人のおのが上知らぬやうにおぼえはべれ」とのたまへば、「さなむ。常にこの道をしも戒め仰せらるる。さるは、かしこき御教へならでも、いとよくをさめてはべる心を」とて、げにをかしと思ひたまへり。

御前に参りたまへれば、かのことは聞こし召したれど、何かは聞き顔にもと

り。「まだ知らぬは、げに世づかぬ御心がまへのけにこそはと、ことわりはげに、いづ方にかは寄る人はべらむとすらむ」とすこしうち笑ひぬ。

かく心ごはけれど、今は堰かれたまふべきならねば、やがてこの人をひき立てて、推し量りに入りたまふ。宮はいと心憂く、情けなくあはつけき人の心なりけり、とねたくつらければ、若々しきやうには言ひ騒ぐとも、と思して、塗籠に御座ひとつ敷かせたまて、うちより鎖して大殿籠もりにけり。これもいつまでにかは、かばかりに乱れ立ちにたる人の心どもはいと悲しう、口惜しう思す。男君は、めざましうつらしと思ひきこえたまへど、かばかりにては何のもて離るることかはと、のどかに思して、よろづに思ひ明かしたまふ。山鳥の心地ぞしたまうける。からうして明け方になりぬ。かくてのみ、ことといへば直面なべければ、出でたまふとて、「ただいささかの隙をだに」と、いみじう聞こえたまへど、いとつれなし。

「怨みわび胸あきがたき冬の夜にまた鎖しまさる関の岩門

聞こえむ方なき御心なりけり」と泣く泣く出でたまふ。

六条院にぞおはしてやすらひたまふ。東の上、「一条の宮渡したてまつりたまへることと、かの大殿わたりなどに聞こゆる、いかなる御ことにかは」と、いとおほどかにのたまふ。御几帳添へたれど、そばよりほのかにはなほ見えてまつりたまふ。「さやうにもなほ人の言ひなしつべきことにはべり。故御息所は、いと心強うあるまじきさまに言ひ放ちたまうしかど、限りのさまに御心地の弱りけるに、また見譲るべき人のなきや悲しかりけむ、亡からむ後の後見にとやうなることはべりしかば、もとよりの心ざしもはべりしことにて、かく思たまへなりぬるを、さまざまにいかに人扱ひはべらむかし。さしもあるまじきをも、あやしう人こそもの言ひさがなきものにあれ」と、うち笑ひつつ、「かの正身なむ、なほ世に経じと深う思ひ立ちて、尼になりなむと思ひ結ばほ

む。

おはしまし着きたれば、殿のうち悲しげもなく、人氣多くてあらぬさまなり。御車寄せて降りたまふを、さらに故里とおぼえず、疎ましううたて思さるれば、とみにも下りたまはず。いとあやしう若々しき御さまかな、と人びとも見たてまつりわづらふ。殿は東の対の南面を、わが御方を仮にしつらひて、住みつき顔におはす。三条殿には、人びと、「にはかにあさましうもなりたまひぬるかな。いつのほどにありしことぞ」と驚きけり。なよらかにをかしばめることを好ましからず思す人は、かくゆくりかなることぞうちまじりたまうける。されど、年経にけることを、音なくけしきも漏らさで過ぐしたまうけるなり、とのみ思ひなして、かく女の御心許いたまはぬと思ひ寄る人もなし。とてもかうても宮の御ためにぞいとほしげなる。

御まうけなどさま変はりて、もののはじめゆゆしげなれど、もの参らせなど皆静まりぬるに、渡りたまて、少将の君をいみじう責めたまふ。「御心ざしまことに長う思されば、今日明日を過ぐして聞こえさせたまへ。なかなか立ち歸りて、もの思し沈みて、亡き人のやうにてなむ臥させたまひぬる。こしらへきこゆるをもつらしとのみ思されたれば、何ごとも身のためこそはべれ。いとわづらはしう聞こえさせにくくなむ」と言ふ。「いとあやしう、推し量りきこえさせしには違ひて、いはけなく心えがたき御心にこそありけれ」とて、思ひ寄れるさま、人の御ためもわがためにも世のもどきあるまじうのたまひ続ければ、「いでや、ただ今はまたいたづら人に見なしたてまつるべきにやと、あわたたしき乱り心地よろづ思たまへわかれず。あが君、とかくおしたちて、ひたぶるなる御心なつかはせたまひそ」と手をする。「いとまだ知らぬ世かな。憎くめざましと人よりけに思し落とすらむ身こそいみじけれ。いかで人にもことわらせむ」と、いはむかたもなしと思してのたまへば、さすがにいとほしうもあ

れてこそ。深き御心のかしこき御おきても、それにかかるべきものなり。君たちの聞こえ知らせたてまつりたまはぬなり。かつはさるまじきことをも御心どもに仕うまつりそめたまうて」と言ひ続けて、左近、少将を責む。

集りて聞こえこしらふるに、いとわりなく、あぎやかなる御衣ども、人びとのたてまつり替へさするも、われにもあらず、なほいとひたぶるに削ぎ捨てまほしう思さるる御髪を、かき出でて見たまへば、六尺ばかりにて、すこし細りたれど、人はかたはにも見たてまつらず、みづからの御心には、いみじの衰へや、人に見ゆべきありさまにもあらず、さまざまに心憂き身を、と思し続けて、また臥したまひぬ。「時違ひぬ。夜も更けぬべし」と皆騒ぐ。時雨いと心あわたたしう吹きまがひ、よろづにもの悲しければ、

のぼりにし峰の煙にたちまじり思はぬ方になびかずもがな

心ひとつには強く思せど、そのころは、御鋏などやうのものは皆とり隠して、人びとの守りきこえければ、かくもて騒がざらむにてだに、何の惜しげある身にてか、をこがましう若々しきやうにはひき忍ばむ、人聞きもうたて思すまじかべきわざをと思せば、その本意のごともしたまはず。

人びとは皆いそぎ立ちて、おのおの櫛、手箱、唐櫃、よろづの物を、はかばかしからぬ袋やうの物なれど、皆さきだてて運びたれば、一人止まりたまふべうもあらで、泣く泣く御車に乗りたまふも、傍らのみまもられたまで、こち渡りたまうし時、御心地の苦しきにも御髪かき撫でつくろひ、下ろしたてまつりたまひしを思し出づるに、目も霧りていみじ。御佩刀に添へて経箱を添へたるが、御傍らも離れねば、

恋しさの慰めがたき形見にて涙にくもる玉の箱かな

黒きもまだしあへさせたまはず、かの手ならしたまへりし螺鈿の箱なりけり。誦経にせさせたまひしを、形見にとどめたまへるなりけり。浦島の子が心地な

名をぞ聞こし召したるべき。さやうのことの思はずなるにつけて倦じたまへると言はれたまはむことを思すなりけり。さりとて、また表はれてものしたまはむもあはあはしう、心づきなきこと、と思しながら、恥づかしと思さむいとはしきを、何かは我さへ聞き扱はむと思してなむ、この筋はかけても聞こえたまはざりける。

大將も、とかく言ひなしつるも今はあいなし、かの御心に許したまはむことは難げなめり、御息所の心知りなりけり、と人には知らせむ、いかがはせむ、亡き人にすこし浅き咎は思はせて、いつありそめしことぞともなく紛らはしてむ、さらがへりて懸想だち涙を尽くしかかづらはむもいとうひうひしかるべし、と思ひ得たまうて、一条に渡りたまふべき日、その日ばかりと定めて、大和の守召して、あるべき作法のたまひ、宮のうち払ひしつらひ、さこそいへども女どちは草茂う住みなしたまへりしを、磨きたるやうにしつらひなして、御心づかひなど、あるべき作法めでたう、壁代、御屏風、御几帳、御座などまで思し寄りつつ、大和の守にのたまひて、かの家にぞ急ぎ仕うまつらせたまふ。

その日我おはしみて、御車、御前などたてまつれたまふ。宮は「さらに渡らじ」と思しのたまふを、人びといみじう聞こえ、大和の守も、「さらに承らじ。心細く悲しき御ありさまを見たてまつり嘆き、このほどの宮仕へは堪ふるに従ひて仕うまつりぬ。今は国のこともはべり、まかり下りぬべし。宮の内のことも見たまへ譲るべき人もはべらず。いとたいだいしう、いかにと見たまふるを、かくよろづに思しいとなむを、げにこの方にとりて思たまふるには、かならずしもおはしますまじき御ありさまなれど、さこそはいにしへも御心になはぬためし多くはべれ。一所やは世のもどきをも負はせたまふべき。いと幼くおはしますことなり。たけう思すとも、女の御心ひとつに、わが御身をとりましたため顧みたまふべきやうかあらむ。なほ人のあがめかしづきたまへらむに助けら

この更衣こそ口惜しからずめやすき人のうちなりけれ。おほかたの世につけて惜しきわざなりや。さてもありぬべき人の、かう亡せゆくよ。院もいみじう驚き思したりけり。かのみこそは、ここにものしたまふ入道の宮より、さしつぎにはらうたうしたまひけれ。人ざまもよくおはすべし」とのたまふ。「御心はいかがものしたまふらむ。御息所はこともなかりし人のけはひ、心ばせになむ。親しううちとけたまはざりしかど、はかなきことのついでに、おのづから人の用意はあらはなるものになむはべる」と聞こえたまひて、宮の御こともかけず、いとつれなし。かばかりのすくよけ心に思ひそめてむこと、諫めむにかなはじ、用ゐざらむものから、我さかしに言出でむもあいなし、と思して止みぬ。

かくて御法事に、よろづとりもちてせさせたまふ。事の聞こえおのづから隠れなければ、大殿などにも聞きたまひて、さやはあるべきなど、女方の心浅きやうに思しなすぞわりなきや。かの昔の御心あれば、君達まで参で訪らひたまふ。誦経など、殿よりもいかめしうせさせたまふ。これかれもさまざま劣らずしたまへれば、時の人のかやうのわざに劣らずなむありける。

宮は、かくて住み果てなむと思し立つことありけれど、院に人の漏らし奏しければ、「いとあるまじきことなり。げに、あまたとざまかうざまに身をもてなしたまふべきことにもあらねど、後見なき人なむ、なかなかさるさまにてあるまじき名を立ち、罪得がましき時、この世後の世、中空にもどかしき咎負ふわぎなる。ここにかく世を捨てたるに、三の宮の同じごと身をやつしたまへる、すべなきやうに人の思ひ言ふも、捨てたる身には思ひ悩むべきにはあらねど、かならずさしも、やうのことと争ひたまはむもうたてあるべし。世の憂きにつけて厭ふはなかなか人悪ろきわざなり。心と思ひ取る方ありて今すこし思ひ静め心澄ましてこそともかうも」とたびたび聞こえたまうけり。この浮きたる御

てだにあらで、大臣などいかに思ひたまはむ、さばかりのことたどらぬには
あらじ、宿世といふもの逃れわびぬることなり、ともかくも口入るべきことな
らず、と思す。女のためのみにこそいづ方にもいとほしけれと、あいなく聞こ
しめし嘆く。紫の上にも、来し方行く先のこと思し出でつつ、かうやうのため
しを聞くにつけても、亡からむ後うしろめたう思ひきこゆるさまをのたまへば、
御顔うち赤めて、心憂くさまで後らかしたまふべきにや、と思したり。女ばか
り、身をもてなすさまも所狭う、あはれなるべきものはなし、もののあはれ、
折をかしきことも見知らぬさまに引き入り沈みなどすれば、何につけてか世
に経る映えばえしさも常なき世のつれづれをも慰むべきぞは、おほかた、もの
の心を知らず、いふかひなきものにならひたらむも、生ほしたてけむ親もいと
口惜しかるべきものにはあらずや、心にのみ籠めて、無言太子とか、小法師ば
らの悲しきことにする昔のたとひのやうに、悪しきこと善きことを思ひ知りな
がら埋もれなむもいふかひなし、わが心ながらも、良きほどにはいかで保つべ
きぞ、と思しめぐらすも、今はただ女一の宮の御ためなり。

大将の君参りたまへるついでありて、思ひたまへらむけしきもゆかしければ、
「御息所の忌果てぬらむな。昨日今日と思ふほどに、三年よりあなたのことに
なる世にこそあれ。あはれにあぢきなしや。夕べの露かかるほどのむさぼりよ。
いかでかこの髪剃りて、よろづ背き捨てむと思ふを、さものどやかなるやうに
ても過ぐすかな。いと悪ろきわざなりや」とのたまふ。「まことに、惜しげな
き人だにこそはべめれ」など聞こえて、「御息所の四十九日のわざなど、大和
守なにがしの朝臣一人扱ひはべる、いとあはれなるわざなりや。はかばかしき
よすがなき人は、生ける世の限りにて、かかる世の果てこそ悲しうはべりけれ
と、聞こえたまふ。「院よりも弔らはせたまふらむ。かのみこいかに思ひ嘆き
たまふらむ。はやう聞きしよりは、この近き年ごろ、ことに触れて聞き見るに、

て、朝霧の晴れ間も待たず、例の文をぞ急ぎ書きたまふ。いと心づきなしと思せど、ありしやうにも奪ひたまはず。いとこまやかに書いて、うち置きてうそぶきたまふ。忍びたまへど、漏りて聞きつけらる。

いつとかはおどろかすべき明けぬ夜の夢覚めてとか言ひしひとこと
上より落つる。

とや書いたまひつらむ、おし包みて、名残も、「いかでよからむ」など口ずさびたまへり。人召して賜ひつ。御返り事をだに見つけてしがな、なほいかなることぞ、とけしき見まほしう思す。

日たけてぞ持て参れる。紫のこまやかなる紙すくよかにて、小少将ぞ例の聞こえたる。ただ同じさまにかひなきよしを書いて、

いとほしきに、かのありつる御文に、手習ひすさびたまへるを盗みたる。とて、中にひき破りて入れたる、目には見たまうてけり、と思すばかりのうれしきぞいと人悪ろかりける。そこはかたなく書きたまへるを、見続けたまへれば、

朝夕に泣く音を立つる小野山は絶えぬ涙や音無の滝

とやとりなすべからむ、古言など、もの思はしげに書き乱りたまへる、御手なども見所あり。人の上などにてかやうの好き心思ひ焦らるるはもどかしう、うつし心ならぬことに見聞きしかど、身のことにては、げにいと堪へがたかるべきわざなりけり。あやしや、などかうしも思ふべき心焦られぞ、と思ひ返したまへど、えしもかなはず。

六条院にも聞こし召して、いとおとなしうよろづを思ひしづめ、人のそしりどころなく、めやすくて過ぐしたまふを、おもだたしう、わがいにしへすこしあざればみ、あだなる名を取りたまうし面起こしに、うれしう思しわたるを、いとほしう、いづ方にも心苦しきことのあるべきこと、さし離れたる仲らひに

里遠み小野の篠原わけて来て我も鹿こそ声も惜しまね

とのたまへば、

藤衣露けき秋の山人は鹿の鳴く音に音をぞ添へつる

よからねど、折からに、忍びやかなる声づかひなどを、よろしう聞きなしたまへり。

御消息とかう聞こえたまへど、「今はかくあさましき夢の世を、すこしも思ひ覚ます折あらばなむ、絶えぬ御とぶらひも聞こえやるべき」とのみすくよかに言はせたまふ。いみじういふかひなき御心なりけりと嘆きつつ帰りたまふ。

道すがら、あはれなる空を眺めて、十三日の月のいとはなやかにさし出でぬれば、小倉の山もたどるまじうおはするに、一条の宮は道なりけり。いとどうちあばれて、未申の方の崩れたるを見入るれば、はるばると下ろし籠めて、人影も見えず。月のみ遣水の面をあらはに澄みましたるに、大納言ここにて遊びなどしたまうし折々を思ひ出でたまふ。

見し人の影澄み果てぬ池水にひとり宿守る秋の夜の月

と独りごちつつ、殿におはしても、月を見つつ、心は空にあくがれたまへり。「さも見苦しう、あらざりし御癖かな」と御達も憎みあへり。

上はまめやかに心憂く、あくがれたちぬる御心なめり、もとよりさる方にならひたまへる六条院の人びとを、ともすればめでたきためしにひき出でつつ、心よからずあいだちなきものに思ひたまへる、わりなしや、我も、昔よりしかならひなましかば、人目も馴れてなかなか過ごしてまし、世のためしにしつべき御心ばへと、親はらからよりはじめたてまつり、めやすきあえものにしたまへるを、ありありては末に恥がましきことやあらむ、などいいたう嘆いたまへり。

夜明け方近く、かたみにうち出でたまふことなく、背き背きに嘆き明かし

ろめたくて、えこまやかにも語らひたまはず。「なほ近くて。な放ちたまひそ。かく山深く分け入る心ざしは隔て残るべくやは。霧もいと深しや」とて、わざとも見入れぬさまに山の方を眺めて、「なほなほ」と切にのたまへば、鈍色の几帳を簾のつまよりすこしおし出でて、裾をひきそばめつつゐたり。大和守の妹なれば、離れたてまつらぬうちに、幼くより生ほし立てたまうければ、衣の色いと濃くて、橡の衣一襲、小桂着たり。「かく尽きせぬ御ことはさるものにて、聞こえなむ方なき御心のつらさを思ひ添ふるに、心魂もあくがれ果てて、見る人ごとに咎められはべれば、今はさらに忍ぶべき方なし」といと多く恨み続けたまふ。かの今はの御文のさまものたまひ出でて、いみじう泣きたまふ。この人もましていみじう泣き入りつつ、「その夜の御返りさへ見えはべらずなりにしを、今は限りの御心にやがて思し入りて、暗うなりにしほどの空のけしきに御心地惑ひにけるを、さる弱目に例の御もののけの引き入れたてまつるとなむ見たまへし。過ぎにし御ことにも、ほとほと御心惑ひぬべかりし折々多くはべりしを、宮の同じさまに沈みたまうしをこしらへきこえむの御心強さになむやうやうものおぼえたまうし。この御嘆きをば、御前にはただわれかの御けしきにて、あきれて暮らさせたまうし」など、とめがたげにうち嘆きつつ、はかばかしうもあらず聞こゆ。「そよや。そもあまりにおぼめかしう、いふかひなき御心なり。今はかたじけなくとも、誰をかはよるべに思ひきこえたまはむ。御山住みもいと深き峰に、世の中を思し絶えたる雲の中なめれば、聞こえ通ひたまはむこと難し。いとかく心憂き御けしき聞こえ知らせたまへ。よろづのことするべきにこそ。世にあり経じと思すとも、従はぬ世なり。まづはかかる御別れの御心になはばあるべきことかは」など、よろづに多くのたまへど、聞こゆべきこともなくて、うち嘆きつつゐたり。鹿のいといたく鳴くを、「われ劣らめや」とて、

おほかたにこそ悲しけれ。

と書いたまへり。なほかく隔てたまへることと、露のあはれをばさしおきて、ただならず嘆きつつおはす。

なほかくおぼつかなく思しわびて、また渡りたまへり。御忌など過ぐして、のどやかに、と思し静めけれど、さまでもえ忍びたまはず、今はこの御なき名の何かはあながちにもつつまむ、ただ世づきてつひの思ひかなふべきにこそは、と思したばかりにければ、北の方の御思ひやりをあながちにもあらがひきこえたまはず。正身は強う思し離るとも、かの一夜ばかりの御恨み文をとらへどころにかこちて、えしもすすぎ果てたまはじ、と頼もしかりけり。

九月十余日、野山のけしきは、深く見知らぬ人だにただにやはおぼゆる。山風に堪へぬ木々の梢も峰の葛葉も、心あわたたしう争ひ散る紛れに、尊き読経の声かすかに、念仏などの声ばかりして、人のけはひいと少なう、木枯の吹き払ひたるに、鹿はただ籬のもとにたたずみつつ、山田の引板にもおどろかず、色濃き稲どもの中に混じりてうち鳴くも、愁へ顔なり。滝の声は、いとどもの思ふ人をおどろかし顔に、耳かしかましようどろき響く。草むらの虫のみぞよりどころなげに鳴き弱りて、枯れたる草の下より龍胆のわれひとりのみ心長うはひ出でて露けく見ゆるなど、皆例のこのころのことなれど、折から所からにや、いと堪へがたきほどのもの悲しさなり。

例の妻戸のもとに立ち寄りたまて、やがて眺め出だして立ちたまへり。なつかしきほどの直衣に、色こまやかなる御衣の擣目いとけうらに透きて、影弱りたる夕日の、さすがに何心もなうさし来たるに、まばゆげに、わざとなく扇をさし隠したまへる手つき、女こそかうはあらまほしけれ、それだにえあらぬを、と見たてまつる。もの思ひの慰めにしつべく笑ましき顔の匂ひにて、少将の君を取り分きて召し寄す。簀子のほどもなければ、奥に人や添ひゐたらむとうし

ど、取りてだに御覽ぜず。すずろにあさましきことを、弱れる御心地に疑ひなく思ししみて、消え失せたまひにしことを思し出づるに、後の世の御罪にさへやなるらむと、胸に満つ心地して、この人の御ことをだにかけて聞きたまふはいとどつらく心憂き涙のもよほしに思さる。人びとも聞こえわづらひぬ。

一くだりの御返りをだにもなきを、しばしは心惑ひしたまへる、など思しけるに、あまりにほど経ぬれば、悲しきことも限りあるを、などかかくあまり見知りたまはずはあるべき、いふかひなく若々しきやうに、と恨めしう、異事の筋に花や蝶やと書けばこそあらめ、わが心にあはれと思ひ、もの嘆かしき方ざまのことを、いかにと問ふ人は睦ましうあはれにこそおぼゆれ、大宮の亡せたまへりしをいと悲しと思ひしに、致仕の大臣のさしも思ひたまへらず、ことわりの世の別れに、おほやけくしき作法ばかりのことを孝じたまひしに、つらく心づきなかりしに、六条院のなかかねむごろに後の御事をも営みたまうしが、わが方ざまといふ中にも、うれしう見たてまつりし、その折に、故衛門督をば取り分きて思ひつきにしぞかし、人柄のいたう静まりて、物をいたう思ひとどめたりし心に、あはれもまさりて人より深かりしが、なつかしうおぼえし、など、つれづれとものをのみ思し続けて、明かし暮らしたまふ。

女君、なほこの御仲のけしきを、いかなるにかありけむ、御息所とこそ文通はしもこまやかにしたまふめりしか、など思ひ得がたくて、夕暮の空を眺め入りて臥したまへるところに、若君してたてまつれたまへる、はかなき紙の端に、あはれをもいかに知りてか慰めむあるや恋しき亡きや悲しき

おぼつかなきこそ心憂けれ。

とあれば、ほほ笑みて、先ぎきもかく思ひ寄りてのたまふ、似げなの亡きがよそへや、と思す。いとどしく、ことなしびに、

いづれとか分きて眺めむ消えかへる露も草葉のうへと見ぬ世を

御心地も限りあることにて、すこし静ませたまひなむほどに、聞こえさせ承らむ」とて、我にもあらぬさまなれば、のたまひ出づることも口ふたがりて、「げにこそ闇に惑へる心地すれ。なほ聞こえ慰めたまひて、いささかの御返りもあらばなむ」などのたまひおきて、立ちわづらひたまふも軽々しう、さすがに人騒がしければ、帰りたまひぬ。

今宵しもあらじと思ひつる事どものしたため、いとはどなく際々しきを、いとあへなしと思ひて、近き御荘の人びと召し仰せて、さるべき事ども仕うまつるべくおきて定めて出でたまひぬ。事にはかなれば、削ぐやうなりつることども、いかめしう人数なども添ひてなむ。大和守も、「ありがたき殿の御心おきて」など、喜びかしこまりきこゆ。名残だになくあさましきこと、と宮は臥しまろびたまへどかひなし。親と聞こゆとも、いとかくはならはすまじきものなりけり。見たてまつる人びとも、この御事を、またゆゆしう嘆ききこゆ。大和守、残りのことどもしたためて、「かく心細くてはえおはしまさじ。いと御心の隙あらじ」など聞こゆれど、なほ峰の煙をだに気近くて思ひ出できこえむと、この山里に住み果てなむと思ひたり。御忌に籠もれる僧は、東面、そなたの渡殿、下屋などに、はかなき隔てしつつ、かすかにゐたり。西の廂をやつして、宮はおはします。明け暮るるも思し分かねど、月ごろ経ければ、九月になりぬ。

山下ろしいとはげしう、木の葉の隠ろへなくなりて、よろづの事いといみじきほどなれば、おほかたの空にもよほされて、干る間もなく思し嘆き、命さへ心になはずと厭はしういみじう思す。さぶらふ人びとも、よろづにもの悲しう思ひ惑へり。大將殿は日々に訪らひきこえたまふ。寂しげなる念仏の僧など慰むばかり、よろづの物を遣はし訪らはせたまひ、宮の御前には、あはれに心深き言の葉を尽くして怨みきこえ、かつは尽きもせぬ御訪らひを聞こえたまへ

宮の思し嘆くらむことを推し量りきこえたまうて、「かくしも急ぎわたりたまふべきことならず」と人びといさめきこゆれど、しひておはしましぬ。

ほどさへ遠くて、入りたまふほどいと心すごし。ゆゆしげに引き隔てめぐらしたる儀式の方は隠して、この西面に入れたてまつる。大和守出で来て、泣く泣くかしこまりきこゆ。妻戸の簀子におし掛かりたまうて、女房呼び出でさせたまふに、ある限り心も収まらず、物おぼえぬほどなり。かく渡りたまへるにぞいささか慰めて少将の君は参る。物もえのたまひやらず。涙もろにおはせぬ心強さなれど、所のさま、人のけはひなどを思しやるもいみじうて、常なき世のありさまの、人の上ならぬもいと悲しきなりけり。

ややためらひて、「よろしうおこたりたまふさまに承りしかば、思うたまへたゆみたりしほどに、夢も覚むるほどはべなるを、いとあさまじうなむ」と聞こえたまへり。思したりしさま、これに多くは御心も乱れにしぞかし、と思すに、さるべきとは言ひながらも、いとつらき人の御契りなれば、いらへをだにしたまはず。「いかに聞こえさせたまふとか聞こえはべるべき。いと軽らかならぬ御さまにて、かくふりはへ急ぎ渡らせたまへる御心ばへを、思し分かぬやうならむもあまりにはべりぬべし」と口々聞こゆれば、「ただ推し量りて。我は言ふべきこともおぼえず」とて、臥したまへるもことわりにて、「ただ今は亡き人と異ならぬ御ありさまにてなむ。渡らせたまへるよしは聞こえさせはべりぬ」と聞こゆ。この人びともむせかへるさまなれば、「聞こえやるべき方もなきを、今すこしみづからも思ひのどめ、また静まりたまひなむに参り来む。いかにしてかくにはかにと、その御ありさまなむゆかしき」とのたまへば、まほにはあらねど、かの思ほし嘆きしありさまを片端つつ聞こえて、「かこちきこえさするさまになむなりはべりぬべき。今日はいとど乱りがはしき心地どもの惑ひに、聞こえさせ違ふことどももはべりなむ。さらば、かく思し惑へる

に、やがて絶え入りたまひぬ。あへなくいみじと言へばおろかなり。昔より、もののけには時々患ひたまふ。限りと見ゆる折々もあれば、例のごと取り入れたるなめりとて、加持参り騒げど、今はのさましるかりけり。

宮は後れじと思し入りて、つと添ひ臥したまへり。人びと参りて、「今はいふかひなし。いとかう思すとも限りある道は帰りおはすべきことにもあらず。慕ひきこえたまふともいかでか御心にはかなふべき」と、さらなることわりを聞こえて、「いとゆゆしう、亡き御ためにも罪深きわざなり。今は去らせたまへ」と引き動かいたてまつれど、すくみたるやうにて、ものもおぼえたまはず。修法の壇こぼちてほろほろと出づるに、さるべき限り、片へこそ立ちとまれ、今は限りのさまいと悲しう心細し。

所々の御弔ひ、いつの間にかと見ゆ。大将殿も限りなく聞き驚きたまうて、まづ聞こえたまへり。六条の院よりも、致仕の大殿よりも、すべていとしげう聞こえたまふ。山の帝も聞こし召して、いとあはれに御文書いたまへり。宮はこの御消息にぞ御ぐしもたげたまふ。

日ごろ重く悩みたまふと聞きわたりつれど、例も篤しうのみ聞きはべりつるならひに、うちたゆみてなむ。かひなきことをばさるものにて、思ひ嘆いたまふらむありさま推し量るなむあはれに心苦しき。なべての世のことわりに思し慰めたまへ。

とあり。目も見えたまはねど、御返り聞こえたまふ。

常にさこそあらめとのたまひけることとて、今日やがてをさめたてまつるとて、御甥の大和守にてありけるぞよろづに扱ひきこえける。骸をだにしばし見たてまつらむとて、宮は惜しみきこえたまひけれど、さてもかひあるべきならねば、皆いそぎたちて、ゆゆしげなるほどにぞ大将おはしたる。「今日より後、日ついで悪しかりけり」など、人聞きにはのたまひて、いとも悲しうあはれに、

しは心憂くあはつけきわぎなるを、ましてかかる御身には、さばかりおぼろけにて人の近づききこゆべきにもあらぬを、思ひのほか心にもつかぬ御ありさまと、年ごろも見たてまつり悩みしかど、さるべき御宿世にこそは。院より始めたてまつりて思しなびき、この父大臣にも許いたまふべき御けしきありしに、おのれ一人しも心をたててもいかがはと思ひ寄りはべりしことなれば、末の世までものしき御ありさまを、わが御過ちならぬに、大空をかこちて見たてまつり過ぐすを、いとかう人のためわがための、よろづに聞きにくかりぬべきことの出で来添ひぬべきが、さてもよその御名をば知らぬ顔にて、世の常の御ありさまにだにあらば、おのづからあり経むにつけても慰むこともやと思ひなしはべるを、こよなう情けなき人の御心にもはべりけるかな」と、つぶつぶと泣きたまふ。

いとわりなくおしこめてのたまふを、あらがひはるけむ言の葉もなくて、ただうち泣きたまへるさま、おほどかにらうたげなり。うちまもりつつ、「あはれ、何ごとかは人に劣りたまへる。いかなる御宿世にて、やすからずものを深く思すべき契り深かりけむ」などのたまふままに、いみじう苦しうしたまふ。もののけなども、かかる弱目に所得るものなりければ、にはかに消え入りて、ただ冷えに冷え入りたまふ。律師も騒ぎたちたまうて、願など立てののしりたまふ。深き誓ひにて、今は命を限りける山籠もりを、かくまでおぼろけならず出で立ちて、壇こぼちて帰り入らむことの面目なく、仏もつらくおぼえたまふべきことを、心を起こして祈り申したまふ。宮の泣き惑ひたまふこと、いとことわりなりかし。

かく騒ぐほどに、大将殿より御文取り入れたる、ほのかに聞きたまひて、今宵もおはすまじきなめり、とうち聞きたまふ。心憂く、世のためしにも引かれたまふべきなめり、何に我さへさる言の葉を残しけむ、とさまざま思し出づる

いとめづらしき御文を、かたがたうれしう見たまふるに、この御咎めをなむ。いかに聞こし召したることにか。

秋の野の草の茂みは分けしかど仮寝の枕結びやはせし

明らめきこえさするもあやなけれど、よべの罪はひたやごもりにや。

とあり。宮にはいと多く聞こえたまで、御厩に足疾き御馬に移し置きて、一夜の大夫をぞたてまつれたまふ。「よべより六条の院にさぶらひて、ただ今なむまかでつると言へ」とて、言ふべきやうささめき教へたまふ。

かしこには、よべもつれなく見えたまひし御けしきを忍びあへで、後の聞こえをもつつみあへず恨みきこえたまうしを、その御返りだに見えず、今日の暮れ果てぬるを、いかばかりの御心にかはと、もて離れてあさましう心もくだけで、よろしかりつる御心地、またいといったう悩みたまふ。なかなか正身の御心のうちは、このふしをことに憂しとも思し驚くべきことしなければ、ただおぼえぬ人にうちとけたりしありさまを見えしことばかりこそ口惜しけれ、いとしも思ししまぬを、かくいみじうおぼいたるを、あさましう恥づかしう、明らめきこえたまふ方なくて、例よりももの恥ぢしたまへるけしき見えたまふを、いと心苦しう、ものをのみ思ほし添ふべかりける、と見たてまつるも、胸つとふたがりて悲しければ、「今さらにむつかしきことをば聞こえじと思へど、なほ御宿世とはいひながら、思はずに心幼くて、人のもどきを負ひたまふべきことを、取り返すべきことにはあらねど、今よりはなほさる心したまへ。数ならぬ身ながらも、よろづに育みきこえつるを、今は何事をも思し知り、世の中のごまかうぎまのありさまをも思したどりぬべきほどに見たてまつりおきつることと、そなたさまはうしろやすくこそ見たてまつりつれ、なほいといはけて強き御心おきてのなかりけること、と思ひ乱れはべるに、今しばしの命もとどめまほしうなむ。ただ人だに、すこしよろしくなりぬる女の、人二人と見るため

何ごとかありけむ」とのたまふがいとさりげなければ、文はをこがましう取りてけり、とすさまじうて、そのことをばかけたまはず、「一夜の深山風にあやまりたまへる悩ましきななりと、をかしきやうにかこちきこえたまへかし」と聞こえたまふ。「いで、このひがことな常にのたまひそ。何のをかしきやうかある。世人になずらへたまふこそなかなか恥づかしけれ。この女房たちも、かつはあやしきまめざまをかくのたまふとほほ笑むらむものを」と、戯れ言に言ひなして、「その文よ。いづら」とのたまへど、とみにも引き出でたまはぬほどに、なほ物語など聞こえて、しばし臥したまへるほどに暮れにけり。

ひぐらしの声におどろきて、山の蔭いかに霧りふたがりぬらむ、あさましや、今日この御返事をだに、といとほしうて、ただ知らず顔に硯おしすりて、いかになしてしにかとりなさむと眺めおはする。

御座の奥のすこし上がりたる所を、試みにひき上げたまへれば、これにさし挟みたまへるなりけりと、うれしうもをこがましうもおぼゆるに、うち笑みて見たまふに、かう心苦しきことなむありける。胸つぶれて、一夜のことを心ありて聞きたまうけると思すに、いとほしう心苦し。よべだにいかに思ひ明かしたまうけむ、今日も今まで文をだに、と言はむ方なくおぼゆ。いと苦しげに言ふかひなく書き紛らはしたまへるさまにて、おぼろけに思ひあまりてやはかく書きたまうつらむ、つれなくて今宵の明けつらむ、と言ふべき方のなければ、女君ぞいとつらう心憂き。すずろにかくあだへ隠して、いでやわがならはしぞやと、さまざまに身もつらく、すべて泣きぬべき心地したまふ。

やがて出で立ちたまはむとするを、心やすく対面もあらざらむものから、人もかくのたまふ、いかならむ、坎日にもありけるを、もしたまきかに思ひ許したまはば、あしからむ、なほよからむことをこそ、とうるはしき心に思して、まづこの御返りを聞こえたまふ。

しきのすさまじさも、見ならはずなりにける事なれば、いとなむ苦しき。かねてよりならはしたまはで」とかこちたまふも、憎くもあらず。「にはかにと思すばかりには何ごとか見ゆらむ。いとうたてある御心の隈かな。よからずもの聞こえ知らする人ぞあるべき。あやしう、もとよりまろをば許さぬぞかし。なほかの緑の袖の名残、あなづらはしきにことづけて、もてなしたてまつらむと思ふやうあるにや、いろいろ聞きにくきことどもほのめくめり。あいなき人の御ためにもいとほしう」などのたまへど、つひにあるべきことと思せば、ことにあらがはず。大輔の乳母いと苦しと聞きて、ものも聞こえず。

とかく言ひしろひて、この御文はひき隠したまひつれば、せめてもあさり取らで、つれなく大殿籠もりぬれば、胸はしりて、いかで取りてしがなと、御息所の御文なめり、何ごとありつらむ、と目も合はず思ひ臥したまへり。女君の寝たまへるに、よべの御座の下などに、さりげなくて探りたまへど、なし。隠したまへらむほどもなければ、いと心やましくて明けぬれど、とみにも起きたまはず。女君は、君達におどろかされて、ゐざり出でたまふにぞ、われも今起きたまふやうにて、よろづにうかがひたまへど、え見つけたまはず。女は、かく求めむとも思ひたまへらぬをぞ、げに懸想なき御文なりけり、と心にも入れねば、君達のあわて遊びあひて、雛作り拾ひ据ゑて遊びたまふ、書読み手習ひなど、さまざまにいとあわたし、小さき稚児這ひかかり引きしろへば、取りし文のことと思ひ出でたまはず。男は異事もおぼえたまはず、かしこに疾く聞こえむと思すに、よべの御文のさまもえたしかに見ずなりにしかば、見ぬさまならむも、散らしてけると推し量りたまふべし、など思ひ乱れたまふ。

誰れも誰れも御台参りなどして、のどかになりぬる昼つ方、思ひわづらひて、「よべの御文は何ごとかありし。あやしう、見せたまはで。今日も訪らひ聞こゆべし。悩ましうて、六条にもえ参るまじければ、文をこそはたてまつらめ。

か年ごろの心もとなさよりも千重にもの思ひ重ねて嘆きたまふ。北の方は、かかる御ありきのけしきほの聞きて、心やましと聞きゐたまへるに、知らぬやうにて君達もて遊び紛らはしつつ、わが昼の御座に臥したまへり。

宵過ぐるほどにぞこの御返り持て参れるを、かく例にもあらぬ鳥の跡のやうなれば、とみにも見解きたまはで、大殿油近う取り寄せて見たまふ。女君、ものの隔てたるやうなれど、いと疾く見つけたまうて、はひ寄りて、御後ろより取りたまうつ。「あさましう、こはいかにしたまふぞ。あなけしからず。六条の東の上の御文なり。今朝風邪おこりて悩ましげにしたまへるを、院の御前にはべりて出でつるほど、またも参うでずなりぬれば、いとほしさに、今の間いかにと聞こえたりつるなり。見たまへよ、懸想びたる文のさまか。さてもなほなほしの御さまや。年月に添へていたうあなづりたまふこそうれたけれ。思はむところをむげに恥ぢたまはぬよ」とうちうめきて、惜しみ顔にもひこしろひたまはねば、さすがにふとも見で持たまへり。「年月に添ふるあなづらはしきは御心ならひなべかめり」とばかり、かくうるはしだちたまへるに憚りて、若やかにをかしきさましてのたまへば、うち笑ひて、「そはともかくもあらむ。世の常のことなり。またあらじかし、よろしうなりぬる男の、かく紛ふ方なく一つ所を守らへて、もの懼ぢしたる鳥のせうやうのもののやうなるは。いかに人笑ふらむ。さるかたくなしき者に守られたまふは、御ためにもたけからずや。あまたが中に、なほ際まさりことなるけぢめ見えたるこそ、よそのおぼえも心にくく、わが心地もなほ古りがたく、をかしきこともあはれなるすぢも絶えざらめ。かく翁のなにがし守りけむやうにおれ惑ひたれば、いとぞ口惜しき。いづこの栄えかあらむ」と、さすがにこの文の、けしきなくをこつり取らむの心にて、欺き申したまへば、いとにほひやかにうち笑ひて、「ものの映え映えしさ作り出でたまふほど、古りぬる人苦しや。いと今めかしくなり変はれる御け

め。心うつくしきやうに聞こえ通ひたまひて、なほありしままならむこそ良からめ。あいなき甘えたるさまなるべし」とて召し寄す。苦しけれどたてまつりつ。

あさましき御心のほどを見たてまつりあらはいてこそなかなか心やすくひたぶる心もつきはべりぬべけれ。

せくからに浅さぞ見えむ山川の流れての名をつつみ果てずは

と言葉も多かれど、見も果てたまはず。この御文も、けぎやかなるけしきにもあらで、めざましげに心地よ顔に、今宵つれなきを、いといみじと思す。故督の君の御心ざまの思はずなりし時、いと憂しと思ひしかど、おほかたのもてなしはまた並ぶ人なかりしかば、こなたに力ある心地して慰めしだに、世には心もゆかざりしを、あないみじや、大殿のわたりに思ひのたまはむこと、と思ひしみたまふ。

なほいかかのたまふとけしきをだに見むと、心地のかき乱りくるるやうにしたまふ目おし絞りて、あやしき鳥の跡のやうに書きたまふ。

頼もしげなくなりにてはべる、訪らひに渡りたまへる折にて、そそのかしきこゆれど、いとはればれしからぬさまにものしたまふめれば、見たまへわづらひてなむ。

女郎花萎るる野辺をいづことて一夜ばかりの宿を借りけむ

とただ書きさして、おしひねりて出だしたまひて、臥したまひぬるまゝに、いといたく苦しがりたまふ。御もののけのたゆめけるにやと人びと言ひ騒ぐ。例の験ある限りいと騒がしうのしる。宮をば、「なほ渡らせたまひね」と、人びと聞こゆれど、御身の憂きまゝに後れきこえじと思せば、つと添ひたまへり。

大将殿は、この昼つ方三条殿におはしにける、今宵立ち返り参でたまはむに、ことしもあり顔に、まだきに聞き苦しかるべしなど念じたまひて、いとなかな

苦しかるべうよろづに思す。まいていふかひなく、人の言によりていかなる名を朽たさまし、などすこし思し慰むる方はあれど、かばかりになりぬる高き人の、かくまでもすすろに人に見ゆるやうはあらじかし、と宿世憂く思し屈して、夕つ方ぞ、「なほ渡らせたまへ」とあれば中の塗籠の戸開けあはせて渡りたまへる。

苦しき御心地にも、なのめならずかしこまりかしづききこえたまふ。常の御作法あやまたず、起き上がりたまうて、「いと乱りがはしげにはべれば、渡らせたまふも心苦しうてなむ。この二日三日ばかり見たてまつらざりけるほどの、年月の心地するも、かつはいとはかなくなむ。後かならずしも対面のはべるべきにもはべらざめり。まためぐり参るとも、かひやははべるべき。思へば、ただ時の間に隔たりぬべき世の中を、あながちにならひはべりにけるも悔しきまでなむ」など泣きたまふ。宮も、もののみ悲しう取り集め思さるれば、聞こえたまふこともなくて見たてまつりたまふ。ものづつみをいたうしたまふ本性に、際々しうのたまひさはやぐべきにもあらねば、恥づかしとのみ思すに、いといとほしうて、いかなりしなども問ひきこえたまはず。大殿油など急ぎ参らせて、御台などこなたにて参らせたまふ。もの聞こし召さずと聞きたまひて、とかう手づからまかなひ直しなどしたまへど、触れたまふべくもあらず。ただ御心地のよろしう見えたまふぞ胸すこしあけたまふ。

かしこよりまた御文あり。心知らぬ人しも取り入れて、「大将殿より、少将の君にとて御使ひあり」と言ふぞまたわびしきや。少将、御文は取りつ。御息所、「いかなる御文にか」とさすがに問ひたまふ。人知れず思し弱る心も添ひて、下に待ちきこえたまひけるに、さもあらぬなめりと思ほすも、心騒ぎして、「いでその御文、なほ聞こえたまへ。あいなし。人の御名をよさまに言ひ直す人は難きものなり。そこに心きよう思すとも、しか用ゐる人は少なくこそあら

ちうちの御心きようおはすとも、かくまで言ひつる法師ばら、よからぬ童べなどはまさに言ひ残してむや。人はいかに言ひあらがひ、さもあらぬことと言ふべきにかあらむ。すべて心幼き限りしもここにさぶらひて」ともえのたまひやらず。いと苦しげなる御心地に、ものを思しおどろきたれば、いといとほしげなり。氣高うもてなしきこえむとおぼいたるに、世づかはしう、軽々しき名の立ちたまふべきを、おろかならず思し嘆かる。「かうすこしものおぼゆる隙に、渡らせたまうべう聞こえよ。そなたへ参り来べけれど、動きすべうもあらでなむ。見たてまつらで久しうなりぬる心地すや」と、涙を浮けてのたまふ。参りて、「しかなむ聞こえさせたまふ」とばかり聞こゆ。

渡りたまはむとて、御額髪の濡れまろがれたるひきつくろひ、単衣の御衣ほころびたる着替へなどしたまひても、とみにもえ動いたまはず。この人びともいかに思ふらむ、まだえ知りたまはで、後にいささかも聞きたまふことあらむに、つれなくてありしよと思しあはせむもいみじう恥づかしければ、また臥したまひぬ。「心地のいみじう悩ましきかな。やがて直らぬさまにもありなむ、いとめやすかりぬべくこそ。脚の氣の上りたる心地す」と、押し下させたまふ。ものをいと苦しうさまざまに思すには、氣ぞ上がりける。

少将、「上に、この御ことほのめかし聞こえける人こそはべけれ。いかなりしことぞと問はせたまひつれば、ありのままに聞こえさせて、御障子の固めばかりをなむすこしこと添へてけぎやかに聞こえさせつる。もしさやうにかすめきこえさせたまはば、同じさまに聞こえさせたまへ」と申す。嘆いたまへるけしきは聞こえ出でず。さればよと、いとわびしくて、ものものたまはぬ御枕より雫ぞ落つる。このことにのみもあらず、身の思はずになりそめしより、いみじうものをのみ思はせたてまつることと、生けるかひなく思ひ続けたまひて、この人はかうても止まで、とかく言ひかかづらひ出でむも、わづらはしう聞き

ぬ。え御子の君庄したまはじ。また、女人の悪しき身をうけ、長夜の闇に惑ふは、ただかやうの罪によりなむさるいみじき報いをも受くるものなる。人の御怒り出で来なば、長きほだしとなりなむ。もはら受けひかず」と、頭振りてただ言ひに言ひ放てば、「いとあやしきことなり。さらにさるけしきにも見えたまはぬ人なり。よろづ心地の惑ひにしかば、うち休みて対面せむとてなむしとし立ち止まりたまへると、ここなる御達言ひしを、さやうにて泊りたまへるにやあらむ。おほかたいとまめやかに、すくよかにものしたまふ人を」とおぼめいたまひながら、心のうちに、さることもやありけむ、ただならぬ御けしきは折々見ゆれど、人の御さまのいとかどかどしう、あながちに人の誹りあらむことははぶき捨て、うるはしだちたまへるに、たはやすく心許されぬことはあらじとうちとけたるぞかし、人少なにておはするけしきを見て、はひ入りもやしたまへりけむ、と思す。

律師立ちぬる後に、小少将の君を召して、「かかることなむ聞きつる。いかなりしことぞ。などかおのれには、さなむくなむとは聞かせたまはざりける。さしもあらじと思ひながら」とのたまへば、いとほしけれど、初めよりありしやうを詳しう聞こゆ。今朝の御文のけしき、宮もほのかにのたまはせつるやうなど聞こえ、「年ごろ忍びわたりたまひける心の内を聞こえ知らせむとばかりにやはべりけむ。ありがたう用意ありてなむ明かしも果てで出でたまひぬるを、人はいかに聞こえはべるにか」、律師とは思ひも寄らで、忍びて人の聞こえけると思ふ。もののたまはで、いと憂く口惜しと思すに、涙ほろほろとこぼれたまひぬ。見たてまつるもいといとほしう、何にありのままに聞こえつらむ、苦しき御心地を、いとど思し乱らむ、と悔しう思ひゐたり。「障子は鎖してなむ」と、よろづによろしきやうに聞こえなせど、「とてもかくても、さばかりに、何の用意もなく、軽らかに人に見えたまひけむこそいといみじけれ。う

たうあはれなる御心ざまはほど経ぬれど、かかる方に頼みきこえては見劣りやしたまはむと思ふも危ふく、など睦ましうさぶらふ限りはおのがどち思ひ乱る。御息所もかけて知りたまはず。

もののけにわづらひたまふ人は、重しと見れど、さはやぎたまふ隙もありてなむものおぼえたまふ。日中の御加持果てて、阿闍梨一人とどまりて、なほ陀羅尼読みたまふ。よろしうおはします、喜びて、「大日如来虚言したまはずは、などてかかくなにがしが心を致して仕うまつる御修法、験なきやうはあらむ。

悪霊は執念きやうなれど、業障にまとはれたるはかなものなり」と、声はかれて怒りたまふ。いと聖だち、すすすすしき律師にて、ゆくりもなく、「そよや。

この大将はいつよりここには参り通ひたまふぞ」と問ひ申したまふ。御息所、

「さることもはべらず。故大納言のいとよき仲にて、語らひつけたまへる心違へじと、この年ごろ、さるべきことにつけて、いとあやしくなむ語らひものしたまふも、かくふりはへ、わづらふを訪らひにとて立ち寄りたまへりければ、かたじけなく聞きはべりし」と聞こえたまふ。「いで、あなかたは。なにがしに隠さるべきにもあらず。今朝、後夜に参う上りつるに、かの西の妻戸より、いとうるはしき男の出でたまへるを、霧深くて、なにがしはえ見分いたてまつらざりつるを、この法師ばらなむ、「大将殿の出でたまふなりけり」と、「よべも御車も返して泊りたまひにける」と口々申しつる。げにいと香うばしき香の満ちて頭痛きまでありつれば、げにさなりけりと思ひあはせはべりぬる。常にいと香うばしうものしたまふ君なり。このこといと切にもあらぬことなり。人はいと有職にものしたまふ。なにがしらも、童にものしたまうし時より、かの君の御ためのことは、修法をなむ、故大宮のたまひつけたりしかば、一向にさるべきこと、今に承るところなれど、いと益なし。本妻強くものしたまふ。さる時にあへる族類にて、いとやむごとなし。若君たちは七八人になりたまひ

たまひて、御衣脱ぎ替へたまふ。常に夏冬といときよらにしおきたまへれば、香の御唐櫃より取う出て奉りたまふ。御粥など参りて御前に参りたまふ。

かしこに御文たてまつりたまへれど、御覧じも入れず。にはかにあさましかりしありさま、めざましうも恥づかしうも思すに、心づきなくて、御息所の漏り聞きたまはむこともいと恥づかしう、またかかることやとかけて知りたまはざらむに、ただならぬふしにても見つけたまひ、人のもの言ひ隠れなき世なれば、おのづから聞きあはせて、隔てけると思さむがいと苦しければ、人びとありしままに聞こえ漏らさなむ、憂しと思すともいかがはせむと思す。親子の御仲と聞こゆる中にも、つゆ隔てずぞ思ひ交はしたまへる。よその人は漏り聞けども、親に隠すたぐひこそは、昔の物語にもあめれど、さはた思されず。人びとは、「何かはほのかに聞きたまひて、ことしもあり顔にとかく思し乱れむ、まだきに心苦し」など言ひあはせて、いかならむと思ふどち、この御消息のゆかしきを、ひきも開けさせたまはねば、心もとなくて、「なほむげに聞こえさせたまはざらむもおぼつかなく若々しきやうにぞはべらむ」など聞こえて、広げたれば、「あやしう、何心もなきさまにて、人にかばかりにても見ゆるあはつけさの、みづからの過ちに思ひなせど、思ひやりなかりしあさましさも慰めがたくなむ。え見ずとを言へ」と、ことのほかにて寄り臥させたまひぬ。

さるは、憎げもなく、いと心深う書いたまうて、

魂をつれなき袖に留めおきてわが心から惑はるるかな

ほかなるものは、とか、昔もたぐひありけりと思たまへなすにも、さらに行く方知らずのみなむ。

などいと多かめれど、人はえまほにも見ず。例のけしきなる今朝の御文にもあらざめれど、なほえ思ひはるけず。人びとは御けしきもいとほしきを、嘆かしう見たてまつりつつ、いかなる御ことにかはあらむ、何ごとにつけてもありが

人のもの言ひいかならむ、御息所の知りたまはざらむも罪得がましう、かく聞きたまひて、心幼くと思しのたまはむもわびしければ、「明かきでだに出でたまへ」とやらひきこえたまふより外の言なし。

「あさましや、ことあり顔に分けはべらむ朝露の思はむところよ。なほさらば思し知れよ。をこがましきさまを見えたてまつりて、賢うすかしやりつと思し離れむこそ、その際は心もえ収めあふまじう、知らぬこととけしからぬ心づかひもならひはじむべう思ひたまへらるれ」とて、いとうしろめたくなかなかなれど、ゆくりかにあざれたることの、まことにならはぬ御心地なれば、いとほしう、わが御みづからも心劣りやせむ、など思いて、誰が御ためにもあらはなるまじきほどの霧に立ち隠れて、出でたまふ心地そらなり。

「荻原や軒端の露にそぼちつつ八重立つ霧を分けぞ行くべき
濡衣はなほえ干させたまはじ。かうわりなうやはせたまふ御心づからこそは」と聞こえたまふ。げにこの御名のたけからず漏りぬべきを、心の問はむにだに口ぎよう答へむと思せば、いみじうもて離れたまふ。

「分け行かむ草葉の露をかことにてなほ濡衣をかけむと思ふ
めづらかなることかな」とあはめたまへるさま、いとをかしう恥づかしげなり。年ごろ人に違へる心ばせ人になりて、さまざまに情けを見えたてまつる名残なく、うちたゆめ好き好きしきやうなるがいとほしう、心恥づかしげなれば、おろかならず思ひ返しつつ、かうあながちに従ひきこえても、後をこがましくやとさまざまに思ひ乱れつつ、出でたまふ道の露けさもいと所狭し。

かやうの歩き慣らひたまはぬ心地に、をかしうも心尽くしにもおぼえつつ、殿におはせば、女君の、かかる濡れをあやしと咎めたまひぬべければ、六条院の東の御殿に参うでたまひぬ。まだ朝霧も晴れず、ましてかしこにはいかにと思しやる。「例ならぬ御歩きありけり」と人びとはささめく。しばしうち休み

世を知りたる方の心やすきやうに、折々ほのめかすもめざましう、げにたぐひなき身の憂さなりや、と思し続けたまふに、死ぬべくおぼえたまうて、「憂きみづからの罪を思ひ知るとても、いとかうあさましきを、いかやうに思ひなすべきにかはあらむ」と、いとほのかに、あはれげに泣いたまうて、

我のみや憂き世を知れるためしにて濡れそふ袖の名を朽たすべき

とのたまふともなきを、わが心に続けて忍びやかにうち誦じたまへるもかたはらいたく、いかに言ひつることぞと思さるるに、「げに悪しう聞こえつかし」などほほ笑みたまへるけしきにて、

「おほかたは我濡衣を着せずとも朽ちにし袖の名やは隠るる

ひたぶるに思しなりねかし」とて、月明き方に誘ひきこゆるもあさましと思す。心強うもてなしたまへど、はかなう引き寄せたてまつりて、「かばかりたぐひなき心ざしを御覧じ知りて、心やすうもてなしたまへ。御許しあらではさらにさらに」と、いとけざやかに聞こえたまふほど、明け方近うなりにけり。

月隈なう澄みわたりて、霧にも紛れずさし入りたり。浅はかなる廂の軒は、ほどもなき心地すれば、月の顔に向かひたるやうなる、あやしうはしたなくて、紛らはしたまへるもてなしなど、いはむかたなくなまめきたまへり。故君の御こともすこし聞こえ出でて、さまようのだやかなる物語をぞ聞こえたまふ。さすがになほ、かの過ぎにし方に思し落とすをば、恨めしげに怨みきこえたまふ。御心の内にも、かれは位などもまだ及ばざりけるほどながら、誰れ誰れも御許しありけるに、おのづからもてなされて見馴れたまひにしを、それだにいとめざましき心のなりにしさま、ましてかうあるまじきことに、よそに聞くあたりになだにあらず、大殿などの聞き思ひたまはむことよ、なべての世のそしりをばさらにもいはず、院にもいかに聞こし召し思はされむ、など、離れぬここかしこの御心を思しめぐらすに、いと口惜しう、わが心一つにかう強う思ふとも、

れば、のたまはむことはたましておぼえたまはず。「いと心憂く若々しき御さまかな。人知れぬ心にあまりぬる好き好きしき罪ばかりこそはべらめ、これより馴れ過ぎたることは、さらに御心許されでは御覧ぜられじ。いかばかり千々に碎けはべる思ひに堪へぬぞや。さりともおのづから御覧じ知るふしもはべらむものを、しひておぼめかしう、け疎うもてなさせたまふめれば、聞こえさせむ方なさに、いかがはせむ。心地なく憎しと思さるとも、かうながら朽ちぬべき愁へをさだかに聞こえ知らせはべらむ、とばかりなり。言ひ知らぬ御けしきの辛きものから、いとかたじけなければ」とて、あながちに情け深う用意したまへり。障子を押さへたまへるはいとものはかなき固めなれど、引きも開けず、「かばかりのけぢめをと、しひて思さるらむこそあはれなれ」とうち笑ひて、うたて心のままなるさまにもあらず。人の御ありさまのなつかしうあてになまめいたまへること、さはいへどことに見ゆ。世とともにものを思ひたまふけにや、痩せ痩せにあえかなる心地して、うちとけたまへるままの御袖のあたりもなよびかに、気近うしみたる匂ひなど、取り集めてらうたげにやはらかなる心地したまへり。

風いと心細う、更けゆく夜のけしき、虫の音も鹿の鳴く音も滝の音も一つに乱れて、艶あるほどなれど、ただありのあはつけ人だに寢覚めしぬべき空のけしきを、格子もさながら、入り方の月の山の端近きほど、とどめがたうものあはれなり。「なほかう思し知らぬ御ありさまこそかへりては浅う御心のほど知らるれ。かう世づかぬまでしれじれしきうしろやすきなどもたぐひあらじとおぼえはべるを、何事にもかやすきほどの人こそかかるをば痴者などうち笑ひてつれなき心もつかふなれ。あまりこよなく思し落としたるに、えなむ静め果つまじき心地しはべる。世の中をむげに思し知らぬにしもあらじを」と、よろづに聞こえせめられたまひて、いかが言ふべき、とわびしう思しめぐらす。

れる、忍びやかに召し寄せて、「この律師にかならず言ふべきことのあるを、護身などに暇なげなめる、ただ今はうち休むらむ。今宵このわたりに泊りて、初夜の時果てむほどに、かのゐたる方にもせむ。これかれさぶらはせよ。隨身などの男どもは、栗栖野の莊近からむ、秣などとり飼はせて、ここに人あまた声なせそ。かやうの旅寝は、軽々しきやうに人もとりなすべし」とのたまふ。あるやうあるべしと心得て、承りて立ちぬ。

さて、「道いとたどたどしければ、このわたりに宿借りはべる。同じうは、この御簾のもとに許されあらなむ。阿闍梨の下るるほどまで」などつれなくのたまふ。例は、かやうに長居して、あざればみたるけしきも見えたまはぬを、うたてもあるかな、と宮思せど、ことさらめきて軽らかにあなたにはひ渡りたまふは、人もさま悪しき心地して、ただ音せでおはしますに、とかく聞こえ寄りて、御消息聞こえ伝へにゐざり入る人の影につきて入りたまひぬ。

まだ夕暮の、霧に閉ぢられて内は暗くなりたるほどなり。あさましうて見返りたるに、宮はいとむくつけうなりたまうて、北の御障子の外にゐざり出でさせたまふを、いとようたどりて、ひきとどめたてまつりつ。御身は入り果てたまへれど、御衣の裾の残りて、障子はあなたより鎖すべき方なかりければ、引きたてさして、水のやうにわななきおはす。人びともあきれて、いかにすべきことともえ思ひえず。こなたよりこそ鎖すかねなどもあれ、いとわりなくて荒々しくはえ引きかなぐるべくはたものしたまはねば、「いとあさましう。思たまへ寄らざりける御心のほどになむ」と泣きぬばかりに聞こゆれど、「かばかりにてさぶらはむが、人よりけに疎ましうめざましう思さるべきにやは。数ならずとも、御耳馴れぬる年月も重なりぬらむ」とて、いとのだやかにさまよくもてしづめて、思ふことを聞こえ知らせたまふ。

聞き入れたまふべくもあらず、悔しう、かくまでと思すことのみやる方なけ

き心地するに、ひぐらしの鳴きしきりて、垣ほに生ふる撫子のうちなびける色もをかしう見ゆ。前の前栽の花どもは心にまかせて乱れあひたるに、水の音いと涼しげにて、山おろし心すごく、松の響き木深く聞こえわたされなどして、不断の経読む時変はりて鐘うち鳴らすに、立つ声もる変はるも一つにあひて、いと尊く聞こゆ。所から、よろづのこと、心細う見なさるるもあはれにもの思ひ続けらる。出でたまはむ心地もなし。律師も加持する音して陀羅尼いと尊く読むなり。

いと苦しげにしたまふなりとて、人びともそなたに集ひて、おほかたもかかる旅所にあまた参らざりけるに、いとど人少なにて宮は眺めたまへり。しめやかにて、思ふこともうち出でつべき折かな、と思ひゐたまへるに、霧のただこの軒のもとまで立ちわたれば、「まかでむ方も見えなくなり行くは、いかがすべき」とて、

山里のあはれを添ふる夕霧に立ち出でむ空もなき心地して
と聞こえたまへば、

山賤の籬をこめて立つ霧も心そらなる人とはとめず

ほのかに聞こゆる御けはひに慰めつつ、まことに帰るさ忘れ果てぬ。

「中空なるわざかな。家路は見えず、霧の籬は立ち止るべうもあらず遣らはせたまふ。つきなき人はかかることこそ」などやすらひて、忍びあまりぬる筋もほのめかし聞こえたまふに、年ごろもむげに見知りたまはぬにはあらねど、知らぬ顔にのみもてなしたまへるを、かく言に出でて怨みきこえたまふを、わづらはしうて、いとど御いらへもなければ、いたう嘆きつつ、心のうちに、またかかる折ありなむやと思ひめぐらしたまふ。情けなうあはつけきものには思はれたてまつるとも、いかがはせむ、思ひわたるさまをだに知らせたてまつらむ、と思ひて、人を召せば、御司の将監よりかうぶり得たる、睦ましき人ぞ参

宮は奥の方にいと忍びておはしませど、こととしからぬ旅の御しつらひ、浅きやうなる御座のほどにて、人の御けはひおのづからしるし。いとやはらかにうちみじろきなどしたまふ御衣の音なひ、さばかりななり、と聞きゐたまへり。心も空におぼえて、あなたの御消息通ふほど、すこし遠う隔たる隙に、例の少将の君などさぶらふ人びとに物語などしたまひて、「かう参り来馴れ、承ることの年ごろといふばかりになりけるを、こよなうもの遠うもてなさせたまへる恨めしきなむ。かかる御簾の前にて、人伝ての御消息などのほのかに聞こえ伝ふることよ。まだこそならはね。いかに古めかしきさまに人びとほほ笑みたまふらむと、はしたなくなむ。齡積もらず軽らかなりしほどに、ほの好きたる方に面馴れなましかば、かううひうひしうもおぼえざらまし。さらにかばかりすすくしうおれて年経る人はたぐひあらじかし」とのたまふ。

げにいとあなづりにくげなるさましたまひつれば、さればよと、「なかなかなる御いらへ聞こえ出でむは恥づかしう」などつきしろひて、「かかる御愁へ聞こしめし知らぬやうなり」と宮に聞こゆれば、「みづから聞こえたまはざめるかたはらいたさに、代はりはべるべきを、いと恐ろしきまでものしたまふめりしを、見あつかひはべりしほどに、いとどあるかなきかの心地になりてなむ、え聞こえぬ」とあれば、「こは宮の御消息か」とる直りて、「心苦しき御悩みを、身に代ふばかり嘆ききこえさせはべるも、何のゆゑにか。かたじけなけれど、ものを思し知る御ありさまなど、はればれしき方にも見たてまつり直したまふまでは、平らかに過ぐしたまはむこそ誰が御ためにも頼もしきことにははべらめと、推し量りきこえさするによりなむ。ただあなたさまに思し譲りて、積もりはべりぬる心ざしをも知ろしめされぬは、本意なき心地なむ」と聞こえたまふ。「げに」と人びとも聞こゆ。

日入り方になり行くに、空のけしきもあはれに霧りわたりて、山の蔭は小暗

る書きざま、言葉もなつかしきところ書き添へたまへるを、いよいよ見まほしう目とまりて、しげう聞こえ通ひたまふ。なほつひにあるやうあるべきやう御仲らひなめりと北の方けしきとりたまへれば、わづらはしくて、参うでまほしう思せど、とみにえ出で立ちたまはず。

八月中の十日ばかりなれば、野辺のけしきもをかしきころなるに、山里のありさまのいとゆかしければ、「なにがし律師のめづらしう下りたなるに、せちに語らふべきことあり。御息所の患ひたまふなるもとぶらひがてら、参うでむ」とおほかたにぞ聞こえて出でたまふ。御前こととしからで、親しき限り五六人ばかり、狩衣にてさぶらふ。ことに深き道ならねど、松が崎の小山の色なども、さる巖ならねど秋のけしきつきて、都に二なくと尽くしたる家居には、なほあはれも興もまさりてぞ見ゆるや。

はかなき小柴垣もゆゑあるさまにしなして、かりそめなれどあてはかに住まひなしたまへり。寝殿とおぼしき東の放出に修法の檀塗りて、北の廂におはすれば、西面に宮はおはします。御もののけむつかし、とてとどめたてまつりたまひけれど、いかでか離れたてまつらむ、と慕ひわたりたまへるを、人に移り散るを懼ぢて、すこしの隔てばかりに、あなたには渡したてまつりたまはず。客人のゐたまふべき所のなければ、宮の御方の御簾の前に入れたてまつりて、上臈だつ人びと、御消息聞こえ伝ふ。「いとかたじけなく、かうまでのたまはせ渡らせたまへるをなむ。もしかひなくなり果てはべりなば、このかしこまりをだに聞こえさせでや、と思ひたまふるをなむ、今しばしかけとどめまほしき心つきはべりぬる」と、聞こえ出だしたまへり。「渡らせたまひし御送りにも思ふたまへしを、六条院に承りさしたることはべりしほどにてなむ。日ごろもそこはかとなく紛るることはべりて、思ひたまふる心のほどよりは、こよなくおろかに御覧ぜらるることの苦しうはべる」など聞こえたまふ。

まめ人の名をとりてさかしがりたまふ大将、この一条の宮の御ありさまをなほあらまほしと心にとどめて、おほかたの人目には昔を忘れぬ用意に見せつつ、いとねむごろにとぶらひきこえたまふ。下の心には、かくては止むまじくなむ月日に添へて思ひまさりたまひける。御息所も、あはれにありがたき御心ばへにもあるかなと、今はいよいよもの寂しき御つれづれを、絶えず訪づれたまふに、慰めたまふことも多かり。

初めより懸想びても聞こえたまはざりしに、ひき返し懸想ばみなまめかむもまばゆし、ただ深き心ざしを見えたてまつりて、うちとけたまふ折もあらじやは、と思ひつつ、さるべきことにつけても宮の御けはひありさまを見たまふ。みづからなど聞こえたまふことはさらになし。いかならむついでに、思ふことをもまほに聞こえ知らせて、人の御けはひを見む、と思しわたるに、御息所、もののけにいたう患ひたまひて、小野といふわたりに、山里持たまへるに渡りたまへり。早うより御祈りの師に、もののけなど祓ひ捨てける律師、山籠もりして里に出でじと誓ひたるを、麓近くて請じ下ろしたまふゆゑなりけり。御車よりはじめて、御前など、大将殿よりぞたてまつれたまへるを、なかなか昔の近きゆかりの君たちは、ことわざしげきおのがじしの世のいとなみに紛れつつ、えしも思ひ出できこえたまはず。弁の君はた、思ふ心なきにしもあらで、けしきばみけるに、ことの外なる御もてなしなりけるには、しひてえ参でとぶらひたまはずなりにたり。この君はいとかしこう、さりげなくて聞こえ馴れたまひにためり。

修法などせさせたまふと聞きて、僧の布施、浄衣などやうのこまかなるものをさへたてまつれたまふ。悩みたまふ人はえ聞こえたまはず、「なべての宣旨書きはものしと思しぬべく、こととしき御さまなり」と人びと聞こゆれば、宮ぞ御返り聞こえたまふ。いとをかしげにて、ただ一くだりなど、おほどかな

夕

霧

をも、いづれとなくめやすしと思すに、なほこの冷泉院を思ひきこえたまふ御心ざしはすぐれて深く、あはれにぞおぼえたまふ。院も常にいぶかしう思ひきこえたまひしに、御対面のまれにいぶせうのみ思されけるに、急がされたまひて、かく心安きさまにと思しなりけるになむ。

中宮ぞ、なかなかまかでたまふこともいと難うなりて、ただ人の仲のやうに並びおはしますに、今めかしう、なかなか昔よりもはなやかに御遊びをもしたまふ。何ごとも御心やれるありさまながら、ただかの御息所の御事を思しやりつつ、行なひの御心進みにたるを、人の許しきこえたまふまじきことなれば、功德のことを立てて思しいとなみ、いとど心深う世の中を思し取れるさまになりまざりたまふ。

まふらむ、亡き影にても、人に疎まれたてまつりたまふ御名のりなどの出で来けること、かの院にはいみじう隠したまひけるを、おのづから人の口さがなくて、伝へ聞こし召しける後、いと悲しういみじくて、なべての世の厭はしく思しなりて、仮にてもかのたまひけむありさまの詳しう聞かまほしきを、まほにはえうち出で聞こえたまはで、ただ、「亡き人の御ありさまの罪軽からぬさまにほの聞くことのはべりしを、さるしるしあらはならでも推し量り伝へつべきことにはべりけれど、後れしほどのあはればかりを忘れぬことにて、ものあなた思うたまへやらざりけるがものはかなさを、いかでよう言ひ聞かせむ人の勧めをも聞きはべりて、みづからだに、かの炎をも冷ましはべりにしがな、とやうやう積もるになむ思ひ知らるることもありける」など、かすめつつぞのたまふ。

げにさも思しぬべきこととあはれに見たてまつりたまうて、「その炎なむ、誰も逃るまじきことと知りながら、朝の露のかかれるほどは思ひ捨てはべらぬになむ。目蓮が仏に近き聖の身にて、たちまちに救ひけむ例にもえ継がせたまはざらむものから、玉のかんざし捨てさせたまはむも、この世には恨み残るやうなるわざなり。やうやうさる御心ざしをしめたまひて、かの御煙晴るべきことをせさせたまへ。しか思ひたまふことはべりながら、もの騒がしきやうに、静かなる本意もなきやうなるありさまに明け暮らしはべりつつ、みづからの勤めに添へて、今静かにと思ひたまふるも、げにこそ心幼きことなれ」など、世の中なべてはかなく厭ひ捨てまほしきことを聞こえ交はしたまへど、なほやしにくき御身のありさまどもなり。

よべはうち忍びてかやすかりし御歩き、今朝は表はれたまひて、上達部ども参りたまへる限りは皆御送り仕うまつりたまふ。春宮の女御の御ありさま並びなく、いつきたてたまへるかひがひしきも、大将のまたいと人に異なる御さま

は、まねぶもかたはらいたくてなむ。明け方に文など講じて、とく人びとまかでたまふ。

六条の院は中宮の御方に渡りたまひて、御物語など聞こえたまふ。「今はかう静かなる御住まひにしばしも参りぬべく、何とはなけれど、過ぐる齢に添へて、忘れぬ昔の御物語など、承り聞こえまほしう思ひたまふるに、何にもかぬ身のありさまにて、さすがにうひうひしく、所狭くもはべりてなむ。我より後の人びとに方々につけて後れゆく心地しはべるも、いと常なき世の心細さののどめがたうおぼえはべれば、世離れたる住まひにもやとやうやう思ひ立ちぬるを、残りの人びとのものはかなからむ、漂はしたまふな、と先々も聞こえつけし心違へず思しとどめてものせさせたまへ」など、まめやかなるさまに聞こえさせたまふ。

例の、いと若うおほどかなる御けはひにて、「九重の隔て深うはべりし年ごろよりも、おぼつかなさのまさるやうに思ひたまへらるるありさまを、いと思ひの外にむつかしうて、皆人の背きゆく世を厭はしう思ひなることもはべりながら、その心の内を聞こえさせうけたまはらねば、何事もまづ頼もしき蔭には聞こえさせならひて、いぶせくはべる」と聞こえたまふ。「げに、公ざまにては限りある折節の御里居も、いとよう待ちつけきこえさせしを、今は何事につけてかは御心にまかせさせたまふ御移ろひもはべらむ。定めなき世と言ひながらも、さして厭はしきことなき人の、さはやかに背き離るるもありがたう、心やすかるべきほどにつけてだに、おのづから思ひかかづらふほだしのみはべるを。などか、その人まねにきほふ御道心は、かへりてひがひがしう推し量りきこえさする人もこそはべれ。かけてもいとあるまじき御ことになむ」と聞こえたまふを、深うも汲みはかりたまはぬなめりかし、とつらう思ひきこえたまふ。

御息所の、御身の苦しうなりたまふらむありさま、いかなる煙の中に惑ひた

御土器二わたりばかり参るほどに、冷泉院より御消息あり。御前の御遊びにはかにとまりぬるを口惜しがりて、左大弁、式部大輔、また人びと引きゐて、さるべき限り参りたれば、大将などは六条の院にさぶらひたまふと聞こし召してなりけり。

雲の上をかけ離れたるすみかにももの忘れせぬ秋の夜の月

同じくは。

と聞こえたまへれば、「何ばかり所狭き身のほどにもあらずながら、今はのどやかにおはしますに、参り馴ることもをさをさなきを、本意なきことに思ひあまりておどろかせたまへる、かたじけなし」とて、にはかなるやうなれど、参りたまはむとす。

月影は同じ雲居に見えながらわが宿からの秋ぞ変はれる

異なることなかめれど、ただ昔今の御ありさまの思し続けられけるままなめり。御使に盃賜ひて、禄いと二なし。

人びとの御車、次第のままに引き直し、御前の人びと立ち混みて、静かなりつる御遊び紛れて出でたまひぬ。院の御車に親王たてまつり、大将、左衛門の督、藤宰相など、おはしける限り皆参りたまふ。直衣にて、軽らかなる御よそひどもなれば、下襲ばかりたてまつり加へて、月ややさし上がり、更けぬる空おもしろきに、若き人びと、笛などわざとなく吹かせたまひなどして、忍びたる御参りのさまなり。うるはしかるべき折節は、所狭くよだけき儀式を尽くしてかたみに御覧ぜられたまひ、またいにしへのただ人ざまに思し返りて、今宵は軽々しきやうにふとかく参りたまへれば、いたう驚き待ち喜びこえたまふ。ねびととのひたまへる御かたち、いよいよ異ものならず。いみじき御盛りの世を、御心と思し捨てて、静かなる御ありさまにあはれ少なからず。その夜の歌ども、唐のも大和のも、心ばへ深うおもしろくのみなむ。例の、言足らぬ片端

いで、思ひの外なる御ことにこそ」とて、

心もて草の宿りを厭へどもなほ鈴虫の声ぞふりせぬ

など聞こえたまひて、琴の御琴召して、珍しく弾きたまふ。宮の、御数珠引き怠りたまひて、御琴になほ心入れたまへり。月さし出でて、いとはなやかなるほどもあはれなるに、空をうち眺めて、世の中さまざまにつけて、はかなく移り変はるありさまも思し続けられて、例よりもあはれなる音に掻き鳴らしたまふ。

今宵は例の御遊びにやあらむと推し量りて、兵部卿宮渡りたまへり。大将の君、殿上人のさるべきなど具して参りたまへれば、こなたにおはしますと、御琴の音を尋ねてやがて参りたまふ。「いとつれづれにて、わざと遊びとはなくとも、久しく絶えにたるめづらしき物の音など、聞かまほしかりつる独り琴を、いとよう尋ねたまひける」とて、宮もこなたに御座よそひて入れたてまつりたまふ。内の御前に今宵は月の宴あるべかりつるを、とまりてさうざうしかりつるに、この院に人びと参りたまふと聞き伝へて、これかれ上達部なども参りたまへり。虫の音の定めをしたまふ。

御琴どもの声々掻き合はせて、おもしろきほどに、「月見る宵の、いつとてものあはれならぬ折はなきなかに、今宵の新たなる月の色には、げになほわが世の外までこそよろづ思ひ流さるれ。故権大納言、何の折々にも、亡きにつけていとど偲はるること多く、公私、ものの折節のにはひ失せたる心地こそすれ。花鳥の色にも音にも思ひわきまへ、いふかひあるかたのいとうるさかりしものを」などのたまひ出でて、みづからも掻き合はせたまふ御琴の音にも、袖濡らしたまひつ。御簾の内にも耳とどめてや聞きたまふらむと、片つ方の御心には思しながら、かかる御遊びのほどにはまづ恋しう内などにも思し出でける。

「今宵は鈴虫の宴にて明かしてむ」と思しのたまふ。

して、「あるまじきことなり。心ならぬ人すこしも混じりぬれば、かたへの人苦しう、あはあはしき聞こえ出で来るわざなり」と諫めたまひて、十余人ばかりのほどぞかたち異にてはさぶらふ。

この野に虫ども放たせたまひて、風すこし涼しくなりゆく夕暮に渡りたまひつつ、虫の音を聞きたまふやうにて、なほ思ひ離れぬさまを聞こえ悩ましたまへば、例の御心はあるまじきことにこそはあなれと、ひとへにむつかしきことに思ひきこえたまへり。人目にこそ変はることなくもてなしたまひしか、内には憂きを知りたまふけしきしるく、こよなう変はりにし御心を、いかで見えたてまつらじの御心にて多うは思ひなりたまひにし御世の背きなれば、今はもて離れて心やすきに、なほかやうになど聞こえたまふぞ苦しうて、人離れたらむ御住まひにもがな、と思しなれど、およすけてえさも強ひ申したまはず。

十五夜の夕暮に、仏の御前に宮おはして、端近う眺めたまひつつ念誦したまふ。若き尼君たち二三人、花奉るとて鳴らす闕伽坏の音、水のけはひなど聞こゆる、さま変はりたるいとなみにそそきあへる、いとあはれなるに、例の渡りたまひて、「虫の音いとしげう乱るる夕べかな」とて、われも忍びてうち誦じたまふ阿弥陀の大呪、いと尊くほのぼの聞こゆ。げに声々聞こえたる中に、鈴虫のふり出でたるほど、はなやかにをかし。「秋の虫の声いづれとなき中に、松虫なむすぐれたるとて、中宮のはるけき野辺を分けて、いとわざと尋ね取りつつ放たせたまへる、しるく鳴き伝ふるこそ少なかなれ。名には違ひて、命のほどはかなき虫にぞあるべき。心にまかせて、人間かぬ奥山、はるけき野の松原に声惜しまぬも、いと隔て心ある虫になむありける。鈴虫は心やすく今めいたるこそらうたけれ」などのたまへば、宮、

おほかたの秋をば憂しと知りにしをふり捨てがたき鈴虫の声

と忍びやかにのたまふ。いとなまめいてあてにおほどかなり。「いかにとかや。

ふ、尊く深きさまを表はして、ただ今の世の才もすぐれ、豊けきさきを、いとど心して言ひ続けたる、いと尊ければ、皆人しほたれたまふ。

これはただ忍びて御念誦堂の初めと思したることなれど、内にも、山の帝も聞こし召して、皆御使どもあり。御誦經の布施など、いと所狭きまで、にはかになむこと広がりける。院にまうけさせたまへりけることどもも、削ぐと思しかど世の常ならざりけるを、まいて今めかしきことどもの加はりたれば、夕べの寺に置き所なげなるまで、所狭き勢ひになりてなむ僧どもは帰りける。

今しも心苦しき御心添ひて、はかりもなくかしづききこえたまふ。院の帝は、この御処分の宮に住み離れたまひなむもつひのことにて、目やすかりぬべく聞こえたまへど、「よそよそにてはおぼつかなかるべし。明け暮れ見たてまつり聞こえ承らむこと怠らむに、本意違ひぬべし。げにあり果てぬ世いくばくあるまじけれど、なほ生ける限りの心ざしをだに失ひ果てじ」と聞こえたまひつつ、この宮をもいとまかにきよらに造らせたまひ、御封の物ども、国々の御莊、御牧などより奉る物ども、はかばかしきさまのは皆かの三条の宮の御倉に納めさせたまふ。またも建て添へさせたまひて、さまさまの御宝物ども、院の御処分に数もなく賜はりたまへるなど、あなたがまの物は皆かの宮に運び渡し、こまかにいかめしうし置かせたまふ。明け暮れの御かしづき、そこらの女房のこども、上下の育みは、おしなべてわが御扱ひにてなど、急ぎ仕うまつらせたまひける。

秋ごろ、西の渡殿の前、中の堀の東の際を、おしなべて野に作らせたまへり。關伽の棚などしてその方にしなさせたまへる御しつらひなど、いとなまめきたり。御弟子に従ひきこえたる尼ども、御乳母、古人どもはさるものにて、若き盛りのも、心定まり、さる方にて世を尽くしつべき限りは選りてなむなさせたまひける。さるきほひには、我も我もときしろひけれど、おとどの君聞こしめ

たして煙たきまで扇ぎ散らせば、さし寄りたまひて、「空に焚くはいづくの煙ぞと思ひ分かれぬこそよけれ。富士の嶺よりもけにくゆり満ち出でたるは本意なきわざなり。講説の折は、おほかたの鳴りを静めて、のどかにものの心も聞き分くべきことなれば、憚りなき衣の音なひ、人のけはひ静めてなむよかるべき」など、例のもの深からぬ若人どもの用意教へたまふ。宮は人氣に圧されたまひて、いと小さくをかしげにてひれ臥したまへり。「若君、らうがはしからむ、抱き隠したてまつれ」などのたまふ。

北の御障子も取り放ちて御簾かけたり。そなたに人びとは入れたまふ。静めて、宮にも、ものの心知りたまふべき下形を聞こえ知らせたまふ。いとあはれに見ゆ。御座を譲りたまへる仏の御しつらひ見やりたまふも、さまざまに、「かかる方の御いとなみをも、もろともに急がむものとは思ひ寄らざりしことなり。よし、後の世にだにかの花の中の宿りに隔てなくを思ほせ」とて、うち泣きたまひぬ。

蓮葉を同じ台と契りおきて露の分かるる今日ぞ悲しき

と、御硯にさし濡らして、香染めなる御扇に書きつけたまへり。宮、

隔てなく蓮の宿を契りても君が心や住まじとすらむ

と書きたまへれば、「いふかひなくも思ほし朽たすかな」とうち笑ひながら、なほあはれとものを思ほしたる御けしきなり。

例の、親王たちなどもいとあまた参りたまへり。御方々より、我も我もと営み出でたまへる捧物のありさま、心ことに所狭きまで見ゆ。七僧の法服など、すべておほかたのことどもは皆紫の上せさせたまへり。綾のよそひにて、袈裟の縫目まで、見知る人は世になべてならずとめでけりとや。むつかしうこまかなることどもかな。講師のいと尊くことの心を申して、この世にすぐれたまへる盛りを厭ひ離れたまひて、長き世々に絶ゆまじき御契りを法華経に結びたま

夏ごろ、蓮の花の盛りに、入道の姫宮の御持仏どもあらはしたまへる、供養
ぜさせたまふ。このたびはおとどの君の御心ざしにて、御念誦堂の具どもこま
かに調べさせたまへるを、やがてしつらはせたまふ。幡のさまなどなつかしう、
心ことなる唐の錦を選び縫はせたまへり。紫の上ぞ急ぎせさせたまひける。花
机の覆ひなどのをかしき目染もなつかしう、きよらなる匂ひ、染めつけられた
る心ばへ、目馴れぬさまなり。夜の御帳の帷を四面ながら上げて、後ろの方に
法華の曼陀羅かけたてまつりて、銀の花瓶に高くこととしき花の色を調べて
たてまつり、名香に唐の百歩の薰衣香を焚きたまへり。阿弥陀仏、脇士の菩薩、
おのおの白檀して作りたてまつりたる、こまかにうつくしげなり。闕伽の具は、
例のきはやかに小さくて、青き白き、紫の蓮を調べて、荷葉の方を合はせたる
名香、蜜を隠しほほろげて焚き匂はしたる、一つ薫りに匂ひ合ひていとなつか
し。経は六道の衆生のために六部書かせたまひて、みづからの御持経は院ぞ御
手づから書かせたまひける、これをだにこの世の結縁にて、かたみに導き交は
したまふべき心を願文に作らせたまへり。さては阿弥陀経、唐の紙はもろくて、
朝夕の御手慣らしにもいかかとて、紙屋の人を召して、ことに仰せ言賜ひて、
心ことにきよらに漉かせたまへるに、この春のころほひより御心とどめて急ぎ
書かせたまへるかひありて、端を見たまふ人びと、目もかかやき惑ひたまふ。
罽かけたる金の筋よりも墨つきの上にかかやくさまなども、いとなむめづらか
なりける。軸、表紙、箱のさまなど、いへばさらなりかし。これはことに沈の
花足の机に据ゑて、仏の御同じ帳台の上に飾らせたまへり。

堂飾り果てて、講師参う上り、行道の人びと参り集ひたまへば、院もあなた
に出でたまふとて、宮のおはします西の廂にのぞきたまへれば、狭き心地する
飯の御しつらひに、所狭く暑げなるまで、ことごとしく装束きたる女房五六十
人ばかり集ひたり。北の廂の簀子まで、童べなどはさまよふ。火取りどもあま

鈴

虫

の恨みとまるばかりのけしきは、何のついでにかは漏り出でけむ、とみづからもえ思ひ出でずなむ。さて今静にかの夢は思ひ合はせてなむ聞こゆべき。夜語らずとか、女房の伝へに言ふなり」とのたまひて、をさをさ御いらへもなければ、うち出で聞こえてけるをいかに思すにかと、つつましく思しけりとぞ。

りに、心短くはべらむこそなかなか世の常の嫌疑あり顔にはべらめ、とてこそ。想夫恋は心とさし過ぎてこと出でたまはむや憎きことにはべらまし、もののついでにほのかなりしはをりからのよしづきてをかしうなむはべりし。何ごとにも人によりことに従ふわざにこそはべるべかめれ。齢などもやうやういたう若びたまふべきほどにもものしたまはず、またあざれがましう好き好きしきけしきなどにももの馴れなどもしはべらぬに、うちとけたまふにや、おほかたなつかしうめやすき人の御ありさまになむものしたまひける」など聞こえたまふに、いとよきついで作り出でて、すこし近く参り寄りたまひて、かの夢語りを聞こえたまへば、とみにもののたまはで聞こしめして、思し合はすることもあり。

「その笛はここに見るべきゆゑあるものなり。かれは陽成院の御笛なり。それを、故式部卿宮のいみじきものにしたまひけるを、かの衛門督は童よりいと異なる音を吹き出でしに感じて、かの宮の萩の宴せられける日、贈り物に取らせたまへるなり。女の心は深くもたどり知らず、しかものしたるななり」などのたまひて、末の世の伝へ、またいづ方にとかは思ひまがへむ、さやうに思ふなりけむかし、など思して、この君もいといたり深き人なれば、思ひ寄ることあらむかし、と思す。

その御けしきを見るに、いとど憚りて、とみにもうち出で聞こえたまはねど、せめて聞かせたてまつらむの心あれば、今しもことのついでに思ひ出でたるやうに、おぼめかしうもてなして、「今はとせしほどにも、とぶらひにまかりてはべりしに、亡からむ後のこととも言ひ置きはべりし中に、しかしかなむ深くかしこまり申すよしを、返す返すものしはべりしかば、いかなることにかはべりけむ、今にそのゆゑをなむえ思ひたまへ寄りはべらねば、おぼつかなくはべる」と、いとたどたどしげに聞こえたまふに、さればよ、と思せど、何かはそのほどの事あらはしのたまふべきならねば、しばしおぼめかしくて、「しか人

心も添ひて見ればにや、眼居などこれは今すこし強うかどあるさままさりたれど、まじりのとぢめをかしうかをれるけしきなど、いとよくおぼえたまへり。口つきのことさらにはなやかなるさましてうち笑みたるなど、わが目のうちつけなるにやあらむ、おとどはかならず思し寄すらむ、といよいよ御けしきゆかし。宮たちは、思ひなしこそ氣高けれ、世の常のうつくしき稚児どもと見えたまふに、この君は、いとあてなるものから、さま異にをかしげなるを見比べたてまつりつつ、いであはれ、もし疑ふゆゑもまことならば、父大臣のさばかり世にいみじく思ひほれたまで、子と名のり出でくる人だになきこと、形見に見るばかりの名残をだにとどめよかし、と泣き焦がれたまふに、聞かせたてまつらざらむ罪得がましき、など思ふも、いで、いかでさはあるべきことぞ、となほ心得ず思ひ寄る方なし。心ばへさへなつかしうあはれにて、睦れ遊びたまへば、いとらうたくおぼゆ。

対へ渡りたまひぬれば、のどやかに御物語など聞こえておはするほどに、日暮れかかりぬ。よべかの一条の宮に参うでたりしに、おはせしありさまなど聞こえ出でたまへるを、ほほ笑みて聞きおはす。あはれなる昔のことかかりたる節々は、あへしらひなどしたまふに、「かの想夫恋の心ばへは、げにいにしへの例にも引き出でつべかりけるをりながら、女はなほ人の心移るばかりのゆゑよしをも、おぼろけにては漏らすまじうこそありけれと、思ひ知らるることどもこそ多かれ。過ぎにし方の心ざしを忘れず、かく長き用意を人に知られぬとならば、同じうは心きよくて、とかくかかづらひ、ゆかしげなき乱れなからむや、誰がためも心にくくめやすかるべきことならむ、となむ思ふ」とのたまへば、さかし、人の上の御教へばかりは心強げにて、かかる好きはいでや、と見たてまつりたまふ。

「何の乱れかはべらむ。なほ常ならぬ世のあはれをかけそめはべりにしあた

くしくおはするを、こなたにぞまた取り分きておはしまさせたまひける、走り出でたまひて、「大将こそ、宮抱きたてまつりてあなたへ率ておはせ」と、みづからかしこまりて、いとしどけなげにのたまへば、うち笑ひて、「おはしませ。いかでか御簾の前をば渡りはべらむ。いと軽々ならむ」とて、抱きたてまつりてゐたまへれば、「人も見ず。まろ、顔は隠さむ。なほなほ」とて、御袖してさし隠したまへば、いとうつくしうて率てたてまつりたまふ。

こなたにも二の宮の、若君とひとつに混じりて遊びたまふ。うつくしみておはしますなりけり。隅の間のほどに下ろしたてまつりたまふを、二の宮見つけたまひて、「まろも大将に抱かれむ」とのたまふを、三の宮、「あが大将をや」とて、控へたまへり。院も御覧じて、「いと乱りがはしき御ありさまもかな。公の御近き衛りを、私の隨身に領ぜむと争ひたまふよ。三の宮こそいとさがなくおはすれ。常にこのかみに競ひ申したまふ」と、諫めきこえ扱ひたまふ。大将も笑ひて、「二の宮は、こよなくこのかみ心にところさりきこえたまふ御心深くなむおはしますめる。御年のほどよりは恐ろしきまで見えさせたまふ」など聞こえたまふ。うち笑みて、いづれもいとうつくしと思ひきこえさせたまへり。「見苦しく軽々しき公卿の御座なり。あなたにこそ」とて、渡りたまはむとするに、宮たちまつはれて、さらに離れたまはず。宮の若君は宮たちの御列にはあるまじきぞかし、と御心のうちに思せど、なかなかその御心ばへを母宮の御心の鬼にや思ひ寄せたまふらむと、これも心の癖にいとほしう思さるれば、いとらうたきものに思ひかしづききこえたまふ。

大将は、この君をまだえよくも見ぬかなと思して、御簾の隙よりさし出でたまへるに、花の枝の枯れて落ちたるを取りて、見せたてまつりて招きたまへば、走りおはしたり。二藍の直衣の限りを着て、いみじう白う光りうつくしきこと、御子たちよりもこまかにをかしげにて、つぶつぶときよらなり。なま目とまる

大殿油近く取り寄せさせたまで、耳挟みして、そそくりつくろひて、抱きてゐたまへり。いとよく肥えて、つぶつぶとをかしげなる胸を開けて、乳などくくめたまふ。稚児もいとうつくしうおはする君なれば、白くをかしげなるに、御乳はいとかはらかなるを、心をやりて慰めたまふ。男君も寄りおはして、「いかなるぞ」などのたまふ。うちまきし散らしなどして、乱りがはしきに、夢のあはれも紛れぬべし。「悩ましげにこそ見ゆれ。今めかしき御ありさまのほどにあくがれたまうて、夜深き御月愛でに、格子も上げられたれば、例のもののけの入り来たるなめり」など、いと若くをかしき顔してかこちたまへば、うち笑ひて、「あやしのものけのしるべや。まる格子上げずは、道なくて、げにえ入り来ざらまし。あまたの人の親になりたまふままに、思ひいたり深く、ものをこそたまひなりにたれ」とて、うち見やりたまへるまみの、いと恥づかしげなれば、さすがに物ものたまはで、「出で、たまひね。見苦し」とて、明らかなる火影をさすがに恥ぢたまへるさまも憎からず。まことにこの君なづみて泣きむつかり明かしたまひつ。

大将の君も、夢思し出づるに、この笛のわづらはしくもあるかな、人の心とどめて思へりしものの、行くべき方にもあらず、女の御伝へはかひなきをや、いかが思ひつらむ、この世にて数に思ひ入れぬことも、かの今はのとぢめに、一念の恨めしきも、もしはあはれとも思ふにまつはれてこそは長き夜の闇にも惑ふわざななれ、かかれはこそは何ごとにも執はとどめじと思ふ世なれ、など思し続けて、愛宕に誦経せさせたまふ、またかの心寄せの寺にもせさせたまひて、この笛をば、わざと人のさるゆゑ深きものにて引き出でたまへりしを、たちまちに仏の道におもむけむも、尊きこととはいひながら、あへなかるべし、と思ひて、六条の院に参りたまひぬ。

女御の御方におはしますほどなりけり。三の宮、三つばかりにて、中にうつ

たるやうにてもものしたまふなるべし。「妹と我といるさの山の」と、声はいとをかしうて、独りごち歌ひて、「こはなどかく鎖し固めたる。あな埋れや。今宵の月を見ぬ里もありけり」とうめきたまふ。格子上げさせたまひて、御簾巻き上げなどしたまひて、端近く臥したまへり。「かかる夜の月に心やすく夢見る人はあるものか。すこし出でたまへ。あな心憂」など聞こえたまへど、心やましううち思ひて、聞き忍びたまふ。

君たちの、いはけなく寝おびれたるけはひなど、ここかしこにうちして、女房もさし混みて臥したる、人氣にぎははしきに、ありつる所のありさま思ひ合はするに、多く変はりたり。この笛をうち吹きたまひつつ、いかに名残も眺めたまふらむ、御琴どもは調べ変はらず遊びたまふらむかし、御息所も、和琴の上手ぞかし、など思ひやりて臥したまへり。いかなれば故君、ただおほかたの心ばへはやむごとなくもてなしきこえながら、いと深きけしきなかりけむ、とそれにつけてもいといぶかしうおぼゆ。見劣りせむこそいといとほしかるべけれ、おほかたの世につけても、限りなく聞くことは、かならずさぞあるかし、など思ふに、わが御仲の、うちけしきばみたる思ひやりもなく、睦びそめたる年月のほどを数ふるに、あはれにいかう押したちておごりならひたまへるも、ことわりにおぼえたまひけり。

すこし寝入りたまへる夢に、かの衛門督、ただありしさまの桂姿にて、かたはらにゐて、この笛を取りて見る。夢のうちにも亡き人のわづらはしうこの声を尋ねて来たる、と思ふに、

「笛竹に吹き寄る風のことならば末の世長きねに伝へなむ
思ふ方異にはべりき」と言ふを、問はむと思ふほどに、若君の寝おびれて泣きたまふ御声に覚めたまひぬ。

この君いたく泣きたまひて、つだみなどしたまへば、乳母も起き騒ぎ、上も

鳴らして止みたまひぬれば、恨めしきまでおぼゆれど、「好き好きしさをさまざまにひき出でも御覧ぜられぬるかな。秋の夜更かしはべらむも昔の咎めやと憚りてなむまかではべりぬべかめる。またことさらに心してなむさぶらふべきを、この御琴どもの調べ変へず待たせたまはむや。弾き違ふこともはべりぬべき世なれば、うしろめたくこそ」など、まほにはあらねど、うち匂はしおきて出でたまふ。

「今宵の御好きには、人許しきこえつべくなむありける。そこはかとなきいにしへ語りにのみ紛らはさせたまひて、玉の緒にせむ心地もしはべらぬ、残り多くなむ」とて、御贈り物に笛を添へてたてまつりたまふ。「これになむまことに古きことも伝はるべく聞きおきはべりしを、かかる蓬生に埋もるるもあはれに見たまふるを、御前駆に競はむ声なむよそながらもいぶかしうはべる」と聞こえたまへば、「似つかはしからぬ隨身にこそははべるべけれ」とて見たまふに、これもげに世とともに身に添へてもてあそびつつ、「みづからもさらにこれが音の限りはえ吹きとほさず、思はむ人にいかで伝へてしがな」と、をりをり聞こえごちたまひしを思ひ出でたまふに、今すこしあはれ多く添ひて、試みに吹き鳴らす。盤渉調のなからばかり吹きさして、「昔を偲ぶ独りごとは、さても罪許されはべりけり。これはまばゆくなむ」とて、出でたまふに、露しげきむぐらの宿にいにしへの秋に変はらぬ虫の声かなと聞こえ出でたまへり。

横笛の調べはことに変はらぬをむなしくなりし音こそ尽きせね

出でがてにやすらひたまふに、夜もいたく更けにけり。

殿に帰りたまへれば、格子など下ろさせて、皆寝たまひにけり。この宮に心かけきこえたまひて、かくねむごろがり聞こえたまふぞ、など人の聞こえ知らせければ、かやうに夜更かしたまふもなま憎くて、入りたまふをも聞く聞く寝

承りあらはしてしがな」とのたまへば、「琴の緒絶えにし後より、昔の御童遊びの名残をだに思ひ出でたまはずなむなりにてはべめる。院の御前にて、女宮たちのとりどりの御琴ども試みきこえたまひしにも、かやうの方はおぼめかしからずものしたまふとなむ定めきこえたまふめりしを、あらぬさまにほればれしうなりて眺め過ぐしたまふめれば、世の憂きつまに、といふやうになむ見たまふる」と聞こえたまへば、「いとことわりの御思ひなりや。限りだにある」とうち眺めて、琴は押しやりたまへれば、「かれなほさらば、声に伝はることもやと聞きわくばかり鳴らせたまへ。ものむつかしう思うたまへ沈める耳をだに明きらめはべらむ」と聞こえたまふを、「しか伝はる中の緒は異にこそははべらめ。それをこそ承らむとは聞こえつれ」とて、御簾のもと近く押し寄せたまへど、とみにしも受けひきたまふまじきことなれば、しひても聞こえたまはず。

月さし出でて曇りなき空に、羽うち交はす雁がねも列を離れぬ、うらやましく聞きたまふらむかし。風肌寒く、ものあはれなるに誘はれて、箏の琴をいとはのかに掻き鳴らしたまへるも奥深き声なるに、いとど心とまり果てて、なかなかに思ほゆれば、琵琶を取り寄せて、いとなつかしき音に想夫恋を弾きたまふ。「思ひ及び顔なるはかたはらいたけれど、これはこと問はせたまふべくや」とて、切に簾の内をそそのかしきこえたまへど、ましてつつましきさしいらへなれば、宮はただものをのみあはれと思し続けたるに、

ことに出でて言はぬも言ふにまさるとは人に恥ぢたるけしきをぞ見ると聞こえたまふに、ただ末つ方をいささか弾きたまふ。

深き夜のあはればかりは聞きわけのことより顔にえやは弾きける

飽かずをかしきほどに、さるおほどかなるものの音がらに、古き人の心しめて弾き伝へける、同じ調べのものといへど、あはれに心すごきものの片端を掻き

しは思し直さる。みづからの御宿世もなほ飽かぬこと多かり。あまた集へたまへる中にも、この宮こそはかたほなる思ひまじらず、人の御ありさまも思ふに飽かぬところなくともしたまふべきを、かく思はざりしさまにて見たてまつること、と思すにつけてなむ、過ぎにし罪許し難く、なほ口惜しかりける。

大将の君は、かの今はのとぢめにとどめし一言を心ひとつに思ひ出でつつ、いかなりしことぞとはいと聞こえまほしう、御けしきもゆかしきを、ほの心得て思ひ寄らるることもあれば、なかなかうち出でて聞こえむかたはらいたくて、いかならむついでにこの事の詳しきありさまも明きらめ、またかの人の思ひ入りたりしさまをも聞こしめさむ、と思ひわたりたまふ。

秋の夕べのものあはれなるに、一条の宮を思ひやりきこえたまひて、渡りたまへり。うちとけ、しめやかに御琴などもなど弾きたまふほどなるべし。深くもえ取りやらで、やがてその南の廂に入れたてまつりたまへり。端つ方なりける人のゐざり入りつるけはひどもしるく、衣の音なひもおほかたの匂ひ香うばしく、心にくきほどなり。例の、御息所対面したまひて、昔の物語ども聞こえ交はしたまふ。わが御殿の明け暮れ人しげくてももの騒がしく、幼き君たちなどすだきあわてたまふにならひたまひて、いと静かにものあはれなり。うち荒れたる心地すれど、あてに気高く住みなしたまひて、前栽の花ども、虫の音しげき野辺と乱れたる夕映えを見わたしたまふ。

和琴を引き寄せたまへれば、律に調べられて、いとよく弾きならしたる、人香にしみてなつかしうおぼゆ。かやうなるあたりに、思ひのままなる好き心ある人は、静むることなくて、さま悪しきけはひをもあらはし、さるまじき名をも立つるぞかし、など思ひ続けつつ、掻き鳴らしたまふ。故君の常に弾きたまひし琴なりけり。をかしき手一つなどすこし弾きたまひて、「あはれ、いとめづらかなる音に掻き鳴らしたまひしはや。この御琴にも籠もりてはべらむかし。

やかに、柳を削りて作りたらむやうなり。頭は露草してことさらに色どりたるむ心地して、口つきうつくしうにほひ、まみのびらかに、恥づかしう薰りたるなどは、なほいとよく思ひ出でらるれど、かれはいとかやうに際離れたるきよりはなかりしものを、いかでかからむ、宮にも似たてまつらず、今より氣高くものものしうさま異に見えたまへるけしきなどは、わが御鏡の影にも似げなからず見なされたまふ。

わづかに歩みなどしたまふほどなり。この筍のらいしに何とも知らず立ち寄りて、いとあわたたしう取り散らして、食ひかなぐりなどしたまへば、「あらうがはしや。いと不便なり。かれ取り隠せ。食ひ物に目とどめたまふもの言ひさがなき女房もこそ言ひなせ」とて笑ひたまふ。かき抱きたまひて、「この君のまみのいとけしきあるかな。小さきほどの稚児をあまた見ねばにやあらむ、かばかりのほどはただいはけなきものとのみ見しを、今よりいとけは異なるこそわづらはしけれ。女宮ものしたまふめるあたりにかかる人生ひ出でて、心苦しきこと誰がためにもありなむかし。あはれ、そのおのの生ひゆく末までは見果てむとすらむやは。花の盛りはありなめど」とうちまもりきこえたまふ。「うたて、ゆゆしき御ことにも」と人びとは聞こゆ。

御歯の生ひ出づるに、食ひ当てむとて、筍をつと握り待ちて、雫もよよと食ひ濡らしたまへば、「いとねぢけたる色好みかな」とて、

憂き節も忘れずながら呉竹のこは捨て難きものにぞありける

と率て放ちて、のたまひかくれど、うち笑ひて何とも思ひたらず。いとそかかしう這ひ下り騒ぎたまふ。

月日に添へて、この君のうつくしうゆゆしきまで生ひまさりたまふに、まことに、この憂き節皆思し忘れぬべし。この人の出でものしたまふべき契りにてさる思ひの外の事もあるにこそはありけめ、逃れ難かなるわざぞかし、とすこ

世を別れ入りなむ道はおくるとも同じところを君も尋ねよ

いと難きわざになむある。

と聞こえたまへるを、涙ぐみて見たまふほどに、おとどの君渡りたまへり。例ならず御前近きらしいどもを、なぞ、あやし、と御覧するに、院の御文なりけり。見たまへば、いとあはれなり。今日か明日かの心地するを、対面の心になはぬこと、などこまやかに書かせたまへり。この同じところの御ともなひを、ことにをかしき節もなき聖言葉なれど、げにさぞ思すらむかし、我さへおろかなるさまに見えたてまつりて、いとどうしろめたき御思ひの添ふべかめるを、いといとほし、と思す。

御返りつつましげに書きたまひて、御使には青鈍の綾一襲賜ふ。書き変へたまへりける紙の、御几帳の側よりほの見ゆるを、取りて見たまへば、御手はいとはかなげにて、

憂き世にはあらぬところのゆかしくて背く山路に思ひこそ入れ

「うしろめたげなる御けしきなるに、このあらぬ所求めたまへる、いとうたて心憂し」と聞こえたまふ。

今はまほにも見えたてまつりたまはず、いとうつくしうらうたげなる御額髪、面つきのをかしさ、ただ稚児のやうに見えたまひて、いみじうらうたきを見たてまつりたまふにつけては、なかうはなりにしことぞ、と罪得ぬべく思さるれば、御几帳ばかり隔てて、またいところなう気遠く疎々しうはあらぬほどにもてなしきこえてぞおはしける。

若君は、乳母のもとに寝たまへりける、起きて這ひ出でたまひて、御袖を引きまつはれたてまつりたまふさま、いとうつくし。白き羅に、唐の小紋の紅梅の御衣の裾、いと長くしどけなげに引きやられて、御身はいとあらはにて、うしろの限りに着なしたまへるさまは例のことなれど、いとらうたげに白くそび

故権大納言のはかなく亡せたまひにし悲しさを、飽かず口惜しきものに恋ひしのびたまふ人多かり。六条の院にも、おほかたにつけてだに、世にめやすき人の亡くなるをば惜しみたまふ御心に、ましてこれは朝夕に親しく参り馴れつつ、人よりも御心とどめ思したりしかば、いかにぞやと思し出づることはありながら、あはれは多く、折々につけてしのびたまふ。御果てにも、誦経など取り分させたまふ。よろづも知らず顔に、いはけなき御ありさまを見たまふにも、さすがにいみじくあはれなれば、御心のうちにまた心ざしたまうて、黄金百両をなむ別にせさせたまひける。大臣は心も知らでぞかしこまり喜びこえさせたまふ。

大将の君もことども多くしたまふ。とりもちてねむごろに営みたまふ。か的一条の宮をも、このほどの御心ざし深く訪らひきこえたまふ。はらからの君たちよりもまさりたる御心のほどを、いとかくは思ひきこえざりきと、大臣、上も、喜びきこえたまふ。亡き後にも世のおぼえ重くものしたまひけるほどの見ゆるに、いみじうあたらしうのみ思し焦がるること尽きせず。

山の帝は、二の宮もかく人笑はれなるやうにて眺めたまふなり、入道の宮もこの世の人めかしきかたはかけ離れたまひぬれば、さまざまに飽かず思さるれど、すべてこの世を思し悩まじと忍びたまふ。御行なひのほどにも、同じ道をこそは勤めたまふらめ、など思しやりて、かかるさまになりたまて後ははかなきことにつけても絶えず聞こえたまふ。

御寺のかたはら近き林に抜き出でたる筍、そのわたりの山に掘れるところなどの、山里につけてはあはれなれば、たてまつれたまふとて、御文こまやかなる端に、

春の野山、霞もたどとしけれど、心ざし深く堀り出でさせてはべるしるしばかりになむ。

横

笛

はるざりなど。

「思ほし嘆くは世のことわりなれど、またいとさのみはいかが。よろづのことさるべきにこそはべめれ。さすがに限りある世になむ」と、慰めきこえたまふ。この宮こそ聞きしよりは心の奥見えたまへ、あはれ、げにいかにも人笑はれなることを取り添へて思すらむ、と思ふもただならねば、いたう心とどめて、御ありさまも問ひきこえたまひけり、かたちぞいとまほにはえものしたまふまじけれど、いと見苦しうかたはらいたきほどにだにあらずは、などて見る目により人をも思ひ飽き、またさるまじきに心をも惑はすべきぞ、さま悪しや、ただ心ばせのみこそ言ひもてゆかむにはやむごとかなかるべけれ、と思ほす。

「今はなほ昔に思ほしなずらへて、疎からずもてなさせたまへ」など、わざと懸想びてはあらねど、ねむごろにけしきばみて聞こえたまふ。直衣姿いとあざやかにて、丈だちものものしうそぞろかにぞ見えたまひける。「かのおとどは、よろづのことなつかしうなまめき、あてに愛敬づきたまへることの並びなきなり。これはををしうはなやかに、あなきよら、とふと見えたまふにほひぞ人に似ぬや」とうちささめきて、「同じうは、かやうにても出で入りたまはましかば」など人びと言ふめり。

「右將軍が墓に草初めて青し」とうち口ずさびて、それもと近き世のことなれば、さまざまに近う遠う、心乱るやうなりし世の中に、高きも下れるも、惜しみあたらしがらぬはなきも、むべむべしき方をばさるものにて、あやしう情けを立てたる人にぞものしたまひければ、さしもあるまじき公人、女房などの年古めきたるどもさへ、恋ひ悲しびきこゆる。まして上には、御遊びなどの折ごとにも、まづ思し出でてなむしのばせたまひける。「あはれ、衛門督」といふ言種、何ごとにつけても言はぬ人なし。六条院には、ましてあはれと思し出づること、月日に添へて多かり。この若君を、御心一つには形見と見なしたまへど、人の思ひ寄らぬことなれば、いとかひなし。秋つ方になれば、この君

宿はよろづのことにつけて静かに心細う、暮らしかねたまふに、例の渡りたまへり。庭もやうやう青み出づる若草見えわたり、ここかしこの砂子薄きものの隠れの方に蓬も所得顔なり。前栽に心入れてつくろひたまひしも、心にまかせて茂りあひ、一むら薄も頼もしげに広がりて、虫の音添へむ秋思ひやらるるより、いともあはれに露けくて分け入りたまふ。伊予簾かけ渡して、鈍色の几帳の衣更へしたる透影涼しげに見えて、よき童のこまやかに鈍ばめる汗衫のつま、頭つきなどほの見えたる、をかしけれど、なほ目おどろかるる色なりかし。今日は簀子にゐたまへば、茵さし出でたり。いと軽らかなる御座なりとて、例の御息所おどろかしきこゆれど、このごろ悩ましとて寄り臥したまへり。とかく聞こえ紛らはすほど、御前の木立ども、思ふことなげなるけしきを見たまふもいともあはれなり。柏木と楓との、ものよりけに若やかなる色して枝さし交はしたるを、「いかなる契りにか、末逢へる頼もしさよ」などのたまひて、忍びやかにさし寄りて、

「ことならば馴らしの枝にならさなむ葉守の神の許しありきと

御簾の外の隔であるほどこそ恨めしけれ」とて、長押に寄りゐたまへり。「なよび姿はた、いといったうたをやぎけるをや」と、これかれつきしろふ。この御あへしらひきこゆる少将の君といふ人して、

「柏木に葉守の神はまさずとも人ならすべき宿の梢か

うちつけなる御言の葉になむ浅う思ひたまへなりぬる」と聞こゆれば、げに、と思すにすこしほほ笑みたまひぬ。

御息所ゐざり出でたまふけはひすれば、やをらる直りたまひぬ。「憂き世の中を思ひたまへ沈む月日の積もるけぢめにや、乱り心地もあやしう、ほればれしうて過ぐしはべるを、かくたびたび重ねさせたまふ御訪らひのいとかたじけなきに、思ひたまへ起こしてなむ」とて、げに悩ましげなる御けはひなり。

見ゆるまで、軒の雫に異ならず濡らし添へたまふ。畳紙にかの「柳の芽にぞ」とありつるを書いたまへるを、たてまつりたまへば、「目も見えずや」とおし
絞り、うちひそみつつぞ見たまふ御さま、例は心強うあざやかに誇りかなる御
けしき名残なく、人悪ろし。さるは、異なることなかめれど、この「玉はぬく」
とある節の、げにと思さるるに心乱れて、久しうえたためらひたまはず。「君の
御母君の隠れたまへりし秋なむ、世に悲しきことの際にはおぼえはべりしを、
女は限りありて、見る人少なう、とあることもかかることもあらはならねば、
悲しびも隠ろへてなむありける。はかばかしからねど、おほやけも捨てたまは
ず、やうやう人となり、官位につけてあひ頼む人びと、おのづから次々に多う
なりなどして、おどろき口惜しがるも類に触れてあるべし。かう深き思ひは、
その大方の世のおぼえも、官位も思ほえず。ただことなることなかりしみづか
らのありさまのみこそ堪へがたく恋しかりけれ。何ばかりのことにてか思ひさ
ますべからむ」と、空を仰ぎて眺めたまふ。

夕暮の雲のけしき、鈍色に霞みて、花の散りたる梢どもをも、今日ぞ目とど
めたまふ。この御畳紙に、

木の下の雫に濡れてさかさまに霞の衣着たる春かな

大将の君、

亡き人も思はざりけむうち捨てて夕べの霞君着たれとは

弁の君、

恨めしや霞の衣誰れ着よと春よりさきに花の散りけむ

御わぎなど、世の常ならずいかめしうなむありける。大将殿の北の方をばさる
ものにて、殿は心ことに、誦経などもあはれに深き心ばへを加へたまふ。

かの一条の宮にも、常に訪らひきこえたまふ。卯月ばかりの卯の花はそこは
かとなう心地よげに、一つ色なる四方の梢もをかしう見えわたるを、もの思ふ

方のおぼえ薄らぐものなりとなむ、常にはかばかしからぬ心に諫めきこえしかば、心浅しと思ひたまへりし。よろづよりも人にまさりて、げにかの思し嘆くらむ御心の内の、かたじけなけれど、いと心苦しうもはべるかな」など、なつかしうこまやかに聞こえたまひて、ややほど経てぞ出でたまふ。

かの君は、五六年のほどのこのかみなりしかど、なほいと若やかになまめき、あいだれてものしたまひし、これは、いとすぐよかに重々しくををしきけはひして、顔のみぞいと若うきよらなること、人にすぐれたまへる、若き人びとはもの悲しさもすこし紛れて見出だしたてまつる。御前近き桜のいとおもしろきを、今年ばかりはとうちおぼゆるも、いまいましき筋なりければ、「あひ見むことは」と口ずさびて、

時しあれば変はらぬ色に匂ひけり片枝枯れにし宿の桜も
わぎとならず誦じなして立ちたまふに、いととう、

この春は柳の芽にぞ玉はぬく咲き散る花の行方知らねば

と聞こえたまふ。いと深きよしにはあらねど、今めかしうかどありとは言はれたまひし更衣なりけり、げにめやすきほどの用意なめり、と見たまふ。

致仕の大殿にやがて参りたまへれば、君たちあまたものしたまひけり。「こなたに入らせたまへ」とあれば、大臣の御出居の方に入りたまへり。ためらひて対面したまへり。古りがたうきよげなる御かたち、いたう痩せ衰へて、御髭などもとりつくろひたまはねば、しげりて、親の孝よりもけにやつれたまへり。見たてまつりたまふより、いと忍びがたければ、あまりにをさまらず乱れ落つる涙こそはしたなけれ、と思へば、せめてぞもて隠したまふ。大臣も、取り分きて御仲よくものしたまひしを、と見たまふに、ただ降りに降り落ちてえとどめたまはず、尽きせぬ御事どもを聞こえ交はしたまふ。

一条の宮に参でたりつるありさまなど聞こえたまふ。いとどしう、春雨かと

て心強うさましはべるを、さらに思し入りたるさまの、いとゆゆしきまで、しばしも立ち後れたまふまじきやうに見えはべれば、すべていと心憂かりける身の、今までながらへはべりて、かくかたがたにはかなき世の末のありさまを見たまへ過ぐすべきにやと、いと静心なくなむ。おのづから近き御仲らひにて、聞き及ばせたまふやうもはべりけむ。初めつ方より、をさをさうけひききこえざりし御ことを、大臣の御心むけも心苦しう、院にもよろしきやうに思し許いたる御けしきなどのほしかば、さらばみづからの心おきての及ばぬなりけりと思ひたまへなしてなむ見たてまつりつるを、かく夢のやうなることを見たまふるに、思ひたまへ合はすれば、みづからの心のほどなむ、同じうは強うもあらがひきこえましを、と思ひはべるに、なほいと悔しう。それはかやうにしも思ひ寄りにはべらざりきかし。御子たちはおぼろけのことならで悪しくも善くもかやうに世づきたまふことはえ心にくからぬことなり、と古めき心には思ひはべしを、いつかたにもよらず、中空に憂き御宿世なりければ、何かは、かかるついでに煙にも紛れたまひなむは、この御身のための人聞きなどはことに口惜しかるまじけれど、さりとて、しかすくよかにえ思ひ静むまじう、悲しう見たてまつりはべるに、いとうれしう浅からぬ御訪らひのたびたびになりはべめるを、有り難うもと聞こえはべるも、さらばかの御契りありけるにこそはと、思ふやうにしも見えざりし御心ばへなれど、今はとてこれかれにつけおきたまひける御遺言のあはれなるになむ、憂きにもうれしき瀬はまじりはべりけるとて、いといったう泣いたまふけはひなり。

大將も、とみにえたためらひたまはず。「あやしう、いとこよなくおよすけたまへりし人の、かかるべうてや、この二三年のこなたなむいたうしめりて、もの心細げに見えたまひしかば、あまり世のことわりを思ひ知り、もの深うなりぬる人の、澄み過ぎて、かかる例心うつくしからず、かへりてはあざやかなる

てあはれは尽きぬものになむありける。もて使ひたまひし御調度ども、常に弾きたまひし琵琶、和琴などの緒も取り放ちやつされて、音を立てぬも、いと埋れいたきわざなりや。

御前の木立いたう煙りて、花は時を忘れぬけしきなるを、眺めつつもの悲しく、さぶらふ人びとも鈍色にやつれつつ、寂しうつれづれなる昼つ方、さきはなやかに追ふ音して、ここに止まりぬる人あり。「あはれ、故殿の御けはひとこそうち忘れては思ひつれ」とて泣くもあり。大将殿のおはしたるなりけり。御消息聞こえ入れたまへり。例の弁の君、宰相などのおはしたると思しつるを、いと恥づかしげにきよなるもてなしにて入りたまへり。

母屋の廂に御座よそひて入れたてまつる。おしなべたるやうに人びとのあへしらひきこえむはかたじけなきさまのしたまへれば、御息所ぞ対面したまへる。「いみじきことを思ひたまへ嘆く心は、さるべき人びとも越えてはべれど、限りあれば、聞こえさせやる方なうて、世の常になりはべりにけり。今はのほども、のたまひ置くことはべりしかば、おろかならずなむ。誰ものどめがたき世なれど、後れ先立つほどのけぢめには思ひたまへ及ばむに従ひて、深き心のほども御覧ぜられにしがなとなむ。神わざなどのしげころほひ、私の心ざしにまかせて、つくづくと籠もりるはべらむも例ならぬことなりければ、立ちながらはた、なかなか飽かず思ひたまへらるべうてなむ、日ごろを過ぐしはべりにける。大臣などの心を乱りたまふさま、見聞きはべるにつけても、親子の道の闇をばさるものにて、かかる御仲らひの深く思ひとどめたまひけむほどを推し量りきこえさするに、いと尽きせずなむ」とて、しばしばおし拭ひ鼻うちかみたまふ。あぎやかに気高きものから、なつかしうなまめいたり。

御息所も鼻声になりたまひて、「あはれなることは、その常なき世のさがにこそは。いみじとても、またたぐひなきことにやはと、年積もりぬる人はしひ

もしひて悲しとおぼえたまひけり。女宮のかく世を背きたまへるありさま、おどろおどろしき御悩みにあらで、すがやかに思し立ちけるほどよ、また、さりともし許しきこえたまふべきことかは、二条の上の、さばかり限りにて、泣く泣く申したまふと聞きしをば、いみじきことに思して、つひにかくかけとどめたてまつりたまへるものを、など取り集めて思ひくだくに、なほ昔より絶えず見ゆる心ばへ、え忍ばぬ折々ありきかし、いとようもて静めたるうはべは、人よりけに用意あり、のどかに、何ごとをこの人の心のうちに思ふらむと、見る人も苦しきまでありしかど、すこし弱きところつきて、なよび過ぎたりしけぞかし、いみじうとも、さるまじきことに心を乱りて、かくしも身に代ふべきことにやはありける、人のためにもいとほしう、わが身はいたづらにやなすべき、さるべき昔の契りといひながら、いと軽々しうあぢきなきことなりかし、など心一つに思へど、女君にだに聞こえ出でたまはず、さるべきついでなくて、院にもまだえ申したまはざりけり。さるは、かかることをなむかすめし、と申し出でて、御けしきも見まほしかりけり。

父大臣、母北の方は、涙のいとまなく思し沈みて、はかなく過ぐる日数をも知りたまはず、御わぎの法服、御装束、何くれのいそぎをも、君たち、御方々、とりどりになむせさせたまひける。経、仏のおきてなども、右大弁の君せさせたまふ。七日七日の御誦経などを、人の聞こえおどろかすにも、「我にな聞かせそ。かくいみじと思ひ惑ふに、なかなか道妨げにもこそ」とて、亡きやうに思し惚れたり。

一条の宮には、ましておぼつかうて別れたまひにし恨みさへ添ひて、日ごろ経るままに、広き宮の内、人気少なう心細げにて、親しく使ひ慣らしたまひし人はなほ参り訪らひきこゆ。好みたまひし鷹、馬など、その方の預りどもも皆、つくところなう思ひ倦じて、かすかに出で入るを見たまふも、ことに触れ

ほろほろとこぼれぬるを、今日は言忌みすべきを、とおし拭ひ隠したまひて、「静かに思ひて嗟くに堪へたり」とうち誦うじたまふ。五十八を十取り捨てたる御齡なれど、末になりたる心地したまひて、いともあはれに思さる。「汝が爺に」とも諫めまほしう思しけむかし。

このことの心知れる人、女房の中にもあらむかし、知らぬこそねたけれ、おこなりと見るらむ、と安からず思せど、わが御咎あることはあへなむ、二つ言はむには、女の御ためこそいとほしけれ、など思して、色にも出だしたまはず。いと何心なう物語して笑ひたまへるまみ、口つきのうつくしきも、心知らざらむ人はいかがあらむ、なほいとよく似通ひたりけり、と見たまふに、親たちの子だにあれかしと泣いたまふらむにもえ見せず、人知れずはかなき形見ばかりをとどめ置きて、さばかり思ひ上がりおよすけたりし身を心もて失ひつるよ、とあはれに惜しければ、めざましと思ふ心もひき返し、うち泣かれたまひぬ。人びとすべり隠れたるほどに、宮の御もとに寄りたまひて、「この人をばいかが見たまふや。かかる人を捨てて背き果てたまひぬべき世にやありける。あな心憂」とおどろかしきこえたまへば、顔うち赤めておはす。

「誰が世にか種は蒔きしと人間はばいかが岩根の松は答へむ

あはれなり」など、忍びて聞こえたまふに、御いらへもなうてひれふしたまへり。ことわりと思せば、しひても聞こえたまはず。いかに思すらむ、もの深うなどはおはせねど、いかでかはただには、と推し量りきこえたまふもいと心苦しうなむ。

大将の君は、かの心に余りてほのめかし出でたりしを、いかなることにかありけむ、すこしものおぼえたるさまならましかば、さばかりうち出でそめたりしに、いとうけしきは見てましを、いふかひなきとぢめにて、折悪しういぶせて、あはれにもありしかな、と面影忘れがたうて、はらからの君たちより

ざたりければ、後ろは異にけぢめも見えたまはぬほどなり。すぎすぎ見ゆる鈍色ども、黄がちなる今様色など着たまひて、まだありつかぬ御かたはらめ、かくてしもうつくしき子どもの心地して、なまめかしうをかしげなり。「いで、あな心憂。墨染こそなほいとたて目もくるる色なりけれ。かやうにても見たてまつることは絶ゆまじきぞかし、と思ひ慰めはべれど、古りがたうわりなき心地する涙の人悪ろさを、いとかう思ひ捨てられたてまつる身の咎に思ひなすも、さまざまに胸いたう口惜しくなむ。取り返すものにもがなや」とうち嘆きたまひて、「今はとて思し離れば、まことに御心と厭ひ捨てたまひけると、恥づかしう心憂くなむおぼゆべき。なほあはれと思せ」と聞こえたまへば、「かかるさまの人はもののあはれも知らぬものと聞きしを、ましてもとよりかからぬことにて、いかがは聞こゆべからむ」とのたまへば、「かひなのことや。思し知る方もあらむものを」とばかりのたまひさして、若君を見たてまつりたまふ。

御乳母たちは、やむごとなくめやすき限りあまたさぶらふ。召し出でて、仕うまつるべき心おきてなどのたまふ。「あはれ、残り少なき世に生ひ出づべき人にこそ」とて抱き取りたまへば、いと心やすくうち笑みて、つぶつぶと肥えて白ううつくし。大将などの稚児生ひ、ほのかに思し出づるには似たまはず。女御の御宮たちはた、父帝の御方さまに、王氣づきて気高うこそおはしませ、ことにすぐれてめでたうしもおはせず。この君、いとあてなるに添へて、愛敬づき、まみの薫りて笑がちなるなどを、いとあはれと見たまふ。思ひなしにや、なほいとようおぼえたりかし。ただ今から、まなこゐののどかに、恥づかしきさまもやう離れて、薫りをかしき顔ざまなり。宮はさしも思し分かず。人はたさらに知らぬことなれば、ただ一所の御心の内のみぞあはれに、はかなかりける人の契りかな、と見たまふに、大方の世の定めなさも思し続けられて、涙の

まふに、いみじうて思し入りたるさま、いと心苦し。御息所も、いみじう人笑へに口惜し、と見たてまつり嘆きたまふこと限りなし。大臣、北の方などはましていはむかたなく、「我こそ先立ため、世のことわりなうつらいこと」と焦がれたまへど、何のかひなし。

尼宮は、おほけなき心もうたてのみ思されて、世に長かれとしも思さざりしを、かくなむと聞きたまふは、さすがにいとあはれなりかし。若君の御ことを、さぞと思ひたりしも、げにかかるべき契りにてや思ひのほか心憂きこともありけむ、と思し寄るに、さまざまの心細うてうち泣かれたまひぬ。

弥生になれば、空のけしきもものうらかにて、この君五十日のほどになりたまひて、いと白うつくしう、ほどよりはおよすけて物語などしたまふ。おとど渡りたまひて、「御心地、さはやかになりたまひにたりや。いでや、いかひなくもはべるかな。例の御ありさまにてかく見なしたてまつらましかば、いかにうれしうはべらまし。心憂く思し捨てけること」と涙ぐみて怨みきこえたまふ。日々に渡りたまひて、今しもやむごとなく限りなきさまにもてなしきこえたまふ。

御五十日に餅参らせたまはむとて、かたち異なる御さまを、人びと、いかなど聞こえやすらへど、院渡らせたまひて、「何か。女にものしたまはばこそ同じ筋にていまいましくもあらめ」とて、南面に小さき御座などよそひて参らせたまふ。御乳母、いとはなやかに装束きて、御前のもの、いろいろを尽くしたる籠物、桧破籠の心ばへどもを、内にも外にも、もとの心を知らぬことなれば、取り散らし、何心もなきを、いと心苦しうまばゆきわざなりやと思す。

宮も起きゐたまひて、御髪の末の所狭う広がりたるを、いと苦しと思して、額など撫でつけておはするに、几帳を引きやりてゐたまへば、いと恥づかしうて背きたまへるを、いとど小さう細りたまひて、御髪は惜しみきこえて長う削

心の内に思ひ合はすることどもあれど、さして確かにはえしも推し量らず。

「いかなる御心の鬼にかは。さらにさやうなる御けしきもなく、かく重りたまへる由をも、聞きおどろき嘆きたまふこと、限りなうこそ口惜しがり申したまふめりしか。などかく思ふことあるにては今まで残いたまひつらむ。こなたかなた明らめ申すべかりけるものを。今はいふかひなしや」とて、取り返さまほしう悲しく思さる。「げにいささかも隙ありつる折、聞こえうけたまはるべうこそはべりけれ。されど、いとかう今日明日としもやはと、みづからながら知らぬ命のほどを思ひのどめはべりけるも、はかなくなむ。このことはさらに御心より漏らしたまふまじ。さるべきついではべらむ折には御用意加へたまへとて聞こえおくになむ。一条にものしたまふ宮、ことに触れて訪らひきこえたまへ。心苦しきさまにて院などにも聞こし召されたまはむを、つくろひたまへ」などのたまふ。言はまほしきことは多かるべけれど、心地せむかたなくなりければ、「出でさせたまひぬ」と手かききこえたまふ。加持参る僧ども近う参り、上、大臣などおはし集りて、人びとも立ち騒げば、泣く泣く出でたまひぬ。女御をばさらにも聞こえず、この大将の御方などいみじう嘆きたまふ。心おきての、あまねく人のこのかみ心にもおしたまひければ、右の大殿の北の方も、この君をのみぞ睦ましきものに思ひきこえたまひければ、よろづに思ひ嘆きたまひて、御祈りなど取り分きてせさせたまひけれど、やむ薬ならねば、かひなきわぎになむありける。女宮にもつひにえ対面しきこえたまはで、泡の消え入るやうにて亡せたまひぬ。

年ごろ、下の心こそねむごろに深くもなかりしか、大方にはいとあらまほしくもてなしかしづききこえて、気なつかしう、心ばへをかしう、うちとけぬさまにて過ぐいたまひければ、つらき節もことになし。ただかく短かりける御身にて、あやしくなべての世すさまじう思ひたまへけるなりけり、と思ひ出でた

もあるかな。この御心地のさまを、何事にて重りたまふとだにえ聞き分きはべらず。かく親しきほどながら、おぼつかなくのみ」などのたまふに、「心には重くなるけぢめもおぼえはべらず、そこどころと苦しきこともなければ、たちまちにかうも思ひたまへざりしほどに、月日も経で弱りはべりにければ、今はうつし心も失せたるやうになむ。惜しげなき身をさまざまにひき留めらるる祈り、願などの力にや、さすがにかかづらふも、なかなか苦しうはべれば、心もてなむ急ぎ立つ心地しはべる。さるは、この世の別れ、避りがたきことはいと多うなむ。親にも仕うまつりさして、今さらに御心どもを悩まし、君に仕うまつることも半ばのほどにて、身を顧みる方はた、ましてはかばかりからぬ恨みを留めつる、大方の嘆きをばさるものにて。また心の内に思ひたまへ乱るることのはべるを、かかる今はのきぎみにて、何かは漏らすべきと思ひはべれど、なほ忍びがたきことを誰にかは愁へはべらむ。これかれあまたものすれど、さまざまなることにて、さらにかすめはべらむもあいなしかし。六条院にいさかなる事の違ひ目ありて、月ごろ心の内にかしこまり申すことなむはべりしを、いと本意なう、世の中心細う思ひなりて、病づきぬとおぼえはべしに、召しありて、院の御賀の楽所の試みの日参りて、御けしきを賜はりしに、なほ許されぬ御心ばへあるさまに御目尻を見たてまつりはべりて、いとど世にながらへむことも憚り多うおぼえなりはべりて、あぢきなう思ひたまへしに、心の騒ぎそめて、かく静まらずなりぬるになむ。人数には思し入れざりけめど、いはけなうはべし時より、深く頼み申す心のはべりしを、いかなる讒言などのありけるにかと、これなむこの世の愁へにて残りはべるべければ、論なうかの後の世の妨げにもやと思ひたまふるを、ことのついでではべらば、御耳留めて、よろしう明らめ申させたまへ。亡からむ後ろにも、この勘事許されたらむなむ御徳にはべるべき」などのたまふままに、いと苦しげにのみ見えまされば、いみじうて、

いよいよ悲しうあたらしと思し惑ふ。

大将の君、常にいと深う思ひ嘆き訪らひきこえたまふ。御喜びにも、まづ参うでたまへり。このおはする対のほとり、こなたの御門は、馬、車たち込み、人騒がしう騒ぎ満ちたり。今年となりては、起き上がることもをさをさしたまはねば、重々しき御さまに、乱れながらはえ対面したまはで、思ひつつ弱りぬること、と思ふに口惜しければ、「なほこなたに入らせたまへ。いとらうがはしきさまにはべる罪は、おのづから思し許されなむ」とて、臥したまへる枕上の方に、僧などしばし出だしたまひて、入れたてまつりたまふ。

早うより、いささか隔てたまふことなう睦び交はしたまふ御仲なれば、別れむことの悲しう恋しかるべき嘆き、親はらからの御思ひにも劣らず。今日は喜びとて心地よげならましを、と思ふに、いと口惜しうかひなし。「などかく頼もしげなくはなりたまひにける。今日はかかる御喜びに、いささかすくよかもやとこそ思ひはべりつれ」とて、几帳のつま引き上げたまへれば、「いと口惜しう、その人にもあらずなりにてはべりや」とて、烏帽子ばかりおし入れて、すこし起き上がらむとしたまへど、いと苦しげなり。白き衣どもの、なつかしうなよよかなるをあまた重ねて、衾ひきかけて臥したまへり。御座のあたりものきよげに、けはひ香うばしう、心にくくぞ住みなしたまへる、うちとけながら用意ありと見ゆ。重く患ひたる人は、おのづから髪髭も乱れ、ものむつかしきけはひも添ふわぎなるを、痩せさらばひたるしも、いよいよ白うあてなるさまして、枕をそばだててもものなど聞こえたまふけはひ、いと弱げに息も絶えつつあはれげなり。

「久しう患ひたまへるほどよりは、ことにいたうもそこなはれたまはざりけり。常の御かたちよりも、なかなかまさりてなむ見えたまふ」とのたまふものから、涙おし拭ひて、「後れ先立つ隔てなくとこそ契りきこえしか。いみじう

かの衛門督は、かかる御事を聞きたまふに、いとど消え入るやうにしたまひて、むげに頼む方少なうなりたまひにたり。女宮のあはれにおぼえたまへば、ここに渡りたまはむことは、今さらに軽々しきやうにもあらむを、上も大臣も、かくつと添ひおはすれば、おのづからとりはづして見たてまつりたまふやうもあらむにあぢきなしと思して、「かの宮に、とかくして今一たび参うでむ」とのたまふを、さらに許しきこえたまはず。

誰にもこの宮の御ことを聞こえつけたまふ。はじめより、母御息所はをさをさ心ゆきたまはざりしを、この大臣の居立ちねむごろに聞こえたまひて、心ざし深かりしに負けたまひて、院にもいかがはせむと思し許しけるを、二品の宮の御こと思ほし乱れけるついでに、「なかなかこの宮は、行く先うしろやすく、まめやかなる後見まうけたまへり」とのたまはすと聞きたまひしを、かたじけなう思ひ出づ。「かくて見捨てたてまつりぬるなめりと思ふにつけては、さまざまにいとほしけれど、心よりほかなる命なれば、堪へぬ契り恨めしうて、思し嘆かれむが心苦しきこと。御心ざしありて訪らひものせさせたまへ」と母上にも聞こえたまふ。「いで、あなゆゆし。後れたてまつりては、いくばく世に経べき身とて、かうまで行く先のことをばのたまふ」とて、泣きにのみ泣きたまへば、え聞こえやりたまはず。右大弁の君にぞ大方の事どもは詳しう聞こえたまふ。心ばへののどかによくおはしつる君なれば、弟の君たちも、また、末々の若きは、親とのみ頼みきこえたまへるに、かう心細うのたまふを、悲しと思はぬ人なく、殿のうちの人も嘆く。

公も惜しみ口惜しがらせたまふ。かく限りと聞こし召して、にはかに権大納言になさせたまへり。よろこびに思ひ起こして今一たびも参りたまふやうもある、と思しのたまはせけれど、さらにえたためらひやりたまはで、苦しきなかにもかしこまり申したまふ。大臣も、かく重き御おぼえを見たまふにつけても、

なう、人よりもすぐれて見たてまつらむと思ししを、この世には甲斐なきやうにないたてまつるも、飽かず悲しければ、うちしほたれたまふ。「かくても、平かにて、同じうは念誦をも勤めたまへ」と聞こえ置きたまひて、明け果てぬるに、急ぎて出でさせたまひぬ。

宮はなほ弱う消え入るやうにしたまひて、はかばかしうもえ見たてまつらず、ものなども聞こえたまはず。おとども、「夢のやうに思ひたまへ乱るる心惑ひに、かう昔おぼえたる御幸のかしこまりをもえ御覧ぜられぬらうがはしきは、ことさらに参りはべりてなむ」と聞こえたまふ。御送りに人びと参らせたまふ。「世の中の今日か明日かにおぼえはべりしほどに、また知る人もなくて漂はむことの、あはれに避りがたうおぼえはべしかば、御本意にはあらざりけめど、かく聞こえつけて、年ごろは心やすく思ひたまへつるを、もしも生きとまりはべらば、さま異に變りて人しげき住まひはつきなかるべきを、さるべき山里などにかけ離れたらむありさまも、またさすがに心細かるべくや。さまに従ひて、なほ思し放つまじく」など聞こえたまへば、「さらに、かくまで仰せらるるなむ、かへりて恥づかしう思ひたまへらるる。乱り心地とかく乱れはべりて、何事もえわきまへはべらず」とて、げにいと堪へがたげに思したり。

後夜の御加持に、御もののけ出で来て、「かうぞあるよ。いとかしこう取り返しつと一人をば思したりしが、いとねたかりしかば、このわたりにさりげなくてなむ日ごろさぶらひつる。今は帰りなむ」とて、うち笑ふ。いとあさましう、さはこのもののけのここにも離れざりけるにやあらむ、と思すに、いとほしう悔しう思さる。宮、すこし生き出でたまふやうなれど、なほ頼みがたげに見えたまふ。さぶらふ人びとも、いといふかひなうおぼゆれど、かうても平かにだにおはしまさば、と念じつつ、御修法また延べてたゆみなく行なはせなど、よろづにせさせたまふ。

御心の内、限りなうしろやすく譲りおきし御ことを、受けとりたまひて、さしも心ざし深からず、わが思ふやうにはあらぬ御けしきを、ことに触れつつ年ごろ聞こし召し、思しつめけること、色に出でて恨みきこえたまふべきにもあらねば、世の人の思ひ言ふらむところも口惜しう思しわたるに、かかる折にもて離れなむも、何かは人笑へに世を恨みたるけしきならで、さもあらざらむ、おほかたの後見には、なほ頼まれぬべき御おきてなるを、ただ預けおきたてまつりししるしには思ひなし、憎げに背くさまにはあらずとも、御処分に広くおもしろき宮賜はりたまへるを、繕ひて住ませたてまつらむ、わがおはします世に、さる方にてもうしろめたからず聞きおき、またかのおとども、さいふともいとおろかにはよも思ひ放ちたまはじ、その心ばへをも見果てむ、と思ほし取りて、「さらば、かくものしたるついでに、忌むこと受けたまはむをだに結縁にせむかし」とのたまはず。

おとどの君、憂しと思す方も忘れて、こはいかなるべきことぞと悲しく口惜しければ、え堪へたまはず、内に入りて、「などか、いくばくもはべるまじき身をふり捨てて、かうは思しなりにける。なほしばし心を静めたまひて、御湯参り、物などをも聞こし召せ。尊きことなりとも、御身弱うては行なひもしたまひてむや。かつはつくろひたまひてこそ」と聞こえたまへど、頭ふりて、いとつらうのたまふと思したり。つれなくて、恨めしと思すこともありけるにや、と見たてまつりたまふに、いとほしうあはれなり。

とかく聞こえ返さひ思しやすらふほどに、夜明け方になりぬ。帰り入らむに、道も昼ははしたなかるべしと急がせたまひて、御祈りにさぶらふ中に、やむごとなう尊き限り召し入れて、御髪下ろさせたまふ。いと盛りにきよらなる御髪を削ぎ捨てて、忌むこと受けたまふ作法、悲しう口惜しければ、おとどはえ忍びあへたまはず、いみじう泣いたまふ。院はた、もとより取り分きてやむごと

怠して、もし後れ先立つ道の道理のままならで別れなば、やがてこの恨みもやかたみに残らむとあぢきなさに、この世のそしりをば知らで、かくものしはべる」と聞こえたまふ。御かたち異にても、なまめかしうなつかしきさまにうち忍びやつれたまひて、うるはしき御法服ならず、墨染の御姿あらまほしうきよらなるも、うらやましく見たてまつりたまふ。例のまづ涙落としたまふ。「患ひたまふ御さま、ことなる悩みにもはべらず、ただ月ごろ弱りたまへる御ありさまに、はかばかしう物なども参らぬ積もりにや、かくものしたまふにこそ」など聞こえたまふ。

「かたはらいたき御座なれども」とて、御帳の前に御茵参りて入れたてまつりたまふ。宮をも、とかう人びと繕ひきこえて、床のしもに下ろしたてまつる。御几帳すこし押しやらせたまひて、「夜居の加持の僧などの心地すれど、まだ験つくばかりの行なひにもあらねば、かたはらいたけれど、ただおぼつかなくおぼえたまふらむさまを、さながら見たまふべきなり」とて、御目おし拭はせたまふ。宮もいと弱げに泣いたまひて、「生くべうもおぼえはべらぬを、かくおはしまいたるついでに尼になさせたまひてよ」と聞こえたまふ。「さる御本意あらば、いと尊きことなるを、さすがに限らぬ命のほどにて、行く末遠き人は、かへりてことの乱れあり、世の人に誹らるるやうありぬべき」などのたまはせて、おとどの君に、「かくなむ進みのたまふを、今は限りのさまならば、片時のほどにてもその助けあるべきさまにてとなむ思ひたまふる」とのたまへば、「日ごろもかくなむのたまへど、邪気などの、人の心たぶろかして、かかる方にて進むるやうもはべなるを、とて聞きも入れはべらぬなり」と聞こえたまふ。「もののけの教へにても、それに負けぬとて、悪しかるべきことならば、こそ憚らめ、弱りにたる人の限りとてもものしたまはむことを聞き過ぎむは、後の悔い心苦しうや」とのたまふ。

さてながらへぬわざならばこそあらめ」と聞こえたまふ。御心のうちには、まことにさも思し寄りてのたまはば、さやうにて見たてまつらむはあはれなりなむかし、かつ見つつも、ことに触れて心置かれたまはむが心苦しう、我ながらもえ思ひ直すまじう、憂きことうち混じりぬべきを、おのづからおろかに人の見咎むることもあらむがいといとほしう、院などの聞こし召さむことも、わがおこたりにのみこそはならめ、御悩みにことづけてさもやなしたてまつりてまし、など思し寄れど、また、いとあたらしうあはれに、かばかり遠き御髪の生ひ先をしかやつさむことも心苦しければ、「なほ強く思しなれ。けしうはおはせじ。限りと見ゆる人もたひらなる例近ければ、さすがに頼みある世になむ」など聞こえたまひて、御湯参りたまふに、いといったう青み痩せて、あさましうはかなげにてうち臥したまへる御さま、おほどきうつくしげなれば、いみじき過ちありとも、心弱く許しつべき御さまかな、と見たてまつりたまふ。

山の帝は、めづらしき御こと平かなりと聞こし召して、あはれにゆかしう思ほすに、かく悩みたまふよしのみあれば、いかにものしたまふべきにか、と御行なひも乱れて思しけり。

さばかり弱りたまへる人の、ものを聞こし召さで日ごろ経たまへば、いと頼もしげなくなりたまひて、「年ごろ見たてまつらざりしほどよりも、院のいと恋しくおぼえたまふを、またも見たてまつらざりぬるにや」と、いたう泣いたまふ。かく聞こえたまふさま、さるべき人して伝へ奏せさせたまひければ、いと堪へがたう悲しと思して、あるまじきこととは思し召しながら、夜に隠れて出でさせたまへり。

かねてさる御消息もなく、にはかにかく渡りおはしまいたれば、あるじの院、おどろきかしこまりきこえたまふ。「世の中を顧みすまじう思ひはべりしかど、なほ惑ひ覚めがたきものは子の道の闇になむはべりければ、行なひも懈

たまへり。宮司、大夫よりはじめて、院の殿上人皆参れり。七日夜は、内より、それも公ざまなり。致仕の大臣など心に仕うまつりたまふべきに、このころは何ごとも思されで、おほぞうの御訪らひのみぞありける。宮たち、上達部などあまた参りたまふ。おほかたのけしきも世になきまでかしづきこえたまへど、おとどの、御心のうちに心苦しと思すことありて、いたうもてはやしきこえたまはず、御遊びなどはなかりけり。

宮は、さばかりひはづなる御さまにて、いとむくつけう、ならはぬことの恐ろしう思されけるに、御湯などもきこしめさず、身の心憂きことをかかるにつけても思し入れば、さはれ、このついでにも死なばや、と思す。おとどはいとよう人目を飾り思せど、まだむつかしげにおはするなどを、取り分けても見たてまつりたまはずなどあれば、老いしらへる人などは、「いでや、おろそかにもおはしますかな。めづらしうさし出でたまへる御ありさまの、かばかりゆゆしきまでにおはしますを」と、うつくしみきこゆれば、片耳に聞きたまひて、さのみこそは思し隔つることもまさらめ、と恨めしう、わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心尽きぬ。

夜なども、こなたには大殿籠もらず、昼つ方などぞさしのぞきたまふ。「世の中のはかなきを見るままに、行く末短うもの心細くて、行なひがちになりてはべれば、かかるほどのらうがはしき心地するにより、え参り来ぬを、いかが。御心地はさはやかに思しなりになりや。心苦しうこそ」とて、御几帳の側よりさしのぞきたまへり。御ぐしもたげたまひて、「なほえ生きたるまじき心地なむしはべるを、かかる人は罪も重かなり、尼になりて、もしそれにや生きたまると試み、また亡くなるとも罪を失ふこともやとなむ思ひはべる」と、常の御けはひよりはいいとおとなびて聞こえたまふを、「いとうたて、ゆゆしき御ことなり。などてかさまでは思す。かかることはさのみこそ恐ろしかなれど、

少なitem、と思ふがあはれなるに、えも出でやらず。

御ありさまを乳母も語りて、いみじく泣き惑ふ。大臣などの思したるけしきぞいみじきや。「昨日今日すこしよろしかりつるを、などかいと弱げには見えたまふ」と騒ぎたまふ。「何か。なほとまりはべるまじきなめり」と聞こえたまひて、みづからも泣いたまふ。

宮はこの暮れつ方より悩ましうしたまひけるを、その御けしきと見たてまつり知りたる人びと騒ぎみちて、おとどにも聞こえたりければ、驚きて渡りたまへり。御心のうちは、あな口惜しや、思ひまする方なくて見たてまつらましかば、めづらしくうれしからまし、と思せど、人にはけしき漏らさじと思せば、驗者など召し、御修法はいつとなく不断にせらるれば、僧どもの中に驗ある限り皆参りて、加持参り騒ぐ。夜一夜悩み明かさせたまひて、日さし上がるほどに生まれたまひぬ。男君と聞きたまふに、かく忍びたることの、あやにくにいちじるき顔つきにてさし出でたまへらむこそ苦しかるべけれ、女こそ何となく紛れ、あまたの人の見るものならねばやすけれ、と思すに、また、かく心苦しき疑ひ混じりたるにては、心やすき方にものしたまふもいとよしかし、さてもあやしや、わが世とともに恐ろしと思ひしことの報いなめり、この世にてかく思ひかけぬことにむかはりぬれば、後の世の罪もすこし軽みなむや、と思す。人はた知らぬことなれば、かく心ことなる御腹にて末に出でおはしたる御おばえいみじかりなむと、思ひいとなみ仕うまつる。

御産屋の儀式、いかめしうおどろおどろし。御方々、さまざまにし出でたまふ御産養、世の常の折敷、衝重、高坏などの心ばへも、ことさらに心々に挑ましき見えつつなむ。五日の夜、中宮の御方より、子持ちの御前の物、女房の中にも品々に思ひ当てたる際々、公事にいかめしうせさせたまへり。御粥で、屯食五十具、所々の饗、院の下部、庁の召次所、何かの隈までいかめしくせさせ

げにあくがるらむ魂や行き通ふらむ、などいとどしき心地も乱るれば、「今さら、この御ことよ、かけても聞こえじ。この世はかうはかなくて過ぎぬるを、長き世のほだしにもこそと思ふなむいとほしき。心苦しき御ことを、平らかにとだにいかで聞き置いたてまつらむ。見し夢を心一つに思ひ合はせて、また語る人もなきが、いみじういぶせくもあるかな」など、取り集め思ひしみたまへるさまの深きを、かつはいとうたて恐ろしう思へど、あはれはた、え忍ばず、この人もいみじう泣く。

紙燭召して御返り見たまへば、御手もなほいとはかなげに、をかしきほどに書いたまひて、

心苦しう聞きながら、いかでかは。ただ推し量り。「残らむ」とあるは、

立ち添ひて消えやしなまし憂きことを思ひ乱るる煙比べに

後るべうやは。

とばかりあるを、あはれにかたじけなしと思ふ。「いでや、この煙ばかりこそはこの世の思ひ出ならめ。はかなくもありけるかな」と、いとど泣きまさりたまひて、御返り、臥しながら、うち休みつつ書いたまふ。言の葉の続きもなう、あやしき鳥の跡のやうにて、

行方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ちは離れじ

夕べはわきて眺めさせたまへ。咎めきこえさせたまはむ人目をも今は心やすく思しなりて、かひなきあはれをだにも絶えずかけさせたまへ。

など書き乱りて、心地の苦しきまさりければ、「よし。いたう更けぬさきに、帰り参りたまひて、かく限りのさまになむ、とも聞こえたまへ。今さらに人あやしと思ひ合はせむを、わが世の後さへ思ふこそ口惜しけれ。いかなる昔の契りにて、いとかかることしも心にしみけむ」と、泣く泣くるざり入りたまひぬれば、例は無期に迎へ据ゑて、すずろ言をさへ言はせまほしうしたまふを、言

占ひ申しければ、さることもやと思せど、さらにもののけの現はれ出で来るもなきに思ほしわづらひて、かかる隈々をも尋ねたまふなりけり。この聖も、丈高やかにまぶしつべたましくて、荒らかにおどろおどろしく陀羅尼読むを、「いで、あな憎や。罪の深き身にやあらむ、陀羅尼の声高きはいと気恐ろしくて、いよいよ死ぬべくこそおぼゆれ」とて、やをらすべり出でてこの侍従と語らひたまふ。

大臣はさも知りたまはず、うち休みたると人びとして申させたまへば、き思して、忍びやかにこの聖と物語したまふ。おとなびたまへれど、なほはなやぎたるところつきて、もの笑ひしたまふ大臣の、かかる者どもと向ひみて、この患ひそめたまひしありさま、何ともなくうちたゆみつつ重りたまへること、「まことにこのもののけ現はるべう念じたまへ」など、こまやかに語らひたまふも、いとあはれなり。

「あれ聞きたまへ。何の罪とも思し寄らぬに、占ひよりけむ女の靈こそ。まことにさる御執の身に添ひたるならば、厭はしき身をひきかへ、やむごとくこそなりぬべけれ。さてもおほけなき心ありて、さるまじき過ちを引き出でて、人の御名をも立て、身をも顧みぬたぐひ、昔の世にもなくやはありける、と思ひ直すに、なほけはひわづらはしう、かの御心にかかる咎を知られたてまつりて、世にながらへむこともいとまばゆくおぼゆるは、げに異なる御光なるべし。深き過ちもなきに、見合はせたてまつりし夕べのほどより、やがてかき乱り惑ひそめにし魂の、身にも返らずなりにしを、かの院のうちにあくがれありかば、結びとどめたまへよ」など、いと弱げに、殻のやうなるさまして、泣きみ笑ひみ語らひたまふ。

宮もものをのみ恥づかしうつつましと思したるさまを語る。さてうちしめり、面瘦せたまへらむ御さまの、面影に見たてまつる心地して思ひやられたまへば、

むを、いかなりぬるとだに御耳とどめさせたまはぬも、ことわりなれど、いと憂くもはべるかな。

など聞こゆるに、いみじうわななけば、思ふことも皆書きさして、

今はとて燃えむ煙もむすばほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ

あはれとだにのたまはせよ。心のどめて、人やりならぬ闇に惑はむ道の光
にもしはべらむ。

と聞こえたまふ。

侍従にも、こりずまに、あはれなることどもを言ひおこせたまへり。「みづからも、今一たび言ふべきことなむ」とのたまへれば、この人も、童よりさるたよりに参り通ひつつ、見たてまつり馴れたる人なれば、おほけなき心こそうたておぼえたまひつれ、今はと聞くはいと悲しうて、泣く泣く、「なほこの御返り。まことにこれをとぢめにもこそはべれ」と聞こゆれば、「われも、今日か明日かの心地しても心細ければ、おほかたのあはればかりは思ひ知らるれど、いと心憂きことと思ひ懲りにしかば、いみじうなむつつましき」とて、さらに書いたまはず。御心本性の、強くづしやかなるにはあらねど、恥づかしげなる人の御けしきの折々にまはならぬが、いと恐ろしうわびしきなるべし。されど、御靨などまかなひて責めきこゆれば、しぶしぶに書いたまふを、取りて忍びて宵の紛れにかしこに参りぬ。

大臣、かしこき行なひ人、葛城山より請じ出でたる、待ち受けたまひて、加持参らせむとしたまふ。御修法、読経などいとおどろおどろしう騒ぎたり。人の申すままに、さまさま聖だつ験者などの、をさをさ世にも聞こえず深き山に籠もりたるなどをも、弟の君たちを遣はしつつ尋ね召すに、けにくく心づきなき山伏などもいと多く参る。患ひたまふさまの、そこはかとなくものを心細く思ひて、音をのみ時々泣きたまふ。陰陽師なども、多くは女の霊とのみ

衛門の督の君、かくのみ悩みわたりたまふことなほおこたらで、年も返りぬ。大臣、北の方思し嘆くさまを見たてまつるに、しひてかけ離れなむ命かひなく、罪重かるべきことを思ふ心は心として、また、あながちにこの世に離れがたく、惜しみ留めまほしき身かは、いはけなかりしほどより、思ふ心異にて、何ごとをも人に今一際まさらむと、公私のことに触れて、なのめならず思ひ上りしかど、その心叶ひがたかりけりと、一つ二つの節ごとに身を思ひ落としてしこなた、なべての世の中すさまじう思ひなりて、後の世の行なひに本意深く進みにしを、親たちの御恨みを思ひて、野山にもあくがれむ道の重きほだしなるべくおぼえしかば、とぎまかうぎまに紛らはしつつ過ぐしつるを、つひになほ世に立ちまふべくもおぼえぬもの思ひの一方ならず身に添ひにたるは、我より他に誰かはつらき、心づからもてそなひつるにこそあめれと思ふに、恨むべき人もなし、神仏をもかこたむ方なきは、これ皆さるべきにこそはあらめ、誰も千年の松ならぬ世は、つひに止まるべきにもあらぬを、かく人にもすこしうちしのばれぬべきほどにて、なげのあはれをもかけたまふ人あらむをこそは一つ思ひに燃えぬるしにはせめ、せめてながらへば、おのづからあるまじき名をも立ち、我も人もやすからぬ乱れ出で来るやうもあらむよりは、なめしと心置いたまふらむあたりにも、さりともし許いてむかし、よろづのこと、今はのとぢめには皆消えぬべきわざなり、また異ざまの過ちしなければ、年ごろものの折ふしごとには、まつはしならひたまひにし方のあはれも出で来なむ、などつれづれに思ひ続くるも、うち返しいとあぢきなし。

などかくほどもなくしなしつる身ならむ、とかきくらし思ひ乱れて、枕も浮きぬばかり人やりならず流し添へつつ、いささか隙ありとて人びと立ち去りたまへるほどに、かしこに御文たてまつれたまふ。

今は限りになりにてはべるありさまはおのづから聞こしめすやうもはべら

柏

木

たまへ。かくいとおぼつかなきこと」と恨みきこえたまふも、またいことわりなり。「人より先なりけるけぢめにや、取り分きて思ひならひたるを、今になほかなしくしたまひて、しばしも見えぬをば苦しきものにしたまへば、心地のかく限りにおぼゆる折しも、見えたてまつらざらむ、罪深くいぶせかるべし。今はと頼みなく聞かせたまはば、いと忍びて渡りたまひて御覧ぜよ。かならずまた対面賜はらむ。あやしくたゆくおろかなる本性にて、ことに触れておろかに思さることありつらむこそ、悔しくはべれ。かかる命のほどを知らで、行く末長くのみ思ひはべりけること」と、泣く泣く渡りたまひぬ。宮はとまりたまひて、言ふ方なく思しこがれたり。

大殿に待ち受けこえたまひて、よろづに騒ぎたまふ。さるは、たちまちにおどろおどろしき御心地のさまにもあらず、月ごろ物などをさらに参らざりけるに、いとどはかなき柑子などをだに触れたまはず、ただやうやうものに引き入るるやうに見えたまふ。さる時の有職のかくものしたまへば、世の中惜しみあたらしがりて、御訪らひに参りたまはぬ人なし。内よりも院よりも、御訪らひしばしば聞こえつつ、いみじく惜しみ思し召したるにも、いとどしき親たちの御心のみ惑ふ。六条院にも、いと口惜しきわざなりと思しおどろきて、御訪らひにたびたび、ねむごろに父大臣にも聞こえたまふ。大将は、ましていとよき御仲なれば、気近くものしたまひつつ、いみじく嘆きありきたまふ。

御賀は、二十五日になりにつけり。かかる時のやむごとなき上達部の重く患ひたまふに、親はらから、あまたの人びと、さる高き御仲らひの嘆きしをれたまへるころほひにて、ものすさまじきやうなれど、次々に滞りつることだにあるを、さて止むまじきことなれば、いかでかは思し止まらむ。女宮の御心のうちをぞ、いとほしく思ひきこえさせたまふ。例の五十寺の御誦経、またかのおはします御寺にも、摩訶毘盧遮那の。

心地かき乱りて堪へがたければ、まだことも果てぬにまかでたまひぬるままに、いといたく惑ひて、例のいとおどろおどろしき酔ひにもあらぬを、いかなればかかるならむ、つつましものを思ひつるに、氣ののぼりぬるにや、いとさいふばかり臆すべき心弱さとはおぼえぬを、言ふかひなくもありけるかな、とみづから思ひ知らる。しばしの酔ひの惑ひにもあらざりけり。やがていといたくわづらひたまふ。大臣、母北の方思し騒ぎて、よそよそにていとおぼつかなしとて、殿に渡したてまつりたまふを、女宮の思したるさま、またいと心苦し。

ことなくて過ぐす月日は、心のどかにあいな頼みして、いとしもあらぬ御心ざしなれど、今はと別れたてまつるべき門出にやと思ふは、あはれに悲しく、後れて思し嘆かむことのかたじけなきを、いみじと思ふ。母御息所も、いといみじく嘆きたまひて、「世のこととして、親をばなほさるものにおきたてまつりて、かかる御仲らひは、とある折もかかる折も、離れたまはぬこそ例のことなれ、かく引き別れて、たひらかにものしたまふまでも過ぐしたまはむが、心尽くしなるべきことを。しばしここにたかくて試みたまへ」と、御かたはらに御几帳ばかりを隔てて見たてまつりたまふ。「ことわりや。数ならぬ身にて、及びがたき御仲らひに、なまじひに許されたてまつりてさぶらふしるしには、長く世にはべりて、かひなき身のほども、すこし人と等しくなるけぢめをもや御覧ぜらるる、とこそ思ふたまへつれ、いといみじく、かくさへなりはべれば、深き心ざしをだに御覧じ果てられずやなりはべりなむと思うたまふるになむ、とまりがたき心地にも、え行きやるまじく思ひたまへらるる」など、かたみに泣きたまひて、とみにもえ渡りたまはねば、また母北の方うしろめたく思して、「などか、まづ見えむとは思ひたまふまじき。われは、心地もすこし例ならず心細き時は、あまたの中にまづ取り分きて、ゆかしくも頼もしくもこそおぼえ

だいささか散るに、春のとなり近く、梅のけしき見るかひありてほほ笑みたり。廂の御簾の内におはしませば、式部卿の宮、右の大臣ばかりさぶらひたまひて、それより下の上達部は簀子に、わざとならぬ日のことにて、御あるじなど気近きほどに仕うまつりなしたり。右の大殿の四郎君、大将殿の三郎君、兵部卿の宮の孫王の君たち二人は、万歳樂、まだいと小さきほどにて、いとらうたげなり。四人ながら、いづれとなく高き家の子にて、かたちをかしげにかしづき出でたる、思ひなしもやむごとなし。また、大将の典侍腹の二郎君、式部卿の宮の兵衛督といひし、今は源中納言の御子、皇じやう、右のおほい殿の三郎君、陵王、大将殿の太郎、落蹲、さては太平樂、喜春樂などいふ舞どもをなむ、同じ御仲らひの君たち、大人たちなど舞ひける。

暮れゆけば、御簾上げさせたまひて、物の興まさるに、いとうつくしき御孫の君たちのかたち、姿にて、舞のさまも世に見えぬ手を尽くして、御師どももおのおの手の限りを教へきこえけるに、深きかどかどしさを加へて、珍らかに舞ひたまふを、いづれをもいとらうたしと思す。老いたまへる上達部たちは、皆涙落としたまふ。式部卿の宮も御孫を思して、御鼻の色づくまでしほたれたまふ。

あるじの院、「過ぐる齡に添へては、酔ひ泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門督心とどめてほほ笑まるる、いと心恥づかしや。さりとも今しばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老いはえ逃れぬわざなり」とて、うち見やりたまふに、人よりけにまめだち屈じて、まことに心地もいと悩ましければ、いみじきことも目もとまらぬ心地する人をしも、さしわきて空酔ひをしつつかくのたまふ、戯れのやうなれど、いとど胸つぶれて、盃のめぐり来るも頭いたくおぼゆれば、けしきばかりにて紛らはすを御覧じ咎めて、持たせながらたびたび強ひたまへば、はしたなくてもてわづらふさま、なべての人に似ずをかし。

心御覽ぜられよ」と催し申さるることはべしかば、重き病を相助けてなむ、参りてはべし。今はいよいよいかすかなるさまに思し澄まして、いかめしき御よそひを待ちうけたてまつりたまはむこと、願はしくも思すまじく見たてまつりはべしを、事どもをば削がせたまひて、静かなる御物語の深き御願ひ叶はせたまはむなむ、まさりてはべるべき」と申したまへば、いかめしく聞きし御賀の事を、女二の宮の御方さまには言ひなさぬも、労ありと思す。

「ただかくなむ。こと削ぎたるさまに世人は浅く見るべきを、さはいへど心得てものせらるるに、さればよとなむ、いとど思ひなればべる。大将は、公方はやうやう大人ぶめれど、かうやうに情けびたる方は、もとよりしまぬにやあらむ。かの院、何事も心及びたまはぬことは、をさをさなきうちにも、樂の方のことは御心とどめて、いとかしく知り調べたまへるを、さこそ思し捨てたるやうなれ、静かに聞こしめし澄まさむこと、今しもなむ心づかひせらるべき。かの大将ともろともに見入れて、舞の童べの用意心ばへよく加へたまへ。物の師などいふものは、ただわが立てたることこそあれ、いと口惜しきものなり」など、いとなつかしくのたまひつくるを、うれしきものから苦しくつつましくて、言少なにて、この御前をとく立ちなむと思へば、例のやうにこまやかにもあらで、やうやうすべり出でぬ。

東のおとどにて、大将のつくろひ出だしたまふ樂人、舞人の装束のことなど、またまた行なひ加へたまふ。あるべき限りいみじく尽くしたまへるに、いとど詳しき心しらひ添ふも、げにこの道はいと深き人にぞものしたまふめる。

今日のはかかる試みの日なれど、御方々物見たまはむに、見所なくはあらせじとて、かの御賀の日は、赤き白椽に、葡萄染の下襲を着るべし、今日は青色に蘇芳襲、樂人三十人、今日は白襲を着たる、辰巳の方の釣殿に続きたる廊を樂所にて、山の南の側より御前に出づるほど、仙遊霞といふもの遊びて、雪のた

かしたまふに、かく重ねてのたまへれば、苦しと思ふ思ふ参りぬ。

まだ上達部なども集ひたまはぬほどなりけり。例の気近き御簾の内に入れたまひて、母屋の御簾下ろしておはします。げにいたく痩せ痩せに青みて、例も誇りかにはなやぎたる方は、弟の君たちにはもて消たれて、いと用意あり顔にしづめたるさまぞことなるを、いとどしづめてさぶらひたまふさま、なかは御子たちの御かたはらにさし並べたらむに、さらに咎あるまじきを、ただことのさまの、誰も誰もいと思ひやりなきこそ、いと罪許しがたけれ、など御目とまれど、さりげなく、いとなつかしく、「そのこととなくて、対面もいと久しくなりにけり。月ごろはいろいろの病者を見あつかひ、心の暇なきほどに、院の御賀のため、ここにものしたまふ御子の法事仕うまつりたまふべくありしを、次々とどこほることしげくて、かく年もせめつれば、え思ひのごとくしあへで、型のごとくなむ斎の御鉢参るべきを、御賀などいへば、こととしきやうなれど、家に生ひ出づる童べの数多くなりけるを、御覧ぜさせむとて、舞など習はしはじめし、そのことをだに果たさむとて、拍子調べむこと、また誰れにかはと思ひめぐらしかねてなむ、月ごろ訪ふらひものしたまはぬ恨みも捨ててける」とのたまふ御けしきの、うらなきやうなるものから、いといと恥づかしきに、顔の色違ふらむとおぼえて、御いらへもとみに聞こえず。

「月ごろ、かたがたに思し悩む御こと承り嘆きはべりながら、春のころほひより、例も患ひはべる乱り脚病といふもの、所狭く起こり患ひはべりて、はかばかしく踏み立つることもはべらず、月ごろに添へて沈みはべりてなむ、内なごにも参らず、世の中跡絶えたるやうにて籠もりはべる。院の御齡足りたまふ年なり、人よりさだかに数へたてまつり仕うまつるべきよし、致仕の大臣思ひ及び申されしを、「冠を掛け、車を惜しまず捨ててし身にて、進み仕うまつらむにつくところなし。げに下臈なりとも、同じごと深きところはべらむ、その

見たてまつりたまふ。

衛門督をば、何ざまのことにも、ゆゑあるべきをりふしには、かならずことさらにまつはしたまひつつ、のたまはせ合はせしを、絶えてさる御消息もなし。人あやしと思ふらむと思せど、見むにつけても、いとどほればれしきかた恥づかしく、見むにはまたわが心もただならずや、と思し返されつつ、やがて月ごろ参りたまはぬをも咎めなし。おほかたの人は、なほ例ならず悩みわたりて、院にはた御遊びなどなき年なれば、とのみ思ひわたるを、大将の君ぞ、あるやうあることなるべし、すき者はさだめて、わがけしきとりしことには忍ばぬにやありけむ、と思ひ寄れど、いとかく定かに残りなきさまならむとは、思ひ寄りたまはざりけり。

十二月になりけり。十余日と定めて、舞ども馴らし、殿のうちゆすりてのしる。二条の院の上は、まだ渡りたまはざりけるを、この試楽によりてぞ、えしづめ果てで渡りたまへる。女御の君も里におはします。このたびの御子は、また男にてなむおはしましける。すぎすぎいとをかしげにておはするを、明け暮れもて遊びたてまつりたまふになむ、過ぐる齡のしるし、うれしく思されける。試楽に、右大臣殿の北の方も渡りたまへり。大将の君、丑寅の町にて、まづうちうちに調楽のやうに、明け暮れ遊び馴らしたまひければ、かの御方は、御前の物は見たまはず。

衛門督を、かかることの折も交じらはせざらむは、いと栄なくさうざうしかるべきうちに、人あやしと傾きぬべきことなれば、参りたまふべきよしありけるを、重くわづらふよし申して参らず。さるは、そこはかと苦しげなる病にもあらざるを、思ふ心のあるにや、と心苦しう思して、取り分きて御消息つかはす。父大臣も、「などか返さひ申されける。ひがひがしきやうに、院にも聞こし召さむを、おどろおどろしき病にもあらず、助けて参りたまへ」とそその

れしかりしを、ひき続き争ひきこゆるやうにて、同じさまに見捨てたてまつらむことの、あへなく思されむにつつみてなむ。心苦しと思ひし人びとも、今はかけとどめらるるほだしばかりなるもはべらず。女御も、かくて、行く末は知りがたけれど、御子たち数添ひたまふめれば、みづからの世だにのどけくは、と見おきつべし。その他は、誰れも誰れも、あらむに従ひて、もろともに身を捨てむも惜しかるまじき齢どもになりたるを、やうやうすすしく思ひはべる。院の御世の残り久しくもおはせじ。いと篤しくいとどなりまさりたまひて、もの心細げにのみ思したるに、今さらに思はずなる御名の漏り聞こえて、御心乱りたまふな。この世はいとやすし。ことにもあらず。後の世の御道の妨げならむも、罪いと恐ろしからむ」など、まほにそのこととは明かしたまはねど、つくづくと聞こえ続けたまふに、涙のみ落ちつつ、我にもあらず思ひしみておはすれば、我もうち泣きたまひて、「人の上にて、もどかしく聞き思ひし古人のさかしらよ、身に代はることにこそ。いかにうたての翁やと、むつかしくうるさき御心添ふらむ」と恥ぢたまひつつ、御硯引き寄せたまひて、手づから押しすり、紙取りまかなひ、書かせたてまつりたまへど、御手もわななきて、え書きたまはず。かのこまかなりし返事は、いとかくしもつつまず、通はしたまふらむかしと思しやるに、いと憎ければ、よろづのあはれも冷めぬべけれど、言葉など教へて書かせたてまつりたまふ。

参りたまはむことは、この月かくて過ぎぬ。二の宮の御勢ひ殊にて参りたまひけるを、古めかしき御身ぎまにて、立ち並び顔ならむも憚りある心地しけり。「霜月はみづからの忌月なり。年の終り、はたいともの騒がし。また、いとどこの御姿も見苦しく、待ち見たまはむをと思ひはべれど、さりとてさのみ延ぶべきことにやは。むつかしくもの思し乱れず、あきらかにもてなしたまひて、このいたく面瘦せたまへる、つくろひたまへ」など、いとらうたしとさすがに

の過ぐるなむあはれなりける。悩みたまふなるさまは、詳しく聞きしち、念誦のついでにも思ひやらるるは、いかが。世の中寂しく思はずなることありとも、忍び過ぐしたまへ。恨めしげなるけしきなど、おぼろけにて、見知り顔にほのめかす、いと品おくれたるわざになむ。など、教へきこえたまへり。

いといとほしく心苦しく、かかるうちうちのあさましきをば聞こし召すべきにはあらで、わがおこたりに本意なくのみ聞き思すらむことを、とばかり思し続けて、「この御返りをば、いかが聞こえたまふ。心苦しき御消息に、まろこそいと苦しけれ。思はずに思ひきこゆることありとも、おろかに人の見咎むばかりはあらじとこそ思ひはべれ。誰が聞こえたるにかあらむ」とのたまふに、恥ぢらひて背きたまへる御姿も、いとらうたげなり。いたく面痩せて、もの思ひ屈したまへる、いとどあてにをかし。

「いと幼き御心ばへを見おきたまひて、いたくはうしろめたがりきこえたまふなりけりと、思ひあはせたてまつれば、今より後もよろづになむ。かうまでもいかで聞こえじと思へど、上の、御心に背くと聞こし召すらむことの、やすからずいぶせきを、ここにだに聞こえ知らせでやはとてなむ。いたり少なく、ただ、人の聞こえなす方にのみ寄るべかめる御心には、ただおろかに浅きとのみ思し、また今はこよなくさだ過ぎにたるありさまも、あなづらはしく目馴れてのみ見なしたまふらむも、かたがたに口惜しくもうれたくもおぼゆるを、院のおはしまさむほどは、なほ心収めて、かの思しおきてたるやうありけむ、さだ過ぎ人をも、同じくならずらへきこえて、いたくな軽めたまひそ。いにしへより本意深き道にも、たどり薄かるべき女方にだに、皆思ひ後れつつ、いとぬるきこと多かるを、みづからの心には、何ばかり思しまよふべきにはあらねど、今はと捨てたまひけむ世の、後見に譲りおきたまへる御心ばへの、あはれにう

ましくいそがせたまひけり。

かくて、山の帝の御賀も延びて、秋とありしを、八月は大将の御忌月にて、樂所のこと行なひたまはむに便なかるべし、九月は院の太后の崩れたまひにし月なれば、十月にと思しまうくるを、姫宮いたく悩みたまへば、また延びぬ。衛門督の御預かりの宮なむ、その月には参りたまひける。太政大臣居立ちて、いかめしくこまかに、もののきよら、儀式を尽くしたまへりけり。督の君もそのついでにぞ思ひ起こして出でたまひける。なほ悩ましく、例ならず病づきてのみ過ぐしたまふ。

宮も、うちはへてものをつつましく、いとほしとのみ思し嘆くけにやあらむ、月多く重なりたまふままに、いと苦しげにおはしませば、院は心憂しと思ひきこえたまふ方こそあれ、いとらうたげにあえかなるさまして、かく悩みわたりたまふを、いかにおはせむと嘆かしくて、さまざまに思し嘆く。御祈りなど、今年は紛れ多くて過ぐしたまふ。

御山にも聞こし召して、らうたく恋しと思ひきこえたまふ。月ごろかくほかほかにて、渡りたまふこともをさをさなきやうに人の奏しければ、いかなるにかと御胸つぶれて、世の中も今さらに恨めしく思して、対の方のわづらひけるころは、なほその扱ひに、と聞こし召してだになまやすからざりしを、そのうち直りがたくものしたまふらむは、そのころほひ便なきことや出で来たりけむ、みづから知りたまふことならねど、良からぬ御後見どもの心にて、いかなるころとかありけむ、内わたりなどのみやびを交はすべき仲らひなどにも、けしからず憂きこと言ひ出づるたぐひも聞こゆかし、ときへ思し寄るも、こまやかなることと思し捨ててし世なれど、なほ子の道は離れがたくて、宮に御文こまやかにてありけるを、おとどおはしますほどにて見たまふ。

そのこととなくて、しばしばも聞こえぬほどに、おぼつかなくてのみ年月

知り、ゆゑをも過ぐさず、よそながらの睦び交はしつべき人は、齋院とこの君とこそは残りありつるを、かくみな背き果てて、齋院、はたいみじうつとめて、紛れなく行なひにしみたまひにたなり。なほここの人のありさまを聞き見る中に、深く思ふさまに、さすがになつかしきことの、かの人の御なずらひにだにもあらざりけるかな。女子を生ほし立てむことよ、いと難かるべきわざなりけり。宿世などいふらむものは、目に見えぬわざにて、親の心に任せがたし。生ひ立たむほどの心づかひは、なほ力入るべかめり。よくこそ、あまたかたがたに心を乱るまじき契りなりけれ。年深くいらざりしほどは、さうぎうしのわざや、さまざまに見ましかばとなむ、嘆かしきをりをりありし。若宮を心して生ほし立てたてまつりたまへ。女御は、ものの心を深く知りたまふほどならで、かく暇なき交らひをしたまへば、何事も心もとなき方にぞものしたまふらむ。御子たちなむ、なほ飽く限り人に点つかるまじくて、世をのどかに過ぐしたまはむに、うしろめたかるまじき心ばせ、つけまほしきわざなりける。限りありて、とざまかうざまの後見まうくるただ人は、おのづからそれにも助けられぬるを」など聞こえたまへば、「はかばかしきさまの御後見ならずとも、世にながらへむ限りは、見たてまつらぬやうあらじと思ふを、いかならむ」とて、なほものを心細げにて、かく心にまかせて、行なひをもとどこほりなくしたまふ人びとを、うらやましく思ひきこえたまへり。

「かむの君に、さま変はりたまへらむ装束など、まだ裁ち馴れぬほどは訪らふべきを、袈裟などはいかに縫ふものぞ。それせさせたまへ。一くだりは六条の東の君にもものしつけむ。うるはしき法服だちては、うたて見目もけうとかるべし。さすがにその心ばへ見せてを」など聞こえたまふ。青鈍の一くだりをここにはせさせたまふ。作物所の人召して、忍びて尼の御具どものさるべきはじめのたまはす。御茵、上席、屏風、几帳などのことも、いと忍びて、わざとが

二条の尚侍の君をば、なほ絶えず思ひ出できこえたまへど、かくうしろめたき筋のこと、憂きものに思し知りて、かの御心弱さも少し軽く思ひなされたまひけり。つひに御本意のことしたまひてけり、と聞きたまひては、いとあはれに口惜しく御心動きて、まづ訪らひきこえたまふ。今なむとだに、にほはしたまはざりけるつらさを、浅からず聞こえたまふ。

海人の世をよ所に聞かめや須磨の浦に藻塩垂れしも誰れならなくに

さまざまなる世の定めなさを心に思ひつめて、今まで後れきこえぬる口惜しさを、思し捨てつとも、避りがたき御回向のうちには、まづこそはと、あはれになむ。

など多く聞こえたまへり。とく思し立ちにしことなれど、この御妨げにかかづらひて、人にはしか表はしたまはぬことなれど、心のうちあはれに、昔よりつらき御契りをさすがに浅くしも思し知られぬ、などかたがたに思し出でらる。御返り、今はかくしも通ふまじき御文のとぢめと思せば、あはれにて、心とめて書きたまふ、墨つきなどいとをかし。

常なき世とは、身一つにのみ知りはべりにしを、後れぬとのたまはせたるになむ、げに、

海人舟にいかかは思ひおくれけむ明石の浦にいさりせし君

回向には、あまねきかどにても、いかがは。

とあり。濃き青鈍の紙にて、櫛にさしたまへる、例のことなれど、いたく過ぐしたる筆づかひ、なほ古りがたくをかしげなり。

二条院におはしますほどにて、女君にも、今はむげに絶えぬることにて、見せたてまつりたまふ。「いといたくこそ恥づかしめられたれ。げに心づきなしや。さまざま心細き世の中のありさまを、よく見過ぐしつるやうなるよ。なべての世のことにて、はかなくものを言ひ交はし、時々によせて、あはれをも

さもえ思ひ放たれたまはず。宮は、いとらうたげにて、悩みわたりたまふさまのなほいと心苦しく、かく思ひ放ちたまふにつけては、あやにくに、憂きに紛れぬ恋しさの苦しく思さるれば、渡りたまひて見たてまつりたまふにつけても、胸いたくいとほしく思さる。御祈りなどさまざまにせさせたまふ。おほかたのことはありしに變らず、なかなかいたはしくやむごとなくもてなしきこゆるさまをましたまふ。氣近くうち語らひきこえたまふさまは、いとこよなく御心隔たりてかたはらいたければ、人目ばかりをめやすくもてなして、思しのみ乱るに、この御心のうちしもぞ苦しかりける。さること見きとも表はしきこえたまはぬに、みづからいとわりなく思したるさまも心幼し。いとかくおはするけどかし、良きやうといひながら、あまり心もとなく後れたる、頼もしげなきわざなり、と思すに、世の中なべてうしろめたく、女御のあまりやはらかにおびれたまへるこそ、かやうに心かけきこえむ人は、まして心乱れなむかし、女は、かうはるけどころなくなよびたるを、人もあなづらはしきにや、さるまじきにふと目とまり、心強からぬ過ちはし出づるなりけり、と思す。

右の大臣の北の方の、取り立てたる後見もなく、幼くより、ものはかなき世にさすらふるやうにて生ひ出でたまひけれど、かどかどしく労ありて、我もおほかたには親めきしかど、憎き心の添はぬにしもあらざりしを、なだらかにつれなくもてなして過ぐし、この大臣のさる無心の女房に心合はせて入り来たりけむにも、けぎやかにもて離れたるさまを、人にも見え知られ、ことさらに許されたるありさまにしなして、わが心と罪あるにはなさずなりにしなど、今思へば、いかにかどあることなりけり、契り深き仲なりければ、長くかくて保たむことは、とてもかくても同じごとあらましものから、心もてありしこととも、世人も思ひ出でば、すこし軽々しき思ひ加はりなまし、いといたくもてなしてしわざなり、と思し出づ。

姫宮は、かく渡りたまはぬ日ごろの経るも、人の御つらさにのみ思すを、今は、わが御おこたりうち混ぜてかくなりぬると思すに、院も聞こし召しつけて、いかに思し召さむと、世の中つつましくなむ。

かの人も、いみじげにのみ言ひわたれども、小侍従もわづらはしく思ひ嘆きて、「かかることなむありし」と告げてければ、いとあさましく、いつのほどにさること出で来けむ、かかることは、あり経れば、おのづからけしきにても、漏り出づるやうもやと思ひしだに、いとつつましく、空に目つきたるやうにおぼえしを、まして、さばかり違ふべくもあらざりしことどもを見たまひてけむ、恥づかしくかたじけなくかたはらいたきに、朝夕涼みもなきころなれど、身もしむる心地して、いはむかたなくおぼゆ。年ごろまめごとにもあだことにも、召しまつはし参り馴れつるものを、人よりはこまかに思しとどめたる御けしきの、あはれになつかしきを、あさましくおほけなきものに心おかれたてまつりては、いかでかは目をも見合はせてまつらむ、さりとして、かき絶え、ほのめき参らざらむも人目あやしく、かの御心にも思し合はせむことのいみじさ、などやすからず思ふに、心地もいと悩ましくて、内へも参らず。さして重き罪には当たるべきならねど、身のいたづらになりぬる心地すれば、さればよと、かつはわが心も、いとつらくおぼゆ。

いでや、しづやかに心にくきけはひ見えたまはぬわたりぞや、まづはかの御簾のはさまも、さるべきことかは、軽々と、大将の思ひたまへるけしき見えきかしなど、今ぞ思ひ合はする。しひて、このことを思ひさまさむと思ふ方にて、あながちに難つけたてまつらまほしきにやあらむ。

良きやうとても、あまりひたおもむきにおほどかにあてなる人は、世のありさまも知らず、かつさぶらふ人に心おきたまふこともなくて、かくいとほしき御身のためも人のためも、いみじきことにもあるかな、とかの御ことの心苦し

同じけしからぬ筋なれど、寄る方ありや、わが身ながらも、さばかりの人に心分けたまふべくはおぼえぬものと、いと心づきなけれど、またけしきに出だすべきことにもあらず、など思し乱るるにつけて、故院の上も、かく御心には知ろし召してや、知らず顔を作らせたまひけむ、思へばその世のことこそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ、と近き例を思すにぞ、恋の山路はえもどくまじき御心まじりける。

つれなしづくりたまへど、もの思し乱るるさまのしるければ、女君、消え残りたるいとほしみに渡りたまひて、人やりならず、心苦しう思ひやりきこえたまふにや、と思して、「心地はよろしくなりにてはべるを、かの宮の悩ましげにおはすらむに、とく渡りたまひにしこそいとほしけれ」と聞こえたまへば、「さかし。例ならず見えたまひしかど、異なる心地にもおはせねば、おのづから心のどかに思ひてなむ。内よりはたびたび御使ありけり。今日も御文ありつとか。院のいとやむごとなく聞こえたまへれば、上もかく思したるなるべし。すこしおろかになどもあらむは、こなたかなた思さむことのいとほしきぞや」とて、うめきたまへば、「内の聞こし召さむよりも、みづから恨めしと思ひきこえたまはむこそ、心苦しからめ。我は思し咎めずとも、よからぬさまに聞こえなす人びと、かならずあらむと思へば、いと苦しくなむ」などのたまへば、「げに、あながちに思ふ人のためには、わづらはしきよすがなけれど、よろづにたどり深きこと、とやかくやと、おほよそ人の思はむ心さへ思ひめぐらさるるを、これはただ、国王の御心やおきたまはむとばかりを憚らむは、浅き心地ぞしける」とほほ笑みて、のたまひ紛らはす。渡りたまはむことは、「もろともに帰りてを、心のどかにあらむ」とのみ聞こえたまふを、「ここには、しばし心やすくてはべらむ。まづ渡りたまひて、人の御心も慰みなむほどに」と聞こえ交はしたまふほどに、日ごろ経ぬ。

年を経て思ひわたりけることの、たまさかに本意かなひて、心やすからぬ筋を書き尽くしたる言葉いと見所ありてあはれなれど、いとかくさやかには書くべしや、あたらの文をこそ思ひやりなく書きけれ、落ち散ることもこそと思ひしかば、昔かやうにこまかなるべき折ふしにも、ことそぎつつこそ書き紛らはししか、人の深き用意は難きわざなりけり、とかの人の心をさへ見落としたまひつ。

さても、この人をばいかがもてなしきこゆべき、めづらしきさまの御心地も、かかることの紛れにてなりけり、いで、あな心憂や、かく人伝てならず憂きことを知るしる、ありしながら見たてまつらむよ、とわが御心ながらもえ思ひ直すまじくおぼゆるを、なほざりのすきびと、初めより心をとどめぬ人だに、また異ざまの心分くらむと思ふは、心づきなく思ひ隔てらるるを、ましてこれは、さま異におほけなき人の心にもありけるかな、帝の御妻をも過つたぐひ、昔もありけれど、それはまたいふ方異なり、宮仕へといひて、我も人も同じ君に馴れ仕うまつるほどに、おのづからさるべき方につけても心を交はしそめ、ものまぎれ多かりぬべきわざなり、女御、更衣といへど、とある筋かかる方につけて、かたほなる人もあり、心ばせかならず重からぬうち混じりて、思はずなることもあれど、おぼろけの定かなる過ち見えぬほどは、さても交じらふやうもあらむに、ふとしもあらはならぬ紛れありぬべし、かくばかりまたなきさまにもてなしきこえて、うちうちの心ざし引く方よりも、いつくしくかたじけなきものに思ひはぐくまむ人をおきて、かかることはさらにたぐひあらじ、と爪弾きせられたまふ。

帝と聞こゆれど、ただ素直に、公さまの心ばへばかりにて、宮仕へのほどもものすさまじきに、心ざし深き私のねぎ言になびき、おのがじしあはれを尽くし、見過ぐしがたき折のいらへをも言ひそめ、自然に心通ひそむらむ仲らひは、

さればよ、いとむげに心にくきところなき御ありさまを、うしろめたしとは見るかし、と思す。

出でたまひぬれば、人びとすこしあかれぬるに、侍従寄りて、「昨日の物はいかがさせたまひてし。今朝、院の御覧じつる文の色こそ似てはべりつれ」と聞こゆれば、あさましと思して、涙のただ出で来に出で来れば、いとほしきものから、いふかひなの御さまや、と見たてまつる。「いづくにかは置かせたまひてし。人びとの参りしに、ことあり顔に近くさぶらはじと、さばかりの忌みをだに心の鬼に避りはべしを、入らせたまひしほどは、すこしほど経はべりにしを、隠させたまひつらむとなむ思うたまへし」と聞こゆれば、「いさとよ。見しほどに入りたまひしかば、ふともえ起き上がらでさし挟みしを、忘れにけり」とのたまふに、いと聞こえむかたなし。寄りて見れば、いづくのかはあらむ。「あないみじ。かの君もいといたく懼ぢ憚りて、けしきにても漏り聞かせたまふことあらばと、かしこまりきこえたまひしものを、ほどだに経ず、かかることの出でまうで来るよ。すべていはけなき御ありさまにて、人にも見えさせたまひければ、年ごろさばかり忘れがたく、恨み言ひわたりたまひしかど、かくまで思うたまへし御ことかは。誰が御ためにもいとほしくはべるべきこと」と、憚りもなく聞こゆ。心やすく若くおはすれば、馴れきこえたるなめり。いらへもしたまはで、ただ泣きにのみぞ泣きたまふ。いと悩ましげにて、つゆばかりの物もきこしめさねば、「かく悩ましくせさせたまふを、見おきたてまつりたまひて、今はおこたり果てたまひにたる御扱ひに、心を入れたまへること」と、つらく思ひ言ふ。

おとどは、この文のなほあやしく思さるれば、人見ぬ方にて、うち返しつつ見たまふ。さぶらふ人びとの中に、かの中納言の手に似たる手して書きたるか、とまで思し寄れど、言葉づかひきらきらとまがふべくもあらぬことどもあり。

御座にうち臥したまひて、御物語など聞こえたまふほどに暮れにけり。すこし大殿籠もり入りにけるに、ひぐらしのはなやかに鳴くにおどろきたまひて、「さらば道たどしからぬほどに」とて、御衣などたてまつり直す。「月待ちてとも言ふなるものを」と、いと若やかなるさましてのたまふは憎からずかし。その間にもとや思すと、心苦しげに思して、立ちとまりたまふ。

夕露に袖濡らせとやひぐらしの鳴くを聞く聞く起きて行くらむ

片なりなる御心にまかせて言ひ出でたまへるもらうたければ、ついゐて、「あな苦しや」とうち嘆きたまふ。

待つ里もいかが聞くらむ方がたに心騒がすひぐらしの声

など思しやすらひて、なほ情けなからむも心苦しければ、止まりたまひぬ。静心なくさすがに眺められたまひて、御くだものばかり参りなどして、大殿籠もりぬ。

まだ朝涼みのほどに渡りたまはむとて、とく起きたまふ。「よべのかはぼりを落として、これは風ぬるくこそありけれ」とて、御扇置きたまひて、昨日うたた寝したまへりし御座のあたりを、立ち止まりて見たまふに、御茵のすこしまよひたるつまより、浅緑の薄様なる文の押し巻きたる端見ゆるを、何心もなく引き出でて御覧ずるに、男の手なり。紙の香などいと艶に、ことさらめきたる書きざまなり。二重ねにこまごまと書きたるを見たまふに、紛るべき方なく、その人の手なりけりと見たまひつ。御鏡など開けて参らする人は、見たまふ文にこそはと心も知らぬに、小侍従見つけて、昨日の文の色と見るに、いといみじく胸つぶつぶと鳴る心地す。御粥など参る方に目も見やらず、いでざりともそれにはあらじ、いといみじく、さることはありなむや、隠いたまひてけむ、と思ひなす。宮は何心もなく、まだ大殿籠もれり。あないはけな、かかる物を散らしたまひて、我ならぬ人も見つけたらましかば、と思すも、心劣りして、

大人びたる人召して、御心地のさまなど問ひたまふ。「例のさまならぬ御心地になむ」と、わづらひたまふ御ありさまを聞こゆ。「あやしく、ほど経てめづらしき御ことに」とばかりのたまひて、御心のうちには、年ごろ経ぬる人びとだにもさることなきを、不定なる御事にもやと思せば、ことにともかくものたまひあへしらひたまはで、ただうち悩みたまへるさまのいとらうたげなるを、あはれと見たてまつりたまふ。

からうして思し立ちて渡りたまひしかば、ふともえ帰りたまはで、二三日はするほど、いかにいかにとうしろめたく思さるれば、御文をのみ書き尽くしたまふ。「いつの間に積もる御言の葉にかあらむ。いでや、やすからぬ世をも見るかな」と、若君の御過ちを知らぬ人は言ふ。侍従ぞ、かかるにつけても胸うち騒ぎける。

かの人も、かく渡りたまへりと聞くに、おほけなく心誤りして、いみじきことどもを書き続けておこせたまへり。対にあからさまに渡りたまへるほどに、人間なりければ、忍びて見せたてまつる。「むつかしきもの見するこそいと心憂けれ。心地のいとど悪しきに」とて、臥したまへれば、「なほただこの端書のいとほしげにはべるぞや」とて広げたれば、人の参るにいと苦しくて、御几帳引き寄せて去りぬ。いとど胸つぶるるに、院入りたまへば、えよくも隠したまはで、御茵の下にさし挟みたまひつ。

夕さりつ方、二条の院へ渡りたまはむとて、御暇聞こえたまふ。「ここには、けしうはあらず見えたまふを、まだいとただよはしげなりしを、見捨てたるやうに思はるるも、今さらにいとほしくてなむ。ひがひがしく聞こえなす人ありとも、ゆめ心置きたまふな。今見直したまひてむ」と語ひたまふ。例はなまいはけなき戯れ言などもうちとけ聞こえたまふを、いたくしめりてさやかにも見合はせたてまつりたまはぬを、ただ世の恨めしき御けしきと心得たまふ。昼の

かく悩みたまふと聞こし召してぞ渡りたまふ。女君は、暑くむつかしとて、御髪澄まして、すこしさはやかにもてなしたまへり。臥しながらうちやりたまへりしかば、とみにも乾かねど、つゆばかりうちふくみまよふ筋もなくて、いときよらにゆらゆらとして、青み衰へたまへるしも、色はさ青に白くうつくしげに、透きたるやうに見ゆる御肌つきなど、世になくうたげなり。もぬけたる虫の殻などのやうに、まだいとただよはしげにおはす。年ごろ住みたまはで、すこし荒れたりつる院の内、たとしへなく狭げにさへ見ゆ。昨日今日かくものおぼえたまふ隙にて、心ことにつくろはれたる遣水、前栽の、うちつけに心地よげなるを見出だしたまひても、あはれに今まで経にけるを思ほす。池はいと涼しげにて、蓮の花の咲きわたれるに、葉はいと青やかにて、露きらきらと玉のやうに見えわたるを、「かれ見たまへ。おのれ一人も涼しげなるかな」とのたまふに、起き上がりて見出だしたまへるもいとめづらしければ、「かくて見たてまつるこそ夢の心地すれ。いみじく、わが身さへ限りとおぼゆる折々のありしはや」と、涙を浮けてのたまへば、みづからもあはれに思して、消え止まるほどやは経べきたまさかに蓮の露のかかるばかりをとのたまふ。

契り置かむこの世ならでも蓮葉に玉るる露の心隔つな

出でたまふ方ざまはもの憂けれど、内にも院にも聞こし召さむところあり、悩みたまふと聞きてもほど経ぬるを、目に近きに心を惑はしつるほど、見たてまつることもをさをさなかりつるに、かかる雲間にさへやは絶え籠もらむと、思し立ちて渡りたまひぬ。

宮は、御心の鬼に、見えたてまつらむも恥づかしうつましく思すに、物なご聞こえたまふ御いらへも聞こえたまはねば、日ごろの積もりを、さすがにさりげなくてつらしと思しけると、心苦しければ、とかくこしらへきこえたまふ。

夜昼思し嘆くに、ほればれしきまで、御顔もすこし面瘦せたまひにたり。

五月などは、まして晴れ晴れしからぬ空のけしきに、えさはやぎたまはねど、ありしよりはすこし良ろしきさまなり。されど、なほ絶えず悩みわたりたまふ。もののけの罪救ふべきわざ、日ごとに法華經一部つつ供養ぜさせたまふ。日ごとに、何くれと尊きわざさせたまふ。御枕上近くても、不断の御読經、声尊き限りして読ませたまふ。現はれそめては、折々悲しげなることどもを言へど、さらにこのもののけ去り果てず。いとど暑きほどは、息も絶えつつ、いよいよのみ弱りたまへば、いはむかたなく思し嘆きたり。なきやうなる御心地にも、かかる御けしきを心苦しく見たてまつりたまひて、世の中に亡くなりなむも、わが身にはさらに口惜しきこと残るまじけれど、かく思し惑ふめるに、空しく見なされたてまつらむが、いと思ひ隈なかるべければ、思ひ起こして、御湯などいささか参るけにや、六月になりてぞ、時々御頭もたげたまひける。めづらしく見たてまつりたまふにも、なほいとゆゆしくて、六条の院にはあからさまにもえ渡りたまはず。

姫宮は、あやしかりしことを思し嘆きしより、やがて例のさまにもおはせず、悩ましくしたまへど、おどろおどろしくはあらず、立ちぬる月より物きこし召さで、いたく青みそこなはれたまふ。かの人は、わりなく思ひあまる時々は、夢のやうに見たてまつりけれど、宮、尽きせずわりなきことに思したり。院をいみじく懼ぢきこえたまへる御心に、ありさまも人のほども、等しくだにやはある、いたくよしめきなまめきたれば、おほかたの人目にこそ、なべての人に優りてめでらるれ、幼くよりさるたぐひなき御ありさまに馴らひたまへる御心には、めざましくのみ見たまふほどに、かく悩みわたりたまふは、あはれなる御宿世にぞありける。御乳母たち見たてまつりとがめて、院の渡らせたまふこともいとたまさかになるを、つぶやき恨みたてまつる。

したるになむありける。やうやう生き出でたまふやうに聞きなしはべりて、今なむ皆人心静むれど、まだいと頼もしげなしや。心苦しきことにこそ」とて、まことにいたく泣きたまへるけしきなり。目もすこし腫れたり。衛門督、わがあやしき心ならひにや、この君の、いとさしも親しからぬ継母の御ことを、いたく心しめたまへるかな、と目をとどむ。

かくこれかれ参りたまへるよし聞こし召して、「重き病者の、にはかにとぢめつるさまなりつるを、女房などは心もえ収めず、乱りがはしく騒ぎはべりけるに、みづからもえのどめず、心あわたたしきほどにてなむ。ことさらになむ、かくものしたまへるよろこびは聞こゆべき」とのたまへり。督の君は胸つぶれて、かかる折のらうらうならずはえ参るまじく、けはひ恥づかしく思ふも、心のうちぞ腹ぎたなかりける。

かく生き出でたまひての後しも、恐ろしく思ひて、またまたいみじき法どもを尽くして加へ行なはせたまふ。うつし人にてだにむくつけかりし人の御けはひの、まして世変はり、妖しきもののさまになりたまへらむを思しやるに、いと心憂ければ、中宮を扱ひきこえたまふさへぞ、この折はもの憂く、言ひもてゆけば、女の身は皆同じ罪深きもとゐぞかしと、なべての世の中厭はしく、かのまた人も聞かざりし御仲の睦物語に、すこし語り出でたまへりしことを、言ひ出でたりしに、まことと思し出づるに、いとわづらはしく思さる。

御髪下ろしてむと切に思したれば、忌むことの力もやとて、御頂しるしばかり挟みて、五戒ばかり受けさせたてまつりたまふ。御戒の師、忌むことのすぐれたるよし、仏に申すにも、あはれに尊きこと混じりて、人悪く御かたはらに添ひゐて、涙おし拭いたまひつつ、仏を諸心に念じきこえたまふさま、世にかしこくおはする人も、いとかく御心惑ふことにあたりては、え静めたまはぬわざなりけり。いかなるわざをして、これを救ひかけとどめたてまつらむとのみ、

の、御罪輕むべからむ功德のことをかならずせさせたまへ。いと悔しきことになむありける」など、言ひ続くれど、もののけに向かひて物語したまはむも、かたはらいなければ、封じ込めて、上をば、また異方に忍びて渡したてまつりたまふ。

かく亡せたまひにけりといふこと世の中に満ちて、御とぶらひに聞こえたまふ人びとあるを、いとゆゆしく思す。今日の帰さ、見に出でたまひける上達部など、帰りたまふ道に、かく人の申せば、「いといみじきことにもあるかな。生けるかひありつる幸ひ人の、光失ふ日にて、雨はそほ降るなりけり」と、うちつけ言したまふ人もあり。また、「かく足らひぬる人は、かならずえ長からぬことなり。「何を桜に」といふ古言もあるは。かかる人のいとど世にながへて、世の樂しびを尽くさば、かたはらの人苦しからむ。今こそ、二品宮は、もとの御おぼえ現はれたまはめ。いとほしげに圧されたりつる御おぼえを」など、うちささめきけり。

衛門督、昨日暮らしがたかりしを思ひて、今日は、御弟ども、左大弁、藤宰相など、奥の方に乗せて見たまひけり。かく言ひあへるを聞くにも胸うちつぶれて、「何か憂き世に久しかるべき」と、うち誦じ独りごちて、かの院へ皆参りたまふ。たしかならぬことなれば、ゆゆしくやとて、ただおほかたの御訪らひに参りたまへるに、かく人の泣き騒げば、まことなりけり、と立ち騒ぎたまへり。

式部卿宮も渡りたまひて、いといたく思しほれたるさまにてぞ入りたまふ。人の御消息もえ申し伝へたまはず。大将の君、涙を拭ひて立ち出でたまへるに、「いかにいかに。ゆゆしきさまに人の申しつれば、信じがたきことにてなむ。ただ久しき御悩みをうけたまはり嘆きて参りつる」などのたまふ。「いと重くなりて、月日経たまへるを、この暁より絶え入りたまへりつるを。もののけの

さらに知られじと思ひつるものを」とて、髪を振りかけて泣くけはひ、ただかの昔見たまひしもののけのさまと見えたり。あさましくむくつけしと、思ししみにしことの変はらぬもゆゆしければ、この童の手をとらへて引き据ゑて、さま悪しくもせさせたまはず。「まことにその人か。よからぬ狐などいふなるもののたぶれたるが、亡き人の面伏なること言ひ出づるもあなるを、たしかなる名のりせよ。また人の知らざらむことの、心にしるく思ひ出でられぬべからむを言へ。さてなむいささかにても信ずべき」とのたまへば、ほろほろといたく泣きて、

「わが身こそあらぬさまなれそれながらそらおぼれする君は君なり
いとつらし、いとつらし」と、泣き叫ぶものから、さすがにもの恥ぢしたるけはひ変らず、なかなかいと疎ましく心憂ければ、もの言はせじ、と思す。

「中宮の御事にても、いとうれしくかたじけなしとなむ、天翔りても見たてまつれど、道異になりぬれば、子の上までも深くおぼえぬにやあらむ、なほみづからつらしと思ひきこえし心の執なむ、止まるものなりける。その中にも、生きての世に、人より落として思し捨てしよりも、思ふどちの御物語のついでに、心善からず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いと恨めしく、今はただ亡きに思し許して、異人の言ひ落としめむをだに、はぶき隠したまへところ思へ、とうち思ひしばかりに、かくいみじき身のけはひなれば、かく所狭きなり。この人を深く憎しと思ひきこゆることはなけれど、守り強く、いと御あたり遠き心地して、え近づき参らず、御声をだにほのかになむ聞きはべるよし、今はこの罪軽むばかりのわぎをせさせたまへ。修法、読経とののしることも、身には苦しくわびしき炎とのみまつはれて、さらに尊きことも聞こえねば、いと悲しくなむ。中宮にも、このよしを伝へ聞こえたまへ。ゆめ御宮仕へのほどに、人ときしろひ嫉む心つかひたまふな。斎宮におはしまししころほひ

く思さるるに、「絶え入りたまひぬ」とて、人参りたれば、さらに何事も思し分かれず、御心も暮れて渡りたまふ道のほどの心もとなきに、げにかの院は、ほとりの大路まで人立ち騒ぎたり。殿のうち、泣きののしるけはひいとまがまがし。我にもあらで入りたまへれば、「日ごろはいささか隙見えたまへるを、にはかになむかくおはします」とて、さぶらふ限りは、我も後れたてまつらじ、惑ふさまでも限りなし。御修法どもの檀こぼち、僧なども、さるべき限りこそまかでね、ほろほろと騒ぐを見たまふに、さらば限りにこそはと、思し果つるあさましきに、何事かはたぐひあらむ。

「さりとも、もののけのするにこそあらめ。いとかくひたぶるにな騒ぎそ」と鎮めたまひて、いよいよいみじき願どもを立て添へさせたまふ。すぐれたる験者どもの限り召し集めて、「限りある御命にて、この世尽きたまひぬとも、ただ、今しばしのどめたまへ。不動尊の御本の誓ひあり。その日数をだにかけ止めたてまつりたまへ」と、頭より、まことに黒煙を立てて、いみじき心を起こして加持したてまつる。院も、ただ、今一たび目を見合はせたまへ、いとあへなく限りなりつらむほどをだに、え見ずなりにけることの悔しく悲しきを、と思し惑へるさま、止まりたまふべきにもあらぬを、見たてまつる心地ども、ただ推し量るべし。いみじき御心のうちを、仏も見たてまつりたまふにや、月ごろさらに現はれ出で来ぬもののけ、小さき童に移りて、呼ばひののしるほどに、やうやう生き出でたまふに、うれしくもゆゆしくも思し騒がる。

いみじく調ぜられて、「人は皆去りね。院一所の御耳に聞こえむ。おのれを、月ごろ、調じわびさせたまふが情けなくつらければ、同じくは、思し知らせむと思ひつれど、さすがに命も堪ふまじく、身を碎きて思し惑ふを見たてまつれば、今こそかくいみじき身を受けたれ、いにしへの心の残りてこそかくまでも参り来たるなれば、ものの心苦しさをえ見過ぐさで、つひに現はれぬること。

にも見合はせたてまつりたまはぬを、いと久しくなりぬる絶え間を恨めしく思すにや、といとほしくて、かの御心地のさまなど聞こえたまひて、「今はのちめにもこそあれ。今さらにおろかなるさまを見えおかれじとてなむ。いはけなかりしほどより扱ひそめて、見放ちがたければ、かう月ごろよろづを知らぬさまに過ぐしはべるにこそ。おのづから、このほど過ぎば、見直したまひてむ」など聞こえたまふ。かくけしきも知りたまはぬも、いとほしく心苦しく思されて、宮は、人知れず涙ぐましく思さる。

督の君は、ましてなかなかなる心地のみまさりて、起き臥し明かし暮らしわびたまふ。祭の日などは、物見に争ひ行く君達かき連れ来て、言ひそそのかせど、悩ましげにもてなして、眺め臥したまへり。女宮をば、かしこまりおきたるさまにもてなしきこえて、をさをさうちとけても見えたてまつりたまはず、わが方に離れるて、いとつれづれに心細く眺めゐたまへるに、童べの持たる葵を見たまひて、

悔しくぞ摘み犯しける葵草神の許せるかざしならぬに

と思ふも、いとなかなかなり。世の中静かならぬ車の音などを、よそのことに聞きて、人やりならぬつれづれに、暮らしがたくおぼゆ。

女宮も、かかるけしきのすさまじげさも見知られたまへば、何事とは知りたまはねど、恥づかしくめざましきに、もの思はしくぞ思されける。女房なども物見に皆出でて、人少なにのどやかなれば、うち眺めて、箏の琴なつかしく弾きまさぐりておはするけはひも、さすがにあてになまめかしけれど、同じくは、今ひと際及ばざりける宿世よ、となほおぼゆ。

もろかづら落葉を何に拾ひけむ名は睦ましきかざしなれども
と書きすさびるたる、いとなめげなるしりう言なりかし。

おとどの君は、まれまれ渡りたまひて、えふとも立ち帰りたまはず、静かな

起きてゆく空も知られぬ明けぐれにいくの露のかかる袖なり

と、ひき出でて、愁へきこゆれば、出でなむとするにすこし慰めたまひて、

明けぐれの空に憂き身は消えなむ夢なりけりと見てもやむべく

と、はかなげにのたまふ声の、若くをかしげなるを、聞きさすやうにて出でぬる魂は、まことに身を離れて止まりぬる心地す。

女宮の御もとにも参うでたまはで、大殿へぞ忍びておはしぬる。うち臥したれど目も合はず、見つる夢のさだかに合はむことも難きをさへ思ふに、かの猫のありしさま、いと恋しく思ひ出でらる。さてもいみじき過ちしつる身かな、世にあらむことこそまばゆくなりぬれと、恐ろしくそら恥づかしき心地して、ありきなどしたまはず。女の御ためはさらにもいはず、わが心地にもいとあるまじきことといふ中にも、むくつけくおぼゆれば、思ひのままにもえ紛れありかず。帝の御妻をも取り過ちて、ことの聞こえあらむに、かばかりおぼえむことゆゑは、身のいたづらにならむ、苦しくもおぼゆまじ。しかいちじるき罪にはあたらずとも、この院に目をそばめられたてまつらむことは、いと恐ろしく恥づかしくおぼゆ。

限りなき女と聞こゆれど、すこし世づきたる心ばへ混じり、上はゆゑあり子めかしきにも、従はぬ下の心添ひたるこそ、とあることかかることにうちなびき、心交はしたまふたぐひもありけれ、これは深き心もおはせねど、ひたおもむきにももの懼ぢしたまへる御心に、ただ今しも人の見聞きつけたらむやうに、まばゆく恥づかしく思さるれば、明かき所にだにえみざり出でたまはず、いと口惜しき身なりけりと、みづから思し知るべし。

悩ましげになむとありければ、おとど聞きたまひて、いみじく御心を尽くしたまふ御事にうち添へて、またいかにと驚かせたまひて、渡りたまへり。そこはかと苦しげなることも見えたまはず、いといたく恥ぢらひしめりて、さやか

らの心ながらも、うつし心にはあらずなむおぼえはべる」、かのおぼえなかりし御簾のつまを猫の綱引きたりし夕べのことも、聞こえ出でたり。げにさはたありけむよ、と口惜しく、契り心憂き御身なりけり。院にも、今はいかでかは見えたてまつらむ、と悲しく心細くて、いと幼げに泣きたまふを、いとかたじけなくあはれと見たてまつりて、人の御涙をさへ拭ふ袖は、いとど露けさのみまさる。

明けゆくけしきなるに、出でむ方なくなかなかなり。「いかがはしはべるべき。いみじく憎ませたまへば、また聞こえさせむこともありがたきを、ただ一言御声を聞かせたまへ」と、よろづに聞こえ悩ますもうるさくわびしくて、もののさらに言はれたまはねば、「果て果てはむくつけくこそなりはべりぬれ。またかかるやうはあらじ」と、いと憂しと思ひきこえて、「さらば不用なめり。身をいたづらにやはなし果てぬ。いと捨てがたきによりてこそかくまでもはべれ、今宵に限りはべりなむいみじくなむ。つゆにても御心ゆるしたまふさまならば、それに代へつるにても捨てはべりなまし」とて、かき抱きて出づるに、果てはいかにしつるぞと、あきれて思さる。隅の間の屏風をひき広げて、戸を押し開けたれば、渡殿の南の戸の、夜べ入りしがまだ開きながらあるに、まだ明けぐれのほなるべし、ほのかに見たてまつらむの心あれば、格子をやをら引き上げて、「かういとつらき御心に、うつし心も失せはべりぬ。すこし思ひのどめよと思されば、あはれとだにのたまはせよ」と、脅しきこゆるを、いとめづらかなり、と思して、物も言はむとしたまへど、わななかれて、いと若々しき御さまなり。

ただ明けに明けゆくに、いと心あわたたしくて、「あはれなる夢語りも聞こえさすべきを、かく憎ませたまへばこそ。さりとて今思し合はすることもはべりなむ」とて、のどかならず立ち出づる明けぐれ、秋の空よりも心尽くしなり。

も聞こし召されにしを、こよなくもて離れてものたまはせざりけるに、頼みをかけそめはべりて、身の数ならぬひとときはに、人より深き心ざしを空しくなしはべりぬることと、動かしはべりにし心なむ、よろづ今はかひなきこと、と思ふたまへ返せど、いかばかりしみはべりにけるにか、年月に添へて、口惜しくも、つらくも、むくつけくも、あはれにも、いろいろに深く思うたまへまさるにせきかねて、かくおほけなきさまを御覧ぜられぬるも、かつはいと思ひやりなく恥づかしければ、罪重き心もさらにはべるまじ」と言ひもてゆくに、この人なりけり、と思すに、いとめざましく恐ろしくて、つゆいらへもしたまはず。「いとことわりなれど、世に例なきことにもはべらぬを、めづらかに情けなき御心ばへならば、いと心憂くて、なかなかひたぶるなる心もこそつきはべれ。あはれとだにのたまはせば、それをうけたまはりてまかでなむ」とよろづに聞こえたまふ。

よその思ひやりはいつくしく、もの馴れて見えたてまつらむも恥づかしく推し量られたまふに、ただかばかり思ひつめたる片端聞こえ知らせて、なかなかかけかけしきことはなくて止みなむ、と思ひしかど、いとさばかり気高う恥づかしげにはあらで、なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひの、あてにいみじくおぼゆることぞ、人に似させたまはざりける。賢しく思ひ鎮むる心も失せて、いづちもいづちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えて止みなばや、とまで思ひ乱れぬ。ただいささかまどろむともなき夢に、この手馴らしし猫の、いとらうたげにうち鳴きて来たるを、この宮に奉らむとて、わが率て来たとおぼしきを、何しに奉りつらむと思ふほどに、おどろきて、いかに見えつるならむ、と思ふ。

宮は、いとあさましく、うつつともおぼえたまはぬに、胸ふたがりて思おぼはるるを、「なほかく逃れぬ御宿世の浅からざりけると思ほしなせ。みづか

ぬ。

いかにいかにと、日々に責められ極じて、さるべき折うかがひつけて、消息しおこせたり。喜びながらいみじくやつれ忍びておはしぬ。まことに、わが心にもいとけしからぬことなれば、気近く、なかなか思ひ乱ることもまさるべきことまでは、思ひも寄らず、ただいとほのかに、御衣のつまばかりを見たてまつりし春の夕の、飽かず世とともに思ひ出でられたまふ御ありさまを、すこし気近くて見たてまつり、思ふことをも聞こえ知らせては、一くだりの御返りなどもや見せたまふ、あはれと思し知る、とぞ思ひける。四月十余日ばかりのことなり。御禊、明日とて、齋院にたてまつりたまふ女房十二人、ことに上臈にはあらぬ若き人、童女など、おのがじしもの縫ひ、化粧などしつつ、物見むと思ひまうくるも、とりどりに暇なげにて、御前の方しめやかにて、人しげからぬ折なりけり。近くさぶらふ按察使の君も、時々通ふ源中將、責めて呼び出ださせければ、下りたる間に、ただこの侍従ばかり、近くはさぶらふなりけり。よき折と思ひて、やをら御帳の東面の御座の端に据ゑつ。さまでもあるべきことなりやは。

宮は何心もなく大殿籠もりにけるを、近く男のけはひのすれば、院のおはする、と思したるに、うちかしこまりたるけしき見せて、床の下に抱き下ろしたてまつるに、物に襲はるるか、せめて見上げたまへれば、あらぬ人なりけり。あやしく聞きも知らぬことどもをぞ聞こゆるや。あさましくむくつけくなりて、人召せど、近くもさぶらはねば、聞きつけて参るもなし。わななきたまふさま、水のやうに汗も流れて、ものもおぼえたまはぬけしき、いとあはれにらうたげなり。「数ならねど、いとかうしも思し召さるべき身とは思つたまへられずなむ。昔よりおほけなき心のはべりしを、ひたぶるに籠めて止みはべなましかば、心のうちに朽たして過ぎぬべかりけるを、なかなか漏らしきこえさせて、院に

かりたまへ。おほけなき心は、すべて、よし見たまへ、いと恐ろしければ、思ひ離れてはべり」とのたまへば、「これよりおほけなき心は、いかがはあらむ。いとむくつけきことをも思し寄りけるかな。何しに参りつらむ」と、はちふく。

「いで、あな聞きにく。あまりこちたくものをこそ言ひなしたまふべけれ。

世はいと定めなきものを、女御、后もあるやうありてものしたまふたぐひなくや。ましてその御ありさまよ。思へばいとたぐひなくめでたけれど、うちうちは心やましきことも多かるらむ。院の、あまたの御中に、また並びなきやうにならはしきこえたまひしに、さしもひとしからぬ際の御方々にたち混じり、めざましげなることもありぬべくこそ。いとよく聞きはべりや。世の中はいと常なきものを、ひとときはに思ひ定めて、はしたなく突き切りなることなのたまひそよ」とのたまへば、「人に落とされたまへる御ありさまとて、めでたき方に改めたまふべきにやははべらむ。これは世の常の御ありさまにもはべらざめり。ただ御後見なくて漂はしくおはしまさむよりは、親ぎまにと譲りきこえたまひしかば、かたみにさこそ思ひ交はしきこえさせたまひためれ。あいなき御落としめ言になむ」と、果て果ては腹立つを、よろづに言ひこしらへて、「まことは、さばかり世になき御ありさまを、見たてまつり馴れたまへる御心に、数にもあらずあやしきなれ姿を、うちとけて御覧ぜられむとは、さらに思ひかけぬことなり。ただ一言物越にて聞こえ知らすばかりは、何ばかりの御身のやつれにかはあらむ。神仏にも思ふこと申すは、罪あるわざかは」と、いみじき誓言をしつつのたまへば、しばしこそいとあるまじきことに言ひ返しけれ、もの深からぬ若人は、人のかく身に代へていみじく思ひのたまふを、え否び果てで、「もしさりぬべき隙あらばたばかりはべらむ。院のおはしまさぬ夜は、御帳のめぐりに人多くさぶらひて、御座のほとりに、さるべき人かならずさぶらひたまへば、いかなる折をかは、隙を見つけはべるべからむ」とわびつつ参り

かる思ひもつきそめたるなりけり。

かくて、院も離れおはしますほど、人目少なくしめやかならむを推し量りて、小侍従を迎へ取りつつ、いみじう語らふ。「昔よりかく命も堪ふまじく思ふことを、かかる親しきよすがありて、御ありさまを聞き伝へ、堪へぬ心のほどをも聞こし召させて頼もしきに、さらにそのしるしのなければ、いみじくなむつらき。院の上だに、「かくあまたにかけかけしくて、人に圧されたまふやうにて、一人大殿籠もる夜な夜な多く、つれづれにて過ぐしたまふなり」など、人の奏しけるついでにも、すこし悔い思したる御けしきにて、「同じくはただ人の心やすき後見を定めむには、まめやかに仕うまつるべき人をこそ定むべかりけれ」とのたまはせて、「女二の宮のなかなかうしろやすく、行く末長きさまにてもものしたまふなること」とのたまはせけるを、伝へ聞きしに、いとほしくも口惜しくも、いかが思ひ乱るる。げに同じ御筋とは尋ねきこえしかど、それはそれとこそおぼゆるわざなりけれ」とうちうめきたまへば、小侍従、「いで、あなおほけな。それをそれとさし置きたてまつりたまひて、またいかやうに限りなき御心ならむ」と言へば、うちほほ笑みて、「さこそはありけれ。宮にかたじけなく聞こえさせ及びけるさまは、院にも内にも聞こし召しけり。「などてかは、さてもさぶらはざらまし」となむ、ことのついでにはのたまはせける。いでや、ただ今すこしの御いたはりあらましかば」など言へば、「いと難き御ことなりや。御宿世とかいふことはべなるをもとにて、かの院の事に出でてねむごろに聞こえたまふに、立ち並び妨げきこえさせたまふべき御身のおぼえとや思されし。このころこそ、すこしものものしく、御衣の色も深くなりたまへれ」と言へば、いふかひなく、はやりかなる口強さに、え言ひ果てたまはで、「今はよし。過ぎにし方をば聞こえじや。ただ、かくありがたきものの隙に、気近きほどにて、この心のうちに思ふことの端、すこし聞こえさせつべくたば

と思したり。「ゆゆしく。かくな思しそ。さりともしうはものしたまはじ。心によりなむ、人はともかくもある。おきて広きうつはものには、幸ひもそれに従ひ、狭き心ある人は、さるべきにて、高き身となりても、ゆたかにゆるべる方は後れ、急なる人は、久しく常ならず、心ぬるくなだらかなる人は、長き例なむ多かりける」など、仏神にも、この御心ばせのありがたく、罪軽きさまを申し明らめさせたまふ。御修法の阿闍梨たち、夜居などにても、近くさぶらふ限りのやむごとなき僧などは、いとかく思し惑へる御けはひを聞くに、いといみじく心苦しければ、心を起こして祈りきこゆ。

すこしよろしきさまに見えたまふ時、五六日うちまぜつつ、また重りわづらひたまふこと、いつとなくて月日を経たまへば、なほいかにおはすべきにか、よかるまじき御心地にや、と思し嘆く。御もののけなど言ひて出で来るもなし。悩みたまふさま、そこはかと見えず、ただ日に添へて弱りたまふさまにのみ見ゆれば、いともいとも悲しくいみじく思すに、御心の暇もなげなり。

まことや、衛門督は中納言になりにかし。今の御世にはいと親しく思されて、いと時の人なり。身のおぼえまさるにつけても、思ふことのかなはぬ愁はしさを思ひわびて、この宮の御姉の二の宮をなむ得たてまつりてける。下臈の更衣腹におはしましたければ、心やすき方まじりて思ひきこえたまへり。人柄もなべての人に思ひなずらふれば、けはひこよなくおはすれど、もとよりしみにし方こそなほ深かりけれ、慰めがたき姨捨にて、人目に咎めらるまじきばかりに、もてなしきこえたまへり。

なほかの下的心忘れず、小侍従といふ語らひ人は、宮の御侍従の乳母のむすめなりけり、その乳母の姉ぞかの督の君の御乳母なりければ、早くより気近く聞きたてまつりて、まだ宮幼くおはしましたし時より、いときよらになむおはします、帝のかしづきたてまつりたまふさまなど、聞きおきたてまつりて、か

あらば頼もしきを、いみじく心細く悲しと見たてまつりたまふに、異事思されねば、御賀の響きも静まりぬ。かの院よりも、かく患ひたまふよし聞こし召して、御訪らひいとねむごろに、たびたび聞こえたまふ。

同じさまにて、二月も過ぎぬ。いふ限りなく思し嘆きて、試みに所を変へたまはむとて、二条の院に渡したてまつりたまひつ。院の内ゆすり満ちて、思ひ嘆く人多かり。冷泉院も聞こし召し嘆く。この人亡せたまはば、院もかならず世を背く御本意遂げたまひてむと、大将の君なども、心を尽くして見たてまつり扱ひたまひて、御修法などは、おほかたのをばさるものにて、取り分きて仕うまつらせたまふ。いささかも思し分く隙には、「聞こゆることを、さも心憂く」とのみ、恨みきこえたまへど、限りありて別れ果てたまはむよりも、目の前にわが心とやつし捨てたまはむ御ありさまを見ては、さらに片時堪ふまじくのみ、惜しく悲しかるべければ、「昔より、みづからぞかかる本意深きを、とまりてさうざうしく思されむ心苦しさに引かれつつ、過ぐすを、さかさまにうち捨てたまはむと思す」とのみ、惜しみきこえたまふに、げにいと頼みがたげに弱りつつ、限りのさまに見えたまふ折々多かるを、いかさまにせむと思し惑ひつつ、宮の御方にも、あからさまに渡りたまはず。御琴どももすさまじくて、皆引き籠められ、院の内の人びとは、皆ある限り二条の院に集ひ参りて、この院には、火を消ちたるやうにて、ただ女どちおはして、人ひとりの御けはひなりけりと見ゆ。

女御の君も渡りたまひて、もろともに見たてまつり扱ひたまふ。「ただにもおはしまさで、もののけなどいと恐ろしきを、早く参りたまひね」と、苦しき御心地にも聞こえたまふ。若宮のいとうつくしうておはしますを見たてまつりたまひても、いみじく泣きたまひて、「おとなびたまはむを、え見たてまつらずなりなむこと。忘れたまひなむかし」とのたまへば、女御、せきあへず悲し

心ゆかせてこそ。いと苦しかりつる日ごろのしるしありて、うしろやすくなりたまひにけり」とて、御琴どもおしやりて大殿籠もりぬ。

対には、例のおはしまさぬ夜は、宵居したまひて、人びとに物語など読ませて聞きたまふ。かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語りどもにも、あだなる男、色好み、二心ある人にかかづらひたる女、かやうなることを言ひ集めたるにも、つひに寄る方ありてこそあめれ、あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな、げにのたまひつるやうに、人より異なる宿世もありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてや止みなむとすらむ、あぢきなくもあるかな、など思ひ続けて、夜更けて大殿籠もりぬる暁方より、御胸を悩みたまふ。人びと見たてまつり扱ひて、「御消息聞こえさせむ」と聞こゆるを、「いと便ないこと」と制したまひて、堪へがたきを押さへて明かしたまひつ。御身もぬるみて、御心地もいと悪しけれど、院もとみに渡りたまはぬほど、かくなむとも聞こえず。

女御の御方より御消息あるに、「かく悩ましくてなむ」と聞こえたまへるに、驚きてそなたより聞こえたまへるに、胸つぶれて、急ぎ渡りたまへるに、いと苦しげにておはす。「いかなる御心地ぞ」とて、探りたてまつりたまへば、いと熱くおはすれば、昨日聞こえたまひし御つつしみの筋など思し合はせたまひて、いと恐ろしく思さる。御粥などこなたに参らせたれど、御覧じも入れず、日一日添ひおはして、よろづに見たてまつり嘆きたまふ。はかなき御くだものをだにいつもの憂くしたまひて、起き上がりたまふこと絶えて、日ごろ経ぬ。いかならむと思し騒ぎて、御祈りども数知らず始めさせたまふ。僧召して、御加持などせさせたまふ。そこところともなく、いみじく苦しうしたまひて、胸は時々おこりつつ患ひたまふさま、堪へがたく苦しげなり。さまさまの御慎しみ限りなけれど、しるしも見えず。重しと見れど、おのづからおこたるけぢめ

りしかば、うちとけては見落とさることやなど、あまりつくろひしほどに、やがて隔たりし仲ぞかし。いとあるまじき名を立ちて、身のあはあはしくなりぬる嘆きを、いみじく思ひしめたまへりしがいとほしく、げに人がらを思ひしも、我罪ある心地して止みにし慰めに、中宮を、かくさるべき御契りとはいひながら、取りたてて、世のそしり人の恨みをも知らず、心寄せたてまつるを、かの世ながらも見直されぬらむ。今も昔も、なほざりなる心のすさびに、いとほしく悔しきことも多くなむ」と、来し方の人の御上、すこしづつのたまひ出でて、「内の御方の御後見は、何ばかりのほどならずとあなづりそめて、心やすきものに思ひしを、なほ心の底見えず、際なく深きところある人になむ。うはべは人になびき、おいらかに見えながら、うちとけぬけしき下に籠もりて、そこはかとなく恥づかしきところこそあれ」とのたまへば、「異人は見ねば知らぬを、これは、まほならねど、おのづからけしき見る折々もあるに、いとうちとけにくく、心恥づかしきありさまするきを、いとたとしへなきうらなさを、いかに見たまふらむ、とつつましかれど、女御はおのづから思し許すらむ、とのみ思ひてなむ」とのたまふ。

さばかりめざましと心置きたまへりし人を、今はかく許して見え交はしなどしたまふも、女御の御ための真心なるあまりぞかし、と思すに、いとありがたければ、「君こそは、さすがに限なきにはあらぬものから、人によりことに従ひ、いとよく二筋に心づかひはしたまひけれ。さらに、ここら見れど、御ありさまに似たる人はなかりけり。いとけしきこそものしたまへ」とほほ笑みて聞こえたまふ。

「宮に、いとよく弾き取りたまへりしことの喜び聞こえむ」とて、夕つ方渡りたまひぬ。我に心置く人やあらむとも思したらずいといたく若びて、ひとへに御琴に心入れておはす。「今は、暇許してうち休ませたまへかし。物の師は

聞こえたまへば、「のたまふやうに、ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、心に堪へぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」とて、残り多げなるけはひ恥づかしげなり。

「まめやかには、いと行く先少なき心地するを、今年もかく知らず顔にて過ぐすは、いとうしろめたくこそ。さきざきも聞こゆること、いかで御許しあらば」と聞こえたまふ。「それはしも、あるまじきことになむ。さてかけ離れたまひなむ世に残りては、何のかひかあらむ。ただかく何となくて過ぐる年月なれど、明け暮れの隔てなきうれしさのみこそ、ますことなくおぼゆれ。なほ思ふさま異なる心のほどを見果てたまへ」とのみ聞こえたまふを、例のことと心やましくて、涙ぐみたまへるけしきを、いとあはれと見たてまつりたまひて、よろづに聞こえ紛らはしたまふ。

「多くはあらねど、人のありさまの、とりどりに口惜しくはあらぬを見知りゆくままに、まことの心ばせおいらかに落ちゐたるこそ、いと難きわざなりけれとなむ、思ひ果てにたる。大将の母君を、幼かりしほどに見そめて、やむごとなくえ避らぬ筋には思ひしを、常に仲よからず、隔てある心地して止みにしこそ、今思へば、いとほしく悔しくもあれ、またわが過ちにのみもあらざりけり、など心ひとつになむ思ひ出づる。うるはしく重りかにて、そのことの飽かぬかな、とおぼゆることもなかりき。ただいとあまり乱れたるところなく、すくすくしく、すこしきかしくやいふべかりけむ、と思ふには頼もしく、見るにはわづらはしかりし人ざまになむ。中宮の御母御息所なむ、さま異に心深くなまめかしき例には、まづ思ひ出でらるれど、人見えにくく苦しかりしさまになむありし。怨むべきふしぞ、げにことわりとおぼゆるふしを、やがて長く思ひつめて深く怨ぜられしこそ、いと苦しかりしか。心ゆるびなく恥づかしくて、我も人もうちたゆみ、朝夕の睦びを交はさむには、いとおつつましきところのあ

る人は、世に久しからぬ例もあなるを、とゆゆしきまで思ひきこえたまふ。さまざまなる人のありさまを見集めたまふままに、取り集め足らひたることは、まことにたぐひあらじ、とのみ思ひきこえたまへり。今年は三十七にぞなりたまふ。見たてまつりたまひし年月のことなども、あはれに思し出でたるついでに、「さるべき御祈りなど、常よりも取り分きて、今年はつつしみたまへ。ものの騒がしくのみありて、思ひいたらぬこともあらむを、なほ思しめぐらして、大きなことどももしたまはば、おのづからせさせてむ。故僧都のものしたまはずなりにたるこそ、いと口惜しけれ。おほかたにてうち頼まむにもいとかしこかりし人を」などのたまひ出づ。

「みづからは、幼くより、人に異なるさまにて、ことごとしく生ひ出でて、今の世のおぼえありさま、来し方にたぐひ少なくなむありける。されどまた、世にすぐれて悲しきめを見る方も、人にはまさりけりかし。まづは、思ふ人にさまざま後れ、残りともれる齡の末にも、飽かず悲しと思ふこと多く、あぢきなくさるまじきことにつけても、あやしくもの思はしく、心に飽かずおぼゆること添ひたる身にて過ぎぬれば、それに代へてや、思ひしほどよりは、今までもながらふるならむとなむ、思ひ知らるる。君の御身には、かの一節の別れより、あなたこなた、もの思ひとて、心乱りたまふばかりのことあらじとなむ思ふ。后といひ、ましてそれより次々は、やむごとなき人といへど、皆かならずやすからぬもの思ひ添ふわぎなり。高き交じらひにつけても、心乱れ、人に争ふ思ひの絶えぬもやすげなきを、親の窓のうちながら過ぐしたまへるやうなる、心やすきことはなし。そのかた、人にすぐれたりける宿世とは思し知るや。思ひの外に、この宮のかく渡りものしたまへるこそは、なま苦しかるべけれど、それにつけては、いとど加ふる心ぎしのほどを、御みづからの上なれば、思し知らずやあらむ。ものの心も深く知りたまふめれば、さりともとなむ思ふ」と

の方は、故大宮の教へきこえたまひしかど、心にもしめたまはざりしほどに、別れたてまつりたまひにしかば、ゆるるかにも弾き取りたまはで、男君の御前にては、恥ぢてさらに弾きたまはず、何ごともおいらかに、うちおほどきたるさまして、子ども扱ひを、暇なく次々したまへば、をかきところもなくおぼゆ。さすがに腹悪しくてももの妬みうちしたる、愛敬づきてうつくしき人ざまにぞものしたまふめる。

院は、対へ渡りたまひぬ。上は、止まりたまひて、宮に御物語など聞こえたまひて、暁にぞ渡りたまへる。日高うなるまで大殿籠れり。「宮の御琴の音はいとうるさくなりけりな。いかが聞きたまひし」と聞こえたまへば、「初めつ方、あなたにてほの聞きしはいかにぞやありしを、いとこよなくなりけり。いかでかは、かく異事なく教へきこえたまはむには」といらへきこえたまふ。「さかし。手を取る取る、おぼつかなからぬ物の師なりかし。これかれにも、うるさくわづらはしくて、暇いるわぎなれば、教へたてまつらぬを、院にも内にも、「琴はさりとも習はしきこゆらむ」とのたまふと聞くがいとほしく、さりともしさばかりのことをだに、かく取り分きて御後見にと預けたまへるしるしには、と思ひ起こしてなむ」など、聞こえたまふついでにも、「昔、世づかぬほどを扱ひ思ひしさま、その世には暇もありがたくて、心のどかに取りわき教へきこゆることなどもなく、近き世にも、何となく次々紛れつつ過ぐして、聞き扱はぬ御琴の音の出で栄えしたりしも、面目ありて、大将のいたくかたぶきおどろきたりしけしきも、思ふやうにうれしくこそありしか」など聞こえたまふ。

かやうの筋も、今はまた、おとなおとなしく宮たちの御扱ひなど取りもちてしたまふさまも、いたらぬことなく、すべて何ごとにつけても、もどかしくたどたどしきこと混じらず、ありがたき人の御ありさまなれば、いとかく具しぬ

ま変はりて、ゆるるかにおもしろく、聞く人ただならず、すずろはしきまで愛敬づきて、輪の手など、すべてさらにいとかどある御琴の音なり。返り声に皆調べ変はりて、律の掻き合はせども、なつかしく今めきたるに、琴は五箇の調べ、あまたの手の中に、心とどめてかならず弾きたまふべき五六の発刺を、いとおもしろく澄まして弾きたまふ。さらにかたほならず、いとおく澄みて聞こゆ。春秋よろづの物に通へる調べにて、通はしわたしつつ弾きたまふ心しらひ、教へきこえたまふさま違へず、いとおくわきまへたまへるを、いとおつくしくおもだたしく思ひきこえたまふ。

この君達のいとうつくしく吹き立てて、切に心入れたるをらうたがりたまひて、「ねぶたくなりいたらむに。今宵の遊びは長くはあらで、はつかなるほどにと思ひつるを、とどめがたき物の音どもの、いづれともなきを、聞き分くほどの耳とからぬたどたどしきに、いたく更けにけり。心なきわざなりや」とて、笙の笛吹く君に、土器さしたまひて、御衣脱ぎてかづけたまふ。横笛の君には、こなたより、織物の細長に袴など、こととしからぬさまに、けしきばかりにて、大将の君には、宮の御方より杯さし出でて、宮の御装束一くだりかづけたてまつりたまふを、おとど、「あやしや。物の師をこそまづはものめかしたまはめ。愁はしきことなり」とのたまふに、宮のおはします御几帳のそばより御笛をたてまつる。うち笑ひたまひて取りたまふ。いみじき高麗笛なり。すこし吹き鳴らしたまへば、皆立ち出でたまふほどに、大将立ち止まりたまひて、御子の持ちたまへる笛を取りて、いみじくおもしろく吹き立てたまへるが、いじめでたく聞こゆれば、いづれもいづれも、皆御手を離れぬものの伝へ伝へ、いと二なくのみあるにてぞ、わが御才のほど、ありがたく思し知られける。

大将殿は、君達を御車に乗せて、月の澄めるにまかでたまふ。道すがら、箏の琴の変はりていみじかりつる音も耳につきて、恋しくおぼえたまふ。わが北

にや、なまなまにまねびて、思ひかなはぬたぐひありけるのち、これを弾く人よからずとかいふ難をつけて、うるさきままに、今はをさをさ伝ふる人なしとか。いと口惜しきことにこそあれ。琴の音を離れては、何ごとをか物を調べ知るべとはせむ。げによろづのこと衰ふるさまはやすくなりゆく世の中に、一人出で離れて、心を立てて、唐土高麗とこの世に惑ひありき、親子を離れむことは、世の中にひがめる者になりぬべし。などか、なのめにて、なほこの道を通はし知るばかりの端をば知りおかざらむ。調べ一つに手を弾き尽くさむことだに、はかりもなきものななり。いはむや、多くの調べ、わづらはしき曲多かるを、心に入りし盛りには、世にありとあり、ここに伝はりたる譜といふものの限りを、あまねく見合はせて、のちのちは師とすべき人もなくてなむ、好み習ひしかど、なほ上りての人には当たるべくもあらじをや。ましてこの後といひては、伝はるべき末もなき、いとあはれになむ」などのたまへば、大将、げにいと口惜しく恥づかし、と思す。

「この御子たちの御中に、思ふやうに生ひ出でたまふものしたまはば、その世になむ、そもさまでながらへとまるやうあらば、いくばくならぬ手の限りも、とどめたてまつるべき。二の宮、今よりけしきありて見えたまふを」などのたまへば、明石の君は、いとおもだたく、涙ぐみて聞きゐたまへり。

女御の君は、箏の御琴をば、上に譲りきこえて、寄り臥したまひぬれば、あづまをおとだの御前に参りて、気近き御遊びになりぬ。葛城遊びたまふ。はなやかにおもしろし。おとど折り返し謡ひたまふ御声、たとへむかたなく愛敬づきめでたし。月やうやうさし上るままに、花の色香もてはやされて、げにいと心にくきほどなり。

箏の琴は、女御の御爪音は、いとらうたげになつかしく、母君の御けはひ加はりて、揺の音深くいみじく澄みて聞こえつるを、この御手づかひは、またさ

騒ぐにやはべらむ、唱歌などいと仕うまつりにくくなむ。和琴は、かの大臣ばかりこそ、かく折につけてこしらへなびかしたる音など、心にまかせて掻き立てたまへるは、いとことにものしたまへ、をさをさ際離れぬものにはべめるを、いとかしこく整ひてこそはべりつれ」とめできこえたまふ。「いとさこととしき際にはあらぬを、わざとうるはしくも取りなさるかな」とて、したり顔にほほ笑みたまふ。「げにけしうはあらぬ弟子どもなりかし。琵琶はしも、ここに口入るべきことまじらぬを、さいへど、物のけはひ異なるべし。おぼえぬ所にて聞き始めたりしに、めづらしき物の声かなとなむおぼえしかど、その折よりは、またこよなく優りにたるをや」とせめて我かしこにかこちなしたまへば、女房などはすこしつきしろふ。

「よろづのこと、道々につけて習ひまねばば、才といふもの、いづれも際なくおぼえつつ、わが心地に飽くべき限りなく、習ひ取らむことはいと難けれど、何かは、そのたどり深き人の、今の世にをさをさなければ、片端をなだらかにまねび得たらむ人、さるかたかどに心をやりてもありぬべきを、琴なむなほわづらはしく手触れにくきものはありける。この琴は、まことに跡のままに尋ねとりたる昔の人は、天地をなびかし、鬼神の心をやはらげ、よろづの物の音のうちに従ひて、悲しび深き者も喜びに変はり、いやしく貧しき者も、高き世に改まり、宝にあづかり、世にゆるさるるたぐひ多かりけり。この国に弾き伝ふる初めつ方まで、深くこの事を心得たる人は、多くの年を知らぬ国に過ぐし、身をなきになして、この琴をまねび取らむと惑ひてだに、し得るは難くなむありける。げにはた、明らかに空の月星を動かし、時ならぬ霜雪を降らせ、雲雷を騒がしたる例、上りたる世にはありけり。かく限りなきものにて、そのままに習ひ取る人のありがたく、世の末なればにや、いづこのそのかみの片端にかはあらむ。されど、なほかの鬼神の耳とどめ、かたぶきそめにけるものなれば

しや、春の朧月夜よ。秋のあはれはた、かうやうなる物の音に、虫の声縊り合はせたる、ただならず、こよなく響き添ふ心地すかし」とのたまへば、大将の君、「秋の夜の隈なき月には、よろづの物とどこほりなきに、琴笛の音も、あきらかに澄める心地はしはべれど、なほことさらに作り合はせたるやうなる空のけしき、花の露も、いろいろ目移ろひ心散りて、限りこそはべれ。春の空のたどたどしき霞の間より、おぼろなる月影に、静かに吹き合はせたるやうには、いかでか。笛の音なども艶に澄みのぼり果てずなむ。女は春をあはれぶと、古き人の言ひ置きはべりける、げにさなむはべりける。なつかしく物のととのほることは、春の夕暮こそことにはべりけれ」と申したまへば、「いな、この定めよ。いにしへより人の分きかねたることを、末の世に下れる人の、えあきらめ果つまじくこそ。物の調べ、曲のものどもはしも、げに律をば次のものにしたるは、さもありかし」などのたまひて、「いかに。ただ今有職のおぼえ高きその人かの人、御前などにてたびたび試みさせたまふに、すぐれたるは数少なくなりためるを、そのこのかみと思へる上手ども、いくばくえまねび取らぬにやあらむ、このかくほのかなる女たちの御中に弾きまぜたらむに、際離るべくこそおぼえね。年ごろ、かく埋れて過ぐすに、耳などもすこしひがひがしくなりにたるにやあらむ、口惜しうなむ。あやしく、人の才、はかなくとりするこども、ものの栄ありてまさる所なる。その御前の御遊びなどに、ひときぎみに選ばるる人びと、それかれといかにぞ」とのたまへば、大将、「それをなむとり申さむと思ひはべりつれど、あきらかならぬ心のままに、およすけてやはと思ひたまふる。上りての世を聞き合はせはべらねばにや、衛門督の和琴、兵部卿宮の御琵琶などをこそ、このころめづらかなる例に引き出ではべめれ。げにかたはらなきを、今宵うけたまはる物の音どもの、皆ひとしく耳おどろきはべるは、なほかくわざともあらぬ御遊びと、かねて思ふたまへたゆみける心の

はれげにおはしける。紅梅の御衣に、御髪のかかりはらるときよらにて、火影の御姿、世になくうつくしげなるに、紫の上は、葡萄染にやあらむ、色濃き小桂、薄蘇芳の細長に御髪のためれるほど、こちたくゆるるかに、大きさなどよきほどに様体あらまほしく、あたりに匂ひ満ちたる心地して、花といはば桜に喩へても、なほものよりすぐれたるけはひことにものしたまふ。

かかる御あたりに、明石はけ圧さるべきを、いとさしもあらず、もてなしなどけしきばみ恥づかしく、心の底ゆかしきさまして、そこはかとなくあてになまめかしく見ゆ。柳の織物の細長に、萌黄にやあらむ、小桂着て、羅の裳のはかなげなる引きかけて、ことさら卑下したれど、けはひ思ひなしも心にくくあなづらはしからず。高麗の青地の錦の端さしたる茵に、まほにもゐで、琵琶をうち置きて、ただけしきばかり弾きかけて、たをやかに使ひなしたる撥のもてなし、音を聞くよりも、またありがたくなつかしくて、五月待つ花橘の、花も実も具しておし折れる薰りおぼゆ。

これもかれも、うちとけぬ御けはひどもを聞き見たまふに、大将も、いと内ゆかしくおぼえたまふ。対の上の、見し折よりもねびまさりたまへらむありさまゆかしきに、静心もなし。宮をば、今すこしの宿世及ばましかば、わがものにても見たてまつりてまし、心のいとぬるきぞ悔しきや、院はたびたびさやうにおもむけて、しりう言にもものたまはせけるを、とねたく思へど、すこし心やすき方に見えたまふ御けはひに、あなづりきこゆとはなけれど、いとしも心は動かざりけり。この御方をば、何ごとも思ひ及ぶべき方なく、気遠くて、年ごろ過ぎぬれば、いかでかただおほかたに、心寄せあるさまをも見えたてまつらむとばかりの、口惜しく嘆かしきなりけり。あながちに、あるまじくおほけなき心地などは、さらにものしたまはず、いとよくもてをさめたまへり。

夜更けゆくけはひ冷やかなり。臥待の月はつかにさし出でたる、「心もとな

掻き返したる音のめづらしく今めきて、さらにこのわざとある上手どもの、おどろおどろしく掻き立てたる調べ調子に劣らず、にぎははしく、大和琴にもかかる手ありけりと、聞き驚かる。深き御労のほどあらはに聞こえておもしろきに、おとど御心落ちみて、いとありがたく思ひきこえたまふ。箏の御琴は、ものの隙々に、心もとなく漏り出づる物の音がらにて、うつくしげになまめかしくのみ聞こゆ。琴は、なほ若き方なれど、習ひたまふ盛りなれば、たどたどしからず、いとよくものに響きあひて、優になりにつける御琴の音かな、と大将聞きたまふ。拍子とりて唱歌したまふ。院も時々扇うち鳴らして、加へたまふ御声、昔よりもいみじくおもしろく、すこしふつつかにもものしきけ添ひて聞こゆ。大将も、声いとすぐれたまへる人にて、夜の静かになりゆくまゝに、言ふ限りなくなつかしき夜の御遊びなり。

月心もとなきころなれば、灯籠こなたかなたに懸けて、火よきほどに灯させたまへり。宮の御方を覗きたまへれば、人よりけに小さくうつくしげにて、ただ御衣のみある心地す。匂ひやかなる方は後れて、ただいとあてやかにをかしく、二月の中の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたらむ心地して、鶯の羽風にも乱れぬべく、あえかに見えたまふ。桜の細長に、御髪は左右よりこぼれかかりて、柳の糸のさましたり。

これこそは、限りなき人の御ありさまなめれ、と見ゆるに、女御の君は同じやうなる御なまめき姿の、今すこし匂ひ加はりて、もてなしけはひ心にくく、よしあるさましたまひて、よく咲きこぼれたる藤の花の、夏にかかりて、かたはらに並ぶ花なき朝ぼらけの心地ぞしたまへる。さるは、いとふくらかなるほどになりたまひて、悩ましくおぼえたまひければ、御琴もおしやりて、脇息におしかかりたまへり。ささやかになよびかかりたまへるに、御脇息は例のほどなれば、およびたる心地して、ことさらに小さく作らばやと見ゆるぞ、いとあ

と思す。女御は、常に上の聞こし召すにも、物に合はせつつ弾きならしたまへれば、うしろやすきを、和琴こそ、いくばくならぬ調べなれど、あと定まりたることなくて、なかなか女のたどりぬべけれ、春の琴の音は、皆掻き合はするものなるを、乱るるところもや、となまいとほしく思す。

大将、いといたく心懸想して、御前のこととしくうるはしき御試みあらむよりも、今日の心づかひはことにまさりておぼえたまへば、あざやかなる御直衣、香にしみたる御衣ども、袖いたくたきしめて、引きつくろひて参りたまふほど、暮れ果てにけり。ゆゑあるたそかれ時の空に、花は去年の古雪思ひ出でられて、枝もたわむばかり咲き乱れたり。ゆるるかにうち吹く風に、えならず匂ひたる御簾の内の香りも吹き合はせて、鶯誘ふつまにしつべく、いみじき御殿のあたりの匂ひなり。御簾の下より、箏の御琴のすそすこしさし出でて、「軽々しきやうなれど、これが緒調へて調べ試みたまへ。ここにまた疎き人に入るべきやうもなきを」とのたまへば、うちかしこまりて賜はりたまふほど、用意多くめやすくて、忝越調の声に発の緒を立てて、ふとも調べやらでさぶらひたまへば、「なほ掻き合はせばかりは、手一つ、すさまじからでこそ」とのたまへば、「さらに今日の御遊びのさしいらへに交じらふばかりの手づかひなむ、おぼえずはべりける」とけしきばみたまふ。「さもあることなれど、女樂にえことまぜでなむ逃げにけると、伝はらむ名こそ惜しけれ」とて笑ひたまふ。調べ果てて、をかしきほどに掻き合はせばかり弾きて、参らせたまひつ。この御孫の君達の、いとうつくしき宿直姿どもにて、吹き合はせたる物の音ども、まだ若けれど、生ひ先ありて、いみじくをかしげなり。

御琴どもの調べども調ひ果てて、掻き合はせたまへるほど、いづれとなき中に、琵琶はすぐれて上手めき、神さびたる手づかひ、澄み果てておもしろく聞こゆ。和琴に、大将も耳とどめたまへるに、なつかしく愛敬づきたる御爪音に、

童べは、かたちすぐれたる四人、赤色に桜の汗衫、薄色の織物の相、浮紋の表の袴、紅の擣ちたる、さまざまてなしすぐれたる限りを召したり。女御の御方にも、御しつらひなどいとどあらたまれるころのくもりなきに、おのおの挑ましく尽くしたるよそほひども鮮やかに二なし。童は、青色に蘇芳の汗衫、唐綾の表の袴、相は山吹なる唐の綺を、同じさまに調べたり。明石の御方は、こととしからで、紅梅二人、桜二人、青磁の限りにて、相濃く薄く、擣目などえならで、着せたまへり。宮の御方にも、かく集ひたまふべく聞きたまひて、童女の姿ばかりは、ことにつくろはせたまへり。青丹に柳の汗衫、葡萄染の相など、ことに好ましくめづらしきさまにはあらねど、おほかたのけはひのいかめしく気高きことさへいと並びなし。

廂の中の御障子を放ちて、こなたかなた御几帳ばかりをけぢめにて、中間は、院のおはしますべき御座よそひたり。今日の拍子合はせには童べを召さむとて、右の大殿の三郎、かむの君の御腹の兄君、笙の笛、左大将の御太郎、横笛と吹かせて、簀子にさぶらはせたまふ。内には、御茵ども並べて、御琴ども参り渡す。秘したまふ御琴ども、うるはしき紺地の袋どもに入れたる取り出でて、明石の御方に琵琶、紫の上に和琴、女御の君に箏の御琴、宮には、かくこととしき琴はまだえ弾きたまはずやと、あやふくて、例の手馴らしたまへるをぞ、調べてたてまつりたまふ。

「箏の御琴は、ゆるぶとなけれど、なほかく物に合はする折の調べにつけて、琴柱の立処乱るるものなり。よくその心しらひ調べべきを、女はえ張りしづめじ。なほ大将をこそ召し寄せつべかめれ。この笛吹ども、まだいと幼げにて、拍子調べむ頼み強からず」と笑ひたまひて、「大将こなたに」と召せば、御方々恥づかしく、心づかひしておはす。明石の君を放ちては、いづれも皆捨てがたき御弟子どもなれば、御心加へて、大将の聞きたまはむに、難なかるべく

は便なく思されて、すこしほど過ごしたまふ。二月十余日と定めたまひて、樂人、舞人など参りつつ、御遊び絶えず。「この対に常にゆかしくする御琴の音、いかでかの人びとの箏、琵琶の音も合はせて、女樂試みさせむ。ただ今のものの上手どもこそ、さらにこのわたりの人びとの御心しらひどもにまさらね。はかばかしく伝へ取りたることはをさをさなけれど、何ごともいかで心に知らぬことあらじとなむ、幼きほどに思ひしかば、世にあるものの師といふ限り、また高き家々のさるべき人の伝へどもをを残さず試みし中に、いと深く恥づかしきかなと、おぼゆる際の人なむなかりし。そのかみよりも、またこのころの若き人びとの、されよしめき過ぐすに、はた浅くなりたるべし。琴はた、ましてさらにまねぶ人なくなりたりとか。この御琴の音ばかりだに伝へたる人をさをさあらじ」とのたまへば、何心なくうち笑みて、うれしく、かくゆるしたまふほどになりける、と思す。二十一二ばかりになりたまへど、なほいといみじく片なりにきびはなる心地して、細くあえかにうつくしくのみ見えたまふ。「院にも見えたてまつりたまはで年経ぬるを、ねびまさりたまひにけり、と御覧ずばかり、用意加へて見えたてまつりたまへ」と、ことに触れて教へきこえたまふ。げにかかる御後見なくては、ましていはけなくおはします御ありさま、隠れなからましと、人びとも見たてまつる。

正月二十日ばかりになれば、空もをかしきほどに、風ぬるく吹きて、御前の梅も盛りになりゆく。おほかたの花の木どもも皆けしきばみ、霞みわたりにけり。「月たたば、御いそぎ近くもの騒がしからむに、搔き合はせたまはむ御琴の音も、試楽めきて人言ひなさむを、このころ静かなるほどに試みたまへ」とて、寝殿に渡したてまつりたまふ。御供に、我も我もとのゆかしがりて、参う上らまほしがれど、こなたに遠きをば選りとどめさせたまひて、すこしねびたれど、よしある限り選りてさぶらはせたまふ。

もなくて参りたまへらむついでに、聞こし召さむと、ゆるしなくゆかしがらせたまはむは、いとはしたなかるべきことにも、といとほしく思して、このころぞ、御心とどめて教へきこえたまふ。

調べことなる手、二つ三つ、おもしろき大曲どもの、四季につけて変はるべき響き、空の寒さぬるさをとのへ出でて、やむごとなかるべき手の限りを、取り立てて教へきこえたまふに、心もとなくおはするやうなれど、やうやう心得たまふままに、いとよくなりたまふ。「昼はいと人しげく、なほ一たびもし按ずる暇も心あわたしければ、夜々なむ静かにことの心もしめたてまつるべき」とて、対にも、そのころは御暇聞こえたまひて、明け暮れ教へきこえたまふ。

女御の君にも、対の上にも、琴は習はしたてまつりたまはざりければ、この折、をさをさ耳馴れぬ手ども弾きたまふらむを、ゆかしと思して、女御も、わざとありがたき御暇を、ただしばし、と聞こえたまひてまかでたまへり。御子二所おはするを、またもけしきばみたまひて、五月ばかりにぞなりたまへれば、神事などにことづけておはしますなりけり。十一日過ぐしては、参りたまふべき御消息うちしきりあれど、かかるついでにかくおもしろき夜々の御遊びをうらやましく、などて我に伝へたまはざりけむ、とつらく思ひきこえたまふ。

冬の夜の月は、人に違ひてめでたまふ御心なれば、おもしろき夜の雪の光に、折に合ひたる手ども弾きたまひつつ、さぶらふ人びとも、すこしこの方にはのめきたるに、御琴どもとりどりに弾かせて、遊びなどしたまふ。年の暮れつ方は、対などにはいそがしく、こなたかなたの御いとなみに、おのづから御覧じ入るることどもあれば、「春のうららかならむ夕べなどに、いかでこの御琴の音聞かむ」とのたまひわたるに、年返りぬ。

院の御賀、まづおほやけよりせさせたまふことどもこちたきに、さしあひて

おとども、「げにさるべきことなり。かかる御けしきなからむにてだに、進み参りたまふべきを、ましてかう待ちきこえたまひけるが心苦しきこと」と、参りたまふべきこと思しもうく。

ついでなくすさまじきさまにてやは、はひ渡りたまふべき、何わざをしてか御覽ぜさせたまふべき、と思しめぐらす。このたび足りたまはむ年、若菜など調じてや、と思して、さまさまの御法服のこと、いもひの御まうけのしつらひ、何くれと、さまことに変はれることどもなれば、人の御心しつらひども入りつつ思しめぐらす。

いにしへも遊びの方に御心とどめさせたまへりしかば、舞人、楽人などを心に定め、すぐれたる限りをとのへさせたまふ。右の大殿の御子ども二人、大将の御子、典侍腹の加へて三人、まだ小さき、七つより上のは、皆殿上せさせたまふ。兵部卿宮の童孫王、すべてさるべき宮たちの御子ども、家の子の君たち、皆選び出でたまふ。殿上の君達も、かたちよく、同じき舞の姿も心ことになるべきを定めて、あまたの舞のまうけをせさせたまふ。いみじかるべきたびのこととて、皆人心を尽くしたまひてなむ。道々のものの師、上手、暇なきころなり。

宮は、もとより琴の御琴をなむ習ひたまひけるを、いと若くて、院にもひき別れたてまつりたまひしかば、おぼつかなく思して、「参りたまはむついでに、かの御琴の音なむ聞かまほしき。さりとて琴ばかりは弾き取りたまひつらむ」としりうごとに聞こえたまひけるを、内にも聞こし召して、「げにさりとてけはひことならむかし。院の御前にて、手尽くしたまはむついでに、参り来て聞かばや」などのたまはせけるを、おとどの君は伝へ聞きたまひて、年ごろ、さりぬべきついでごとには教へきこゆることもあるを、そのけはひはげにまさりたまひにたれど、まだ聞こし召しどころある、もの深き手には及ばぬを、何心

だ一所の御もてなしに、人には劣らねど、あまり年積もりなば、その御心ばへもつひに衰へなむ、さらむ世を見果てぬさきに、心と背きにしがな、とたゆみなく思しわたれど、さかしきやうにや思さむとつつまれて、はかばかしくもえ聞こえたまはず。内の帝さへ御心寄せことに聞こえたまへば、おろかに聞かれたてまつらむいとほしくて、渡りたまふこと、やうやう等しきやうになりゆく。さるべきこと、ことわりとは思ひながら、さればよ、とのみやすからず思されけれど、なほつれなく同じさまにて過ぐしたまふ。春宮の御さしつぎの女一の宮を、こなたに取り分きて、かしづきたてまつりたまふ。その御扱ひになむ、つれづれなる御夜がれのほども慰めたまひける。いづれも分かず、うつくしくかなしと思ひきこえたまへり。

夏の御方は、かくとりどりなる御孫扱ひをうらやみて、大将の君の典侍腹の君を、切に迎へてぞかしづきたまふ。いとをかしげにて、心ばへも、ほどよりはされおよすけたれば、おとどの君もらうたがりたまふ。少なき御嗣と思しかど、末に広ごりて、こなたかなたいと多くなり添ひたまふを、今はただこれをうつくしみ扱ひたまひてぞ、つれづれも慰めたまひける。

右の大殿の参り仕うまつりたまふこと、いにしへよりもまさりて親しく、今は北の方もおとなび果てて、かの昔のかけかけしき筋思ひ離れたまふにや、さるべき折も渡りまうでたまふ。対の上にも御対面ありて、あらまほしく聞こえ交はしたまひけり。姫宮のみぞ、同じさまに、若くおほどきておはします。女御の君は、今は公さまに思ひ放ちきこえたまひて、この宮をばいと心苦しく幼からむ御むすめのやうに、思ひはぐくみたてまつりたまふ。

朱雀院の、今はむげに世近くなりぬる心地してももの心細きを、さらにこの世のこと顧みじと思ひ捨つれど、対面なむ今一たびあらまほしきを、もし恨み残りもこそすれ、こととしきさまならで渡りたまふべく聞こえたまひければ、

過ぎにたる神樂おもてどもの、おのが顔をば知らで、おもしろきことに心はしみて、庭火も影しめりたるに、なほ「万歳万歳」と、桺葉を取り返しつつ祝ひきこゆる御世の末、思ひやるぞいとどしきや。よろづのこと飽かずおもしろきままに、千夜を一夜になさまほしき夜の、何にもあらで明けぬれば、返る波にきほふも口惜しく、若き人びと思ふ。

松原にはるばると立て続けたる御車どもの、風にうちなびく下簾の隙々も、常磐の蔭に花の錦を引き加へたと見ゆるに、袍の色々けぢめおきて、をかしき懸盤取り続きて、もの参りわたすをぞ、下人などは目につきて、めでたしとは思へる。尼君の御前にも浅香の折敷に、青鈍の表折りて、精進物を参るとて、「めざましき女の宿世かな」とおのがじしはしりうごちけり。

詣でたまひし道は、ことごとしくて、わづらはしき神宝、さまざまに所狭げなりしを、帰さはよろづの逍遙を尽くしたまふ。言ひ続くるもうるさくむつかしきことどもなれば。かかる御ありさまをも、かの入道の、聞かず見ぬ世にかけ離れたうべるのみなむ、飽かざりける。難きことなりかし、交じらはましも見苦しくや。世の中の人、これを例にて、心高くなりぬべきころなめり。よろづのことにつけて、めであさみ、世の言種にて、「明石の尼君」とぞ、幸ひ人に言ひける。かの致仕の大殿の近江の君は双六打つ時の言葉にも、「明石の尼君、明石の尼君」とぞ、賽は乞ひける。

入道の帝は、御行なひをいみじくしたまひて、内の御ことをも聞き入れたまはず、春秋の行幸になむ、昔思ひ出でられたまふこともまじりける。姫宮の御ことをのみぞ、なほえ思し放たで、この院をばなほおほかたの御後見に思ひきこえたまひて、うちうちの御心寄せあるべく奏せさせたまふ。二品になりたまひて、御封などまさる。いよいよはなやかに御勢ひ添ふ。

対の上、かく年月に添へてかたがたにまさりたまふ御おぼえに、わが身はた

御畳紙に書きたまへり。尼君うちしほたる。かかる世を見るにつけても、かの浦にて、今はと別れたまひしほど、女御の君のおはせしありさまなど思ひ出づるも、いとかたじけなかりける身の宿世のほどを思ふ。世を背きたまひし人も恋しく、さまざまにもの悲しきを、かつはゆゆしと言忌して、

住の江をいけるかひある渚とは年経る尼も今日や知るらむ

遅くは便なからむと、ただうち思ひけるままなりけり。

昔こそまづ忘れね住吉の神のしるしを見るにつけても

と独りごちけり。

夜一夜遊び明かしたまふ。二十日の月はるかに澄みて、海の面おもしろく見えわたるに、霜のいとこちたく置きて、松原も色まがひて、よろづのことぞぞろ寒く、おもしろさもあはれさも立ち添ひたり。対の上、常の垣根のうちながら、時々につけてこそ、興ある朝夕の遊びに耳古り目馴れたまひけれ、御門より外の物見をさをさしたまはず、ましてかく都のほかのありきは、まだ慣らひたまはねば、珍しくをかしと思さる。

住の江の松に夜深く置く霜は神の掛けたる木綿鬘かも

篁の朝臣の、「比良の山さへ」と言ひける雪の朝を思しやれば、祭の心うけたまふしるしにやと、いよいよ頼もしくなむ。女御の君、

神人の手に取りもたる榊葉に木綿かけ添ふる深き夜の霜

中務の君、

祝子が木綿うちまがひ置く霜はげにいちじるき神のしるしか

次々数知らず多かりけるを、何せむにかは聞きおかむ。かかるをりふしの歌は、例の上手めきたまふ男たちも、なかなか出で消えして、松の千歳より離れて、今めかしきことなければ、うるさくてなむ。

ほのぼのと明けゆくに、霜はいよいよ深くて、本末もたどたどしきまで酔ひ

ありさま、言へばさらなり。さるは、「尼君をば、同じくは、老の波の皺延ぶばかりに、人めかしくて詣でさせむ」と、院はのたまひけれど、「このたびは、かくおほかたの響きに立ち交じらむもかたはらいたし。もし思ふやうならむ世の中を待ち出でたらば」と、御方はしづめたまひけるを、残りの命うしろめたくて、かつがつものゆかしがりて、慕ひ参りたまふなりけり。さるべきにて、もとよりかく匂ひたまふ御身どもよりも、いみじかりける契り、あらはに思ひ知らるる人の御ありさまなり。

十月中の十日なれば、神の斎垣にはふ葛も色変はりて、松の下紅葉など音にのみ秋を聞かぬ顔なり。こととしき高麗唐土の樂よりも、東遊の耳馴れたるは、なつかしくおもしろく、波風の声に響きあひて、さる木高き松風に吹き立てたる笛の音も、ほかにて聞く調べには変はりて身にしみ、御琴に打ち合はせたる拍子も、鼓を離れて調べとりたるかた、おどろおどろしからぬも、なまめかしくすごうおもしろく、所からはまして聞こえけり。山藍に摺れる竹の節は、松の緑に見えまがひ、かざしの色々は、秋の草に異なるけぢめ分かれで、何ごとにも目のみまがひいろふ。求子果つる末に、若やかなる上達部は肩ぬぎて下りたまふ。匂ひもなく黒き袍に、蘇芳襲の、葡萄染の袖を、にはかに引きほころばしたるに、紅深き袂の袂の、うちしぐれたるにけしきばかり濡れたる、松原をば忘れて、紅葉の散るに思ひわたさる。見るかひ多かる姿どもに、いと白く枯れたる萩を高やかにかざして、ただ一返り舞ひて入りぬるは、いとおもしろく飽かずぞありける。

おとど、昔のことと思し出でられ、中ごろ沈みたまひし世のありさまも、目の前のやうに思さるるに、その世のこと、うち乱れ語りたまふべき人もなければ、致仕の大臣をぞ恋しく思ひきこえたまひける。入りたまひて、二の車に忍びて、

誰れかまた心を知りて住吉の神代を経たる松にこと問ふ

との春秋の神楽に、かならず長き世の祈りを加へたる願ども、げにかかる御勢ひならでは、果たしたまふべきこととも思ひおきてざりけり。ただ走り書きたる趣きの、才々しくはかばかしく、仏神も聞き入れたまふべき言の葉明らかなり。いかでさる山伏の聖心に、かかることどもを思ひよりけむと、あはれにおほけなくも御覧ず。さるべきにて、しばしかりそめに身をやつしける、昔の世の行なひ人にやありけむ、など思しめぐらすに、いとど軽々しくも思されざりけり。

このたびは、この心をば表はしたまはず、ただ院の御物詣にて出で立ちたまふ。浦伝ひのもの騒がしかりしほど、そこらの御願ども、皆果たし尽くしたまへれども、なほ世の中にかくおはしまして、かかるいろいろの栄えを見たまふにつけても、神の御助けは忘れがたくて、対の上も具しきこえさせたまひて、詣でさせたまふ響き世の常ならず。いみじくことども削ぎ捨てて、世の煩ひあるまじくと省かせたまへど、限りありければ、めづらかによそほしくなむ。

上達部も、大臣二所をおきたてまつりては、皆仕うまつりたまふ。舞人は、衛府の次将どもの、かたちきよげに丈だち等しき限りを選らせたまふ。この選びに入らぬをば、恥に愁へ嘆きたる好き者どもありけり。陪従も、石清水、賀茂の臨時の祭などに召す人びとの、道々のことにすぐれたる限りを整へさせたまへり。加はりたる二人なむ、近衛府の名高き限りを召したりける。御神楽の方には、いと多く仕うまつれり。内、春宮、院の殿上人、方々に分かれて、心寄せ仕うまつる。数も知らず、いろいろに尽くしたる上達部の御馬鞍、馬副、隨身、小舎人童、次々の舎人などまで、整へ飾りたる見物、またなきさまなり。女御殿、対の上は、一つに奉りたり。次の御車には明石の御方、尼君忍びて乗りたまへり。女御の御乳母、心知りにて乗りたり。方々のひとだまひ、上の御方の五つ、女御殿の五つ、明石の御あかれの三つ、目もあやに飾りたる装束

思せど、人にのたまひあはせぬことなれば、いぶせくなむ。

春宮の女御は、御子たちあまた数添ひたまひて、いとど御おぼえ並びなし。源氏のうち続き後にゐたまふべきことを、世人飽かず思へるにつけても、冷泉院の後は、ゆゑなくて、あながちにかくしおきたまへる御心を思すに、いよいよ六条院の御ことを、年月に添へて、限りなく思ひきこえたまへり。

院の帝、思し召ししやうに、御幸も所狭からで、渡りたまひなどしつつ、かくてしもげにめでたくあらまほしき御ありさまなり。

姫宮の御ことは、帝、御心とどめて思ひきこえたまふ。おほかたの世にも、あまねくもてかしづかれたまふを、対の上の御勢ひにはえまさりたまはず。年月経るままに、御仲いとうるはしく睦びきこえ交はしたまひて、いささか飽かぬことなく、隔ても見えたまはぬものから、「今は、かうおほぞうの住まひならで、のどやかに行なひをもとなむ思ふ。この世はかばかりと見果てつる心地する齡にもなりにけり。さりぬべきさまに思し許してよ」と、まめやかに聞こえたまふ折々あるを、「あるまじくつらき御ことなり。みづから深き本意あることなれど、とまりてさうざうしくおぼえたまひ、ある世に変はらむ御ありさまの、うしろめたさによりこそながらふれ。つひにそのこと遂げなむ後に、ともかくも思しなれ」などのみ、妨げきこえたまふ。

女御の君、ただこなたをまことの御親にもてなしきこえたまひて、御方は、隠れがの御後見にて、卑下しものしたまへるしもぞ、なかなか行く先頼もしげにめでたかりける。尼君も、ややもすれば、堪へぬよろこびの涙、ともすれば落ちつつ、目をさへ拭ひただして、命長き、うれしげなる例になりてものしたまふ。

住吉の御願かつがつ果たしたまはむとて、春宮女御の御祈りに詣でたまはむとて、かの箱開けて御覧ずれば、さまざまのいかめしきことども多かり。年ご

なほはかなき心のすさびは絶えざりしかど、かう厳しきもの怨じはことになかりしものを、心づきなく、いとど昔を恋ひきこえたまひつつ、故里にうち眺めがちにのみおはします。さ言ひつつも、二年ばかりになりぬれば、かかる方に目馴れて、たださる方の御仲にて過ぐしたまふ。

はかなくて、年月もかさなりて、内の帝、御位に即かせたまひて、十八年にならせたまひぬ。「嗣の君とならせたまふべき御子おはしまさず、ものの栄なきに、世の中はかなくおぼゆるを、心やすく思ふ人びとも対面し、私ざまに心をやりて、のどかに過ぎまほしくなむ」と、年ごろ思しのたまはせつるを、日ごろいと重く悩ませたまふことありて、にはかに下りみさせたまひぬ。世の人、飽かず盛りの御世を、かく逃れたまふこと、と惜しみ嘆けど、春宮もおとなびさせたまひにたれば、うち嗣ぎて、世の中の政事など、ことに変はるけぢめもなかりけり。

太政大臣、致仕の表たてまつりて、籠もりゐたまひぬ。「世の中の常なきにより、かしこき帝の君も位を去りたまひぬるに、年深き身の冠を掛けむ、何か惜しからむ」と思しのたまひて、左大将、右大臣になりたまひてぞ、世の中の政事仕うまつりたまひける。

女御の君は、かかる御世をも待ちつけたまはで、亡せたまひにければ、限りある御位を得たまへれど、ものの後ろの心地してかひなかりけり。六条の女御の御腹の一の宮坊にゐたまひぬ。さるべきこととかねて思ひしかど、さしあたりてはなほめでたく、目おどろかるるわざなりけり。右大将の君、大納言になりたまひぬ。いよいよあらまほしき御仲らひなり。

六条院は、下りゐたまひぬる冷泉院の御嗣おはしまさぬを、飽かず御心のうちに思す。同じ筋なれど、思ひ悩ましき御ことならで過ぐしたまへるばかりに、罪は隠れて、末の世まではえ伝ふまじかりける御宿世、口惜しくさうざうしく

ことに従はずとて、おろかに見捨てられためれば、いとなむ心苦しき」とて、御しつらひをも、立ちゐる御手づから御覧じ入れ、よろづにかたじけなく御心に入れたまへり。

宮は、亡せたまひにける北の方を、世とともに恋ひきこえたまひて、ただ昔の御ありさまに似たてまつりたらむ人を見む、と思しけるに、悪しくはあらねど、さま変はりてぞものしたまひける、と思すに、口惜しくやありけむ、通ひたまふさまいとの憂げなり。大宮、いと心づきなきわざかな、と思し嘆きたり。母君も、さこそひがみたまへれど、うつし心出で来る時は、口惜しく憂き世と思ひ果てたまふ。大将の君も、さればよ、いたく色めきたまへる親王をと、はじめよりわが御心に許したまはざりしことなればにや、ものしと思ひたまへり。

かむの君も、かく頼もしげなき御さまを近く聞きたまふには、さやうなる世の中を見ましかば、こなたかなたにかに思し見たまはましなど、なまをかしくもあはれにも思し出でけり。そのかみも、気近く見聞こえむとは思ひ寄らざりきかし、ただ情け情けしう心深きさまにのたまひわたりしを、あへなくあはつけきやうにや聞き落としたまひけむと、いと恥づかしく、年ごろも思しわたることなれば、かかるあたりにて聞きたまはむことも、心づかひせらるべく、なと思す。

これよりも、さるべきことは扱ひきこえたまふ。せうとの君たちなどして、かかる御けしきも知らず顔に、憎からず聞こえまつはしなどするに、心苦しくて、もて離れたる御心はなきに、大北の方といふさがな者ぞ、常に許しなく怨じきこえたまふ。「親王たちは、のどかに二心なくて見たまはむをだにこそ、はなやかならぬ慰めには思ふべけれ」とむつかりたまふを、宮も、漏り聞きたまひては、いと聞きならはぬことかな、昔いとあはれと思ひし人をおきても、

許したまはず、「この君をだに人笑へならぬさまにて見む」と思しのたまふ。親王の御おぼえいとやむごとなく、内にも、この宮の御心寄せいとこよなくて、このことと奏したまふことをば、え背きたまはず、心苦しきものに思ひきこえたまへり。おほかたも今めかしくおはする宮にて、この院、大殿にさしつぎたてまつりては、人も参り仕うまつり、世人も重く思ひきこえけり。大将も、さる世のおもしとなりたまふべき下形なれば、姫君の御おぼえ、などてかは軽くはあらむ。聞こえ出づる人びと、ことに触れて多かれど、思しも定めず。衛門督を、さもけしきばまば、と思すべかめれど、猫には思ひ落としたてまつるにや、かけても思ひ寄らぬぞ口惜しかりける。母君の、あやしくなほひがめる人にて、世の常のありさまにもあらずもて消ちたまへるを、口惜しきものに思して、継母の御あたりをば、心つけてゆかしく思ひて、今めきたる御心ぎまにぞものしたまひける。

兵部卿宮、なほ一所のみおはして、御心につきて思しけることどもは皆違ひて、世の中もすさまじく、人笑へに思さるるに、さてのみやはあまえて過ぐすべきと思して、このわたりにけしきばみ寄りたまへれば、大宮、「何かは。かしづかむと思はむ女子をば、宮仕へに次ぎては、親王たちにこそは見せたてまつらめ。ただ人のすくよかなほなほしきのみ、今の世の人のかしこくする、品なきわぎなり」とのたまひて、いたくも悩ましたてまつりたまはず、受け引き申したまひつ。親王、あまり怨みどころなきを、さうぎうしと思せど、おほかたのあなづりにくきあたりなれば、えしも言ひすべしたまはで、おはしましそめぬ。いと二なくかしづききこえたまふ。

大宮は、女子あまたものしたまひて、「さまぎまもの嘆かしき折々多かるに、物懲りしぬべけれど、なほこの君のことの思ひ放ちがたくおぼえてなむ。母君は、あやしきひがものに、年ごろに添へてなりまさりたまふ。大将はた、わが

「げにをかしきさましたりけり。心なむまだなつきがたきは、見馴れぬ人を知るにやあらむ。ここなる猫どもことに劣らずかし」とのたまへば、「これは、さるわきまへ心もをさをさはべらぬものなれど、その中にも心かしこきは、おのづから魂はべらむかし」など聞こえて、「まさるどもさぶらふめるを、これはしばし賜はり預からむ」と申したまふ。心のうちに、あながちにをこがましく、かつはおぼゆる。

つひにこれを探ね取りて、夜もあたり近く臥せたまふ。明け立てば、猫のかしづきをして、撫で養ひたまふ。人氣遠かりし心もいとよく馴れて、ともすれば衣の裾にまつはれ、寄り臥し睦るるを、まめやかにうつくし、と思ふ。いとにかく眺めて、端近く寄り臥したまへるに、来て、「ねうねう」といとうたげに鳴けば、かき撫でて、うたてもすすむかな、とほほ笑まる。

「恋ひわぶる人のかたみと手ならせばなれよ何とて鳴く音なるらむこれも昔の契りにや」と、顔を見つつのたまへば、いよいようたげに鳴くを、懷に入れて眺めゐたまへり。御達などは、「あやしくにはかなる猫のときめくかな。かやうなるもの見入れたまはぬ御心に」と、とがめけり。宮より召すにも参らせず、取りこめて、これを語らひたまふ。

左大将殿の北の方は、大殿の君たちよりも、右大将の君をば、なほ昔のままに疎からず思ひきこえたまへり。心ばへのかどかどしく気近くおはする君にて、対面したまふ時々も、こまやかに隔てたるけしきなくもてなしたまへれば、大将も、淑景舎などの疎々しく及びがたげなる御心ぎまのあまりなるに、さま異なる御睦びにて思ひ交はしたまへり。

男君、今はまして、かのはじめの北の方をもて離れ果てて、並びなくもてかしづきこえたまふ。この御腹には、男君達の限りなれば、さうざうしとて、かの真木柱の姫君を得て、かしづかまほしくしたまへど、祖父宮など、さらに

猫をだに得てしがな、思ふこと語らふべくはあらねど、かたはら寂しき慰めにもなつけむ、と思ふに、もの狂ほしく、いかでかは盗み出でむと、それさへぞ難きことなりける。

女御の御方に参りて、物語など聞こえ紛らはし試みる。いと奥深く、心恥づかしき御もてなしにて、まほに見えたまふこともなし。かかる御仲らひにだに氣遠くならひたるを、ゆくりかにあやしくはありしわざぞかし、とはさすがにうちおぼゆれど、おぼろけにしめたるわが心から、浅くも思ひなされず。

春宮に参りたまひて、論なう通ひたまへるところあらむかしと、目とどめて見たてまつるに、匂ひやかになどはあらぬ御かたちなれど、さばかりの御ありさま、はたいと異にて、あてになまめかしくおはします。

内の御猫のあまた引き連れたりけるはらからどもの、所々にあかれて、この宮にも参れるが、いとをかしげにて歩くを見るに、まづ思ひ出でらるれば、「六条の院の姫宮の御方にはべる猫こそ、いと見えぬやうなる顔して、をかしうはべしか。はつかになむ見たまへし」と啓したまへば、わざとらうたくせさせたまふ御心にて、詳しく問はせたまふ。「唐猫の、ここのに違へるさましてなむはべりし。同じやうなるものなれど、心をかしく人馴れたるは、あやしくなつかしきものになむはべる」など、ゆかしく思さるばかり聞こえなしたまふ。

聞こし召しおきて、桐壺の御方より伝へて、聞こえさせたまひければ、参らせたまへり。げにいうつくしげなる猫なりけり、と人びと興ずるを、衛門督は、尋ねむと思したりき、と御けしきを見おきて、日ごろ経て参りたまへり。童なりしより、朱雀院の取り分きて思し使はせたまひしかば、御山住みに後れきこえては、またこの宮にも親しう参り、心寄せきこえたり。御琴など教へきこえたまふとて、「御猫どもあまた集ひはべりにけり。いづら、この見し人は」と尋ねて見つけたまへり。いとらうたくおぼえてかき撫でてゐたり。宮も、

ことわりとは思へども、うれたくも言へるかな、いでや、なぞ、かく異なることなきあへしらひばかりを慰めにては、いかが過ぎさむ、かかる人伝てならで、一言をものたまひ聞こゆる世ありなむや、と思ふにつけても、おほかたにては惜しくめでたしと思ひきこゆる院の御ため、なまゆがむ心や添ひにたらむ。つごもりの日は、人びとあまた参りたまへり。なまもの憂くすずろはしけれど、そのあたりの花の色をも見てや慰む、と思ひて参りたまふ。殿上の賭弓、如月にとありしを過ぎて、三月はた御忌月なれば、口惜しくと、人びと思ふに、この院に、かかるまとあるべしと聞き伝へて、例の集ひたまふ。左右の大將、さる御仲らひにて参りたまへば、すけたちなど挑みかはして、小弓とのたまひしかど、歩弓のすぐれたる上手どもありければ、召し出でて射させたまふ。

殿上人どもも、つきづきしき限りは皆、前後の心、こまどりに方分きて、暮れゆくままに、今日にとぢむる霞のけしきもあわたたしく、乱るる夕風に、花の蔭いと立つことやすからで、人びといたく酔ひ過ぎたまひて、「艶なる賭物ども、こなたかなた人びとの御心見えぬべきを。柳の葉を百度当てつべき舎人どもの、うけばりて射取る、無心なりや。すこしこしき手つきどもをこそ挑ませめ」とて、大將たちよりはじめて下りたまふに、衛門督、人よりけに眺めをしつつものしたまへば、かの片端心知れる御目には、見つけつつ、なほいとけしき異なり、わづらはしきこと出で来べき世にやあらむ、とわれさへ思ひつきぬる心地す。この君たち御仲いとよし。さる仲らひといふ中にも、心交はしてねむごろなれば、はかなきことにても、もの思はしくうち紛るることあらむを、いとほしくおぼえたまふ。

みづからも、おとどを見たてまつるに、気恐ろしくまばゆく、かかる心はあるべきものか、なのめならむにてだに、けしからず、人に点つかるべき振る舞ひはせじ、と思ふものを、ましておほけなきこと、思ひわびては、かのありし

若
菜
下

常よりも御さしらへなければ、すさまじく、しひて聞こゆべきことにもあらねば、ひき忍びて例の書く。

一日は、つれなし顔をなむ。めざましうと許しきこえざりしを、見ずもあらぬやいかに。あなかけかけし」

と、はやりかに走り書きて、

いまさらに色にな出でそ山桜およばぬ枝に心かけきとかひなきことを。

とあり。

をするに、この夕べより屈しいたくもの思はしくて、いかならむ折に、またさばかりにても、ほのかなる御ありさまをだに見む、ともかくもかき紛れたる際の人こそ、かりそめにも、たはやすき物忌、方違への移ろひも軽々しきに、おのづからともかくも、ものの隙をうかがひつくるやうもあれ、など思ひやる方なく、深き窓のうちに、何ばかりのことにつけてか、かく深き心ありけりとだに知らせたてまつるべき、と胸痛くいぶせければ、小侍従がり例の文やりたまふ。

一日、風に誘はれて、御垣の原をわけ入りてはべしに、いとどいかに見落としたまひけむ。その夕べより乱り心地かきくらし、あやなく今日は眺め暮らしはべる。

など書きて、

よそに見て折らぬ嘆きはしげれどもなごり恋しき花の夕かげとあれど、一日の心も知らねば、ただ世の常の眺めにこそはと思ふ。

御前に人しげからぬほどなれば、かの文を持て参りて、「この人のかくのみ忘れぬものに言問ひものしたまふこそわづらはしくはべれ。心苦しげなるありさまも、見たまへあまる心もや添ひはべらむと、みづからの心ながら知りがたくなむ」と、うち笑ひて聞こゆれば、「いとうたてあることをも言ふかな」と、何心もなげにのたまひて、文広げたるを御覧ず。「見もせぬ」と言ひたるところを、あさましかりし御簾のつまを思し合はせらるるに、御面赤みて、おとどのさばかりことのついでごとに、「大将に見えたまふな。いはけなき御ありさまなんめれば、おのづからとりはづして、見たてまつるやうもありなむ」と、戒めきこえたまふを思し出づるに、大将の、さることのありしと語りきこえたらむ時、いかにあはめたまはむと、人の見たてまつりけむことをば思さで、まづ憚りきこえたまふ心のうちぞ幼かりける。

ぐらすに、いとどこよなく、御あたりはるかなるべき身のほども思ひ知らるれば、胸のみふたがりてまかでたまひぬ。

大将の君、一つ車にて、道のほど物語したまふ。「なほこのころのつれづれには、この院に参りて紛らはすべきなりけり」、「今日のやうならむ暇の隙待ちつけて、花の折過ぐさず参れ」とのたまひつるを、春惜しみがてら、月のうち小弓持たせて参りたまへ」と語らひ契る。おのおの別るる道のほど物語したまうて、宮の御事のなほ言はまほしければ、「院には、なほこの対にのみものせさせたまふなめりな。かの御おぼえの異なるなめりかし。この宮いかに思すらむ。帝の並びなくならはしたてまつりたまへるに、さしもあらで、屈したまひにたらむこそ心苦しけれ」と、あいなく言へば、「たいだいしきこと。いかでかさはあらむ。こなたは、さま変はりて生ほしたてたまへる睦びの、けぢめばかりにこそあべかめれ。宮をば、かたがたにつけて、いとやむごとなく思ひきこえたまへるものを」と語りたまへば、「いで、あなかま、たまへ。皆聞きてはべり。いといとほしげなる折々あなるをや。さるは、世におしなべたらぬ人の御おぼえを、ありがたきわざなりや」といとはしがる。

「いかなれば花に木づたふ鶯の桜をわきてねぐらとはせぬ

春の鳥の、桜一つにとまらぬ心よ。あやしとおぼゆることぞかし」と、口ずさびに言へば、いで、あなあぢきなものの扱ひや、さればよ、と思ふ。

「深山木にねぐら定むるはこ鳥もいかでか花の色に飽くべき

わりなきこと。ひたおもむきにのみやは」といらへて、わづらはしければ、ことに言はせずなりぬ。異事に言ひ紛らはして、おのおの別れぬ。

督の君は、なほ大殿の東の対に、独り住みにてぞものしたまひける。思ふ心ありて、年ごろかかる住まひをするに、人やりならずさうさうしく心細き折々あれど、わが身かばかりにて、などか思ふことかなはざらむ、とのみ心おごり

対の南面に入りたまへれば、みなそなたに参りたまひぬ。宮もゐ直りたまひて、御物語したまふ。次々の殿上人は、簀子に円座召して、わぎとなく、椿餅、梨、柑子やうのものども、さまざまに、箱の蓋どもにとり混ぜつつあるを、若き人びとそばれ取り食ふ。さるべき干物ばかりして、御土器参る。

衛門督は、いとにかく思ひしめりて、ややもすれば、花の木に目をつけて眺めやる。大将は心知りに、あやしかりつる御簾の透影、思ひ出づることやあらむ、と思ひたまふ。いと端近なりつるありさまを、かつは軽々しと思ふらむかし、いでやこなたの御ありさまの、さはあるまじかめるものを、と思ふに、かかればこそ世のおぼえのほどよりは、うちうちの御心ざしぬるきやうにはありけれ、と思ひ合はせて、なほ内外の用意多からずいはけなきは、らうたきやうなれど、うしろめたきやうなりや、と思ひ落とさる。

宰相の君は、よろづの罪をもさをさたどられず、おぼえぬものの隙より、ほのかにもそれと見たてまつりつるにも、わが昔よりの心ざしのしるしあるべきにやと、契りうれしき心地して、飽かずのみおぼゆ。

院は、昔物語し出でたまひて、「太政大臣の、よろづのことにたち並びて勝ち負けの定めたまひし中に、鞠なむえ及ばずなりにし。はかなきことは伝へあるまじけれど、ものの筋はなほこよなかりけり。いと目も及ばずかしこうこそ見えつれ」とのたまへば、うちほほ笑みて、「はかばかしき方にはぬるくはべる家の風の、さしも吹き伝へはべらむに、後の世のため、異なることなくこそはべりぬべけれ」と申したまへば、「いかでか。何ごとも人に異なるけぢめをば記し伝ふべきなり。家の伝へなどに書き留め入れたらむこそ、興はあらめ」など戯れたまふ御さまの、匂ひやかにきよらなるを見たてまつるにも、かかる人にならひて、いかばかりのことにか、心を移す人はものしたまはむ、何ごにつけてか、あはれと見ゆるしたまふばかりはなびかしきこゆべき、と思ひめ

ひこしろふほどに、御簾のそばいとあらはに引き開けられたるを、とみにひき直す人もなし。この柱のもとにありつる人びとも心あわたたしげにて、もの懼ぢしたるけはひどもなり。

几帳の際すこし入りたるほどに、桂姿にて立ちたまへる人あり。階より西の二の間の東のそばなれば、まぎれどころもなくあらはに見入れらる。紅梅にやあらむ、濃き薄きすぎすぎにあまた重なりたる、けぢめはなやかに、草子のつまのやうに見えて、桜の織物の細長なるべし。御髪のスそまでげざやかに見ゆるは、糸をよりかけたるやうになびきて、裾のふさやかにそがれたる、いとうつくしげにて、七八寸ばかりぞ余りたまへる。御衣の裾がちに、いと細くささやかにて、姿つき、髪のかかりたまへるそば目、言ひ知らずあてにらうたげなり。夕影なれば、さやかならず奥暗き心地するも、いと飽かず口惜し。鞆に身を投ぐる若君達の、花の散るを惜しみもあへぬけしきどもを見るとて、人びと、あらはをふともえ見つけぬなるべし。猫のいたく鳴けば、見返りたまへる面もち、もてなしなど、いとおいらかにて、若くうつくしの人やと、ふと見えたり。

大将、いとかたはらいたけれど、はひ寄らむもなかなかいと軽々しければ、ただ心を得させて、うちしはぶきたまへるにぞ、やをらひき入りたまふ。さるは、わが心地にもいと飽かぬ心地したまへど、猫の綱ゆるしつれば、心にもあらずうち嘆かる。ましてさばかり心をしめたる衛門督は、胸ふとふたがりて、誰ればかりにかはあらむ、ここらの中にしるき桂姿よりも、人に紛るべくもあらざりつる御けはひなど、心にかかりておぼゆ。さらぬ顔にもてなしたれど、まさに目とどめじやと、大将はいとほしく思さる。わりなき心地の慰めに、猫を招き寄せてかき抱きたれば、いと香ばしくて、らうたげにうち鳴くも、なつかしく思ひよそへらるるぞ、好き好きしきや。

おとど御覧じおこせて、「上達部の座、いと軽々しや。こなたにこそ」とて、

て、えならぬ花の蔭にさまよひたまふ、夕ばえいときよげなり。をさをささまよく静かならぬ乱れごとなめれど、所から人からなりけり。ゆゑある庭の木立のいたく霞みこめたるに、色々紐ときわたる花の木ども、わづかなる萌黄の蔭に、かくはかなきことなれど、善き悪しきけぢめあるを挑みつつ、われも劣らじと思ひ顔なる中に、衛門督のかりそめに立ち混じりたまへる足もとに、並ぶ人なかりけり。かたちいときよげに、なまめきたるさましたる人の、用意いたくして、さすがに乱りがはしき、をかしく見ゆ。御階の間にあたれる桜の蔭に寄りて、人びと、花の上も忘れて心に入れたるを、おとども、宮も、隅の高欄に出でて御覧ず。

いと労ある心ばへども見えて、数多くなりゆくに、上臈も乱れて、冠の額すこしくつろぎたり。大将の君も、御位のほど思ふこそ例ならぬ乱りがはしきかなとおぼゆれ、見る目は人よりけに若くをかしげにて、桜の直衣のやや萎えたるに、指貫の裾つ方、すこしふくみて、けしきばかり引き上げたまへり。軽々しうも見えず、ものきよげなるうちとけ姿に、花の雪のやうに降りかかれれば、うち見上げて、しをれたる枝すこし押し折りて、御階の中のしなのほどにゐたまひぬ。督の君続きで、「花乱りがはしく散るめりや。桜は避きてこそ」などのたまひつつ、宮の御前の方をしり目に見れば、例の、ことにをさまらぬけはひどもして、色々こぼれ出でたる御簾のつま、透影など、春の手向けの幣袋にやとおぼゆ。

御几帳どもしどけなく引きやりつつ、人氣近く世づきてぞ見ゆるに、唐猫のいと小さくをかしげなるを、すこし大きな猫追ひ続きで、にはかに御簾のつまより走り出づるに、人びとおびえ騒ぎで、そよそよと身じろきさまよふけはひども、衣の音なひ、耳かしかましき心地す。猫は、まだよく人にもなつかぬにや、綱いと長く付きたりけるを、物にひきかけまつはれにけるを、逃げむと

なかりける。「対の上の御けはひには、なほ圧されたまひてなむ」と世人もまねび伝ふるを聞きては、「かたじけなくとも、さるものは思はせたてまつらざらまし。げにたぐひなき御身にこそあたらざらめ」と、常にこの小侍従といふ御乳主をも言ひはげまして、世の中定めなきを、おとどの君、もとより本意ありて思しおきてたる方に赴きたまはば、とたゆみなく思ひありきけり。

弥生ばかりの空うらかなる日、六条の院に、兵部卿宮、衛門督など参りたまへり。おとど出でたまひて、御物語などしたまふ。「静かなる住まひは、このごろこそいとつれづれに、紛るることなかりけれ。公私にことなしや。何わざしてかは暮らすべき」などのたまひて、「今朝、大将のものしつるは、いづ方にぞ。いとさうざうしきを、例の小弓射させて見るべかりけり。好むめる若人どもも見えつるを、ねたう、出でやしぬる」と問はせたまふ。大将の君は、丑寅の町に、人びとあまたして、鞠もて遊ばして見たまふと聞こしめして、「乱りがはしきことの、さすがに目覚めて、かどかどしきぞかし。いづら、あなたに」とて、御消息あれば参りたまへり。若君達めく人びと多かりけり。「鞠持たせたまへりや。誰々かものしつる」とのたまふ。「これかれはべりつ」、「こなたへまかでむや」とのたまひて、寝殿の東面、桐壺は若宮具したてまつりて参りたまひにしころなれば、こなた隠ろへたりけり。遣水などのゆきあひはれて、よしあるかかりのほどを尋ねて、立ち出づ。太政大臣殿の君達、頭弁、兵衛佐、大夫の君など、過ぐしたるもまだ片なりなるも、さまざまに人よりまさりてのみものしたまふ。やうやう暮れかかるに、風吹かずかしこき日なりと興じて、弁の君もえしづめず立ちまじれば、おとど、「弁官もえをさめあへぎめるを、上達部なりとも、若き衛府司たちはなどか乱れたまはざらむ。かばかりの齢にては、あやしく見過ぐす、口惜しくおぼえしわざなり。さるは、いと軽々なりや、このことのさまよ」などのたまふに、大将も督君も皆下りたまひ

じれば、かたへの人にひかれつつ、同じけはひもてなしになだらかなるを、ただ明け暮れは、いはけたる遊び戯れに心入れたる童女のありさまなど、院は、いと目につかず見たまふことどもあれど、一つさまに世の中を思しのたまはぬ御本性なれば、かかる方をもまかせて、さこそはあらまほしからめと御覧じゆるしつつ、戒めととのへさせたまはず、正身の御ありさまばかりをば、いとよく教へきこえたまふに、すこしもてつけたまへり。

かやうのことを、大将の君も、げにこそありがたき世なりけれ、紫の御用意けしきの、ここの年経ぬれど、ともかくも漏り出で見え聞こえたるところなく、しづやかなるをもととして、さすがに心うつくしう、人をも消たず、身をもやむごとなく心にくくもてなし添へたまへること、と見し面影も忘れがたくなみなむ思ひ出でられける。わが御北の方も、あはれと思す方こそ深けれ、いふかひあり、すぐれたるらうらうじきなどのしたまはぬ人なり。おだしきものに、今はと目馴るるに心ゆるびて、なほかくさまさまに集ひたまへるありさまどもの、とりどりにをかしきを、心ひとつに思ひ離れがたきを、ましてこの宮は、人の御ほどを思ふにも、限りなく心ことなる御ほどに、取り分きたる御けしきもあらず、人目の飾りばかりにこそ、と見たてまつり知る。わざとおほけなき心にしもあらねど、見たてまつる折ありなむや、とゆかしく思ひきこえたまひけり。

衛門の督の君も、院に常に参り、親しくさぶらひ馴れたまひし人なれば、この宮を父帝のかしづきあがめたてまつりたまひし御心おきてなど、詳しく見たてまつりおきて、さまさまの御定めありしころほひより、聞こえ寄り、院にもめざましとは思しのたまはせずと聞きしを、かくことさまになりたまへるは、いと口惜しく、胸いたき心地すれば、なほえ思ひ離れず、その折より語らひつきにける女房のたよりに、御ありさまなども聞き伝ふるを、慰めに思ふぞはか

はかなきことにて、ものの心得ずひがしき人は、立ち交じらふにつけて、人のためさへからきことありかし。さ直しどころなく、誰もものしたまふめれば、心やすくなむ」とのたまふにつけても、さりや、よくこそ卑下しにけれ、など思ひ続けたまふ。対へ渡りたまひぬ。

「さもいとやむごとなき御心ざしのみまさるめるかな。げにはた、人よりことにかくしも具したまへるありさまの、ことわりと見えたまへるこそめでたけれ。宮の御方、うはべの御かしづきのみめでたくて、渡りたまふことも、えなのめならざるは、かたじけなきわざなめりかし。同じ筋にはおはすれど、今一際は心苦しく」としりうごちきこえたまふにつけても、わが宿世はいとたくぞおぼえたまひける。やむごとなきだに、思すさまにもあらざる世に、まして立ちまじるべきおぼえにしあらねば、すべて今は恨めしき節もなし。ただかの絶え籠もりにたる山住みを、思ひやるのみぞあはれにおぼつかなき。尼君もただ福地の園に種まきて、とやうなりし一言をうち頼みて、後の世を思ひやりつつ眺めゐたまへり。

大将の君は、この姫宮の御ことを、思ひ及ばぬにしもあらざりしかば、目に近くおはしますを、いとただにもおぼえず、おほかたの御かしづきにつけて、こなたにはさりぬべき折々に参り馴れ、おのづから御けはひありさまも見聞きたまふに、いと若くおほどきたまへる一筋にて、上の儀式はいかめしく、世の例にしつばかり、もてかしづきたてまつりたまへれど、をさをさけぎやかにの深くは見えず、女房などもおとなおとなしきは少なく、若やかなるかたち人の、ひたぶるにうちはなやぎ、さればめるはいと多く、数知らぬまで集ひさぶらひつつ、もの思ひなげなる御あたりとはいひながら、何ごとものどやかに心しづめたるは、心のうちのあらはにしも見えぬわざなれば、身に人知れぬ思ひ添ひたらむも、またまことに心地ゆきげに、とどこほりなかるべきにしうち混

心ゆがみたらむ人を、さも思ひ寄らず、うらなからむためは、引き返しあはれに、いかでかかるにはと、罪得がましきにも、思ひ直ることもあるべし。おぼろけの昔の世のあだならぬ人は、違ふ節々あれど、ひとりひとり罪なき時には、おのづからもてなす例どもあるべかめり。さしもあるまじきことに、かどかどしく癖をつけ、愛敬なく、人をもて離るる心あるは、いとうちとけがたく、思ひぐまなきわざになむあるべき。多くはあらねど、人の心の、とあるさまかかるおもむきを見るに、ゆゑよしといひ、さまざまに口惜しからぬ際の心ばせあるべかめり。皆おのおの得たる方ありて、取るところなくもあらねど、また取り立てて、わが後見に思ひ、まめまめしく選び思はむには、ありがたきわざになむ。ただまことに心の癖なくよきことは、この対をのみなむ、これをぞおいらかなる人といふべかりける、となむ思ひはべる。よしとて、またあまりひたたけて頼もしげなきも、いと口惜しや」とばかりのたまふに、かたへの人は思ひやられぬかし。

「そこにこそ、すこしものの心得てものしたまふめるを、いとよし、睦び交はして、この御後見をも同じ心にてものしたまへ」など忍びやかにのたまふ。「のたまはせねど、いとありがたき御けしきを見たてまつるままに、明け暮れの言種に聞こえはべる。めざましきものになど、思しゆるさざらむに、かうまで御覧じ知るべきにもあらぬを、かたはらいたきまで数まへのたまはすれば、かへりてはまばゆくさへなむ。数ならぬ身のさすがに消えぬは、世の聞き耳もいと苦しく、つつましく思うたまへらるるを、罪なきさまにもて隠されたてまつりつつのみこそ」と聞こえたまへば、「その御ためには何の心ざしかはあらむ。ただこの御ありさまを、うち添ひてもえ見たてまつらぬおぼつかなきに、譲りきこえらるるなめり。それもまた、とりもちて掲焉になどあらぬ御もてなしどもに、よろづのことなのめに目やすくなれば、いとなむ思ひなくうれしき。

き節もや混じりはべるとてなむ。今はとて別れはべりにしかど、なほこそあはれは残りはべるものなりけれ」とて、さまよくうち泣きたまふ。寄りたまひて、「いとかしこく、なほほればれしからずこそあるべけれ。手などもすべて何ごとも、わざと有職にしつべかりける人の、ただこの世経る方の心おきてこそ少なかりけれ。かの先祖の大臣は、いとかしこくありがたき心ぎしを尽くして、おほやけに仕うまつりたまひけるほどに、ものの違ひめありて、その報いにかく末はなきなりなど人言ふめりしを、女子の方につけたれど、かくていと嗣なしといふべきにはあらぬも、そこらの行なひのしるしにこそはあらめ」など、涙おし拭ひたまひつつ、この夢のわたりに目とどめたまふ。あやしく、ひがひがしく、すずろに高き心ざしありと、人も咎め、また我ながらも、さるまじき振る舞ひを、仮にてもするかなと思ひしことは、この君の生まれたまひし時に、契り深く思ひ知りにしかど、目の前に見えぬあなたのことは、おぼつかなくこそ思ひわたりつれ、さらば、かかる頼みありて、あながちには望みしなりけり、横さまにいみじき目を見、ただよひしも、この人一人のためにこそありけれ、いかなる願をか心に起こしけむ、とゆかしければ、心のうちに拝みて取りたまひつ。

「これは、また具してたてまつるべきものはべり。今また聞こえ知らせはべらむ」と、女御には聞こえたまふ。そのついでに、「今はかくいにしへのことをもたどり知りたまひぬれど、あなたの御心ばへをおろかに思しなすな。もとよりさるべき仲、えさらぬ睦びよりも、横さまの人のなげのあはれをもかけ、一言の心寄せあるは、おぼろけのことにもあらず。まして、ここになどさぶらひ馴れたまふを見る見るも、初めの心ざし変はらず、深くねむごろに思ひきこえたるを。いにしへの世のたとへにも、さこそうはべには育みけれと、らうらうじきたどりあらむも、賢きやうなれど、なほあやまりても、わがため下の

ありつる箱も、惑ひ隠さむもさま悪しければ、さておはするを、「なぞの箱。深き心あらむ。懸想人の長歌詠みて封じこめたる心地こそすれ」とのたまへば、「あなうたてや。今めかしくなり返らせたまふめる御心ならひに、聞き知らぬやうなる御すさび言どもこそ、時々出で来れ」とてほほ笑みたまへれど、ものあはれなりける御けしきどもしるければ、あやしとうち傾きたまへるさまなれば、わづらはしくて、「かの明石の岩屋より、忍びてはべし御祈りの巻数、またまだしき願などはべりけるを、御心にも知らせたてまつるべき折あらば、御覧じおくべくやとてはべるを、ただ今は、ついでなくて何かは開けさせたまはむ」と聞こえたまふに、げに、あはれなるべきありさまぞかしと思して、「いかに行なひまして住みたまひにたらむ。命長くて、ここの年ごろ勤むる罪もこよなからむかし。世の中によりあり賢しき方々の人として見るにも、この世に染みたるほどの濁り深きにやあらむ、賢き方こそあれ、いと限りありつつ及ばざりけりや。さもいたり深く、さすがにけしきありし人のありさまかな。聖だち、この世離れ顔にもあらぬものから、下の心は、皆あらぬ世に通ひ住みにたるところ見えしか。まして今は、心苦しきほだしもなく思ひ離れにたらむをや。かやすき身ならば、忍びていと会はまほしくこそ」とのたまふ。「今はかのはべりし所をも捨てて、鳥の音聞こえぬ山となむ聞きはべる」と聞こゆれば、「さらばその遺言ななりな。消息は通はしたまふや。尼君いかに思ひたまふらむ。親子の仲よりも、またさるさまの契りは、ことにこそ添ふべけれどとてうち涙ぐみたまへり。

「年の積もりに、世の中のありさまをとかく思ひ知りゆくまに、あやしく恋しく思ひ出でらるる人の御ありさまなれば、深き契りの仲らひはいかにあはれならむ」などのたまふついでに、この夢語りも、思し合はすることもやと思ひて、「いとあやしき梵字とかいふやうなる跡にはべめれど、御覧じとどむべ

べれば、譲りきこえそめはべりにしを、いとかうしもものしたまはじとなむ、年ごろは、なほ世の常に思うたまへわたりはべりつる。今は来し方行く先、うしろやすく思ひなりにてはべり」など、いと多く聞こえたまふ。涙ぐみて聞きおはす。かくむつまじかるべき御前にも、常にうちとけぬさましたまひて、わりなくものづつみしたるさまなり。この文の言葉、いとうたてこはく、憎げなるさまを、陸奥国紙にて年経にければ、黄ばみ厚肥えたる五六枚、さすがに香にいと深くしみたるに書きたまへり。いとあはれと思して、御額髪のやうやう濡れゆく御側目、あてになまめかし。

院は、姫宮の御方におはしけるを、中の御障子よりふと渡りたまへれば、えしも引き隠さで、御几帳をすこし引き寄せて、みづからは、はた隠れたまへり。「若宮はおどろきたまへりや。時の間も恋しきわざなりけり」と聞こえたまへば、御息所はいらへも聞こえたまはねば、御方、「対に渡しきこえたまひつ」と聞こえたまふ。「いとあやしや。あなたにこの宮を領じたてまつりて、懷をさらに放たずもて扱ひつつ、人やりならず衣も皆濡らして、脱ぎかへがちなめる。軽々しく、などかく渡したてまつりたまふ。こなたに渡りてこそ見たてまつりたまはめ」とのたまへば、「いとうたて。思ひぐまなき御ことかな。女におはしまさむにだに、あなたにて見たてまつりたまはむこそよくはべらめ。まして男は限りなしと聞こえさすれど、心やすくおぼえたまふを。戯れにてもかやうに隔てがましきことなさかしがり聞こえさせたまひそ」と聞こえたまふ。うち笑ひて、「御仲どもにまかせて、見放ちきこゆべきななりな。隔てて、今は誰も誰もさし放ち、さかしらなどのたまふこそ幼けれ。まづはかやうにはひ隠れて、つれなく言ひ落としたまふめりかし」とて、御几帳を引きやりたまへれば、母屋の柱に寄りかかりて、いときよげに、心恥づかしげなるさましてものしたまふ。

宿世にこそはべれ」とて喜ぶ。この文箱は持たせて参う上りたまひぬ。

宮より、とく参りたまふべきよしのみあれば、「かく思したる、ことわりなり。めづらしきことさへ添ひて、いかに心もとなく思さるらむ」と、紫の上も
のたまひて、若宮忍びて参らせたてまつらむ御心づかひしたまふ。御息所は、
御暇の心やすからぬに懲りたまひて、かかるついでにしばしあらまほしく思し
たり。ほどなき御身に、さる恐ろしきことをしたまへれば、すこし面痩せ細り
て、いみじくなまめかしき御さましたまへり。「かくためらひがたくおはする
ほど、つくろひたまひてこそは」など、御方などは心苦しがりきこえたまふを、
おとどは、「かやうに面痩せて見えたてまつりたまはむも、なかなかあはれな
るべきわざなり」などのたまふ。

対の上などの渡りたまひぬる夕つ方、しめやかなるに、御方、御前に参りた
まひて、この文箱聞こえ知らせたまふ。「思ふさまにかなひ果てさせたまふま
では、取り隠して置きてはべるべけれど、世の中定めがたければ、うしろめた
さになむ。何ごとをも御心と思し数まへざらむこなた、ともかくもはかなくな
りはべりなば、かならずしも、今はのとぢめを御覧ぜらるべき身にもはべらね
ば、なほうつし心失せずはべる世になむ、はかなきことをも聞こえさせ置くべ
くはべりける、と思ひはべりて、むつかしくあやしき跡なれど、これも御覧ぜ
よ。この願文は、近き御厨子などに置かせたまひて、かならずさるべからむ折
に御覧じて、このうちのことどもはせさせたまへ。疎き人には、な漏らさせた
まひそ。かばかりと見たてまつりおきつれば、みづからも世を背きはべなむと、
思うたまへなりゆけば、よろづ心のどこにもおぼえはべらず。対の上の御心、
おろかに思ひきこえさせたまふな。いとありがたくものしたまふ深き御けしき
を見はべれば、身にはこよなくまさりて、長き御世にもあらなむ、とぞ思ひは
べる。もとより御身に添ひきこえさせむにつけても、つつましき身のほどには

世人に違ひたる宿世にもあるかな、と思ひはべしかど、生ける世にゆき離れ、隔たるべき仲の契りとは思ひかけず、同じ蓮に住むべき後の世の頼みをさへかけて、年月を過ぐし来て、にはかにかくおぼえぬ御こと出で来て、背きにし世に立ち返りてはべる、かひある御こと見たてまつりよろこぶものから、片つかたにはおぼつかなく、悲しきことのうち添ひて絶えぬを、つひにかくあひ見ず、隔てながらこの世を別れぬるなむ、口惜しくおぼえはべる。世に経し時だに、人に似ぬ心ばへにより、世をもてひがむるやうなりしを、若きどち頼みならひて、おのおのはまたなく契りおきてければ、かたみにいと深くこそ頼みはべしか。いかなれば、かく耳に近きほどながら、かくて別れぬらむ」と言ひ續けて、いとあはれにうちひそみたまふ。御方もいみじく泣きて、「人にすぐれむ行く先のこともおぼえずや。数ならぬ身には、何ごともしげやかに、かひあるべきにもあらぬものから、あはれなるありさまに、おぼつかなくてやみなむのみこそ口惜しけれ。よろづのこと、さるべき人の御ためとこそおぼえはべれ、さて絶え籠もりたまひなば、世の中も定めなきに、やがて消えたまひなば、かひなくなむ」とて、夜もすがらあはれなることどもを言ひつつ明かしたまふ。

「昨日も、おとどの君の、あなたにありと見置きたまひてしを、にはかにはひ隠れたらむも軽々しきやうなるべし。身ひとつは、何ばかりも思ひ憚りはべらず、かく添ひたまふ御ためなどのいとほしきになむ、心にまかせて身をももてなしにくかるべき」とて、暁に帰り渡りたまひぬ。「若宮はいかがおはします。いかでか見たてまつるべき」とても泣きぬ。「今見たてまつりたまひてむ。女御の君も、いとあはれになむ思し出でつつ、聞こえさせたまふめる。院も、ことのついでに、もし世の中思ふやうならば、ゆゆしきかね言なれど、尼君そのほどまでながらへたまはなむ、とのたまふめりき。いかに思すことにかあらむ」とのたまへば、またうち笑みて、「いでや、さればこそ、さまざま例なき

したまひし琴の御琴、琵琶とり寄せたまひて、掻い調べたまひつつ、仏にまかり申したまひてなむ、御堂に施入したまひし、さらぬものどもも、多くはたてまつりたまひて、その残りをなむ、御弟子ども六十余人なむ、親しき限りさぶらひける、ほどにつけて皆処分したまひて、なほし残りをなむ、京の御料とて、送りたてまつりたまへる。今はとてかき籠もり、さるはるけき山の雲霞に混じりたまひにし、むなしき御跡にとまりて、悲しび思ふ人びとなむ多くはべる」など、この大徳も、童にて京より下りし人の、老法師になりてとまれる、いとあはれに心細しと思へり。仏の御弟子のさかしき聖だに、鷲の峰をばたどたどしからず頼みきこえながら、なほ薪尽きける夜の惑ひは深かりけるを、まして尼君の悲しと思ひたまへること限りなし。

御方は南の御殿におはするを、「かかる御消息なむある」とありければ、忍びて渡りたまへり。重々しく身をもてなして、おぼろけならでは、通ひ、あひたまふこともかたきを、あはれなることなむと聞きて、おぼつかなければ、うち忍びてものしたまへるに、いといみじく悲しげなるけしきにてゐたまへり。火近く取り寄せて、この文を見たまふに、げにせきとめむかたぞなかりける。よその人は何とも目とどむまじきことの、まづ昔、来し方のことと思ひ出で、恋しと思ひわたりたまふ心には、あひ見で過ぎ果てぬるにこそはと見たまふに、いみじくいふかひなし。涙をえせきとめず、この夢語りを、かつは行く先頼もしく、さらば、ひが心にてわが身をさしもあるまじきさまにあくがらしたまふと、中ごろ思ひただよはれしことは、かくはかなき夢に頼みをかけて、心高きものしたまふなりけり、とかつがつ思ひ合はせたまふ。

尼君、久しくためらひて、「君の御徳には、うれしくおもだたしきことをも、身にあまりて並びなく思ひはべり。あはれにいぶせき思ひもすぐれてこそはべりけれ。数ならぬ方にても、ながらへし都を捨てて、かしこに沈みゐしをだに、

なりたまひて、願ひ満ちたまはむ世に、住吉の御社をはじめ、果たし申したまへ。さらに何ごとをかは疑ひはべらむ。この一つの思ひ、近き世にかなひはべりぬれば、はるかに西の方、十萬億の国隔てたる九品の上の望み疑ひなくなりはべりぬれば、今はただ迎ふる蓮を待ちはべるほど、その夕べまで、水草清き山の末にて勤めはべらむとてなむ、まかり入りぬる。

光出でむ暁近くなりにつけり今ぞ見し世の夢語りする

とて、月日書きたり。

命終らむ月日もさらにな知ろしめしそ。いにしへより人の染めおきける藤衣にも何かやつれたまふ。ただわが身は変化のものと思しなして、老法師のためには功德をつくりたまへ。この世の楽しみに添へても、後の世を忘れたまふな。願ひはべる所にだに至りはべりなば、かならずまた対面ははべりなむ。娑婆の他の岸に至りて、疾くあひ見むとを思せ。

さて、かの社に立て集めたる願文どもを、大きな沈の文箱に封じ籠めてたてまつりたまへり。

尼君には、ことごとにも書かず、ただ、

この月の十四日になむ、草の庵まかり離れて、深き山に入りはべりぬる。かひなき身をば、熊、狼にも施しはべりなむ。そこには、なほ思ひしやうなる御世を待ち出でたまへ。明らかなる所にて、また対面はありなむとのみあり。

尼君、この文を見て、かの使ひの大徳に問へば、「この御文書きたまひて、三日といふになむ、かの絶えたる峰に移ろひたまひにし。なにがしらも、かの御送りに麓まではさぶらひしかど、皆返したまひて、僧一人、童二人なむ御供にさぶらはせたまふ。今はと世を背きたまひし折を、悲しきとぢめと思うたまへしかど、残りはべりけり。年ごろ行なひの隙々に、寄り臥しながら掻き鳴ら

さるべき折節のことも通ひける。思ひ離るる世のとぢめに、文書きて御方にたてまつれたまへり。

この年ごろは、同じ世の中のうちにめぐらひはべりつれど、何かは、くくながら身を変へたるやうに思うたまへなしつつ、させることなき限りは聞こえうけたまはらず。仮名文見たまふるは、目の暇いりて、念仏も懈怠するやうに益なうてなむ、御消息もたてまつらぬを、つてにうけたまはれば、若君は春宮に参りたまひて、男宮生まれたまへるよしをなむ、深く喜び申しはべる。そのゆゑは、みづからかくつたなき山伏の身に、今さらにこの世の栄えを思ふにもはべらず、過ぎにし方の年ごろ、心ぎたなく、六時の勤めにも、ただ御ことを心にかけて、蓮の上の露の願ひをばさし置きてなむ、念じたてまつりし。わがおもと生まれたまはむとせし、その年の二月のその夜の夢に見しやう、みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす、みづからは山の下に隠れて、その光にあたらず、山をば広き海に浮かべおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆく、となむ見はべし。夢覚めて、朝より、数ならぬ身に頼むところ出で来ながら、何ごとにつけてか、さるいかめしきことをば待ち出でむと、心のうちに思ひはべしを、そのころより孕まれたまひにしこなた、俗の方の書を見はべしにも、また内教の心を尋ぬる中にも、夢を信ずべきこと多くはべしかば、賤しき懷のうちにも、かたじけなく思ひいたづきたてまつりしかど、力及ばぬ身に、思うたまへかねてなむ、かかる道に赴きはべりにし。またこの国のことに沈みはべりて、老の波にさらに立ち返らじと思ひとぢめて、この浦に年ごろはべしほども、わが君を頼むことに思ひきこえはべしかばなむ、心一つに多くの願を立てはべし。その返り申し平らかに、思ひのごと時にあひたまふ。若君国の母と

世になく響きこちたきほどに、うちうちのなまめかしくこまかなるみやびの、まねび伝ふべき節は目も止まらずなりにけり。おとどの君も、若宮をほどなく抱きたてまつりたまひて、「大将のあまたまうけたなるを、今まで見せぬがうらめしきに、かくらうたき人をぞ得たてまつりたる」と、うつくしみきこえたまふはことわりなりや。日々に、ものを引き伸ぶるやうにおよすけたまふ。御乳母など、心知らぬはとみに召さで、さぶらふ中に、品、心すぐれたる限りを選びて、仕うまつらせたまふ。

御方の御心おきての、らうらうじく気高くおほどかなるものの、さるべき方には卑下して、憎らかにもうけばらぬなどを褒めぬ人なし。対の上は、まほならねど、見え交はしたまひて、さばかり許しなく思したりしかど、今は宮の御徳に、いと睦ましくやむごとなく思しなりにたり。稚児うつくしみたまふ御心にて、天児など御手づから作り、そそくりおはするもいと若々し。明け暮れ、この御かしづきにて過ぐしたまふ。かの古体の尼君は、若宮をえ心のどかに見たてまつらぬなむ、飽かずおぼえける。なかなか見たてまつり初めて恋ひきこゆるにぞ、命もえ堪ふまじかめる。

かの明石にも、かかる御こと伝へ聞きて、さる聖心地にもいとうれしくおぼえければ、「今なむこの世の境を心やすく行き離るべき」と、弟子どもに言ひて、この家をば寺になし、あたりの田などやうのものは、皆その寺のことにしておきて、この国の奥の郡に、人も通ひがたく、深き山あるを、年ごろも占めおきながら、あしこに籠もりなむ後、また人には見え知らるべきにもあらずと思ひて、ただすこしのおぼつかなきこと残りければ、今までながらへけるを、今はさりととも、仏神を頼み申してなむ移ろひける。

この近き年ごろとなりては、京に、異なることならで、人も通はしたてまつらざりつ。これより下したまふ人ばかりにつけてなむ、一くだりにても、尼君、

など聞こえ紛らはしたまふ。別れけむ暁のことも、夢の中に思し出でられぬを、口惜しくもありけるかな、と思す。

弥生の十余日のほどに、平らかに生まれたまひぬ。かねてはおどろおどろしく思し騒ぎしかど、いたく悩みたまふことなくて、男御子にさへおはすれば、限りなく思すさまにて、おとども御心落ちゐたまひぬ。

こなたは隠れの方にて、ただ気近きほどなるに、いかめしき御産養などのうちしきり、響きよそほしきありさま、げにかひある浦と尼君のためには見えたれど、儀式なきやうなれば、渡りたまひなむとす。対の上も渡りたまへり。白き御装束したまひて、人の親めきて、若宮をつと抱きてゐたまへるさま、いとをかし。みづからかかること知りたまはず、人の上にも見ならひたまはねば、いとめづらかにうつくし、と思ひきこえたまへり。むつかしげにおはするほどを、絶えず抱きとりたまへば、まことのおば君は、ただ任せたてまつりて、御湯殿の扱ひなどを仕うまつりたまふ。春宮の宣旨なる内侍のすけぞ仕うまつる御迎湯に、おりたちたまへるもいとあはれに、うちうちのこともほの知りたるに、すしかたほならばいとほしからましを、あさましく気高く、げにかかる契りことにものしたまひける人かな、と見きこゆ。このほどの儀式などもまねびたてむに、いとさらなりや。

六日といふに、例の御殿に渡りたまひぬ。七日の夜、内よりも御産養のことあり。朱雀院の、かく世を捨ておはします御代はりにや、蔵人所より、頭弁、宣旨うけたまはりて、めづらかなるさまに仕うまつれり。祿の絹など、また中宮の御方よりも、公事にはたちまさり、いかめしくせさせたまふ。次々の親王たち、大臣の家々、そのころのいとなみにて、われもわれもときよらを尽くして仕うまつりたまふ。

おとどの君も、このほどのことどもは、例のやうにもこと削がせたまはで、

隙もあらむに。薬師などやうのさまして。いと盛り過ぎたまへりや」など、なまたはらいたく思ひたまへり。よしめきそして振る舞ふとおぼゆめれども、もうもうに耳もおぼおぼしかりければ、「ああ」と傾きてゐたり。さるはいとさ言ふばかりにもあらずかし。六十五六のほどなり。尼姿いとかはらかに、あてなるさまして、目艶やかに泣き腫れたるけしきの、あやしき昔思ひ出でたるさまなれば、胸うちつぶれて、「古体のひが言どもやはべりつらむ。よくこの世のほかなるやうなる、ひがおぼえどもにとり混ぜつつ、あやしき昔のことどもも出でまうで来つらむはや。夢の心地こそしはべれ」と、うちほほ笑みて見たてまつりたまへば、いとなまめかしくきよらにて、例よりもいたくしづまり、もの思ひたるさまに見えたまふ。わが子とおぼえたまはずかたじけなきに、いとほしきことどもを聞こえたまひて、思し乱るるにや、今はかばかりと御位を極めたまはむ世に、聞こえも知らせむとこそ思へ、口惜しく思し捨つべきにはあらねど、いといとほしく心劣りしたまふらむ、とおぼゆ。

御加持果てて、まかでぬるに、御くだものなど近くまかなひなし、「こればかりをだに」と、いと心苦しげに思ひて聞こえたまふ。尼君は、いとめでたううつくしう見たてまつるままにも、涙はえとどめず。顔は笑みて、口つきなどは見苦しくひろごりたれど、まみのわたりうちしぐれてひそみゐたり。あなきたはらいた、と目くはすれど、聞きも入れず。

「老の波かひある浦に立ち出でてしほたるる海人を誰れかとかめむ昔の世にも、かやうなる古人は罪許されてなむはべりける」と聞こゆ。御硯なる紙に、

しほたるる海人を波路のしるべにて尋ねも見ばや浜の苦屋を
御方もえ忍びたまはで、うち泣きたまひぬ。

世を捨てて明石の浦に住む人も心の闇ははるけしもせじ

見たてまつるは夢の心地して、いつしかと参り近づき馴れたてまつる。年ごろ、母君はかう添ひさぶらひたまへど、昔のことなどまほにしも聞こえ知らせたまはざりけるを、この尼君、喜びにえ堪へで参りては、いと涙がちに、古めかしきことどもを、わななき出でつつ語りきこゆ。初めつ方は、あやしくむつかしき人かなと、うちまもりたまひしかど、かかる人ありとばかりはほの聞きおきたまへれば、なつかしくもてなしたまへり。生まれたまひしほどのこと、おとどの君のかの浦におはしましたりしありさま、「今はとて京へ上りたまひしに、誰も誰も心を惑はして、今は限り、かばかりの契りにこそはありけれ、と嘆きしを、若君のかく引き助けたまへる御宿世の、いみじくかなしきこと」と、ほろほろと泣けば、げにあはれなりける昔のことを、かく聞かせざらましかば、おぼつかなくても過ぎぬべかりけり、と思して、うち泣きたまふ。心のうちには、わが身は、げにうけばりていみじかるべき際にはあらざりけるを、対の上の御もてなしに磨かれて、人の思へるさまなどもかたほにはあらぬなりけり、人びとをばまたなきものに思ひ消ち、こよなき心おごりをばしつれ、世人は下に言ひ出づるやうもありつらむかし、など思し知り果てぬ。母君をば、もとよりかくすこしおぼえ下れる筋と知りながら、生まれたまひけむほどなどをば、さる世離れたる境にてなども知りたまはざりけり。いとあまりおほどきたまへるけにこそは。あやしくおぼおほしかりけることなりや。かの入道の、今は仙人の、世にも住まぬやうにてゐたなるを聞きたまふも心苦しくなど、かたがたに思ひ乱れたまひぬ。

いとものあはれに眺めておはするに、御方参りたまひて、日中の御加持に、こなたかなたより参り集ひ、もの騒がしくののしるに、御前にこと人もさぶらはず、尼君、所得て、いと近くさぶらひたまふ、「あな見苦しや。短き御几帳引き寄せてこそさぶらひたまはめ。風など騒がしくて、おのづからほころびの

禄ども、大将賜ふ。御心と削ぎたまひて、いかめしきことどもは、このたび停めたまへれど、内、春宮、一院、後の宮、次々の御ゆかりつくしきほど、いひ知らず見えにたることなれば、なほかかる折にはめでたくなむおぼえける。

大将のただ一所おはするをさうぎうしく栄なき心地せしかど、あまたの人にすぐれ、おぼえことに、人柄もかたはらなきやうにものしたまふにも、かの母北の方の、伊勢の御息所との恨み深く、挑みかはしたまひけむほどの御宿世どもの行く末見えたるなむ、さまざまなりける。その日の御装束どもなど、こなたの上なむしたまひける。禄ども、おほかたのことをぞ、三条の北の方はいそぎたまふめりし。折節につけたる御いとなみ、うちうちのもののきよらをも、こなたにはただよそのことにのみ聞きわたりたまふを、何事につけてかは、かかるもののしき数にもまじらひたまはましとおぼえたるを、大将の君の御ゆかりに、いとよく数まへられたまへり。

年返りぬ。桐壺の御方、近づきたまひぬるにより、正月朔日より御修法不断にせさせたまふ。寺々社々の御祈り、はた数も知らず。おとどの君、ゆゆしきことを見たまへてしかば、かかるほどのこといと恐ろしきものに思ししみたるを、対の上などの、さることしたまはぬは、口惜しくさうぎうしきものから、うれしく思さるるに、まだいとあえかなる御ほどに、いかにおはせむ、とかねて思し騒ぐに、二月ばかりより、あやしく御けしき変はりて悩みたまふに、御心ども騒ぐべし。陰陽師どもも、所を変へてつつしみたまふべく申しければ、他のさし離れたらむはおぼつかなしとて、かの明石の御町の中の対に渡したてまつりたまふ。こなたはただおほきなる対二つ、廊どもなむめぐりてありけるに、御修法の壇隙なく塗りて、いみじき験者ども集ひてののしる。母君、この時に、わが御宿世も見ゆべきわざなめれば、いみじき心を尽くしたまふ。

かの大尼君も、今はこよなきほけ人にてぞありけむかし、この御ありさまを

大納言二人、中納言三人、宰相五人、殿上人は、例の内、春宮、院、残る少し。御座、御調度どもなどは、太政大臣詳しくうけたまはりて、仕うまつらせたまへり。今日は、仰せ言ありて、渡り参りたまへり。院も、いとかしくおどろき申したまひて、御座に着きたまひぬ。母屋の御座に向へて、大臣の御座あり。いときよらにもものしく太りて、この大臣ぞ今盛りの宿徳とは見えたまへる。あるじの院は、なほいと若き源氏の君に見えたまふ。御屏風四帖に、内の御手書かせたまへる、唐の綾の薄毯に、下絵のさまなどおろかならむやはおもしろき春秋の作り絵などよりも、この御屏風の墨つきのかかやくさまは目も及ばず、思ひなしさへめでたくなむありける。置物の御厨子、弾き物、吹き物など、蔵人所より賜はりたまへり。大将の御勢ひもいとかめしくなりたまひにたれば、うち添へて、今日の作法いとなり。御馬四十疋、左右の馬寮、六衛府の官人、上より次々に牽きととのふるほど、日暮れ果てぬ。

例の万歳楽、賀王恩などいふ舞、けしきばかり舞ひて、大臣の渡りたまへるに、めづらしくもてはやしたまへる御遊びに、皆人心を入れたまへり。琵琶は、例の兵部卿宮、何ごとにも世に難きものの上手におはして、いと二なし。御前に琴の御琴、大臣和琴弾きたまふ。年ごろ添ひたまひにける御耳の聞きなしにや、いと優にあはれに思さるれば、琴も御手をさをさ隠したまはず、いみじき音ども出づ。昔の御物語どもなど出で来て、今はた、かかる御仲らひに、いづ方につけても聞こえかよひたまふべき御睦びなど、心よく聞こえたまひて、御酒あまたたび参りて、もののおもしろさもとどこほりなく、御酔ひ泣きどもえとどめたまはず。

御贈り物に、すぐれたる和琴一つ、好みたまふ高麗笛添へて、紫檀の箱一よろひに、唐の本どもここの草の本など入れて、御車に追ひてたてまつれたまふ。御馬ども迎へ取りて、右つかさども、高麗の樂してののしる。六衛府の官人の

疋を分かちてせさせたまふ。ありがたき御はぐくみを思し知りながら、何ごとにつけてかは深き御心ざしをもあらはし御覽ぜさせたまはむとて、父宮、母御息所のおはせまし御ための心ざしをも取り添へ思すに、かくあながちにおほやけにも聞こえ返させたまへば、ことども多くとどめさせたまひつ。「四十の賀といふことは、さきざきを聞きはべるにも、残りの齡久しき例なむ少なかりけるを、このたびはなほ世の響きとどめさせたまひて、まことに後に足らむことを数へさせたまへ」とありけれど、公ざまにて、なほいとかめしくなむありける。

宮のおはします町の寝殿に御しつらひなどして、さきざきのこと変はらず、上達部の祿など、大饗になずらへて、親王たちにはことに女の装束、非参議の四位、まうち君達などただの殿上人には白き細長一襲、腰差などまで、次々に賜ふ。装束限りなくきよらを尽くして、名高き帯、御佩刀など、故前坊の御方ざまにて、伝はり参りたるも、またあはれになむ。古き世の一の物と名ある限りは、皆集ひ参る御賀になむあめる。昔物語にも、もの得させたるをかしこきことには数へ続けためれど、いとうるさくて、こちたき御仲らひのことどもは、えぞ数へあへはべらぬや。

内には、思し初めてしことどもを、むげにやはとて、中納言にぞつけさせたまひてける。そのころの右大将、病して辞したまひけるを、この中納言に、御賀のほど、よろこび加へむと思し召して、にはかになさせたまひつ。院もよろこび聞こえさせたまふものから、「いとかくにはかに、余る喜びをなむ、いちはやき心地しはべる」と卑下し申したまふ。丑寅の町に御しつらひまうけたまひて、隠ろへたるやうにしましたまへれど、今日は、なほはた、ことに儀式まさりて、所々の饗なども、内蔵寮、穀倉院より仕うまつらせたまへり。屯食など、公けざまにて、頭中将宣旨うけたまはりて、親王たち五人、左右の大臣、

行幸に、青海波のいみじかりし夕べ、思ひ出でたまふ人びとは、権中納言、衛門督、また劣らず立ち続きたまひにける、世々のおぼえ、ありさま、かたち、用意などもさをさ劣らず、官位はやや進みてさへこそなど、齡のほどをも数へて、なほさるべきにて、昔よりかく立ち続きたる御仲らひなりけり、とめでたく思ふ。あるじの院も、あはれに涙ぐましく、思し出でらるることども多かり。

夜に入りて、楽人どもまかり出づ。北の政所の別当ども、人びと率ゐて、祿の唐櫃に寄りて、一つづつ取りて、次々賜ふ。白きものどもを、品々かづきて、山際より池の堤過ぐるほどのよそ目は、千歳をかねて遊ぶ鶴の毛衣に思ひまがへらる。御遊び始まりて、またいとおもしろし。御琴どもは、春宮よりぞ調へさせたまひける。朱雀院よりわたり参れる琵琶、琴、内より賜はりたまへる箏の御琴など、皆昔おぼえたるものの音どもにて、めづらしく掻き合はせたまへるに、何の折にも過ぎにし方の御ありさま、内わたりなど思し出でらる。故入道の宮おはせましかば、かかる御賀など、われこそ進み仕うまつらましか、何ごとにつけてかは心ざしも見えたてまつりけむ、と飽かず口惜しくのみ思ひ出できこえたまふ。

内にも、故宮のおはしまさぬことを、何ごとにも榮なくさうざうしく思さるるに、この院の御ことをだに、例の跡あるさまのかしこまりを尽くしても、え見せたてまつらぬを、世とともに飽かぬ心地したまふも、今年はこの御賀にとつけて、行幸などもあるべく思しておきてけれど、「世の中のわづらひならむこと、さらにせさせたまふまじくなむ」と、否び申したまふことたびたびになりぬれば、口惜しく思しとまりぬ。

師走の二十日余りのほどに、中宮まかでさせたまひて、今年に残りの御祈りに、奈良の京の七大寺に、御誦經の布四千反、この近き都の四十寺に、絹四百

り。御堂のさまおもしろいはむかたなく、紅葉の蔭分けゆく野辺のほどよりはじめて見物なるに、かたへはきほひ集りたまふなるべし。霜枯れわたれる野原のままに、馬車の行きちがふ音しげく響きたり。御誦経、われもわれもと御方々いかめしくせさせたまふ。

二十三日を御としみの日にて、この院は、かく隙間なく集ひたまへるうちに、わが御私の殿と思す二条の院にて、その御まうけせさせたまふ。御装束をはじめ、おほかたのことどもも、皆こなたにのみしたまふ。御方々も、さるべきことども分けつつ望み仕うまつりたまふ。対どもは、人の局々にしたるを払ひて、殿上人、諸大夫、院司、下人までのまうけ、いかめしくせさせたまへり。寢殿の放出を例のしつらひにて、螺鈿の倚子立てたり。おとどの西の間に、御衣の机十二立てて、夏冬の御よそひ、御衾など例のごとく、紫の綾の覆ども、うるはしく見えわたりて、うちの心はあらはならず。御前に置物の机二つ、唐の地の裾濃の覆したり。挿頭の台は沈の花足、黄金の鳥、銀の枝にゐたる心ばへなど、淑景舎の御あづかりにて、明石の御方のせさせたまへる、ゆる深く心ことなり。うしろの御屏風四帖は、式部卿宮なむせさせたまひける、いみじく尽くして、例の四季の絵なれど、めづらしき山水、潭など、目馴れずおもしろし。北の壁に添へて置物の御厨子二よろい立てて、御調度ども例のことなり。南の廂に上達部、左右の大臣、式部卿宮をはじめたてまつりて、次々は、まして参りたまはぬ人なし。舞台の左右に、楽人の平張打ちて、西東に屯食八十具、緑の唐櫃四十つつ続けて立てたり。

未の時ばかりに楽人参る。万歳楽、皇じやうなど舞ひて、日暮れかかるほどに、高麗の乱声して、落蹲舞ひ出でたるほど、なほ常の目馴れぬ舞のさまなれば、舞ひ果つるほどに、権中納言、衛門督下りて、入綾をほのかに舞ひて、紅葉の蔭に入りぬる名残、飽かず興ありと人びと思したり。いにしへの朱雀院の

かざしを尋ねきこゆれば、かたじけなけれど、分かぬさまに聞こえさすれど、ついでなくてはべりつるを、今よりは疎からず、あなたなどにもものしたまひて、おこたらむことはおどろかしなどもものしたまはむなむ、うれしかるべき」などのたまへば、「頼もしき御蔭どもに、さまざまに後れきこえたまひて、心細げにおはしますめるを、かかる御ゆるしのはべめれば、ますことなくなむ思うたまへられける。背きたまひにし上の御心向けも、ただかなむ御心隔てきこえたまはず、まだいはけなき御ありさまをもはぐくみたてまつらせたまふべくぞはべめりし。うちうちにもさなむ頼みきこえさせたまひし」など聞こゆ。「いとかたじけなかりし御消息の後、いかでとのみ思ひはべれど、何ごとにつけても、数ならぬ身なむ口惜しかりける」と、安らかにおとなびたるけはひにて、宮にも御心につきたまふべく、絵などのこと、雛の捨てがたきさま、若やかに聞こえたまへば、げにいと若く心よげなる人かなと、幼き御心地にはうちとけたまへり。

さて後は、常に御文通ひなどして、をかしき遊びわざなどにつけても、疎からず聞こえ交はしたまふ。世の中の人も、あいなう、かばかりになりぬるあなたのことは、言ひあつかふものなれば、初めつ方は、「対の上いかに思すらむ。御おぼえ、いとこの年ごろのやうにはおはせじ。すこしは劣りなむ」など言ひけるを、今すこし深き御心ざし、かくてしも勝るさまなるを、それにつけても、また安からず言ふ人びとあるに、かく憎げなくさへ聞こえ交はしたまへば、こゝと直りて、目安くなむありける。

神無月に、対の上、院の御賀に、嵯峨野の御堂にて、薬師仏供養じたまつりたまふ。いかめしきことは、切にいさめ申したまへば、忍びやかと思しおきてたり。仏、経箱、帙簀のとのへ、まことの極樂思ひやらる。最勝王経、金剛般若、寿命経など、いとゆたけき御祈りなり。上達部いと多く参りたまへ

うつくしうもおはするかなと、さまざま見たてまつりたまへる御目うつしには、年ごろ目馴れたまへる人のおぼろけならむが、いとかくおどろかるべきにもあらぬを、なほたぐひなくこそはと見たまふ。ありがたきことなりかし。あるべき限り気高う恥づかしげにととのひたるに添ひて、はなやかに今めかしく、にほひなまめきたるさまさまの香りも取りあつめ、めでたき盛りに見えたまふ。去年より今年はまさり、昨日より今日はめづらしく、常に目馴れぬさまのしたまへるを、いかでかくしもありけむと思す。

うちとけたりつる御手習を硯の下にさし入れたまへれど、見つけたまひて、引き返し見たまふ。手などのいとわざとも上手と見えで、らうらうじくうつくしげに書きたまへり。

身に近く秋や来ぬらむ見るままに青葉の山も移ろひにけりとある所に目とどめたまひて、

水鳥の青羽は色も変はらぬを萩の下こそけしきことなれ

など書き添へつつさびたまふ。ことに触れて、心苦しき御けしきの、下にはおのづから漏りつつ見ゆるを、ことなく消ちたまへるも、ありがたくあはれに思さる。

今宵はいづ方にも御暇ありぬべければ、かの忍び所に、いとわりなくて出でたまひにけり。いとあるまじきことと、いみじく思し返すにもかなはざりけり。春宮の御方は、実の母君よりも、この御方をば睦ましきものに頼みきこえたまへり。いとうつくしげにおとなびまさりたまへるを、思ひ隔てずかなしと見たてまつりたまふ。御物語などいとなつかしく聞こえ交はしたまひて、中の戸開けて、宮にも対面したまへり。

いと幼げにのみ見えたまへば、心安くて、おとなおとなしく親めきたるさまに、昔の御筋をも尋ねきこえたまふ。中納言の乳母といふ召し出でて、「同じ

誰れも思すらむかし。からうしてまかでたまへり。姫宮のおはしますおとどの東面に、御方はしつらひたり。明石の御方、今は御身に添ひて出で入りたまふも、あらまほしき御宿世なりかし。

対の上、こなたに渡りて、対面したまふついでに、「姫宮にも、中の戸開けて聞こえむ。かねてよりもさやうに思ひしかど、ついでなきにはつつましきをかかる折に聞こえ馴れなば、心安くなむあるべき」と、おとどに聞こえたまへば、うち笑みて、「思ふやうなるべき御語らひにこそはあなれ。いと幼げにものしたまふめるを、うしろやすく教へなしたまへかし」と許しきこえたまふ。宮よりも、明石の君の恥づかしげにて交じらむを思せば、御髪すまし、ひきつくろひておはする、たぐひあらじと見えたまへり。

おとどは、宮の御方に渡りたまひて、「夕方、かの対にはべる人の、淑景舎に對面せむとて出で立つ、そのついでに、近づききこえさせまほしげにものすめるを、許して語らひたまへ。心などはいとよき人なり。まだ若々しくて、御遊びがたきにもつきなからずなむ」など聞こえたまふ。「恥づかしうこそはあらめ。何ごとをか聞こえむ」とおいらかにのたまふ。「人のいらへは、ことにしたがひてこそは思し出でめ。隔て置きてなもてなしたまひそ」と、こまかに教へきこえたまふ。御仲うるはしくて過ぐしたまへと思す。あまりに何心もなき御ありさまを見あらはされむも、恥づかしくあぢきなけれど、さのたまはむを、心隔てむもあいなしと思すなりけり。

対には、かく出で立ちなどしたまふものから、我より上の人やはあるべき、身のほどなるものはかなきさまを、見えおきたてまつりたるばかりこそあらめ、など思ひ続けられて、うち眺めたまふ。手習などするにも、おのづから古言も、もの思はしき筋にのみ書かるるを、さらばわが身には思ふことありけり、と身ながらぞ思し知らるる。院、渡りたまひて、宮、女御の君などの御さまどもを、

いと若やかなる御振る舞ひを、心ながらもゆるさぬことに思しながら、関守の固からぬたゆみにや、いとよく語らひおきて出でたまふ。そのかみも、人よりこよなく心とどめて思うたまへりし御心ざしながら、はつかにてやみにし御仲間ひには、いかでかはあはれも少なからむ。

いみじく忍び入りたまへる御寝くたれのさまを待ち受けて、女君、さばかりならむと心得たまへれど、おぼめかしくもてなしておはす。なかなかうちふすべなどしたまへらむよりも心苦しく、などかくしも見放ちたまへらむと思さるれば、ありしよりけに深き契りをのみ、長き世をかけて聞こえたまふ。かんの君の御ことも、また漏らすべきならねど、いにしへのことも知りたまへれば、まほにはあらねど、「物越しに、はつかなりつる対面なむ、残りある心地する。いかで人目咎めあるまじくもて隠しては、今一たびも」と語らひきこえたまふ。うち笑ひて、「今めかしくもなり返る御ありさまかな。昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦しく」とて、さすがに涙ぐみたまへるまみの、いとらうたげに見ゆるに、「かう心安からぬ御けしきこそ苦しけれ。ただおいらかに引きつみなどして教へたまへ。隔てあるべくもならはしきこえぬを、思はずにこそなりにける御心なれ」とて、よろづに御心とりたまふほどに、何ごともえ残したまはずなりぬめり。宮の御方にも、とみにえ渡りたまはず、こしらへきこえつつおはします。姫宮は何とも思したらぬを、御後見どもぞ安からず聞こえける。わづらはしうなど見えたまふけしきならば、そなたもまして心苦しかるべきを、おいらかにうつくしきもて遊びぐさに思ひきこえたまへり。

桐壺の御方は、うちはへえまかでたまはず。御暇のありがたければ、心安くならひたまへる若き御心に、いと苦しくのみ思したり。夏ごろ悩ましくしたまふを、とみにも許しきこえたまはねば、いとわりなしと思す。めづらしきさまの御心地にぞありける。まだいとあえかなる御ほどに、いとゆゆしくぞ誰れも

めたらむよりもめづらしくあはれにて、明けゆくもいと口惜しくて、出でたまはむ空もなし。

朝ぼらけのただならぬ空に、百千鳥の声もいとうらかなり。花は皆散り過ぎて、名残かすめる梢の浅緑なる木立、昔藤の宴したまひし、このころのことなりけりかしと思し出づる、年月の積もりにけるほども、その折のことかき続けあはれに思さる。中納言の君、見たてまつり送るとて、妻戸押し開けたるに、立ち返りたまひて、「この藤よ、いかに染めけむ色にか。なほえならぬ心添ふ匂ひにこそ。いかでかこの蔭をば立ち離るべき」と、わりなく出でがてに思しやすらひたり。山際よりさし出づる日のはなやかなるにさしあひ、目もかかやく心地する御さまの、こよなくねび加はりたまへる御けはひなどを、めづらしくほど経ても見たてまつるは、まして世の常ならずおぼゆれば、さる方にてもなどか見たてまつり過ぐしたまはざらむ、御宮仕へにも限りありて、際ことに離れたまふこともなかりしを、故宮のよろづに心を尽くしたまひ、よからぬ世の騒ぎに、軽々しき御名さへ響きてやみにしよ、など思ひ出でらる。名残多く残りぬらむ御物語のとぢめには、げに残りあらせまほしきわざなめるを、御身を心にえまかせたまふまじく、こころの人目もいと恐ろしくつつましかければ、やうやうさし上がり行くに心あわたたしくて、廊の戸に御車さし寄せたる人びとも、忍びて声づくりきこゆ。

人召して、かの咲きかかりたる花、一枝折らせたまへり。

沈みしも忘れぬものをこりずまに身も投げつべき宿の藤波

いといたく思しわづらひて寄りゐたまへるを、心苦しう見たてまつる。女君も、今さらにいとおつましく、さまざまに思ひ乱れたまへるに、花の蔭はなほなつかしくて、

身を投げむ淵もまことの淵ならでかけじやさらにこりずまの波

したてまつらむに、いと便なうはべらむ」とて、あながちに思ひめぐらして、入れたてまつる。御とぶらひなど聞こえたまひて、「ただここもとに。物越しにても。さらに昔のあるまじき心などは、残らずなりにけるを」と、わりなく聞こえたまへば、いたく嘆く嘆くみざり出でたまへり。さればよ、なほ気近さは、とかつ思さる。かたみにおぼろけならぬ御みじろきなれば、あはれも少なからず。東の対なりけり。辰巳の方の廂に据ゑたてまつりて、御障子のしりばかりは固めたれば、「いと若やかなる心地もするかな。年月の積もりをも、紛れなく数へらるる心ならひに、かくおぼめかしきはいみじうつらくこそ」と怨みきこえたまふ。

夜いたく更けゆく。玉藻に遊ぶ鴛鴦の声々など、あはれに聞こえて、しめじめと人目少なき宮の内のありさまも、さも移りゆく世かな、と思し続けるに、平中がまねならねど、まことに涙もろになむ。昔に変はりておとなおとなしくは聞こえたまふものから、これをかくてやと引き動かしたまふ。

年月をなかに隔てて逢坂のさもせきがたく落つる涙か

女、

涙のみせきとめがたき清水にてゆき逢ふ道はやく絶えにき

などかけ離れきこえたまへど、いにしへを思し出づるも、誰れにより多うはさるいみじきこともありし世の騒ぎぞは、と思ひ出でたまふに、げに今一たびの対面はありもすべかりけり、と思し弱るも、もとよりづしやかなるところはおはせざりし人の、年ごろは、さまざまに世の中を思ひ知り、来し方を悔しく、公私のことに触れつつ、数もなく思し集めて、いといたく過ぐしたまひにたれど、昔おぼえたる御対面に、その世のことも遠からぬ心地して、え心強くももてなしたまはず。なほらうらうじく若うなつかしくて、一方ならぬ世のつつましさをあはれをも思ひ乱れて、嘆きがちにものしたまふけしきなど、今始

ひたまふ。「人伝てならで、物越しに聞こえ知らすべきことなむある。さりぬべく聞こえなびかして、いみじく忍びて参らむ。今はさやうのありきも所狭き身のほどに、おぼろけならず忍ぶれば、そこにもまた人には漏らしたまはじと思ふに、かたみにうしろやすくなむ」とのたまふ。かむの君、いでや、世の中を思ひ知るにつけても、昔よりつらき御心を、ここら思ひつめつる年ごろの果てに、あはれに悲しき御ことをさし置きて、いかなる昔語りをか聞こえむ、げに人は漏り聞かぬやうありとも、心の問はむこそいと恥づかしかるべけれ、とうち嘆きたまひつつ、なほさらにあるまじきよしをのみ聞こゆ。

いにしへ、わりなかりし世にだに、心交はしたまはぬことにもあらざりしを、げに背きたまひぬる御ため、うしろめたきやうにはあれど、あらざりしことにもあらねば、今しもけざやかにきよまはりて、立ちにしわが名、今さらに取り返したまふべきにや、と思し起こして、この信太の森を道のしるべにて参うでたまふ。女君には、「東の院にものする常陸の君の、日ごろわづらひて久しくなりにけるを、もの騒がしき紛れに訪らはねば、いとほしくてなむ。昼などけざやかに渡らむも便なきを、夜の間に忍びてとなむ思ひはべる。人にもかくとも知らせじ」と聞こえたまひて、いといたく心懸想したまふを、例はさしも見えたまはぬあたりを、あやしと見たまひて、思ひ合はせたまふこともあれど、姫宮の御事の後は、何事もいと過ぎぬる方のやうにはあらず、すこし隔つる心添ひて、見知らぬやうにておはす。

その日は、寝殿へも渡りたまはで、御文書き交はしたまふ。薫き物などに心を入れて暮らしたまふ。宵過ぐして、睦ましき人の限り四五人ばかり、網代車の昔おぼえてやつれたるにて出でたまふ。和泉の守して、御消息聞こえたまふ。かく渡りおはしましたるよし、ささめき聞こゆれば、驚きたまひて、「あやしく。いかやうに聞こえたるにか」とむつかりたまへど、「をかしやかにて、帰

へ」とて、御使にも、女房して、土器さし出でさせたまひて、しひさせたまふ。御返りはいかがなど、聞こえにくく思したれど、ことごとくおもしろかるべき折のことならねば、ただ心をのべて、

背く世のうしろめたくはさがりがたきほだしをしひてかけな離れそ

などやうにぞあめりし。女の装束に、細長添へてかづけたまふ。御手などのいとめでたきを、院御覧じて、何ごともいと恥づかしげなめるあたりに、いはけなくて見えたまふらむこと、いと心苦しう思したり。

今はとて、女御、更衣たちなど、おのがじし別れたまふも、あはれなることなむ多かりける。尚侍の君は、故後の宮のおはしましし二条の宮にぞ住みたまふ。姫宮の御ことをおきては、この御ことをなむかへりみがちに帝も思したりける。尼になりなむと思したれど、かかるきほひには、慕ふやうに心あわたたしく、と諫めたまひて、やうやう仏の御ことなどいそがせたまふ。

六条のおとは、あはれに飽かずのみ思してやみにし御あたりなれば、年ごろも忘れがたく、いかならむ折に対面あらむ、今一たびあひ見て、その世のことも聞こえまほしくのみ思しわたるを、かたみに世の聞き耳も憚りたまふべき身のほどに、いとほしげなりし世の騒ぎなども思し出でらるれば、よろづにつみ過ぐしたまひけるを、かうのどやかになりたまひて、世の中を思ひしづまりたまふらむころほひの御ありさま、いよいよゆかしく心もとなければ、あるまじきこととは思しながら、おほかたの御とぶらひにことつけて、あはれなるさまに常に聞こえたまふ。若々しかるべき御あはひならねば、御返りも時々につけて聞こえ交はしたまふ。昔よりもこよなくうち具し、ととのひ果てにたる御けはひを見たまふにも、なほ忍びがたくて、昔の中納言の君のもとにも、心深きことどもを常にのたまふ。

かの人の兄なる和泉の前の守を召し寄せて、若々しくいにしへに返りて語ら

して、心安くうつくしきさましたまへり。院の帝は、ををしくすくよかなる方の御才などこそ、心もとなくおはします、と世人思ひためれ、をかしき筋、なまめきゆゑゆゑしき方は、人にまさりたまへるを、などてかくおいらかに生ほしたてたまひけむ、さるは、いと御心とどめたまへる御子と聞きしを、と思ふもなま口惜しけれど、憎からず見たてまつりたまふ。ただ聞こえたまふままに、なよなよとなびきたまひて、御いらへなどをも、おぼえたまひけることは、いはけなくうちのたまひ出でて、え見放たず見えたまふ。昔の心ならましかば、うたて心劣りせましを、今は世の中を皆さまざまに思ひなだらめて、とあるもかかるも、際離るることは難きものなりけり、とりどりにこそ多うはありければ、よその思ひはいとあらまほしきほどなりかし、と思すに、差し並び目離れず見たてまつりたまへる年ごろよりも、対の上の御ありさまぞなほありがたく、われながらも生ほしたてけり、と思す。一夜のほど、朝の間も恋しくおぼつかなく、いとどしき御心ぎしのまさるを、などかくおぼゆるむとゆゆしきまでなむ。院の帝は、月のうちに御寺に移ろひたまひぬ。この院に、あはれなる御消息ども聞こえたまふ。姫宮の御ことはさらなり、わづらはしく、いかに聞くところやなど、憚りたまふことなく、ともかくも、ただ御心にかけてもてなしたまふべくぞ、たびたび聞こえたまひける。されど、あはれにうしろめたく、幼くおはするを思ひきこえたまひけり。

紫の上にも、御消息ことにあり。

幼き人の、心地なきさまにて移ろひものすらむを、罪なく思しゆるして、後見たまへ。尋ねたまふべきゆゑもやあらむとぞ。

背きにしこの世に残る心こそ入る山路のほだしなりけれ

闇をえはるけで聞こゆるも、をこがましくや。

とあり。おとども見たまひて、「あはれなる御消息を。かしこまり聞こえたま

へり。鶯の若やかに、近き紅梅の末にうち鳴きたるを、「袖こそ匂へ」と花をひき隠して、御簾押し上げて眺めたまへるさま、夢にもかかる人の親にて重き位と見えたまはず。若うなまめかしき御さまなり。

御返り、すこしほど経る心地すれば、入りたまひて、女君に花見せたてまつりたまふ。「花といはば、かくこそ匂はまほしけれな。桜に移しては、また塵ばかりも心分くる方なくやあらまし」などのたまふ。「これも、あまた移ろはぬほど、目とまるにやあらむ。花の盛りに並べて見ばや」などのたまふに、御返りあり。紅の薄様にあざやかにおし包まれたるを、胸つぶれて、御手のいと若きを、しばし見せたてまつらであらばや、隔つとはなけれど、あはあはしきやうならむは、人のほどかたじけなし、と思すに、ひき隠したまはむも、心おきたまふべければ、かたそば広げたまへるを、しりめに見おこせて添ひ臥したまへり。

はかなくてうはの空にぞ消えぬべき風にただよふ春のあは雪

御手、げにいと若く幼げなり。さばかりのほどになりぬる人は、いとかくおはせぬものと、目とまれど、見ぬやうに紛らはして止みたまひぬ。異人の上ならば、さこそあれなどは忍びて聞こえたまふべけれど、いとほしくて、ただ、「心安くを思ひなしたまへ」とのみ聞こえたまふ。

今日は、宮の御方に昼渡りたまふ。心ことにうち化粧じたまへる御ありさま、今見たてまつる女房などは、まして見るかひありと思ひきこゆらむかし。御乳母などやうの老いしらへる人びとぞ、いでや、この御ありさま一所こそめでたけれ、めざましきことはありなむかし、とうち混ぜて思ふもありける。女宮は、いとらうたげに幼きさまにて、御しつらひなどのことごとしくよだけくうるはしきに、みづからは何心もなくものはかなき御ほどにて、いと御衣がちに、身もなくあえかなり。ことに恥ぢなどもしたまはず、ただ稚児の面嫌ひせぬ心地

るに、「なほ残れる雪」と忍びやかに口ずさびたまひつつ、御格子うち叩きたまふも、久しくかかることなかりつるならひに、人びとも空寝をしつつ、やや待たせたてまつりて引き上げたり。「こよなく久しかりつるに、身も冷えにけるは。懼ぢきこゆる心のおろかならぬにこそあめれ。さるは、罪もなしや」とて、御衣ひきやりなどしたまふに、すこし濡れたる御単衣の袖をひき隠して、うらもなくなつかしきものから、うちとけてはたあらぬ御用意など、いと恥づかしげにをかし。限りなき人と聞こゆれど、難かめる世をと、思し比べらる。

よろづいにしへのことを思し出でつつ、とけがたき御けしきを怨みきこえたまひて、その日は暮らしたまひつれば、え渡りたまはで、寢殿には御消息を聞こえたまふ。

今朝の雪に心地あやまりて、いと悩ましくはべれば、心安き方にためらひはべる。

とあり。御乳母、「き聞こえさせはべりぬ」とばかり、言葉に聞こえたり。異なることなの御返りや、と思す。院に聞こし召さむこともいとほし、このころばかりつくろはむと思せど、えさもあらぬを、さは思ひしことぞかし、あな苦し、とみづから思ひ続けたまふ。女君も、思ひやりなき御心かな、と苦しがりたまふ。

今朝は、例のやうに大殿籠もり起きさせたまひて、宮の御方に御文たてまつれたまふ。ことに恥づかしげもなき御さまなれど、御筆などひきつくろひて、白き紙に、

中道を隔つるほどはなけれども心乱るる今朝のあは雪

梅に付けたまへり。人召して、「西の渡殿よりたてまつらせよ」とのたまふ。やがて見出だして、端近くおはします。白き御衣どもを着たまひて、花をまさがりたまひつつ、友待つ雪のほのかに残れる上に、うち散り添ふ空を眺めたま

れ、かたじけなく心苦しき御ことなめれば、いかで心おかれたてまつらじとなむ思ふ」などのたまへば、中務、中将の君などやうの人びと、目をくはせつつ、「あまりなる御思ひやりかな」など言ふべし。昔はただならぬさまに使ひならしたまひし人どもなれど、年ごろはこの御方にさぶらひて、皆心寄せきこえたるなめり。異御方々よりも、「いかに思すらむ。もとより思ひ離れたる人びとは、なかなか心安きを」など、おもむけつつとぶらひきこえたまふもあるを、かく推し量る人こそなかなか苦しけれ、世の中もいと常なきものを、などてかさのみは思ひ悩まむ、など思す。

あまり久しき宵居も例ならず、人やとがめむと心の鬼に思して、入りたまひぬれば、御衾参りぬれど、げにかたはらさびしき夜な夜な経にけるも、なほただならぬ心地すれど、かの須磨の御別れの折などを思し出づれば、今はとかけ離れたまひても、ただ同じ世のうちに聞きたてまつらましかばと、わが身までのことはうち置き、あたらしく悲しかりしありさまぞかし、さてその紛れにわれも人も命堪へずなりなましかば、いふかひあらまし世かは、と思し直す。風うち吹きたる夜のけはひ冷やかにて、ふとも寝入られたまはぬを、近くさぶらふ人びとあやしとや聞かむと、うちも身じろきたまはぬも、なほいと苦しげなり。夜深き鳥の声の聞こえたるも、ものあはれなり。

わざとつらしとにはあらねど、かやうに思ひ乱れたまふけにや、かの御夢に見えたまひければ、うちおどろきたまひて、いかにと心騒がしたまふに、鳥の音待ち出でたまへれば、夜深きも知らず顔に急ぎ出でたまふ。いといはけなき御ありさまなれば、乳母たち近くさぶらひけり。妻戸押し開けて出でたまふを、見たてまつり送る。明けぐれの空に、雪の光見えておぼつかなし。名残までとまれる御匂ひ、「闇はあやなし」と独りごたる。

雪は、所々消え残りたるが、いと白き庭の、ふとけぢめ見えわかれぬほどな

目に近く移れば変はる世の中を行く末遠く頼みけるかな

古言など書き交ぜたまふを、取りて見たまひて、はかなき言なれど、げにとことわりにて、

命こそ絶ゆとも絶えめ定めなき世の常ならぬ仲の契りを

とみにもえ渡りたまはぬを、「いとかたはらいたきわざかな」と、そそのかしきこえたまへば、なよやかにをかしきほどに、えならず匂ひて渡りたまふを見出だしたまふも、いとただにはあらずかし。

年ごろ、さもやあらむと思ひしことどもも、今はとのみもて離れたまひつつ、さらばかくにこそはと、うちとけゆく末に、ありありて、かく世の聞き耳もなのめならぬことの出で来ぬるよ、思ひ定むべき世のありさまにもあらざりければ、今より後もうしろめたくぞ思しなりぬる。さこそつれなく紛らはしたまへど、さぶらふ人びとも、「思はずなる世なりや。あまたものしたまふやうなれど、いづ方も皆、こなたの御けはひには、かたさり憚るさまにて過ぐしたまへばこそ、ことなくなだらかにもあれ、おしたちてかばかりなるありさまに、消たれてもえ過ぐしたまふまじ。またさりとて、はかなきことにつけても安からぬことのあらむ折々、かならずわづらはしきことども出で来なむかし」など、おのがじしうち語らひ嘆かしげなるを、つゆも見知らぬやうに、いとけはひをかしく物語などしたまひつつ、夜更くるまでおはす。

かう人のただならず言ひ思ひたるも、聞きにくしと思して、「かくこれかれあまたものしたまふめれど、御心にかなひて、今めかしくすぐれたる際にもあらずと、目馴れてさうざうしく思したりつるに、この宮のかく渡りたまへるこそめやすけれ。なほ童心の失せぬにやあらむ、われも睦びきこえてあらまほしきを、あいなく隔てあるさまに人びとやとりなさむとすらむ。ひとしきほど劣りざまなど思ふ人にこそ、ただならず耳たつこともおのづから出で来るわざな

やびを尽くしたまふ。対の上もことに触れて、ただにも思されぬ世のありさまなり。げにかかるにつけて、こよなく人に劣り消たることもあるまじけれど、また並ぶ人なくならひたまひて、はなやかに生ひ先遠く、あなづりにくきけはひにて移ろひたまへるに、なまはしたなく思さるれど、つれなくのみもてなして、御渡りのほども、もろ心にはかなきこともし出でたまひて、いとらうたげなる御ありさまを、いとどありがたしと思ひきこえたまふ。姫宮は、げにまだいと小さく片なりにおはするうちにも、いといはけなきけしきして、ひたみちに若びたまへり。かの紫のゆかり尋ね取りたまへりし折思し出づるに、かれはされていふかひありしを、これはいといはけなくのみ見えたまへば、よかめり、憎げにおしたちたることなどはあるまじかめり、と思すものから、いとあまりものの榮なき御さまかなと見たてまつりたまふ。

三日がほどは夜離れなく渡りたまふを、年ごろさもならひたまはぬ心地に、忍ぶれどなほものあはれなり。御衣どもなど、いよいよ薰きしめさせたまふものから、うち眺めてものしたまふけしき、いみじくらうたげにをかし。などてよろづのことありとも、また人をば並べて見るべきぞ、あだあだしく心弱くなりおきにけるわがおこたりに、かかることも出で来るぞかし、若けれど、中納言をばえ思しかけずなりぬめりしをと、われながらつらく思し続けるに、涙ぐまれて、「今宵ばかりはことわりと許したまひてむな。これより後のとだえあらむこそ、身ながらも心づきなかるべけれ。またさりとて、かの院に聞こし召さむことよ」と、思ひ乱れたまへる御心のうち苦しげなり。すこしほほ笑みて、「みづからの御心ながらだにえ定めたまふまじかなるを、ましてことわりも何も。いづこにとまるべきにか」と、いふかひなげにとりなしたまへば、恥づかしうさへおぼえたまひて、つらづゑをつきたまひて、寄り臥したまへれば、硯を引き寄せたまひて、

で、めづらしきもの一つばかり弾きたまふに、こととしからねど、限りなくおもしろき夜の御遊びなり。唱歌の人びと御階に召して、すぐれたる声の限り出だして、返り声になる、夜の更け行くままに、物の調べどもなつかしく変はりて、青柳遊びたまふほど、げにねぐらの鶯おどろきぬべく、いみじくおもしろし。私事のさまにしましたまひて、禄などいと警策にまうけられたりけり。

暁に、かんの君帰りたまふ。御贈り物などありけり。「かう世を捨つるやうにて明かし暮らすほどに、年月の行方も知らず顔なるを、かう数へ知らせたまへるにつけては、心細くなむ。時々は、老いやまさと見たまひ比べよかし。かく古めかしき身の所狭さに、思ふに従ひて対面なきもいと口惜しくなむ」など聞こえたまひて、あはれにもをかしくも、思ひ出できこえたまふことなきにしもあらねば、なかなかほのかにて、かく急ぎ渡りたまふを、いと飽かず口惜しくぞ思されける。かむの君も、まことの親をばさるべき契りばかりに思ひきこえたまひて、ありがたくこまかなりし御心ばへを、年月に添へて、かく世に住み果てたまふにつけても、おろかならず思ひきこえたまひけり。

かくて如月の十余日に、朱雀院の姫宮、六条院へ渡りたまふ。この院にも、御心まうけ世の常ならず。若菜参りし西の放出に、御帳立てて、そなたの一二の対、渡殿かけて、女房の局々まで、こまかにしつらひ磨かせたまへり。内に参りたまふ人の作法をまねびて、かの院よりも御調度など運ばる。渡りたまふ儀式言へばさらなり。御送りに、上達部などあまた参りたまふ。かの家司望みたまひし大納言も、やすからず思ひながらさぶらひたまふ。御車寄せたる所に、院渡りたまひて、下ろしたてまつりたまふなども、例には違ひたることどもなり。ただ人におはすれば、よろづのこと限りありて、内参りにも似ず、婿の大君といはむにもこと違ひて、めづらしき御仲のあはひどもになむ。

三日がほど、かの院よりも、あるじの院方よりも、いかめしくめづらしきみ

わざなめれど、御孫の君たちは、いづ方につけても、おり立ちて雑役したまふ。籠物四十枝、折櫃物四十、中納言をはじめたてまつりて、さるべき限り、取り続きたまへり。御土器くだり、若菜の御羹参る。御前には、沈の懸盤四つ、御坏どもなつかしく、今めきたるほどにせられたり。

朱雀院の御菓のことなほたひらぎ果てたまはぬにより、楽人などは召さず、御笛など、太政大臣の、その方は整へたまひて、「世の中に、この御賀よりまためづらしくきよら尽くすべきことあらじ」とのたまひて、すぐれたる音の限りを、かねてより思しまうけたりければ、忍びやかに御遊びあり。とりどりにたてまつる中に、和琴は、かの大臣の第一に秘したまひける御琴なり。さるものの上手の、心をとどめて弾き馴らしたまへる音、いと並びなきを、異人は掻きたてにくくしたまへば、衛門督の固く否ぶるを責めたまへば、げにいとおもしろく、をさをさ劣るまじく弾く。何ごとも、上手の嗣といひながら、かくしもえ継がぬわざぞかし、と心にくくあはれに人びと思す。調べに従ひて、跡ある手ども、定まれる唐土の伝へどもは、なかなか尋ね知るべき方あらはなるを、心にまかせて、ただ掻き合はせたるすが掻きに、よろづの物の音調へられたるは、妙におもしろく、あやしきまで響く。父大臣は、琴の緒もいとゆるに張りて、いたう下して調べ、響き多く合はせてぞ掻き鳴らしたまふ。これは、いとわららかに昇る音の、なつかしく愛敬づきたるを、いとかうしもは聞こえざりしを、と親王たちも驚きたまふ。琴は兵部卿宮弾きたまふ。この御琴は、宜陽殿の御物にて、代々に第一の名ありし御琴を、故院の末つ方、一品宮の好みたまふことにて、賜はりたまへりけるを、この折のきよらを尽くしたまはむとするため、大臣の申し賜はりたまへる御伝へ伝へを思すに、いとあはれに、昔のこと恋しく思し出でらる。親王も酔ひ泣きえとどめたまはず。御けしきとりたまひて、琴は御前に譲りきこえさせたまふ。もののあはれにえ過ぐしたまは

ほどなり。

人びと参りなどしたまひて、御座に出でたまふとて、かんの君に御対面あり。御心のうちには、いにしへ思し出づることもさまざまなりけむかし。いと若くきよらにて、かく御賀などいふことは、ひが数へにやとおぼゆるさまの、なまめかしく人の親げなくおはしますを、めづらしくて、年月隔てて見たてまつりたまふは、いと恥づかしけれど、なほけやかなる隔てもなくて、御物語聞こえ交はしたまふ。幼き君もいとうつくしくてもものしたまふ。かむの君は「うち続いても御覽ぜられじ」とのたまひけるを、大将かかるついでにだに御覽ぜさせむとて、二人同じやうに、振分髪の何心なき直衣姿どもにておはす。「過ぐる齢もみづからの心にはことに思ひとがめられず、ただ昔ながらの若々しきありさまにて、改むることもなきを、かかる末々のもよほしになむ、なまはしたなきまで思ひ知らるる折もはべりける。中納言のいつしかとまうけたなるを、ことごとしく思ひ隔てて、まだ見せずかし。人よりことに数へ取りたまひける今日の子の日こそ、なほうれたけれ。しばしは老を忘れてもはべるべきを」と聞こえたまふ。かんの君も、いとよくねびまさり、もののしきけさへ添ひて、見るかひあるさましたまへり。

若葉さす野辺の小松を引き連れてもとの岩根を祈る今日かな

とせめておとなび聞こえたまふ。沈の折敷四つして、御若葉、さまばかり参れり。御土器取りたまひて、

小松原末の齢に引かれてや野辺の若葉も年を摘むべき

など聞こえ交はしたまひて、上達部あまた南の廂に着きたまふ。

式部卿宮は参りにくく思しけれど、御消息ありけるに、かく親しき御仲らひにて、心あるやうならむも便なくて、日たけてぞ渡りたまへる。大将の、したり顔にて、かかる御仲らひにうけばりてものしたまふも、げに心やましげなる

大北の方、常にうけはしげなることどもをのたまひ出でつつ、あぢきなき大将の御ことにてさへ、あやしく恨みそねみたまふなるを、かやうに聞きて、いかにいちじるく思ひ合はせたまはむ、など、おいらかなる人の御心といへど、いかでかはかばかりの隈はなからむ、今はさりとものみ、わが身を思ひ上がり、うらなくて過ぐしける世の、人笑へならむことを、下には思ひ続けたまへど、いとおいらかにのみもてなしたまへり。

年も返りぬ。朱雀院には、姫宮、六条院に移ろひたまはむ御いそぎをしたまふ。聞こえたまへる人びと、いと口惜しく思し嘆く。内にも御心ばへありて聞こえたまひけるほどに、かかる御定めを聞こし召して、思し止まりにけり。さるは、今年ぞ四十になりたまひければ、御賀のこと、おほやけにも聞こし召し過ぐさず、世の中の営みにて、かねてより響くを、ことのわづらひ多くいかめしきことは昔より好みたまはぬ御心にて、皆かへさひ申したまふ。

正月二十三日、子の日なるに、左大将殿の北の方、若菜参りたまふ。かねてけしきも漏らしたまはで、いといたく忍びて思しまうけたりければ、にはかにて、えいさめ返しきこえたまはず。忍びたれど、さばかりの御勢ひなれば、渡りたまふ御儀式など、いと響きことなり。

南の御殿の西の放出に御座よそふ。屏風、壁代よりはじめ、新しく払ひしつらはれたり。うるはしく椅子などは立てず、御地敷四十枚、御茵、脇息など、すべてその御具ども、いときよらにせさせたまへり。螺鈿の御厨子二よろひに、御衣箱四つ据ゑて、夏冬の御装束、香壺、薬の箱、御硯、ゆする坏、搔上の箱などやうのもの、うちうちきよらを尽くしたまへり。御插頭の台には沈、紫檀を作り、めづらしきあやめを尽くし、同じき金をも色使ひなしたる、心ばへあり今めかしく、かんの君、もののみやび深くかどめきたまへる人にて、目馴れぬさまにしなしたまへる、おほかたのことをば、ことさらにこととしからぬ

え否びずなりにしを、ことごとしくぞ人は言ひなさむかし。今はさやうのこと
も初ひ初ひしく、すさまじく思ひなりにたれば、人伝てにけしきばませたまひ
しには、とかく逃れきこえしを、対面のついでに、心深きさまなることどもを
のたまひ続けしには、えすくすくしくも返さひ申きでなむ。深き御山住みに移
ろひたまはむほどにこそは、渡したてまつらめ。あぢきなくや思さるべき。い
みじきことありとも、御ため、あるより変はることはさらにあるまじきを、心
なおきたまひそよ。かの御ためこそ心苦しからめ。それもかたはならずもてな
してむ。誰も誰ものどかにて過ぐしたまはば」など聞こえたまふ。はかなき御
すさびごとをだに、めざましきものに思して、心やすからぬ御心ざまなれば、
いかが思さむと思すに、いとつれなくて、「あはれなる御譲りにこそはあなれ。
ここにはいかなる心をおきたてまつるべきにか。めざましく、かくてなど、咎
めらるまじくは、心やすくてもはべなむを、かの母女御の御方ざまにても、う
とからず思し数まへてむや」と卑下したまふを、「あまりかううちとけたまふ
御ゆるしも、いかなればと、うしろめたくこそあれ。まことは、さだに思しゆ
るいて、われも人も心得て、なだらかにもてなし過ぐしたまはば、いよいよあ
はれになむ。ひがこと聞こえなどせむ人の言、聞き入れたまふな。すべて世の
人の口といふものなむ、誰が言ひ出づることともなく、おのづから人の仲らひ
など、うちほほゆがみ、思はずなること出で来るものなるを、心ひとつにしづ
めて、ありさまに従ふなむよき。まだきに騒ぎて、あいなきもの怨みしたまふ
な」と、いとよく教へきこえたまふ。

心のうちにも、かく空より出で来にたるやうなることにて、逃れたまひがた
きを、憎げにも聞こえなさじ、わが心に憚りたまひ、いさむることに従ひたま
ふべき、おのがどちの心より起これる懸想にもあらず、せかるべき方なきもの
から、をこがましく思ひむすばほるさま、世人に漏り聞こえじ、式部卿宮の

何ごとともまだ浅くて、たどり少なくこそはべらめ。かたじけなくとも深き心にて後見きこえさせはべらむに、おはします御蔭に変わりては思されじを、ただ行く先短くて、仕うまつりさすことやばはべらむと、疑はしき方のみなむ心苦しくはべるべき」と受け引き申したまひつ。

夜に入りぬれば、あるじの院方も、客人の上達部たちも、皆御前にて、あるじのこと、精進物にて、うるはしからずなまめかしくせさせたまへり。院の御前に、浅香の懸盤に御鉢など、昔に変はりて参るを、人びと涙おし拭ひたまふ。あはれなる筋のことどもあれど、うるさければ書かず。夜更けて帰りたまふ。祿ども次々に賜ふ。別当大納言も御送りに参りたまふ。あるじの院は、今日の雪にいとど御風邪加はりて、かき乱り悩ましく思さるれど、この宮の御事聞こえ定めつるを、心やすく思しけり。

六条院は、なま心苦しうさまざま思し乱る。紫の上も、かかる御定めなむと、かねてもほの聞きたまひけれど、さしもあらじ、前斎院をも、ねむごろに聞こえたまふやうなりしかど、わざとしも思し遂げずなりにしを、など思して、さることもやあるとも問ひきこえたまはず、何心もなくしておはするに、いとほしく、この事をいかに思さむ、わが心はつゆも変はるまじく、さることあらむにつけては、なかなかいとど深さこそまさらめ、見定めたまはざらむほど、いかに思ひ疑ひたまはむなど、安からず思さる。今の年ごろとなりては、ましてかたみに隔てきこえたまふことなく、あはれなる御仲なれば、しばし心に隔て残したることあらむもいぶせきを、その夜はうち休みて明かしたまひつ。

またの日、雪うち降り、空のけしきものあはれに、過ぎにし方行く先の御物語聞こえ交はしたまふ。「院の頼もしげなくなりましたまひにたる、御とぶらひに参りて、あはれなることどものありつるかな。女三の宮の御ことを、いと捨てがたげに思して、しかしかなむのたまはせつけしかば、心苦しくて、え聞こ

をば、取り分きうしろめたく見わづらひはべる」とて、まほにはあらぬ御けしき、心苦しく見たてまつりたまふ。御心のうちにも、さすがにゆかしき御ありさまなれば、思し過ぐしがたくて、「げにただ人よりも、かかる筋には、私さまの御後見なきは、口惜しげなるわざになむはべりける。春宮かくておはしませば、いとかしこき末の世の儲けの君と天の下の頼みどころに仰ぎきこえさするを、ましてこのことと聞こえ置かせたまはむことは、一事としておろそかに軽め申したまふべきにはべらねば、さらに行く先のこと思し悩むべきにもはべらねど、げにこと限りあれば、公けとなりたまひ、世の政事御心になふべしとは言ひながら、女の御ために、何ばかりのけぎやかなる御心寄せあるべきにもはべらざりけり。すべて女の御ためには、さまざまことの御後見とすべきものは、なほさるべき筋に契りを交はし、えさらぬことに育みきこゆる御護りめはべるなむ、うしろやすかるべきことにはべるを、なほしひて後の世の御疑ひ残るべくは、よろしきに思し選びて、忍びてさるべき御預かりを定めおかせたまふべきになむはべなる」と奏したまふ。「さやうに思ひ寄る事はべれど、それも難きことになむありける。いにしへの例を聞きはべるにも、世をたもつ盛りのみこにだに、人を選びて、さるさまのことをしたまへるたぐひ多かりけり。ましてかく、今はとこの世を離るる際にて、ことごとしく思ふべきにもあらねど、またしか捨つる中にも、捨てがたきことありて、さまざまに思ひわづらひはべるほどに、病は重りゆく、また取り返すべきにもあらぬ月日の過ぎゆけば、心あわたたしくなむ。かたはらいたき譲りなれど、このいはけなき内親王一人、分きて育み思して、さるべきやすがをも御心に思し定めて預けたまへと聞こえまほしきを、権中納言などの独りものしつるほどに、進み寄るべくこそありけれ。おほいまうち君に先ぜられて、ねたくおぼえはべる」と聞こえたまふ。「中納言の朝臣まめやかなる方はいとよく仕うまつりぬべくはべるを、

六条院も、すこし御心地よろしくと聞きたてまつらせたまひて、参りたまふ。御賜ばりの御封などこそ、皆同じごと、下りゐの帝と等しく定まりたまへれど、まことの太上天皇の儀式にはうけばりたまはず、世のもてなし思ひきこえたるさまなどは心ことなれど、ことさらに削ぎたまひて、例のこととしからぬ御車にたてまつりて、上達部などさるべき限り、車にてぞ仕うまつりたまへる。

院にはいみじく待ちよろこびきこえさせたまひて、苦しき御心地を思し強りて御対面あり。うるはしきさまならず、ただおはします方に御座よそひ加へて入れたてまつりたまふ。変はりたまへる御ありさま見たてまつりたまふに、来し方行く先暮れて、悲しくとめがたく思さるれば、とみにもえたためらひたまはず、「故院におくれたてまつりしころほひより、世の常なく思うたまへられしかば、この方の本意深く進みはべりにしを、心弱く思うたまへたゆたふことのみはべりつつ、つひにかく見たてまつりなしはべるまで、おくれたてまつりはべりぬる心のぬるさを、恥づかしく思うたまへらるるかな。身にとりては、ことももあるまじく思うたまへたちはべる折々あるを、さらにいと忍びがたきこと多かりぬべきわざにこそはべりけれ」と、慰めがたく思したり。

院ももの心細く思さるるに、え心強からず、うちしほれたまひつつ、いにしへ今の御物語、いと弱げに聞こえさせたまひて、「今日か明日かとおぼえはべりつつ、さすがにほど経ぬるを、うちたゆみて深き本意の端にても遂げずなりなむこと、と思ひ起こしてなむ。かくても残りの齢なくは行なひの心ぎしも叶ふまじけれど、まづ仮にてものだめおきて、念仏をだにと思ひはべる。はかばかしからぬ身にても、世にながらふること、ただこの心ぎしにひきとどめられたると思うたまへ知られぬにしもあらぬを、今まで勤めなき怠りをだに安からずなむ」とて、思しおきてたるさまなど詳しくのたまはするついでに、「女御子たちを、あまたうち捨てはべるなむ心苦しき。中にも、また思ひ譲る人なき

かの院よりぞ奉らせたまひける。

中宮よりも、御装束、櫛の箱、心ことに調ぜさせたまひて、かの昔の御髪上の具、ゆゑあるさまに改め加へて、さすがに元の心ばへも失はず、それと見せて、その日の夕つ方奉れさせたまふ。宮の権の佐、院の殿上にもさぶらふを御使にて、姫宮の御方に参らすべくのたまはせつれど、かかる言ぞ中にありける。

さしながら昔を今に伝ふれば玉の小櫛ぞ神さびにける

院御覧じつけて、あはれに思し出でらるることもありけり。あえ物けしうはあらじと譲りきこえたまへるほど、げにおもだたしきかむぎしなれば、御返りも、昔のあはれをばさしおきて、

さしつぎに見るものにもが万世を黄楊の小櫛の神さぶるまで

とぞ祝ひきこえたまへる。

御心地いと苦しきを念じつつ、思し起こして、この御いそぎ果てぬれば、三日過ぐして、つひに御髪下ろしたまふ。よろしきほどの人の上にてだに、今はとてさま変はるは悲しげなるわざなれば、ましていとあはれげに御方々も思し惑ふ。尚侍の君は、つとさぶらひたまひて、いみじく思し入りたるを、こしらへかねたまひて、「子を思ふ道は限りありけり。かく思ひしみたまへる別れの堪へがたくもあるかな」とて、御心乱れぬべけれど、あながちに御脇息にかかりたまひて、山の座主よりはじめて、御忌むことの阿闍梨三人さぶらひて、法服などたてまつるほど、この世を別れたまふ御作法、いみじく悲し。今日は、世を思ひ澄ましたる僧たちなどだに、涙もえとどめねば、まして女宮たち、女御、更衣、ここのら男女、上下ゆすり満ちて泣きとよむに、いと心あわたたしう、かからで、静やかなる所にやがて籠もるべく、思しまうけける本意違ひて思し召さるるも、ただこの幼き宮にひかされて、と思しのたまはす。内よりはじめたてまつりて、御とぶらひのしげさ、いとさらなり。

めにもあらぬを、かくのたまへば、いとほしく口惜しくも思ひて、うちうちに
思し立ちにたるさまなど、詳しく聞こゆれば、さすがにうち笑みつつ、「いと
かなしくしたてまつりたまふみなめれば、あながちにかく来し方行く先のた
どりも深きなめりかしな。ただ内にこそたてまつりたまはめ。やむごとなきま
づの人びとおはすといふことは、よしなきことなり。それにさはるべきこと
もあらず。かならず、さりとて、末の人疎かなるやうもなし。故院の御時に、
大后の、坊の初めの女御にて、いきまきたまひしかど、むげの末に参りたまへ
りし入道宮に、しばしは圧されたまひにきかし。このみこの御母女御こそは、
かの宮の御はらからにものしたまひけめ。かたちも、さしつぎにはいとよしと
言はれたまひし人なりしかば、いづ方につけても、この姫宮、おしなべての際
にはよもおはせじを」などいぶかしくは思ひきこえたまふべし。

年も暮れぬ。朱雀院には、御心地なほおこたるさまにもおはしまさねば、よ
ろづあわたたしく思し立ちて、御裳着のこと思しいそぐさま、来し方行く先あ
りがたげなるまでいつくしくのしる。御しつらひは、柏殿の西面に、御几帳
よりはじめて、ここの綾錦混ぜさせたまはず、唐土の後の飾りを思しやりて、
うるはしくことごとしく、かかやくばかり調へさせたまへり。御腰結には、太
政大臣をかねてより聞こえさせたまへりければ、ことごとしくおはする人にて、
参りにくく思しけれど、院の御言を昔より背き申したまはねば、参りたまふ。
今二所の大臣たち、その残り、上達部などは、わりなき障りあるも、あながち
にためらひ助けつつ参りたまふ。親王たち八人、殿上人はたさらにもいはず、
内、春宮の残らず参り集ひて、いかめしき御いそぎの響きなり。院の御こと、
このたびこそとぢめなれと、帝、春宮をはじめたてまつりて、心苦しく聞こし
召しつつ、蔵人所、納殿の唐物ども多く奉らせたまへり。六条院よりも、御と
ぶらひいとこちたし。贈り物ども、人びとの禄、尊者の大臣の御引出物など、

ずは、わが身も苦しくこそはあらめ、など、もとより好き好きしからぬ心なれば、思ひしづめつつうち出でねど、さすがに他ざまに定まり果てたまはむも、いかにぞやおぼえて、耳はとまりけり。

春宮にも、かかることども聞こし召して、「さし当たりたるただ今のことよりも、後の世の例ともなるべきことなるを、よく思し召しめぐらすべきことなり。人柄よろしとても、ただ人は限りあるを、なほしか思し立つことならば、かの六条院にこそ親ざまに譲りきこえさせたまはめ」となむ、わざとの御消息とはあらねど、御けしきありけるを待ち聞かせたまひても、げにさることなり、いとよく思しのたまはせたりと、いよいよ御心立たせたまひて、まづかの弁してぞ、かつがつ案内伝へきこえさせたまひける。

この宮の御こと、かく思しわづらふさまは、さきざきも皆聞きおきたまへれば、「心苦しきことにもあなるかな。さはありとも、院の御世残りすくなしとて、ここにはまたいくばく立ちおくれたてまつるべしとてか、その御後見の事をば受けとりきこえむ。げに次第を過たぬにて、今しばしのほども残りとまる限りあらば、おほかたにつけては、いづれの御子たちをも、よそに聞き放ちたてまつるべきにもあらねど、またかく取り分きて聞きおきたてまつりてむをば、ことにこそは後見きこえめと思ふを、それだにいと不定なる世の定めなざなりや」とのたまひて、「ましてひとつに頼まれたてまつるべき筋にむつび馴れきこえむことは、いとなかなかに、うち続き世を去らむきざみ心苦しく、みづからのためにも浅からぬほだしになむあるべき。中納言などは、年若く軽々しきやうなれど、行く先遠くて、人柄もつひにおほやけの御後見ともなりぬべき生ひ先なめれば、さも思し寄らむに、などかこよなからむ。されど、いといたくまめだちて、思ふ人定まりにてぞあめれば、それに憚らせたまふにやあらむ」などのたまひて、みづからは思し離れたるさまなるを、弁は、おぼろけの御定

ともなく、つひには世のかためとなるべき人なれば行く末も頼もしけれど、なほまたこのためと思ひ果てむには限りぞあるや」と、よろづに思しわづらひたり。かうやうにも思し寄らぬ姉宮たちをば、かけても聞こえ悩ましたまふ人もなし。あやしく、うちうちにのたまはする御ささめき言どもの、おのづからひろごりて、心を尽くす人びと多かりけり。

太政大臣も、この衛門督の、今までひとりのみありて、みこたちならずは得じと思へるを、かかる御定めども出で来たなる折に、さやうにもおもむけたてまつりて、召し寄せられたらむ時、いかばかりわがためにも面目ありてうれしからむ、と思しのたまひて、尚侍の君には、かの姉、北の方して、伝へ申したまふなりけり。よろづ限りなき言の葉を尽くして奏せさせ、御けしき賜はらせたまふ。

兵部卿宮は、左大将の北の方を聞こえ外したまひて、聞きたまふらむところもあり、かたほならむことはと選り過ぐしたまふに、いかがは御心の動かざらむ。限りなく思し焦られたり。

藤大納言は、年ごろ院の別当にて、親しく仕うまつりて、さぶらひ馴れにたるを、御山籠もりしたまひなむ後、寄り所なく心細かるべきに、この宮の御後見にことよせて、顧みさせたまふべく、御けしき切に賜はりたまふなるべし。

権中納言も、かかることどもを聞きたまふに、人伝てにもあらず、さばかりおもむけさせたまへりし御けしきを見たてまつりてしかば、おのづから便りにつけて、漏らし聞こし召さることもあらば、よももて離れてはあらじかし、と心ときめきもしつべけれど、女君の、今はとうちとけて頼みたまへるを、年ごろつらきにもことつけつべかりしほどだに、他ぎまの心もなくて過ぐしてしを、あやにくに、今さらに立ち返り、にはかに物をや思はせきこえむ、なのめならずやむごとなき方にかかづらひなば、何ごとも思ふままならで、左右に安から

よりほかに人にも見えず、宿世のほど定められむなむ、いと軽々しく、身のもてなしありさま、推し量らるることなるを、あやしくものはかなき心ざまにや、と見ゆる御さまなるを、これかれの心にまかせてもてなしきこゆな、さやうなることの世に漏り出でむこと、いと憂きことなり」など、見捨てたてまつりたまはむ後の世をうしろめたげに思ひきこえさせたまへれば、いよいよわづらはしく思ひあへり。

「今すこしものをも思ひ知りたまふほどまで見過ぐさむところは、年ごろ念じつるを、深き本意も遂げずなりぬべき心地のするに思ひもよほされてなむ。かの六条のおとどは、げにさりともものの心得て、うしろやすき方はこよなかりなむを、方々にあまたものせらるべき人びとを知るべきにもあらずかし。とてもかくても人の心からなり。のどかにおちゐて、おほかたの世のためしとも、うしろやすき方は並びなく、ものせらるる人なり。さらで、よろしかるべき人、誰ればかりかはあらむ。兵部卿宮、人柄はめやすしかし。同じき筋にて、異人とわきまへおとしむべきにはあらねど、あまりいたくなよびよしめくほどに、重き方おくれて、すこし軽びたるおぼえや進みにたらむ。なほさる人はいと頼もしげなくなむある。また、大納言の朝臣の家司望むなる、さる方にもものまめやかなるべきことにはあなれど、さすがにいかにぞや。さやうにおしなべたる際はなほめざましくなむあるべき。昔もかうやうなる選びには、何事も人に異なるおぼえあるにことよりてこそありけれ。ただひとへにまたなく持ちゐるむ方ばかりを、かしこきことに思ひ定めむは、いと飽かず口惜しかるべきわざになむ。右衛門督の下にわぶなるよし、尚侍のものせられし、その人ばかりなむ、位など今すこしものめかしきほどになりなば、などかはとも思ひ寄りぬべきを、まだ年いと若くて、むげに軽びたるほどなり。高き心ざし深くて、やもめにて過ぐしつつ、いたくしづまり思ひ上がれるけしき、人には抜けて、才などもこ

限りなき人と聞こゆれど、今の世のやうとては、皆ほがらかにあるべかしくて、世の中を御心と過ぐしたまひつべきもおはしますべかめるを、姫宮は、あさましくおぼつかなく心もとなくのみ見えさせたまふに、さぶらふ人びとは、仕うまつる限りこそはべらめ。おほかたの御心おきてに従ひきこえて、賢しき下人もなびきさぶらふこそ、頼りあることにはべらめ。取り立てたる御後見ものしたまはざらむは、なほ心細きわざになむはべるべき」と聞こゆ。

「しか思ひたどるによりなむ。みこたちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやうにもあり、また高き際といへども、女は男に見ゆるにつけてこそ、悔しげなることも、めざましき思ひも、おのづからうちまじるわざなめれと、かつは心苦しく思ひ乱るるを、またさるべき人に立ちおくれて、頼む蔭どもに別れぬる後、心を立てて世の中に過ぐさむことも、昔は人の心たひらかに、世に許さるまじきほどのことをば、思ひ及ばぬものとならひたりけむ、今日の世には、好き好きしく乱りがはしきことも、類に触れて聞こゆめりかし。昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人のむすめの、今日は直々しく下れる際の好き者どもに名を立ち欺かれて、亡き親の面を伏せ、影を恥づかしむるたぐひ多く聞こゆる。言ひもてゆけば、皆同じことなり。ほどほどにつけて、宿世などいふなることは知りがたきわざなれば、よろづにうしろめたくなむ。すべて悪しくも善くも、さるべき人の心に許しおきたるままにて世の中を過ぐすは、宿世宿世にて、後の世に衰へある時も、みづからの過ちにはならず、あり経てこよなき幸ひあり、めやすきことになる折は、かくても悪しからざりけりと見ゆれど、なほたちまちふとうち聞きつけたるほどは、親に知られず、さるべき人も許さぬに、心づからの忍びわざし出でたるなむ、女の身にはますことなき疵とおぼゆるわざなる。直々しきただ人の仲らひにてだに、あはつけく心づきなきことなり。みづからの心より離れてあるべきにもあらぬを、思ふ心

ますものなれば、よろづに嘆かしく、かくあまたの御中に、取り分ききこえさせたまふにつけても、人の嫉みあべかめるを、いかで塵も据ゑたてまつらじ」と語らふに、弁、「いかなるべき御ことにかあらむ。院はあやしきまで御心長く、仮にても見そめたまへる人は、御心とまりたるをも、またさしも深からざりけるをも、かたがたにつけて尋ね取りたまひつつ、あまた集へきこえたまへれど、やむごとなく思したるは、限りありて一方なめれば、それにことよりて、かひなげなる住まひしたまふ方々こそは多かめるを、御宿世ありて、もしさやうにおはしますやうもあらば、いみじき人と聞こゆとも、立ち並びておしたちたまふことはえあらじとこそは推し量らるれど、なほいかかと憚らるることありてなむおぼゆる。さるは、「この世の榮え、末の世に過ぎて、身に心もとなきことはなきを、女の筋にてなむ、人のもどきをも負ひ、わが心にも飽かぬこともある」となむ、常にうちうちのすきびごとにも思しのたまはすなる。げにおのれらが見たてまつるにも、さなむおはします。かたがたにつけて御蔭に隠したまへる人、皆その人ならず立ち下れる際にはものしたまはねど、限りあるただ人どもにて、院の御ありさまに並ぶべきおぼえ具したるやはおはすめる。それに同じくは、げにさもおはしまさば、いかにたぐひたる御あはひならむ」と語らふを、乳母、またことのついでに、「しかしかなむ、なにがしの朝臣にほのめかしはべしかば、「かの院にはかならずうけひき申させたまひてむ。年ごろの御本意かなひて思しぬべきことなるを、こなたの御許しまことにありぬべくは、伝へきこえむ」となむ申しはべりしを、いかなるべきことにかははべらむ。ほどほどにつけて、人の際々思しわきまへつつ、ありがたき御心ざまにものしたまふなれど、ただ人だに、またかかづらひ思ふ人立ち並びたることは、人の飽かぬことにしはべめるを、めざましきこともやはべらむ。御後見望みたまふ人びとは、あまたものしたまふめり。よく思し定めてこそよくはべらめ。

ほかざまに思ひ移ろふべくもはべらざりけるに、その思ひ叶ひては、いとど揺るぐ方はべらじ。かの院こそ、なかなか、なほいかなるにつけても、人をゆかしく思したる心は絶えずものせさせたまふなれ。その中にも、やむごとなき御願ひ深くて、前斎院などをも今に忘れがたくこそ聞こえたまふなれ」と申す。「いで、その旧りせぬあだけこそはいとうしろめたけれ」とはのたまはすれど、げにあまたの中にかかづらひて、めざましかるべき思ひはありとも、なほやがて親ざまに定めたるにて、さもや譲りおききこえまし、なども思し召すべし。「まことに少しも世づきてあらせむと思はむ女子持たらば、同じくは、かの人あたりにこそは触ればはせまほしけれ。いくばくならぬこの世のあひだは、さばかり心ゆくありさまにてこそ過ぐさまほしけれ。われ女ならば、同じはらからなりとも、かならず睦び寄りなまし。若かりし時など、さなむおぼえし。まして女の欺かれむは、いとことわりぞや」とのたまはせて、御心のうちに、かむの君の御ことも思し出でらるべし。

この御後見どもの中に、重々しき御乳母の兄、左中弁なる、かの院の親しき人にて年ごろ仕うまつるありけり。この宮にも心寄せことにてさぶらへば、参りたるにあひて、物語するついでに、「上なむ、しかしか御けしきありて聞こえたまひしを、かの院に折あらば漏らしきこえさせたまへ。皇女たちは、独りおはしますこそは例のことなれど、さまざまにつけて心寄せたてまつり、何ごとにつけても、御後見したまふ人あるは頼もしげなり。上をおきたてまつりて、また真心に思ひきこえたまふべき人もなければ、おのらは仕うまつるとても、何ばかりの宮仕へにかあらむ。わが心一つにしもあらで、おのづから思ひの他のこともおはしまし、軽々しき聞こえもあらむ時には、いかさまにかはわづらはしからむ。御覧ずる世に、ともかくもこの御こと定まりたらば、仕うまつりよくなむあるべき。かしこき筋と聞こゆれど、女はいと宿世定めがたくおはし

を聞こしめして、「まことに、かれはいとさま異なりし人ぞかし。今はまた、その世にもねびまさりて、光るとはこれを言ふべきにやと見ゆる匂ひなむ、いとど加はりにたる。うるはしだちて、はかばかしき方に見れば、いつくしくあざやかに、目も及ばぬ心地するを、またうちとけて、戯れごとをも言ひ乱れ遊べば、その方につけては似るものなく愛敬づき、なつかしくうつくしきことの並びなきこそ、世にありがたけれ。何ごとにも前の世推し量られて、めづらかなる人のありさまなり。宮の内に生ひ出でて、帝王の限りなくかなしきものにしたまひ、さばかり撫でかしづき、身に変へて思したりしかど、心のままにも驕らず、卑下して二十がうちには納言にもならずなりにきかし。一つ余りてや宰相にて大将かけたまへりけむ。それに、これはいとこよなく進みにためるは。次々の子の、世のおぼえのまさるなめりかし。まことに賢き方の才、心もちるなどは、これもをさをさ劣るまじく、あやまりても、およすけまさりたるおぼえいと異なめり」などめでさせたまふ。

姫宮のいとうつくしげにて、若く何心なき御ありさまなるを見たてまつりたまふにも、「見はやしたてまつり、かつはまた、片生ひならむことをば、見隠し教へきこえつべからむ人のうしろやすからむに、預けきこえばや」など聞こえたまふ。大人しき御乳母ども召し出でて、御裳着のほどのことなどのたまはするついでに、「六条のおとどの、式部卿親王のむすめ生ほし立てけむやうに、この宮を預かりて育まむ人もがな。ただ人の中にはありがたし。内には中宮さぶらひたまふ。次々の女御たちとても、いとやむごとなき限りものせらるるに、はかばかしき後見なくて、さやうの交じらひいとなかなかならむ。この権中納言の朝臣の独りありつるほどに、うちかすめてこそ試みるべかりけれ。若けれど、いと警策に、生ひ先頼もしげなる人にこそあめるを」とのたまはす。

「中納言は、もとよりいとまめ人にて、年ごろも、かのわたりに心をかけて、

るべき物語などのついでにも、いにしへのうれはしきことありてなむなど、うちかすめ申さるる折ははべらずなむ。「かくおほやけの御後見を仕うまつりさして、静かなる思ひをかなへむと、ひとへに籠もりゐし後は、何ごとをも知らぬやうにて、故院の御遺言のごともえ仕うまつらず、御位におはしましし世には、齢のほども、身のうつはものも及ばず、かしこき上の人びと多くて、その心ぎしを遂げて御覧ぜらるることなかりき。今かく政事を去りて、静かにおはしますころほひ、心のうちをも隔てなく、参りうけたまはらまほしきを、さすがに何となく所狭き身のよそほひにて、おのづから月日を過ぐすこと」となむ、折々嘆き申したまふ」など奏したまふ。

二十にもまだわづかなるほどなれど、いとよくととのひ過ぐして、かたちも盛りに匂ひて、いみじくきよなるを、御目にとどめてうちまもらせたまひつつ、このもてわづらはせたまふ姫宮の御後見にこれをやなど、人知れず思し寄りけり。「太政大臣のわたりに、今は住みつかれにたりとな。年ごろ心得ぬさまに聞きしがいとほしかりしを、耳やすきものから、さすがにねたく思ふことこそあれ」とのたまはする御けしきを、いかにのたまはするにかと、あやしく思ひめぐらすに、この姫宮をかく思し扱ひて、さるべき人あらば預けて、心やすく世をも思ひ離ればやとなむ思しのたまはすると、おのづから漏り聞きたまふ便りありければ、さやうの筋にやとは思ひぬれど、ふと心得顔にも何かはいらへきこえさせむ、ただ、「はかばかしくもはべらぬ身には、寄るべもさぶらひがたくのみなむ」とばかり奏して止みぬ。

女房などは、覗きて見きこえて、「いとありがたくも見えたまふかたち、用意かな。あなめでた」など、集りて聞こゆるを、老いしらへるは、「いで、さりととも、かの院のかばかりにおはせし御ありさまには、えなずらひきこえたまはざめり。いと目もあやにこそきよらにものしたまひしか」など、言ひしろふ

くめでたき御ありさまを、心やりどころに参り仕うまつりたまふ限りは、心を尽くして惜しみきこえたまふ。

六条院よりも御訪らひしばしあり。みづからも参りたまふべきよし聞こし召して、院はいといたく喜びきこえさせたまふ。中納言の君参りたまへるを、御簾の内に召し入れて、御物語こまやかなり。「故院の上の、今はのきぎみにあまたの御遺言ありし中に、この院の御こと、今の内の御ことなむ、取り分きてのたまひ置きしを、公けとなりて、こと限りありければ、うちうちの御心寄せは変らずながら、はかなきことのあやまりに、心おかれたてまつることもありけむと思ふを、年ごろことに触れて、その恨み残したまへるけしきをなむ漏らしたまはぬ。賢しき人といへど、身の上になりぬれば、こと違ひて心動き、かならずその報い見え、ゆがめることなむ、いにしへだに多かりける。いかならむ折にかその御心ばへほころぶべからむと、世の人もおもむけ疑ひけるを、つひに忍び過ぐしたまひて、春宮などにも心を寄せきこえたまふ。今はた、またなく親しかるべき仲となり、睦び交はしたまへるも、限りなく心には思ひながら、本性の愚かなるに添へて、子の道の闇にたち交じり、かたくななるさまにやとて、なかなかよそのことに聞こえ放ちたるさまにてはべる。内の御ことはかの御遺言違へず仕うまつりおきてしかば、かく末の世の明らけき君として、来しかたの御面をも起こしたまふ、本意のごと、いとうれしくなむ。この秋の行幸の後、いにしへのこととり添へて、ゆかしくおぼつかなくなむおぼえたまふ。対面に聞こゆべきことどもはべり。かならずみづから訪らひものしたまふべきよし、もよほし申したまへ」などうちしほたれつつのたまはす。

中納言の君、「過ぎはべりにけむ方はともかくも思うたまへ分きがたくはべり。年まかり入りはべりて、おほやけにも仕うまつりはべるあひだ、世の中のことを見たまへまかりありくほどには、大小のことにつけても、うちうちのさ

聞かせたまひて、渡らせたまへり。母女御も添ひきこえさせたまひて参りたまへり。すぐれたる御おぼえにしもあらざりしかど、宮のかくておはします御宿世の限りなくめでたければ、年ごろの御物語こまやかに聞こえさせたまひけり。宮にも、よろづのこと、世をもちたまはむ御心づかひなど聞こえ知らせたまふ。御年のほどよりはいとよく大人びさせたまひて、御後見どもも、こなたかなた軽々しからぬ仲らひにものしたまへば、いとうしろやすく思ひきこえさせたまふ。

「この世に恨み残ることもはべらず。女宮たちのあまた残りとはどまる行く先を思ひやるなむ、さらぬ別れにもほだしなりぬべかりける。さきざき人の上に見聞きしにも、女は心よりほかに、あはあはしく人におとしめらるる宿世あるなむ、いと口惜しく悲しき。いづれをも、思ふやうならむ御世には、さまざまにつけて、御心とどめて思し尋ねよ。その中に、後見などあるはさる方にも思ひ譲りはべり、三の宮なむ、いはけなき齢にて、ただ一人を頼もしきものとならひて、うち捨ててむ後の世にただよひさすらへむこと、いとうしろめたく悲しくはべる」と、御目おし拭ひつつ聞こえ知らせさせたまふ。

女御にも、心うつくしきさまに聞こえつけさせたまふ。されど、女御の人よりはまさりて時めきたまひしに、皆挑み交はしたまひしほど、御仲らひどもえうるはしからざりしかば、その名残にて、げに今はわざと憎しなどはなくとも、まことに心とどめて思ひ後見むとまでは思さずもや、とぞ推し量らるるかし。

朝夕にこの御ことを思し嘆く。年暮れゆくままに、御悩みまことに重くなりまさらせたまひて、御簾の外にも出でさせたまはず。御もののけにて、時々悩ませたまふこともありつれど、いとかくうちはへ、をやみなきさまにはおはしまさざりつるを、このたびはなほ限りなりと思し召したり。御位を去らせたまひつれど、なほその世に頼みそめたてまつりたまへる人びとは、今もなつかし

朱雀院の帝、ありし御幸ののち、そのころほひより、例ならず悩みわたらせたまふ。もとよりあつくおはしますうちに、このたびはもの心細く思し召されて、「年ごろ行なひの本意深きを、後の宮おはしましつるほどは、よろづ懼りきこえさせたまひて、今まで思しとどこほりつるを、なほその方にもよほすにやあらむ、世に久しかるまじき心地なむする」などのたまはせて、さるべき御心まうけどもせさせたまふ。

御子たちは、春宮をおきたてまつりて、女宮たちなむ四所おはしましける。その中に、藤壺と聞こえしは、先帝の源氏にぞおはしましける、まだ坊と聞こえさせし時参りたまひて、高き位にも定まりたまべかりし人の、取り立てたる御後見もおはせず、母方もその筋となくものはかなき更衣腹にてもものしたまひければ、御交じらひのほども心細げにて、大后の尚侍を参らせたてまつりたまひて、かたはらに並ぶ人なくもてなしきこえたまひなどせしほどに、氣圧されて、帝も御心のうちにいとほしきものには思ひきこえさせたまひながら、下りさせたまひにしかば、かひなく口惜しくて、世の中を恨みたるやうにて亡せたまひにし、その御腹の女三の宮を、あまたの御中にすぐれてかなしきものに思ひかしづききこえたまふ。そのほど、御年、十三四ばかりおはす。今はと背き捨て、山籠もりしなむ後の世にたちとまりて、誰を頼む蔭にてもものしたまはむとすらむと、ただこの御ことをうしろめたく思し嘆く。

西山なる御寺造り果てて、移ろはせたまはむほどの御いそぎをせさせたまふに添へて、またこの宮の御裳着のことを思しいそがせたまふ。院のうちにやむごとなく思す御宝物、御調度どもをばさらにもいはず、はかなき御遊びものまで、すこしゆゑある限りをば、ただこの御方に取りわたしたてまつらせたまひて、その次々をなむ異御子たちには御処分もありける。

春宮は、かかる御悩みに添へて、世を背かせたまふべき御心づかひになむと

若
菜
上

幻	御 法	夕 霧	鈴 虫	横 笛	柏 木	若 菜 下	若 菜 上
二 三 三	二 二 〇	一 七 六	一 六 六	一 五 三	一 二 七	六 五	二
(	(	(	(	(	(	(	(
1	2	7	8	9	1	1	2
4	7	1	1	4	2	8	4
)	)	)	)	)	)	)	)

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

「新日本古典文学体系」版にて改行・読点修正

(<http://sksrc.blog82.fc2.com>)